

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20

平成15年度発掘調査報告

(第1分冊)

平成16年3月

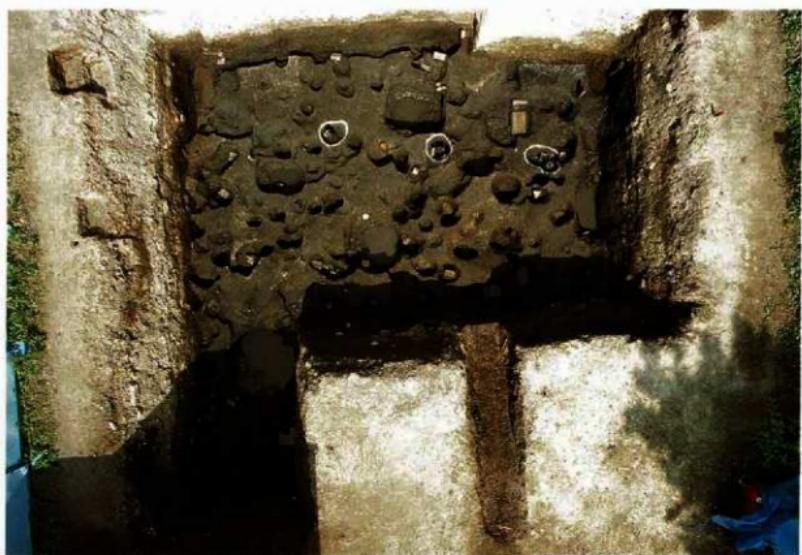
鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20

**平成15年度発掘調査報告
(第1分冊)**

平成16年3月

鎌倉市教育委員会



米町遺跡



佐助ヶ谷遺跡

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成13・14年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として17ヶ所の調査成果を掲載しています。特に米町遺跡（地点3）では、鎌倉時代の掘立柱建物跡が複数棟発見され、当時、商業地として賑わったと伝えられる当地の様子を垣間見ることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成16年3月31日
鎌倉市教育委員会

例　　言

- 1 本書は平成15年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書掲載の調査地点とその収録分冊は別表、調査地点位置図及び目次のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び写真・図面等の資料は鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査内容の詳細は、それぞれの報文を参照されたい。

総 目 次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例 言	II
平成15年度調査の概観	IV
1 玉縄城跡 (No. 63) 植木字植谷戸70番1外	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の概要	8
第3章 検出遺構と出土遺物	8
第4章 まとめ	9
2 今小路西遺跡 (No. 201) 由比ガ浜一丁目148番5	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	19
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	19
第3章 検出遺構と出土遺物	24
第4章 まとめ	61
3 米町遺跡 (No. 245) 大町二丁目2324番1外	
第1章 調査地点をめぐって	84
第2章 調査の概要	94
第3章 調査の成果	95
第4章 まとめと考察	145
4 名越ヶ谷遺跡 (No. 231) 大町七丁目1615番8	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	170
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	172
第3章 検出遺構と出土遺物	175
第4章 まとめ	187
5 玉縄城跡 (No. 63) 植木字植谷戸198番の一部	
第1章 遺跡の立地と歴史的環境	202
第2章 調査の概要	204
第3章 発見した遺構と遺物	205
第4章 調査所見	221
6 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) 佐助一丁目476番1	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	233
第2章 調査の概要	236
第3章 検出遺構と出土遺物	240
第4章 佐助ヶ谷遺跡の花粉分析	299
第5章 調査のまとめ	304

平成15年度調査の概観

平成15年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査1件を含む34件であり、調査面積は1,750.79m²であった。これを前年度の25件、1,721.03m²と比較すると件数は9件増加（対前年度比36%増）し、本市が昭和59年度に国庫補助事業として市内遺跡発掘調査を開始して以来、単年度で最高の調査件数となった。しかしながら調査面積はわずかに29.76m²の増加（対前年度比1.73%増）にとどまっている。本年度は国の施策として実施された住宅取得に係る減税措置の影響で5～7月に発掘調査が集中し、年間調査件数の増加につながったものとみられる。調査面積は平均で1件あたり51.49m²で、この点からは個々の住宅の建設規模が小規模化している傾向が窺われる。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設が31件、自己用店舗併用住宅の建設が3件であった。個人専用住宅の建設に関わる31件の内訳は、鋼管杭打ち工事が15件（44.12%）、柱状の地盤改良が14件（41.18%）、地下室の築造が1件、車庫の築造が1件、その他が3件となっており、鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因主体（29件：85.3%）を占める傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査原因、面積及び期間等については「平成15年度調査地点一覧」を参照。）

1 今小路西遺跡（NO. 201）

個人住宅建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、古代・中世の遺物と共に遺構面を確認したので発掘調査を実施した。本件は14年度末からの継続調査である。調査の結果、13世紀前半代の方形の池跡と思われる護岸と多数の柱穴を確認した。護岸は木組側溝と同様の構造で、当初木組み側溝の南辺ではないかとも考えたが、東辺が確認され、方池と考えるべきであると結論された。池は14世紀代には埋め立てられ池の覆土上面は土丹による地形で覆われていたが、そこからは大型の高麗青磁瓶の破片が多数出土した。また池覆土からは猿と考えられる人形の頭部が出土した。これは「くぐつ」人形と考えられる。この他、古代の瓦が出土しているが、遺構は確認されていない。当該地の遺跡の性格は明らかではないが、苑池を伴う屋敷の一画と考えられる。なお、地表下2.5mで、波食台が確認されている。

2 西ノ台遺跡（NO. 378）

個人事業に伴う自己用住宅建設範囲の発掘調査である。西ノ台と称される台地の南西側に帯状に存在する平坦地の一画に当たる。杭工事であるため確認調査を実施し、その結果土器細片が出土したので発掘調査を実施した。事業区域に当たる谷戸部での確認調査では、常滑片が出土したが、遺構に伴うものではなく、谷戸部を埋め立てた造成土に混入したものと判断されたので、事業区域の発掘調査は実施していない。調査の結果、土壌等が確認され、かわらけ・陶磁器等13世紀後半から14世紀にかけての遺物が若干出土したが、遺構の性格は不明である。

3 若宮大路周辺遺跡群（NO. 242）

店舗併用住宅の建設に伴う発掘調査である。当該敷地北側の店舗ビル建設工事に伴う発掘調査では13世紀代の柱穴群が確認されており、杭工法による基礎であったため、確認調査を行ったところ、隣接

地と同様の柱穴群が発見されたため、発掘調査を行った。なお、店舗併用住宅であったため、神奈川県教育庁生涯学習文化財課と国庫補助対応について協議を行い、その適用について了解を得て発掘調査を実施した。調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀前半から14世紀前半の遺物が多数出土し、若宮大路に並行する南北方向の溝跡・掘建柱建物の柱穴多数が検出され、若宮大路に面する屋敷地の一画であることが確認された。

4 公方屋敷跡 (NO. 268)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に土丹地形による堅固な遺構面を確認したので発掘調査を実施した。調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀前半から14世紀代の遺物と共に礎石建物跡4棟以上、玉砂利敷き遺構、溝跡、井戸跡などが検出された。礎石建物の柱間は210cm(7尺)であり、本格的な住宅建築と推定された。当該地は室町時代に於ける足利公方家の屋敷跡(室町期に於ける東国武家政権の政権所在地)の伝承地であるが、上面の遺構が削平されており、室町期の遺構は検出されなかつたが、鎌倉期における足利家の屋敷跡が検出された可能性がある。

5 光明寺旧境内遺跡 (NO. 316)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認を実施したところ、中世の遺物と共に砂丘上に遺構面を確認したので発掘調査を実施した。調査の結果、かわらけ・陶磁器片など14世紀代の遺物と共に難灰岩切石(鎌倉石)を使用した石敷き遺構が二列検出された。一列は南西から北東に延び、現在の光明寺本堂に向かう方向であり、もう一列はそれと直行し、北西から南東方向に延びている。この方向性は光明寺寺務所建設に伴う現境内域内の発掘調査で確認されており、当該地も近世の絵図では光明寺の境内域になっていることから、当該地の発掘調査により当該地を含めた光明寺の現在地での境内地の確定が一四世紀であることが確認された。

6 若宮大路周辺遺跡群 (NO. 242)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀後半を中心とした遺物と共に、木組みの板壁構造を持つ方形堅穴建築址2棟、柱穴、土壤、埋甕などが検出された。埋甕は常滑焼大甕を使用し、中からは「かわらけ」が10数点まとめて出土した。遺構の様相から当該地は屋敷地とは異なり、庶民の居住区域と推定される。

7 極楽寺中心伽藍跡 (NO. 290)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。極楽寺旧境内の内、中心伽藍部分と考えられる区域内での钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・瓦・水晶など13世紀末から15世紀にかけての遺物と共に、調査区北側の山裾を切り開き、岩盤を削平して造成した基壇状遺構、溝跡などが確認されたが、極楽寺境内絵図に描かれた具体的な堂舎との対比はできなかった。

8 能蔵寺跡 (NO. 314)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・鉄製品など14世紀を中心とした遺物と共に、土壌、柱穴、方形堅穴状遺構、溝跡などが検出された。当該地は御所神社の参道に面しているが、遺構群の様相からは神社・寺院などの宗教的な区域ではなく、都市民の居住区域と推定される。

9 浄妙寺旧境内遺跡 (NO. 408)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、当該地の造成工事に伴う発掘調査の成果に基づき、発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など13世紀後半から14世紀前半を中心とした遺物と共に、土壌、柱穴、溝跡などが確認された。当該地は浄妙寺境内絵図に境内地の一部として描かれ、その北側に池が描かれているが、当該地を含め浄妙寺参道の南東部、鎌倉六浦線に面した区域は参道部分より一段高く、遺構の状態からも池の外側である。近隣の調査では六浦道は鎌倉六浦線の南側で確認されているから、当該地で確認された遺構は浄妙寺境内の一部と考えられる。

10 甘縄神社遺跡群 (NO. 177)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、当該地の宅地造成時の発掘調査成果を参考に確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など14世紀代の遺物と共に土壌、南北方向の浅い溝跡などを検出した。溝中には常滑焼の大甕が破碎され、廃棄されている状況が確認された。宅地造成時の調査成果を勘案すると、当該地は屋敷地の一画であると推定される。

11 円覚寺門前遺跡 (NO. 287)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀の遺物と共に溝跡、柱穴、土壌などを検出した。遺構の状態からは、寺院の門前に広がる都市民の居住地、門前町のような様相が観察される。

12 円覚寺旧境内遺跡 (NO. 287)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、近隣の遺構の状況を勘案し確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器・漆器・木製品・銭・水晶製五輪塔など13世紀後半から14世紀前半の遺物と共に5面の遺構面を確認し、道路跡1本、溝跡4条、柱穴66口、土壌7基などを検出した。道路跡は丸太を道に対して縦方向に敷いた幅1m40cmの遺構で、円覚寺門前の木戸を迂回する「馬道」の可能性が指摘されている。

13 報国寺遺跡 (No. 306)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・錢・木製品・石製品など13世紀中頃から14世紀中頃の遺物と共に5面の遺構面を確認し、掘建柱建物跡2棟、網代塀1列、土壙10基、石積溝2条を確認した。石積溝は東西方向で、山裾から報国寺に向かっている。遺物の年代から14世紀の遺構は報国寺創の遺構と考えられ、13世紀代の遺構はそれ以前の屋敷地の一画であると推定される。

14 浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に庭石や遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・瓦など13世紀前半から14世紀代を中心とした遺物と共に苑池の汀線、井戸などが検出された。苑池の南側汀線が確認されたが、汀線は当初は直線で垂直であったが、その後埋め立てられて州浜状になり、景石が据えられていた。苑池が埋め立てられる際、大量の瓦を廃棄しており、その瓦は永福寺跡の出土品とも共通しているが、複数の時期の瓦が混在している。これらの成果から、当該地は浄明寺境内の一画をなす庭園であることが確認されると共に、2. 今小路西遺跡の調査成果同様、13世紀前半に鎌倉で方池が取り入れられていたことが確認され、その後、州浜を持つ苑池に変化しているという、我が国の庭園史上、重要な知見を得ることができた。

15 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、隣接地の発掘調査成果を参考に発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器など14世紀頃の遺物と共に砂丘上に方形堅穴建築址2棟以上が検出された。方形堅穴状遺構のうち1棟は床面の壁際に方形の切石が「コ」字状に敷かれていた。本件調査により、当該地を含め周辺には砂丘上につくられた半地下水式の倉庫群の遺構が存在することが再確認された。

16 大倉幕府跡 (No. 253)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、北側隣接地の発掘調査成果を参考に発掘調査を実施した。

調査の結果、上層は擾乱が激しく、また下層は湧水が激しく崩落の危険性があったため、最下層までの調査は断念した。かわらけ・陶磁器片など14世紀中頃の遺物と共にかわらけの焼成遺構と考えられる遺構が確認された。下層の遺構を確認していないため、大倉幕府にかかる遺構は検出されていない。また検出されたかわらけの焼成遺構は、鎌倉幕府滅亡以降と考えられる。

17 報国寺遺跡 (No. 306)

前出の調査地点13の西側隣接地における個人住宅の建設に伴う発掘調査である。钢管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施せずに隣接地の調査成果を勘案しながら発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・銭・木製品・石製品など13世紀中頃から14世紀中頃の遺物が出土するとともに、前出の調査地点13の調査成果と同様の遺構群が発見された。

18 米町遺跡（No. 245）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に溝などの遺構を確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品・人骨など13世紀前半から中頃の遺物と共に、規模の大きな東西方向の溝跡、それに架かる橋脚跡、溝の南側に並行して走る道路跡、土壌などが検出された。溝と道路跡は当該地北側の道と並行しており、この道は北東を走る大町大路と並行しているから、大町大路南側に逆川を挟んでもう一本道が走っていたかもしれない。本件調査は中世都市鎌倉の街路構成の研究に新たな知見を与えるものであった。

19 横小路周辺遺跡（No. 259）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に道路面と考えられる土丹地形による遺構面を確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・瓦・木製品など13世紀前半から14世紀代の遺物と共に、轍を伴う道路状遺構、柱穴、土壌などが検出された。道路状遺構は確認された範囲では最大幅が3m程度で、13世紀前半につくられたと考えられる。永福寺に向かう二階堂大路の可能性も考えられ、大路の一部であれば、二階堂大路の位置を示す初めての調査となる。

20 若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

自己用店舗併用住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に、土壌、柱穴などが検出された。遺構の状況からは屋敷地であるか都市民の居住区域であるか判然としないが、出土品中には三彩の陶枕があり、注目される。

21 永福寺跡（No. 61）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。遺跡パトロール中、鋼管杭打ちを伴う基礎工事を実施しているのを確認したため、工事の一時中断を申し入れ、急速、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、上面が削平され、14世紀以降の遺構は確認されなかつたが、かわらけ・陶磁器片・など13世紀後半の遺物と共に、掘建柱建物跡、布堀りを伴う柵列、土壌、井戸などが検出された。布堀りを伴う柵列は調査区中央に東西方向に存在し、柵列の北側と南側それぞれに掘建柱建物跡が検出され、敷地外まで広がっていることが確認された。本件調査で確認された建物跡は、永福寺僧坊の一部と推定される。

22 瑞泉寺周辺遺跡（No. 338）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など13世紀中頃から15世紀初頭の遺物と共に礎石建物、掘建柱建物跡、柱穴、土壙などが検出された。調査区北側は岩盤を削平した平面上に礎石建物が、岩盤が落ち込む南側の土の面には掘建柱建物が存在した。出土品には青磁算木文香炉・天目茶碗などがあり、寺院か僧坊の一画と推定される。

23 下馬周辺遺跡（No. 200）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、土師器・かわらけ・陶磁器片などを伴って柱穴・土壙などが検出された。基盤となる砂丘は南側に向かって緩やかに低くなっていることが確認されたほか、砂丘上面が削平され、砂丘の自然層に掘り込まれた僅かな遺構が検出されたに留まった。

24 弁ヶ谷遺跡（No. 314）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、南側隣接地の発掘調査成果を参考に発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に、溝跡、柱穴、土壙などが検出された。弁ヶ谷は北条名越氏の本拠地と推定され、名越氏創建の新善光寺や北条高時創建の崇壽寺などの寺院もあった。当該地は弁ヶ谷の入口に当たり、当該地の北側では強固な土丹地形面を伴う遺構面が確認されている。本件調査ではそうした強固な遺構面は存在せず、遺構の状況が異なっており、北条氏関係の屋敷地などとは異なる区域と考えられる。

25 弁ヶ谷遺跡（No. 314）

前出の地点23の西側隣接地における個人住宅の建設に伴う発掘調査である。調査原因が鋼管杭打ちを伴う基礎工事であり、前出23と同時期に事前相談がなされ着工も同時期であったため、2地点の発掘調査を同時に並行して実施した。調査成果も同様である。

26 若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に竪穴状遺構、溝跡、柱穴、土壙、南北方向の道路跡などが検出された。遺構の状況から、当該地は都市民の居住区域であると推定される。

27 笹目遺跡（No. 207）

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施し

たところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など14世紀代の遺物と共に地形面・土壌などが検出された。近隣の発掘調査成果との比較から、西側は遺構の埋没深度が深く、東側は遺構の埋没深度が浅い事から、調査地西側の道路を挟んで谷戸内の東側と西側で中世の土地利用が異なることが判明した。

28 米町遺跡 (No. 245)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など14世紀代の遺物と共に方形堅穴建築址・柱穴・土壌などの遺構を検出した。調査地は砂丘上に位置しており、大町大路に近接した場所で半地下式の倉庫跡と推定される方形堅穴建築址が検出されたことは貴重である。

29 保寿院跡 (No. 250)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など14世紀代の遺物と共に柱穴・土壌・礎石などを検出した。礎石の配置は散漫で、建物の配置をつかむことができなかったが、遺物の年代と礎石が存在することから、保寿院跡として良いと考えられる。

30 北条小町邸跡 (No. 282)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であり、小町大路の側溝が存在することが推定されたため確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に構などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に構跡・柱穴・土壌などを検出した。溝は幅4m以上で

小町大路西側側溝もしくは北条氏小町邸の東側の区画溝と考えられ、木組みで控えの梁が確認された。本件調査により、小町大路の西側で、木組み溝の確認箇所が1件追加され、溝の位置関係がさらに明らかとなった。

31 円覚寺門前遺跡 (No. 287)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片など14世紀後半代の遺物と共に柱穴・土壌・溝跡・東西方向の石列を1条検出した。調査地の北西側に面する道は瓜ヶ谷へ抜ける道で、建武二年から三年の製作とされる重要文化財「円覚寺境内図」にも描かれているが、当該地の状況は判然としない。本件調査は絵画資料との対比が可能であり、前出の調査地点10・12の調査と共に鎌倉の中世都市研究に貴重な資料を提供することとなった。

32 宇津宮辻子幕府跡 (No. 239)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。地下室を伴う建築工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわら仮・陶磁器片など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に方形竪穴建築址・柱穴・土壙・井戸などを検出した。幕府推定地の一画まで砂丘が広がり、倉庫群が広がっていたことを確認できたことは中世都市鎌倉の都市構造を知る上で新しい知見であった。

33 北条時房・顯時邸跡 (No. 274)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、かわらけ・陶磁器片・木製品など13世紀から14世紀にかけての遺物と共に柱穴・土壙・礎石建物跡・池跡などが検出された。礎石建物は東西方方向に柱間2m10cm(7尺)の礎石列が、2間分検出された。また、池跡は玉砂利が集中していた。建物と池が同時存在であるかは明確になっていない。若宮大路に面した屋敷の区域で礎石建物と池跡が確認されたことは、中世都市鎌倉の中心部の館の構造を知る上で新しい資料を得ることとなった。

34 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

個人住宅の建設に伴う発掘調査である。鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、確認調査を実施したところ、中世の遺物と共に遺構面などを確認したので発掘調査を実施した。

調査の結果、小町大路東側の側溝と推定される溝及びその東側に広がる掘立柱建物群が確認された。

本誌所収の平成13・14年度発掘調査地点一覧

第1分冊

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①	玉縄城跡 (NO.63)	植木字植谷戸70番1外	個人専用住宅 (防災工事)	城館	30.00m ²	平成13年5月25日 ～平成13年6月14日
②	今小路西遺跡 (NO.201)	由比ガ浜一丁目148番5	個人専用住宅	都市	115.02m ²	平成13年6月5日 ～平成13年8月3日
③	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目2324番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	67.21m ²	平成13年8月6日 ～平成13年9月29日
④	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町七丁目1615番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	20.00m ²	平成13年9月18日 ～平成13年10月13日
⑤	玉縄城跡 (NO.63)	植木字植谷戸198番の一部	個人専用住宅 (位置指定道路)	城館	73.13m ²	平成13年9月25日 ～平成13年10月31日
⑥	佐助ヶ谷遺跡 (NO.203)	佐助一丁目476番1の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	120.00m ²	平成13年9月6日 ～平成13年12月15日

第2分冊

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑦	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	雪ノ下三丁目607番1	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	43.66m ²	平成13年11月8日 ～平成13年12月22日
⑧	横小路周辺遺跡 (NO.259)	二階堂字会下323番外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	15.00m ²	平成13年12月17日 ～平成13年12月27日
⑨	妙本寺遺跡 (NO.232)	大町一丁目1140番1外	個人専用住宅	社寺	105.00m ²	平成14年1月7日 ～平成14年2月1日
⑩	妙本寺遺跡 (NO.232)	大町一丁目1140番2	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	28.50m ²	平成14年9月17日 ～平成14年9月26日
⑪	新善光寺跡 (NO.279)	材木座四丁目573番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	45.00m ²	平成14年1月7日 ～平成14年2月2日
⑫	台山遺跡 (NO.29)	山ノ内字宮下小路819番1外	個人専用住宅 (擁壁及び車庫)	集落	12.00m ²	平成14年4月1日 ～平成14年4月19日
⑬	笹目遺跡 (NO.207)	笹目町330番11外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	43.50m ²	平成14年4月1日 ～平成14年4月22日
⑭	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	雪ノ下四丁目567番7	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	25.00m ²	平成14年6月25日 ～平成14年7月22日
⑮	長谷小路周辺遺跡 (NO.203)	由比ガ浜三丁目194番50	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	51.75m ²	平成14年7月1日 ～平成14年7月25日
⑯	北条政村屋敷跡 (NO.131)	常盤字常松下1005番2	個人専用住宅 (地下室)	城館	28.19m ²	平成14年7月23日 ～平成14年8月9日
⑰	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町六丁目1708番4の一部	車庫の築造	都市	27.29m ²	平成14年7月27日 ～平成14年8月20日

◎印は平成13年度の調査、

※印は平成14年度の調査をそれぞれ示す。

平成15年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	今小路西遺跡 (NO.201)	御成町200番2の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	124.00m ²	平成15年3月3日 ～平成15年6月20日
2	西ノ台遺跡 (NO.378)	台字西ノ台1595番外	個人専用住宅	集落	35.15m ²	平成15年4月11日 ～平成15年4月22日
3	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目283番の一部	店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	150.16m ²	平成15年4月14日 ～平成15年6月11日
4	公方屋敷跡 (NO.268)	淨明寺四丁目273番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	73.13m ²	平成15年4月30日 ～平成15年7月5日
5	光明寺旧境内遺跡 (NO.316)	材木座六丁目855番21外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	77.00m ²	平成15年5月1日 ～平成15年6月30日
6	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	雪ノ下一丁目161番33の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	24.00m ²	平成15年5月9日 ～平成15年6月11日
7	極楽寺中心伽藍跡 (NO.290)	極楽寺三丁目1028番1の一部	個人専用住宅	社寺	43.00m ²	平成15年5月28日 ～平成15年6月27日
8	能藏寺跡 (NO.314)	材木座四丁目274番2の一部	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	45.00m ²	平成15年5月29日 ～平成15年7月21日
9	淨妙寺旧境内遺跡 (NO.408)	淨明寺三丁目101番13	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	40.00m ²	平成15年6月10日 ～平成15年7月9日
10	甘繩神社遺跡群 (NO.177)	長谷一丁目227番25	個人専用住宅 (地下車庫)	都市	36.20m ²	平成15年6月17日 ～平成15年7月10日
11	円覚寺門前遺跡 (NO.287)	山ノ内字松岡1344番	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	37.80m ²	平成15年6月18日 ～平成15年7月18日
12	円覚寺旧境内遺跡 (NO.434)	山ノ内字瑞應山393番3	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	36.00m ²	平成15年6月23日 ～平成15年7月24日
13	報国寺遺跡 (NO.306)	淨明寺二丁目474番11外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	30.00m ²	平成15年6月23日 ～平成15年7月25日
14	淨妙寺旧境内遺跡 (NO.408)	淨明寺三丁目3番2	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	37.13m ²	平成15年7月1日 ～平成15年8月8日
15	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	由比ガ浜一丁目127番1	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	30.00m ²	平成15年7月15日 ～平成15年8月6日
16	大倉幕府跡 (NO.253)	雪ノ下三丁目701番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	官衙	16.00m ²	平成15年7月24日 ～平成15年8月8日
17	報国寺遺跡 (NO.306)	淨明寺二丁目474番12	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	21.00m ²	平成15年7月30日 ～平成15年8月31日

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
18	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目2235番3	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	42.00m ²	平成15年8月9日 ～平成15年9月22日
19	横小路周辺遺跡 (NO.259)	二階堂字四ツ115番3の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	80.00m ²	平成15年8月9日 ～平成15年9月27日
20	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目283番の一部	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	81.65m ²	平成15年8月21日 ～平成15年10月23日
21	永福寺跡 (NO.61)	二階堂字亀ヶ瀬247番13	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	42.25m ²	平成15年9月10日 ～平成15年10月14日
22	瑞泉寺周辺遺跡 (NO.338)	二階堂字紅葉ヶ谷647番6外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	50.00m ²	平成15年9月12日 ～平成15年10月25日
23	下馬周辺遺跡 (NO.200)	大町二丁目975番6	個人専用住宅	都市	25.00m ²	平成15年10月8日 ～平成15年10月17日
24	弁ヶ谷遺跡 (NO.314)	材木座六丁目643番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	25.80m ²	平成15年10月21日 ～平成15年11月17日
25	弁ヶ谷遺跡 (NO.314)	材木座六丁目643番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	25.00m ²	平成15年10月21日 ～平成15年11月17日
26	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	御成町126番1	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	18.00m ²	平成15年10月25日 ～平成15年11月21日
27	筈目遺跡 (NO.207)	筈目町415番21外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	13.10m ²	平成15年11月18日 ～平成15年11月27日
28	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目922番7外	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	35.00m ²	平成15年12月1日 ～平成15年12月26日
29	保寿院跡 (NO.250)	西御門一丁目922番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	76.00m ²	平成16年1月9日 ～平成16年2月26日
30	北条小町邸跡 (NO.282)	雪ノ下一丁目440番の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	56.00m ²	平成16年1月16日 ～平成16年2月19日
31	円覚寺門前遺跡 (NO.287)	山ノ内字松岡1377番6	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	49.30m ²	平成16年1月20日 ～平成16年3月13日
32	宇津宮辻子幕府跡 (NO.239)	小町二丁目283番の一部	個人専用住宅 (地下室)	官衙	62.62m ²	平成16年2月26日 ～平成16年4月3日
33	北条時房・顯時邸跡 (NO.278)	雪ノ下一丁目236番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	22.50m ²	平成16年3月3日 ～平成16年4月6日
34	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目402番9外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	191.00m ²	平成16年3月10日 ～平成16年5月16日

★は平成14年度からの継続調査を示す。

◎は平成16年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

1:50,000



平成15年度の緊急観測調査地点（1～34）

本誌掲載の平成13・14年度年度調査地点（①～⑩）

※道跡名は一覽表を参照

たまなわじょうあと
玉縄城跡 (No.63)

植木字植谷戸70番1外地点

例 言

- 1 本報は鎌倉市植木字植谷戸70番1外地点に所在する玉縄城跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は宅地造成に関わる基礎工事に先立って実施された。調査面積は30.00m²である。
- 3 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成13年5月25日から6月14日まで行なった。
- 4 調査体制は以下の通りである。
調査担当者 原 広志
調査員 伊丹まどか・須佐直子・石元道子・須佐仁和・早坂伸市
協力機関名 ㈲武藏建設
- 5 本報の執筆は第4章を原。その他を伊丹が執筆した。資料整理作業は執筆者の他に、石元が行なった。
- 6 本報の遺構と遺物の挿図の縮尺は次の通りである。
遺構全側図：1/100、個別遺構図：1/50、遺物実測図：1/3
なお、各挿図には縮尺を表示している。
- 7 本報掲載の写真は、遺構を原が、遺物を石元が撮影した。
- 8 挿図の「玉縄城周辺の地形」(図2)は『玉縄城跡発掘調査報告書』 玉縄城跡発掘調査団 1994年刊より転載した。
- 9 発掘調査における出土遺物・図面・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の概要	8
1. 調査の経過	8
2. 測量設定	8
第3章 検出遺構と出土遺物	8
第4章まとめ	9

挿 図 目 次

図1 調査地点周辺図	5
図2 玉繩城周辺の地形	6
国土座標上の位置	6
図3 調査地全側図	7
エレベーション図	7
調査地等高線図	7
図4 土壙1	8
図5 出土遺物	8

図 版 目 次

図版1 1. 調査地より七曲坂を望む	11
2. 調査地全景（北から）	11
図版2 1. 調査地全景（南から）	12
2. 調査地斜面堆積状況	12
図版3 1. 土壙1検出状況	13
2. ピット1検出状況	13
図版4 出土遺物	14

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

玉繩城は戦国大名後北条氏の有力支城の一つで、該期には東相模地域の領国經營を担っていた。北条早雲により永正9年（1512）に築城、豊臣秀吉の小田原討伐に伴い天正18年（1590）に開城している。近世には廃城後、城の南に松平氏の陣屋が置かれる。

玉繩城の城主は代々「玉繩北条氏」として世襲されており、氏時・為昌・綱成・氏繁・氏舜・氏勝の6代続いたと見られている。氏時は早雲の子で、大永6年（1526）には鎌倉に侵入した安房の里見実と戸部川（柏尾川）辺りで戦を交えている。為昌は享禄4年（1531）から天文11年まで城主であったとされる。鶴岡八幡宮の再興に関わっていたことが知られる。綱成は城主となった時期ははっきりしないが元亀3年（1572）まで在任していたとされ、最も長く城主を勤めている。武勇の譽れが高い。氏繁は玉繩ばかりでなく、広く関東に足跡を残している。氏舜は天正5年（1577）から同8年（1580）頃に城主であったと見られる。氏勝は最後の城主で、天正18年（1590）豊臣秀吉の軍勢を前に開城している。また、玉繩に拠った後北条氏の家臣は「玉繩衆」と呼ばれ、「小田原衆所領役帳」に玉繩城主とその家臣の名が挙げられている。主要な家臣としては間宮豊前守と行方与次郎がいる。

玉繩城は鎌倉市域の北西端に位置し、稜線や谷戸があり組んだ海拔50～80mほどの低丘陵に築かれている。現在では学校建設・宅地開発・マンション建設などによって、あまり旧状を留めてはいない。城域は図2に示した太線範囲が該当するとと思われるが、さらにその周辺地域も城と密接な係わりを有していたと考えられ、広大な範囲に及んでいる。城域自体は東寄りに位置する中心部と西側に展開する外郭部に分けられ、さらに周辺地域には城下や砦が点在していた。城の中心部には本丸を初めとする多くの曲輪や土塁・堀が築かれているのに対し、外郭部は大小の谷戸で形成されている。また、城下城には農地が存在し、それとともに家臣の居宅や寺院が点在して、職人・商人が集住して常設ないし定期的な市が設けられ、ある程度の町が形成されていたと思われる。砦には二伝寺砦・高岩砦・おんべ山砦・長尾砦・天神山がある。

玉繩城周辺では今次調査地点を含めて今まで＊個所で発掘調査が実施されている。個々の調査について取り上げることは出来ないが、玉繩城期の遺構では曲輪・平坦面・切岸・土塁・縄掘・道路・通路状遺構・建物址・柱穴列・井戸・溝・土壙・ピットなどが、遺物では中国製陶磁器（青磁・染付・白磁）・国産陶磁器（瀬戸・美濃・常滑）・かわらけ・鉄製品（釘・錢貨）・石製品（石臼・砥石・つぶて石）・漆器・木製品などが検出され、廃城後の城割りも確認されている。ただし一部の地点を除くと、遺構・遺物の密度はかなり低く（特に遺物）、玉繩城関連の遺構・遺物が全く発見されないケースも少なくない。

調査地点は城内の外郭部に該当し、玉繩城東方の通路となる七曲坂の入り口、北方に延びる谷戸の東側の丘陵の尾根に位置する。玉繩城期にはこの一帯は食料調達用の水田が開けていた。この水田は水濠の役割も果たしていたようである。また、七曲坂を上っていくと七曲の曲輪に至る。現在も七曲坂に至る山裾には、長屋門が残り、その横を舗装された道路が七曲坂に至る個所まで延びている。この情景は旧状のままを残すと考えられる。

※本章は大河内勉「玉繩城跡－城廻字中村478番3地点」（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17

所収－平成13年3月）を加筆・修正したものである。

※参考文献『鎌倉市史 考古編』 勝吉川弘文館 1956年3月



図1 調査地点周辺図

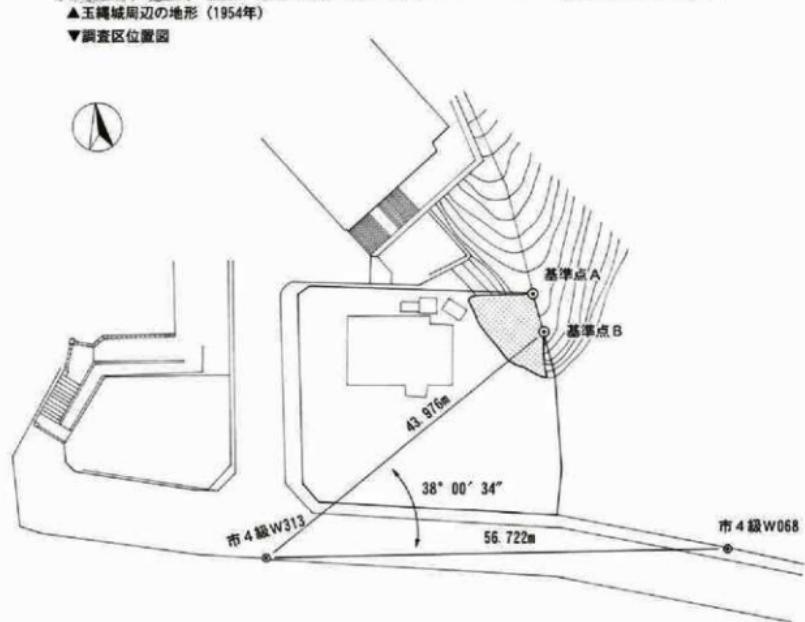


図2 國土座標上の位置

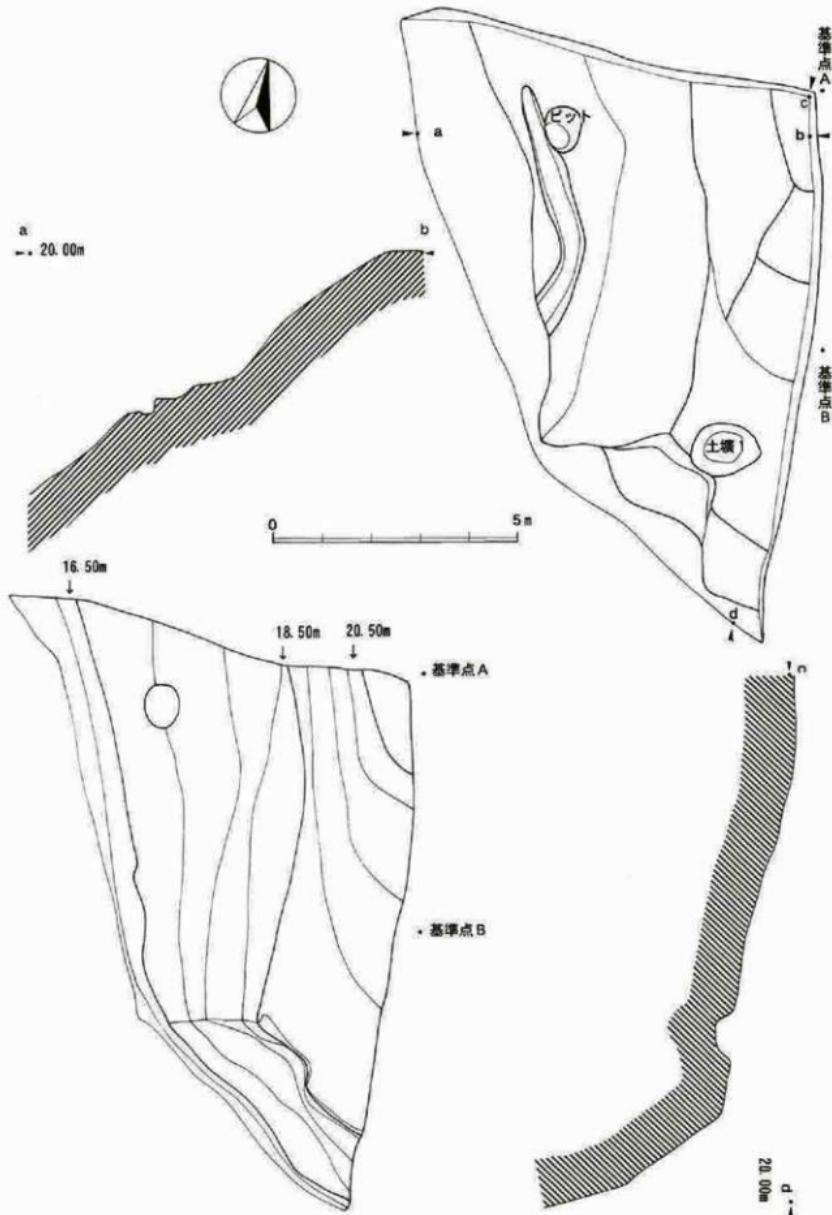


図3 調査地全側図・エレベーション図・等高線図

第2章 調査の概要

1 調査の経過

本調査地は七曲坂に至る谷戸の北側に延びる支谷の東側の丘陵の尾根裾に位置する。宅地造成に伴う急傾斜地崩壊対策事業の一貫として調査を実施した。調査面積は30.00m²である。

発掘調査は平成13年5月25日から6月14日まで実施した。調査に先立って岩盤上面の植木の伐採、除草、堆積土の除去を重機と人力を併用して行なった。調査地は斜面に位置し、尾根裾が崖状に切り立っている事等から、対象範囲は狹小なものとなった。

2 測量設定(図2)

調査地が斜面に位置するため、グリッドを設定して調査を実施することが不可能であったため、調査地内に任意の基準点(A点・B点)を設置し、光波測量機による測量(図面作成)を実施した。その際鎌倉市道路管理課が設置した4級基準点W313を基点に4級基準点W068を結び、調査区内の基準点Bに国土座標標を移動した。

レベル原点は鎌倉市3級水準点(No.304=14,688m)を調査区内に移動した。従って、文章中および挿図のレベル数値は全て海拔高で示してある。

第3章 検出遺構と出土遺物

調査地点は調査面積が狭小なうえ、丘陵の尾根裾の頂部の斜面に位置し、遺構検出の為の好条件は整っていないかったが、本調査地の支谷奥ではマンション建設に伴う発掘調査が1999年に実施され(註1)、石垣状遺構・掘立柱建物・やぐら・柱穴・溝・井戸・土壙・ピット等の遺構が確認され、堆積層中からは古墳時代前期の遺物が出土し、丘陵上に同時期の住居址が存在すると考えられ、今回の調査では関係する遺構・遺物の発見を期待した。

しかしながら、重機と人力により、岩盤上面に堆積した表土を掘削した後、溝状遺構・ピット・土壙等の遺構を確認したが、後世の搅乱を大きく受けしており、確実に中世の遺構と考えられるのは土壙1基のみであった。遺物も中世の遺物と考えられるものは図示した2点の他には、かわらけの破片が3点出土したのみである。また、期待していた古代の遺物は出土しなかった。

検出遺構(図3)

調査地となった斜面は3段の平場を持つ。1段目は斜面頂部。1段目の平場は調査区外に続くが、大

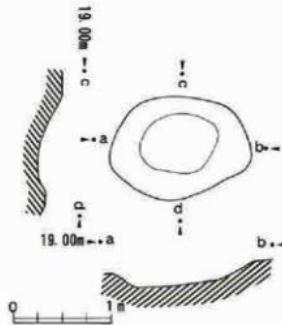


図4 土壙1

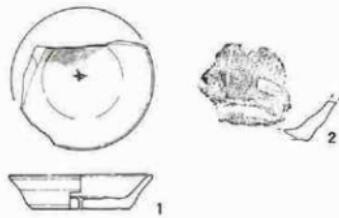


図5 出土遺物

きく広がる様子はなかった。2段目の平場は土壙1を検出した調査地南の尾根端部である。この平場の先は崖状に切り立っている。土壙1は一部削平を受けており、後世に尾根端部を削って崖状に造成した際に削平を受けた可能性もある。3段目の平場は調査地東で溝状土壙・ピットを検出した。この平場は、やや傾斜しており、平坦な平場を造成していたとは言いがたい。また、ピット・溝状土壙は時期は不明であるが後世に作られたものであると考えている。この平場の端部も先は崖状に切り立っている。

前述した支谷奥の調査地点では、丘陵崖面を意識的に切り出して造成を行なっており、本調査地点で確認した崖面はそれに続くものであろうと考えている。

土壤1（図4）

長軸140cm、短軸102cm、深さ20cmを測る。堆積土から、かわらけが出土している。

出土遺物（図5）

1は土壙1出土。ロクロ成形かわらけ。側壁は外反して立ち上がる。底部に穿孔が開く。外底部一部に油煤痕残る。胎土は砂分を多く含む粗い土であった。2は瀬戸窯割り鉢断面。割り目は7条を1単位としている。図示しなかった遺物はかわらけ3点。

（註1）「玉繩城跡（No.63）植谷戸地点 発掘調査概要報告」 平成11年6月

現在資料整理中であるが、出土遺物から15世紀後半から16世紀後半の年代観が与えられている。

第4章 まとめ

玉繩城跡は、永正9年（1512）に関八州制覇の野望をもつ北条早雲が、三浦半島を本拠として相模一円に勢力を拡げていた三浦氏を奉制するために半島の付根で交通の要地にあたり、地形に適した要害の当地に城を築いたものである。武藏方面から三浦氏への援軍を絶つ目的もあって、本城には藤沢市の渡内・高谷・大堀、横浜市戸塚区長尾台、鎌倉市山崎にそれぞれ支城をもうけ後北条氏にとって東相模最大の拠点であった。本調査地点は、玉繩城の東方外郭部に所在しており植木谷戸という南北に走る谷に位置している。その中心付近から西方へ向かう支谷を通って玉繩城主廓部地域の前面に抜ける道は、城が機能していた当時の道と伝えられており、支谷の突き当たりで七曲坂と呼称される急坂の道となる。この道の登り口に向かって右側域にあたり南東方向に開口した小谷戸とそれを囲む丘陵の南東端部が調査地点にあたる。また西方にそびえる崖は玉繩城主廓部の諏訪段へと続いている。

本調査地点の西側に隣接する共同住宅建設に先立つ発掘調査（鎌倉市植木字植谷戸66番1外）では、15世紀後半～16世紀前半（第2面）と16世紀後半（第1面）の二時期の生活面に伴って、やぐら2基、掘立柱建物8軒、柱穴列18列、溝15条、井戸5基、土壙25基、石垣状造構1基の他、多数のピットが検出された。出土遺物には、舶載陶磁器、国産陶磁器、中世土器、漆・木製品、石・金属製品、鑄造製品、近世かわらけなどがみられた。この発掘調査の調査団長である田代郁夫氏のご教示によると、『やぐら』の存在から谷戸内に寺院跡の存在が想定できるが、第2面で検出された掘立柱建物の性格については検討の余地があること、第1面で検出された掘立柱建物は立地や時期から玉繩城に関連した根小屋的な建物が考えられるとの貴重なご意見を頂いた。

今回の調査地点は、南東方向に下ってくる細い尾根頂部から既存建物のある平地部分までの西側斜面にあたる極めて狭い範囲の調査であり、後世の崩落が著しく認められたが、頂部から斜面にかけて岩盤

を削平して造成された3段の平場を検出することができた。尾根端部の岩盤平場面に穿たれた土壙1から15世紀後葉～16世紀頃の所産と考えられるロクロ成形のかわらけと瀬戸大窯期の擂鉢と考えられるものが出土した。3段目の平場はやや傾斜面になっており、ここからは溝状土壙・ピットを検出したが、覆土の観察から考えて後世に開削されたものと捉えられた。

従って、本調査地点で検出した平場及び崖面は後世の削平や崩落を受けてはいるが、西隣する調査地点で検出された丘陵崖面の人工的な造成面の続きにあたるものであろう。

【参考文献】

- 大三輪龍彦 1986 『相模玉縄城－城廻字打越165地点の発掘調査』 鎌倉考古学研究所調査研究報告
馬淵和雄他 第3集 鎌倉考古学研究所
大河内勉 1994 『玉縄城跡発掘調査報告書－植木相模陣374番他地点－』 玉縄城跡発掘調査団
菊川英政
田代郁夫 1999 『玉縄城跡植谷戸地点発掘調査概要報告－鎌倉市植木字植谷戸66番1外－』 玉縄城跡発掘調査団

田代郁夫氏には、調査期間中や資料整理に際して多大なご協力とご教示を賜った。記して感謝の意を申し上げたい。



1. 調査地より七曲坂を望む



2. 調査地全景（北から）

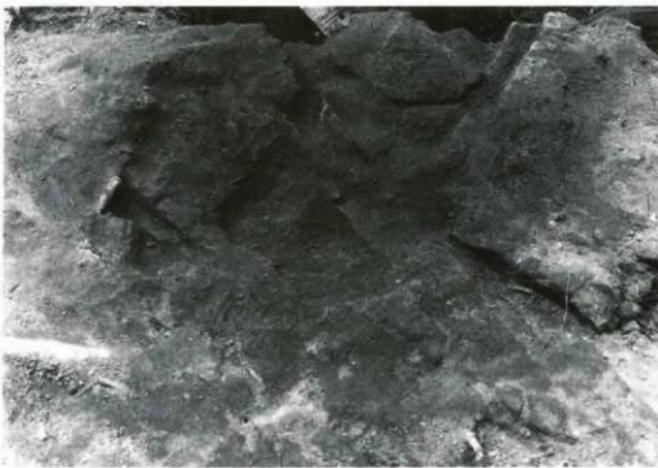
図版2



1. 調査地全景（南から）



2. 調査地斜面堆積状況



1. 土壌 1 検出状況



2. ピット 1 検出状況

図版4



いま こうじ にし い せき
今小路西遺跡 (No.201)

由比ガ浜一丁目148番5 地点

例　　言

1. 本書は、鎌倉市由比ガ浜一丁目148番5における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。

2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

調査期間は平成13年6月5日～同年8月3日にかけて実施され、調査対象面積は115.02m²である。
出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。

3. 調査体制は以下のとおりである。

調査の主体 鎌倉市教育委員会

調査担当 宮田眞（日本考古学协会会员）

調査員 滝澤晶子

調査補助員 宇賀神雅子・岩沢智和

調査協力者 渡辺輝彦・沼上三代治（社団法人鎌倉市シルバーハウスセンター）・袖山時彦

4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構図 1/80・1/40（遺構図の水系高は海拔高を示す。）

遺物実測図 1/3・1/6

5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。

軸の限界線 ————— 使用痕の範囲 ↗←→↖

調整の変化点 ————— 加工痕の範囲 ↗←→↖

6. 本書の執筆は第1章 宮田眞、第2～4章・編集は滝澤晶子が行なった。

7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。

遺構図版 滝澤晶子

遺物図版 河内令子・渡辺美佐子・坂倉美恵子

遺構写真 滝澤晶子

遺物写真 滝澤晶子

8. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関に御教示・御協力を賜った。（敬称略）
汐見一夫（石製品の分類）

9. また、発掘調査に際して多大な御協力・御理解を頂いた施主の方にここに記して、深く感謝の意を表する。

目次 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	19
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	19
第3章 検出遺構と出土遺物	24
第4章まとめ	61

挿図目次

図1 遺跡周辺図	20	図22 3面遺構配置図	42
図2 遺跡位置図	21	図23 方形竪穴建築址2・4	43
図3 グリッド配置図	22	図24 方形竪穴建築址2出土遺物	43
図4 基本土層図	23	図25 方形竪穴建築址4出土遺物	44
図5 1面遺構配置図	25	図26 方形竪穴建築址3・5	44
図6 近世溝1	26	図27 方形竪穴建築址3出土遺物	45
図7 道路遺構1	26	図28 方形竪穴建築址5出土遺物	45
図8 道路遺構1出土遺物	27	図29 井戸1・2	46
図9 表土層出土遺物	28	図30 井戸1出土遺物	46
図10 1面出土遺物(1)	29	図31 井戸2出土遺物	46
図11 1面出土遺物(2)	30	図32 方形土壙1・2・土壙3~9	47
図12 1面出土遺物(3)	31	図33 方形土壙1・2出土遺物	50
図13 2面遺構配置図	33	図34 土壙2・3・4・8出土遺物	52
図14 方形竪穴建築址1	34	図35 溝2	53
図15 方形竪穴建築址1出土遺物	35	図36 溝2出土遺物	55
図16 土壙1	36	図37 3面出土遺物(1)	57
図17 土壙1出土遺物	36	図38 3面出土遺物(2)	58
図18 道路遺構2・3	37	図39 中世層出土の古代遺物	59
図19 道路遺構2・3出土遺物	38	図40 不明遺構	60
図20 2面出土遺物(1)	39	図41 3面下出土遺物	60
図21 2面出土遺物(2)	40		

写真図版目次

図版1	A. 作業風景（東より）	63
	B. 1面全景（西より）	63
図版2	A. 1面近世溝1（西より）	64
	B. 1面近世溝1（北より）	64
図版3	A. 1面道路遺構1（北より）	65
	B. 道路遺構1・2・3東西断面	65
図版4	A. 2面全景（西より）	66
	B. 2面方形竪穴建築址1（北より）	66
図版5	A. 2面道路遺構2・3（西より）	67
	B. 2面道路遺構2・3 贊増状況	67
図版6	A. 3面全景（西より）	68
	B. 3面方形竪穴建築址2（南より）	68
図版7	A. 3面井戸1（西より）	69
	B. 3面井戸1（北より）	69
図版8	A. 3面溝2（南より）	70
図版9	A. 3面方形土壙1（東より）	71
	B. 3面方形土壙1・土壙3・4（北より）	71
図版10	A. 3面土壙4（北より）	72
	B. 3面土壙7（北より）	72
図版11	A. 3面調査区南東部（東より）	73
	B. 不明遺構（西より）	73
図版12	出土遺物（1）	74
図版13	出土遺物（2）	75
図版14	出土遺物（3）	76
図版15	出土遺物（4）	77
図版16	出土遺物（5）	78

第1章 遺跡の位置と歴史的背景

本調査地点はJR横須賀線鎌倉駅の南西約500mの距離、鎌倉市由比ガ浜一丁目148番5に所在する。遺跡名である「今小路西遺跡」は、調査地の東方150mを南北に通る通称「今小路」の西側に位置する遺跡の総称で、南北約1kmに亘っている。今小路西遺跡ではこれまでに市立御成小学校内・鎌倉市社会福祉センター用地をはじめ大小多くの調査が実施されている。

調査地は地形的に見ると、鎌倉の平野部を取り囲む丘陵の一頂上である「源氏山」から、真南に延びる稜線の南端部に位置する通称「御成山」の南麓となる。また調査地の北方40mには暗渠であるが「佐助川」が西から東に流れている。

調査地の北方150mの距離にある、御成小学校内の発掘調査では、御成山を背にして南北に並ぶ広大な御家人クラス以上の上級武家屋敷と、その東側地域に道路遺構を挟んで展開する中世町屋群が検出された。さらにその下層からは、8~10世紀代の大規模な掘立柱建物群や基壇建築群が発見され、現在鎌倉都衙に比定されている。鎌倉都衙に関連すると考えられる遺構群の広がりは、東方はJR鎌倉駅西口一帯のビル建設に伴う発掘調査からも検出されており、更に御成小学校に南隣する社会福祉センター用地の発掘調査からも大型掘立柱建物3棟が発見された。

また御成小学校内からは、縄文時代中期~後期に至る土器片が出土している。これらは水磨した小片が中心で、当該地において居住、活動が営まれたとは考えにくく、周辺微高地等から流下・混入したと推測される。

本調査地の南方350mの江ノ電和田塚駅付近には、人物埴輪の出土で知られる、高塚式の「向原古墳群」があったとされる。しかし現在、和田塚駅付近は住宅が密集する平坦地となっており、古墳群の痕跡は全く残っていない。御成小学校内からは土器類や円筒埴輪、社会福祉センター用地からはメノウ製の勾玉等、古墳時代の遺物が出土しており、調査地付近においても古墳群の範囲が及んでいた可能性を持たれる。

また平成12年の夏に本調査地の北方25mの近接地点で発掘調査が実施され、中世期の掘立柱建物建物2棟及び柱穴列等の検出があり、さらに僅かではあるが古代遺物の出土が報告されている。

これらの点から、本調査地においても中世、古代の複合遺跡の遺存する可能性が指摘される。

《参考文献》

- 今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書 1990年 同発掘調査団編・鎌倉市教育委員会発行
今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地） 1993年 同調査団編・鎌倉市教育委員会発行
鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第1分冊、185~198頁） 2002年 鎌倉市教育委員会

第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層

1) 調査経過

発掘調査は、鎌倉市由比ガ浜一丁目148番5における個人専用住宅建設の事前調査として実施された。調査は平成13年4月27日に鎌倉市教育委員会による確認調査の後、本調査を平成13年6月5日~同年8月3日にかけて行なった。調査対象面積は115.02m²である。



図1 遺跡周辺図



図2 遺跡位置図

平成13年6月5日 重機による表土掘削を開始
 平成13年6月19日 1面検出 道路遺構1検出
 平成13年6月28日 1面調査終了
 平成13年7月2日 2面検出 道路遺構2・方形堅穴建築址1検出
 平成13年7月12日 2面調査終了
 平成13年7月13日 3面検出
 平成13年7月14日 3面構造群検出(方形堅穴建築址・土壤・方形土壤等)
 平成13年7月25日 井戸1・2検出
 平成13年7月26日 溝2検出
 平成13年8月1日 3面全景撮影
 平成13年8月2日 不明遺構検出
 平成13年8月3日 現地調査終了

2) グリッド配置(図2・3)

グリッドは調査区全体をカバーするように設定した。その設定は図3に示した通りで、1目盛は2mで、それぞれ、x軸は北に、y軸は東に数値が増える。

磁北はグリッドの南北軸に対し、 $36^{\circ} 43' 00''$ 西に傾いている。また、本来の方位とは異なるが、便宜上x軸を南北、y軸を東西と呼び報告する。

国土座標との関係は、 $(x\ 6, y\ 0) = (-76121m, -25896.5m)$ ・ $(x\ 6, y\ 10) = (-76124.7m, -25887m)$ である。

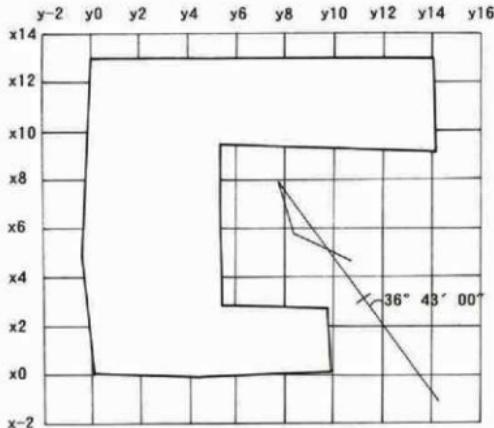


図3 グリッド配置図

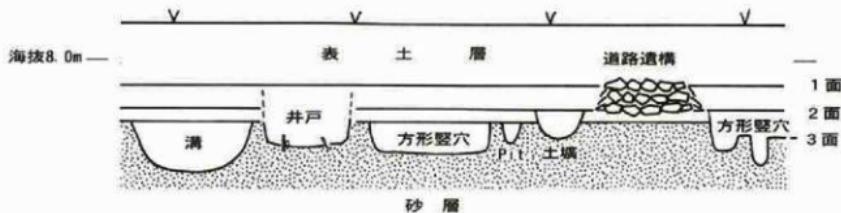


図4 基本土層図

3) 基本土層

本調査地点からは3面の生活面が確認された。建設に伴う掘削深度の制限があり、一部下層が未調査な部分があるものの、中世面は全て検出された。

1面

現地表は海拔8.3m前後を測り、1面は現地表下30cmに検出された。表土層は現代埋立層で、数ヶ所に擾乱が確認された。1面上には20cm程度の包含層があった。包含層は茶褐色砂質土で、締まりのある層である。1面構成土は暗茶褐色粘質土で、かわらけ片・小土丹粒・炭化物を多く含み、締まりは良い。

2面

1面下30cm、海拔7.7m前後に検出された。包含層は暗茶褐色砂質土で、5~10cmの土丹・かわらけ片を多く含むしまりの良い層である。2面構成土は暗褐色砂質土で、小土丹粒・炭化物を多く含み、締まりはとても良い。

3面

2面下20cm、海拔7.5m前後に検出された。茶褐色砂層の地山である。締まりは良いが、湧水のため脆い。

古代層

3面同レベルから古代の可能性がある遺構が検出され、古代遺物が幾つか出土している。調査区南東の張り出し部分は地山の砂層が検出されず、3面レベル以下に古代層のある可能性があるが、調査掘削深度の関係上未調査である。

第3章 検出遺構と出土遺物

今回の調査では中世生活面が3時期確認された。浜地に近く、周辺遺跡からは砂丘が確認されている。いずれも砂質土で構成される面であった。遺跡の中央付近には3期にわたる南北道路遺構・溝1条が検出された。また、2・3面からは方形竪穴建築址・井戸・土壙等が密に検出され、当遺跡からは町屋的要素を示す遺構群が発見された。

なお、本来の方位とは若干異なるが、便宜上グリッドラインに沿った東西南北を本報告書内では使用し、正確な方位は各図面上に矢印を記入している。

1面（図5）

1面は現地表下30cm、海拔8.0m前後に検出されたほぼ平坦な面である。かなりの部分を近世以降に擾乱されており、近世溝が1条検出された。中世期の遺構としては道路遺構が1本検出され、調査区北東部は大土丹により一気に埋立されていた。

近世溝1（図6）

近世溝1は(x13, y8)グリッド付近、海拔7.65m前後に検出された南北方向の溝である。深さは検出面から60cmを測るが東岸及び上層は擾乱されて遺存していない。a-a'の図のように二段掘りされている。下端際には丸杭が3本遺存していた。また、中段には遺存状態は悪いが、板が検出された。底面はほぼ平坦で比高差は数cmしかない。南北軸線方向はN-34°-Eである。

道路遺構1（図7）

道路遺構1は(x12~0, y4~6)グリッド付近、海拔7.8m前後に検出された南北方向の土丹地業である。道幅は検出し得た範囲で120cmを測る。長さは調査区外南に続き、不明である。ごくわずかではあるが、南から北に上っている。土丹は調査区北部が密である。南北軸線方向はN-33°-Eである。

道路遺構1出土遺物（図8）

図8-1は糸切りかわらけの小皿である。復元で口径は8.0cm、底径は4.9cm、器高は2.0cmを測る。胎土は肌色を呈し粉質、微砂を多く含む。

図8-2・3は石製品である。2は伊予産の中砥。3は火打石。半透明の石英である。

図8-4は平瓦。凸面は格子叩き目が残る。

胎土は灰色を呈し、砂を多く含む。

表土層出土遺物（図9）

図9-1~9はかわらけである。1・5は手づくねである。胎土は1・4・6・7・9は橙色、その他は肌色を呈す。1・7は胎芯が黒灰色を呈す。8・9はスノコ痕が強く残る。

図9-10~20は磁器である。10~14は青磁。

図9 表土層出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(13.0)	-	3.0
2	-	(12.8)	(8.6)	3.2
3	-	(12.0)	(8.0)	3.5
4	-	(11.9)	(7.6)	2.8
5	-	(9.4)	-	1.6
6	-	(8.8)	(6.8)	1.8
7	-	(8.2)	(5.2)	2.1
8	-	(7.8)	5.7	2.0
9	-	7.3	5.4	1.9



図5 1面遺構配置図

10・11は蓮弁文碗の口縁部片である。釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。釉層厚く失透している。素地は灰白色を呈し、緻密である。12・13は碗の底部片である。小破片のため文様は不明。12の底径は復元で5.5cmを測る。釉調は12が黄灰色、13が緑青色を呈し、光沢は良い。素地は灰白色を呈し、緻密である。

14は折筋鉢である。内面に陰刻で蓮弁文が施される。口径は復元で20.0cmを測る。釉調は青味灰色を呈し、光沢は良い。細かく貫入があり、微気泡のため若干透明度は低い。素地は灰色を呈し、堅緻である。15～20は白磁の口兀皿である。15・16の口径は復元で10.4cm・10.3cmを、19の底径は6.0cmを測る。釉調は概ね灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し、堅緻。20は青白磁の梅瓶の底部片である。底径は復元で8.4cmを測る。釉調は透明度の高い水青色を呈し、光沢は良い。素地は灰白色を呈し、硬質だが、黒色微粒を多く含みやや粗い。

図9～21は瀬戸のおろし皿である。表面には灰釉がかかり、胎土は灰色を呈し、硬質である。

図9-22・23は常滑である。22は蓋の口縁部片。口径は復元で14.6cmを測る。口縁端は外側に折り返されている。器表は茶褐色を呈し、自然釉がかかること。胎土は灰色を呈し、比較的密で緻密である。23は蓋の口縁部片。n字口縁で口径は復元で44.4cmを測る。器表は茶褐色を呈し、口縁内側・肩部に自然釉がかかること。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

図9-24・25は研磨痕のある常滑片である。

図9-26・27は鉄製の釘である。図9-28~30は錢である。28は至道元寶、29は元豐通寶、30は元祐通寶である。

図9-31・32は近世遺物である。31は瀬戸の香炉である。32は用途不明の土器である。器形はひょうたん型で、上方に1ヶ所孔が穿たれる。内底面には何かを貼り付けた痕が2ヶ所残る。外面は火を受け煤けている。

1面出土遺物(図10~12)

図10-1~41は糸切りかわらけである。1~16は大皿、17~40は小皿、41は極小の皿である。5~10は口径が大きく、器厚は薄手である。11~16は口径が11cm前後である。胎土は概ね肌色~淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。8・11・14~16は比較的きめが細かい。17~21は底径が広く器高の低いタイプである。胎土は肌色を呈し、微砂・小礫を含み、粉質だが、若干ざらつく。26~29は底径が小さく、器壁が開いて立ち上がる。28は糸切りを失敗し、底部が厚く残ってしまっている。胎土は明肌色を呈し、粉質である。30~37は底径が小さく、器高は深い。器壁は体部中位に強く稜が入り、角度を変えて立ち上がる。器厚は薄手である。胎土は概ね淡橙色を呈し、微砂を含む。焼成は良好で、硬く焼き締まる物が多い。38~40は器高が深く、器壁は若干丸味を持つ。器厚は薄手である。胎土は

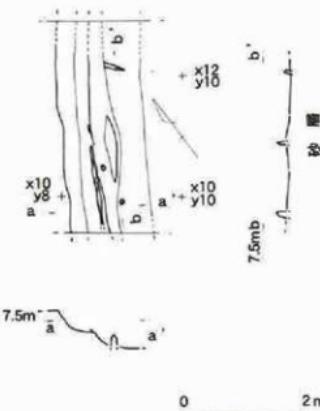


図6 近世溝1

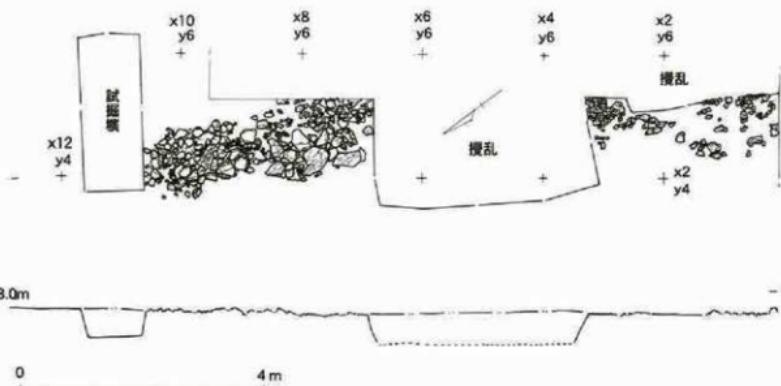


図7 道路遺構1

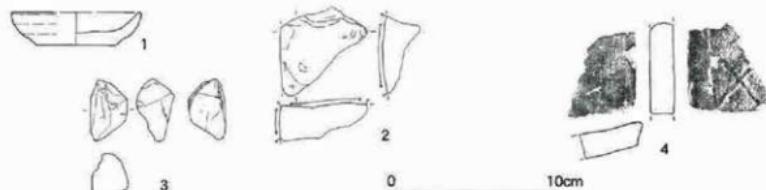


図8 道路遺構1出土遺物

淡橙色を呈し、微砂を含む。10・18・21・22・24・25・26・35・36・38は灯明皿で、器表に煤が付着している。

図10-42~69は磁器である。42~54は青磁。42~47は蓮弁文碗である。43・44の口径は復元で18.0cm・14.2cmを測る。釉調は43・44・46が緑青色、45が灰緑色を呈し、光沢は良い。43は透明度が低い。46は再火を受け白濁している。素地はいずれも灰色を呈し、堅緻である。47は底部片である。釉調は灰緑色を呈し、不透明である。素地は灰色を呈し、堅緻。48は創花文碗の口縁部片である。釉調は緑灰色を呈し、光沢は良いが、透明度は低い。素地は白色を呈す。49は碗の底部片である。内底面に型押しで文様があるが薄くてはっきりとしない。釉調は緑灰色を呈し、光沢が無い。素地は粘性があり、硬質である。50は折腰小鉢の口縁部片である。口径は復元で8.7cmを測る。釉調は緑青色だが、白濁して変色している。素地は灰色を呈し堅緻。51~53は折縁鉢の口縁部片である。53の口径は復元で22.8cmを測る。釉調は51・52が緑青色を呈し、微気泡多くやや失透するが、光沢は良い。53は青味灰白色を呈し、細かい貫入及び微気泡のため不透明である。素地は灰白色を呈し、緻密。54は鉢の底部片である。内底面に魚等の貼付け文があったようである。釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。素地は灰白色を呈し、硬質である。55~59は白磁の口元皿である。55・56の口径は復元で11.4cm・10.0cm

図10 1面出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高	番号	遺構	口径	底径	鍾高
1	-	(11.6)	(8.0)	2.9	22	-	(7.6)	(4.8)	1.8
2	-	(12.2)	(7.7)	3.5	23	-	(7.3)	(4.8)	1.8
3	-	(12.0)	(7.0)	2.9	24	-	(8.0)	(5.2)	1.9
4	-	(12.4)	(6.8)	3.0	25	-	(7.7)	(5.5)	1.9
5	-	13.0	7.0	3.3	26	-	8.3	5.1	1.9
6	-	(14.2)	(8.8)	3.1	27	-	(8.0)	(4.5)	1.7
7	-	(14.4)	(9.0)	3.6	28	-	(7.7)	(4.3)	2.1
8	-	(13.4)	(7.5)	3.1	29	-	(7.4)	(5.0)	1.6
9	-	12.9	7.8	3.2	30	-	(8.0)	4.8	2.5
10	-	(13.3)	(7.7)	3.1	31	-	(7.3)	4.1	2.1
11	-	(11.4)	(7.0)	3.2	32	-	(7.4)	4.4	2.2
12	-	(10.7)	6.0	3.5	33	-	(7.2)	(4.4)	2.6
13	-	(11.2)	(6.5)	2.8	34	-	7.0	4.0	2.3
14	-	(11.8)	7.0	3.4	35	-	(7.8)	(4.2)	2.3
15	-	(11.8)	7.0	3.0	36	-	(8.0)	4.4	2.3
16	-	(10.6)	(5.2)	2.9	37	-	(9.2)	(5.0)	2.5
17	-	8.8	7.0	1.4	38	-	(7.6)	4.6	2.2
18	-	(8.4)	(6.5)	1.3	39	-	(7.8)	(4.0)	2.5
19	-	(8.4)	(6.0)	1.7	40	-	7.6	(4.4)	1.9
20	-	(7.8)	5.2	1.8	41	-	(4.6)	(4.0)	0.8
21	-	8.2	5.0	1.6					

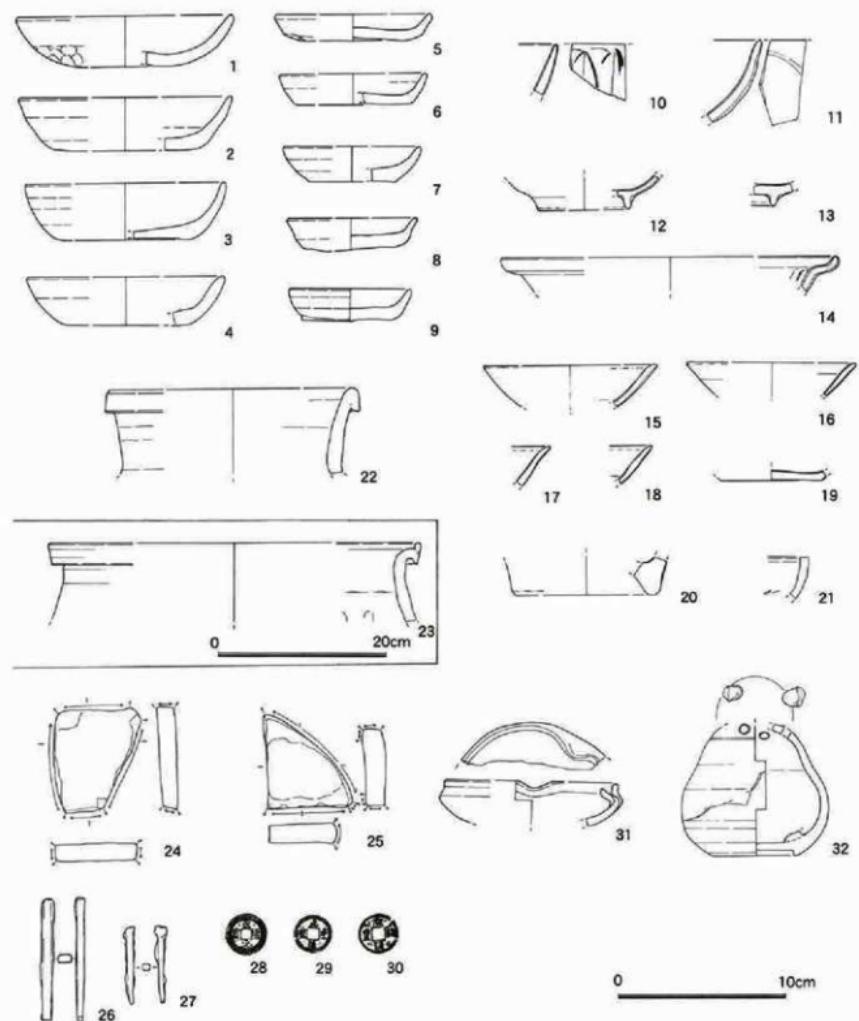


図9 表土層出土遺物

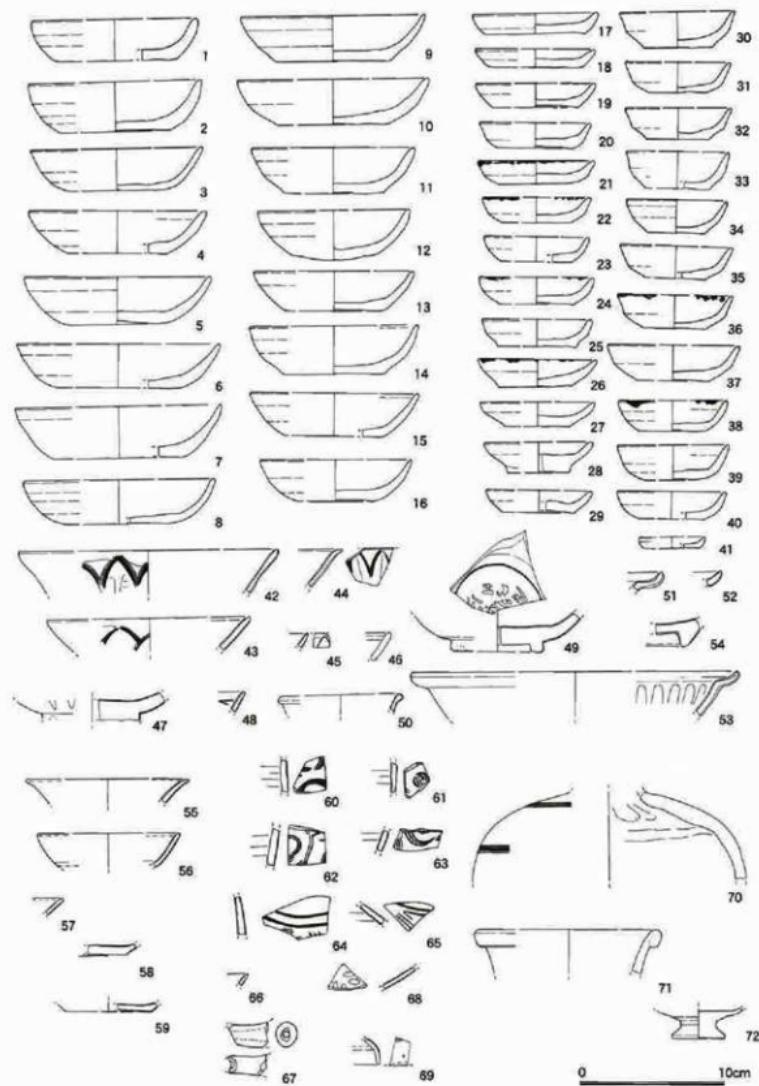


図10 1面出土遺物（1）

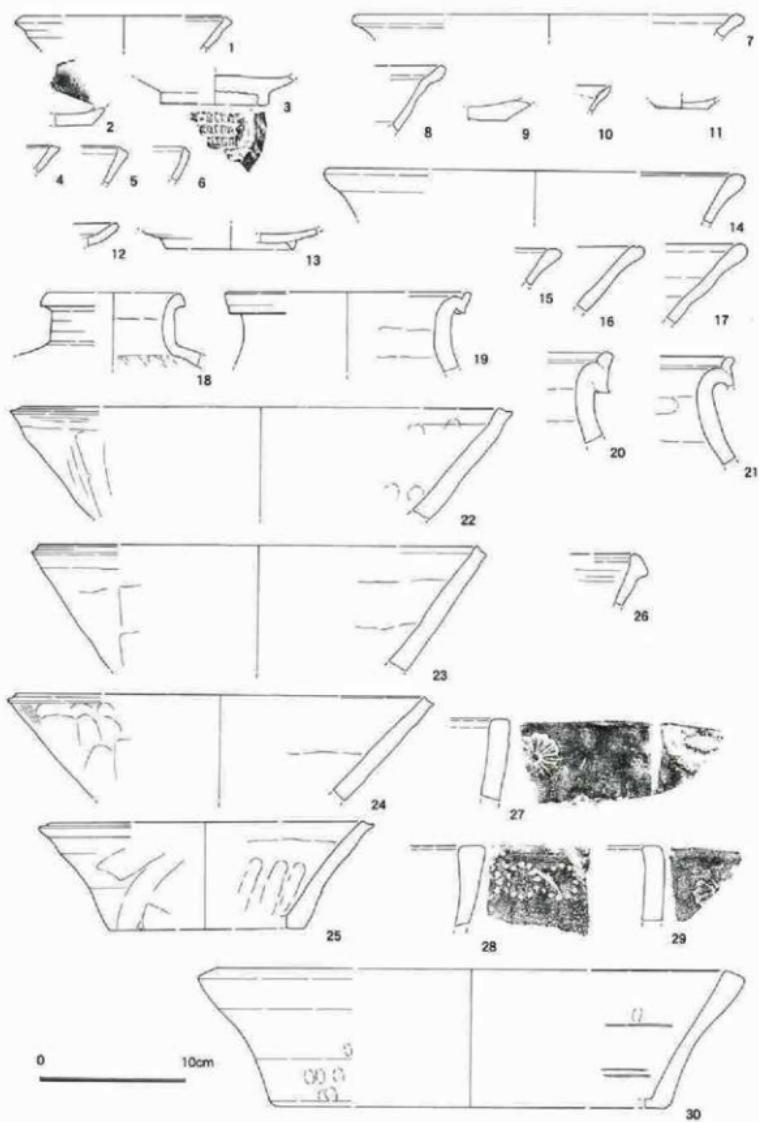


図11 1面出土遺物（2）

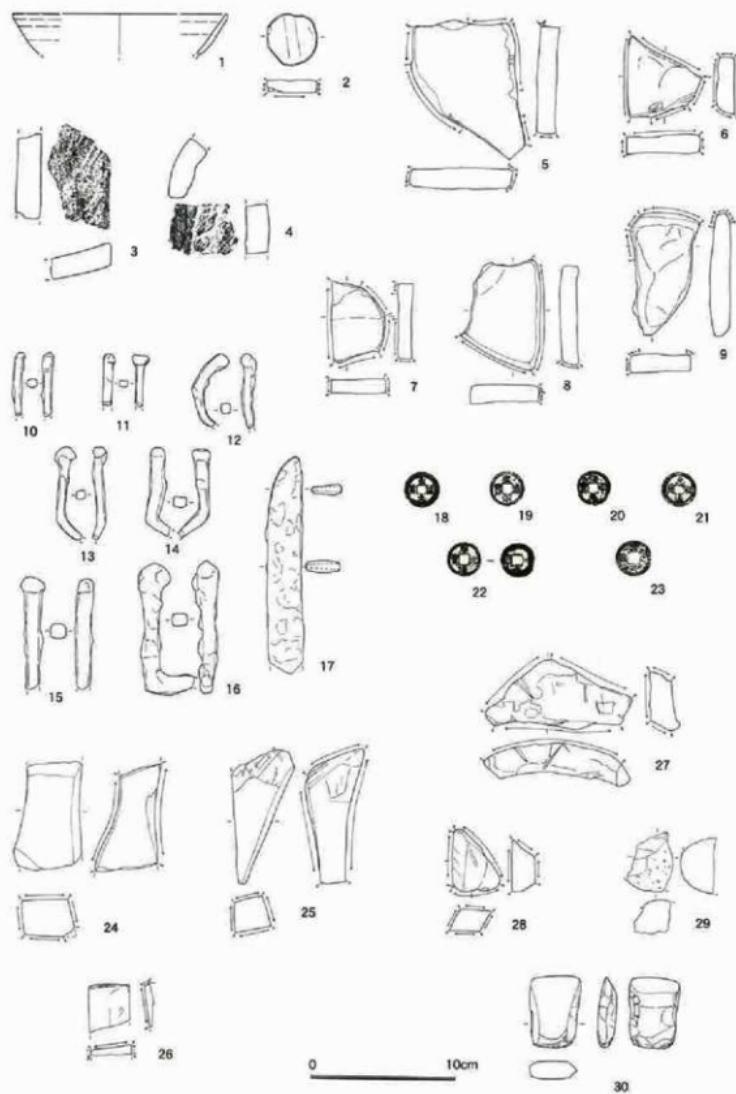


図12 1面出土遺物（3）

を測る。55は口縁端が外側に反り、56は丸味がある。釉調はいずれも若干青味のある灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し、緻密。60～69は青白磁である。60～65は梅瓶の破片である。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈し、黒色微粒を含み若干粗い。66は碗の口縁部片。67は碗か皿の底部片である。小破片のため詳細は不明。型押しで草文が施される。釉調は白濁し灰白色を呈す。68は水注の口。釉調は水青色を呈し、透明である。69は合子の蓋である。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈し、緻密。

図10-70～72・図11-1～11は瀬戸である。図10-70・71は壺である。70の最大胴径は復元で19.0cmを測る。肩の上位と下位に2条の沈線が廻る。灰釉がかかり、胎土は灰色を呈し、比較的きめ細かで、硬質である。71の口径は復元で11.0cmを測る。灰釉がかかり、胎土は灰色を呈し、硬質である。図10-72は仏飯器。器表には自然釉がかかる。胎土は肌色を呈し、やや粗い。図11-1～6はおろし皿である。1の口径は復元で15.0cmを測る。3は外底部高台内におろし目が付けられている。底径は復元で7.4cmを測る。灰釉がかかり、胎土は1が白褐色、3～6が灰白色、2が灰色を呈し、2は粘性があり緻密。その他は微石粒を含み粗い。図11-7・8は折縁鉢の口縁部片である。胎土は7が肌色、8が灰色を呈し、微石粒を含み、粗い。7は釉が剥離し、器表は肌荒れしている。8は光沢のある灰釉がかかる。図11-9は鉢の底部片。図11-10は縁釉小皿の口縁部片。光沢のある灰釉が口縁部にかかる。胎土は灰色を呈し、比較的緻密。図11-11は入子の底部片。内面は磨耗し、外面には煤が付着している。底径は3.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、無釉である。

図11-12・13は山皿・山茶碗である。12は山皿。胎土は灰色を呈し、微石粒を含み粗い。口縁に自然釉がかかる。13は山茶碗である。底径は復元で8.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、白色石粒を含む。断面逆三角形の貼付け高台が付く。内底面は磨耗している。

図11-14～17は山茶碗系こね鉢の口縁部片である。14の口径は復元で28.8cmを測る。いずれも胎土は灰色を呈し、石粒を含み粗い。口縁部を中心に器表には薄く自然釉がかかる。16の口縁端には沈線が入る。17の内底面下位は磨滅している。

図11-18～25は常滑である。18・19は壺の口縁部片。口径は各々、9.0cm・16.4cmを測る。胎土は、18は灰色を呈し、微石粒を多く含み粗い。器表は暗赤褐色を呈し、部分的に自然釉がかかる。19は灰白色を呈し、石粒を多く含み粗い。器表は茶褐色を呈し、部分的に自然釉がかかる。20・21は壺の口縁部片である。いずれも胎土は灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。器表は茶褐色を呈し、口縁内側から外面に自然釉がかかる。22～25はこね鉢の口縁部片である。各々、口径は復元で34.4cm・31.0cm・29.0cm・23.0cmを測る。25の底径は復元で13.4cm、器高は7.3cmを測る。胎土はいずれも黒灰色を呈し、微石粒を多く含み粗い。器表は暗赤褐色を呈し、自然釉がかかる。内面は使用され磨滅している。

図11-26は魚住のこね鉢である。胎土は灰色を呈し、微砂を含み粗い。口縁端部は外側に引き出され、縁帶状になる。縁帶部分には黒色の釉がかかる。

図11-27～30は火鉢である。27～29は輪花型火鉢で、外面に菊花文スタンプが捺される。器表は黒色処理され、胎土は灰色～淡橙色を呈し、微砂を多く含む。30の復元で口径は37.4cm、底径は26.8cm、器高は9.5cmを測る。胎土は橙色を呈し、微石粒を多く含む。口縁上面は磨かれている。

図12-1は手づくねの白かわらけである。口径は復元で14.8cmを測る。胎土は白色を呈し、きめ細かい粉質で、微砂を含む。

図12-2はかわらけ転用円板である。かわらけの底部片を直径3.5cmの円板に加工している。

図12-3・4は瓦である。3は平瓦、4は丸瓦である。胎土は灰色を呈し、石粒を多く含み硬く焼

締まっている。

図12-5～9は研磨痕のある常滑片である。

図12-10～17は鉄製品である。10～16は釘。17は刀子である。遺存長は15.0cm、幅は2.0cmを測る。

図12-18～23は銭である。18は至道元寶、19は皇宋通寶、20は治平元寶、21は元祐通寶、22は慶元通寶（背文二）、23は不明である。

図12-24～29は石製品である。24～26は砥石。24は菅口産の荒砥、25は上野（砥沢）産の中砥、26は鳴滝産の仕上げ砥で、幅は2.7cmを測る。27・28は西彼杵産の滑石鍋の転用品で、27は加工途中の物である。29は輕石である。30は磨製石斧である。縦5.0cm、幅3.7cm、厚さ1.3cmを測る。下層からの混入品であろう。

2面（図13）

2面は1面下30cm、海拔7.7m前後に検出された平坦な面である。土壌1基・方形堅穴建築址1棟・道路構造が検出された。道路構造は補修を行なっているようで、一部2層確認された。この面は締まりの良い砂質土で構成されている。



図13 2面遺構配置図

方形堅穴建築址1 (図14)

方形堅穴建築址1は(x12, y0)グリッド付近、海拔7.7m前後に検出された。調査区北西隅のため、その全様は不明である。床面はマウンド状に掘り残され、壁際には遺存状態は悪いが板材が残っていた。柱穴はマウンド部分に1口、南東隅に1口検出された。深さは検出面から40cm前後を測る。南北軸線方向はN-26°-Eである。

方形堅穴建築址1出土遺物 (図15)

図15-1~15は上層出土遺物である。1~5は糸切りかわらけ。胎土は橙色を呈し、微砂・小礫を含む。3・5は灯明皿で、器表に煤が付着している。図15-6~9は磁器である。6は青磁の蓮弁文碗。釉調は青味灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し、緻密である。7は白磁の口元皿である。口径は復元で9.8cmを測る。口縁端は外反する。釉調は白色を呈し、透明度・光沢共に優れる。素地は白色を呈し、緻密である。8・9は青白磁である。8は碗の口縁部片。釉調は透明度の高い水青色で、光沢は良い。素地は白色を呈し、緻密である。9は小壺等の蓋である。口径は復元で3.5cmを測る。釉調は水青色を呈すが、再火を受け白濁・肌荒れしている。素地は灰味白色を呈し、緻密である。図15-10・11は瀬戸である。10は華瓶の口縁部片。口径は復元で9.0cmを測る。口縁部は輪花状に作られている。緑色の灰釉がかけられ、外面は所々剥離している。胎土は灰白色を呈し、若干粗い。11はおろし皿である。口径は復元で18.0cmを測る。灰釉がかかり、胎土は灰色を呈し、堅致である。図15-12は魚住のこね鉢である。口径は復元で28.8cmを測る。胎土は青味のある灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。図15-13は火鉢である。口径は復元で36.0cmを測る。胎土は土器質で、灰色を呈し、微石粒を多く含む。口縁端は内側に引き出され、断面は釘頭状を呈する。側面上位に貫通する孔が穿たれる。外面には指頭痕が残り、上位は横ナデされている。図15-14・15は錢。14は祥符元寶、15は熙寧元寶である。図15-16・17は底石である共に鳴滌産の仕上げ砥。17の幅は2.7cmを測る。

図15-18~33は下層出土遺物である。18~25は糸切りかわらけである。18・19は口径が11~12cmを測り中皿である。20~25は小皿である。20・21は外側面中位に強い稜をもち、器高が深い。22~25の器壁は外に広がって立ち上がる。胎土は22・23が橙色、その他が肌色を呈し、微砂・小礫を含む。19は灯明皿で器表に煤が付着している。図15-26は青白磁の皿である。口縁内外面に銀と思われる金属が付着している。内面には型押しで雷文と蓮弁文が施されている。釉調は透明度の高い水青色で、光沢は優れる。素地は白色を呈し、緻密である。図15-27は瀬戸系の山茶碗である。器表には自然釉がかかり、胎土は

図15 方形堅穴建築址1出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺物	口径	底径	器高
1	上層	13.6	8.0	3.7
2	上層	(14.0)	(8.7)	3.5
3	上層	(8.3)	(4.5)	2.5
4	上層	(7.5)	(4.8)	1.6
5	上層	(8.3)	5.6	2.0
18	下層	(12.0)	(7.5)	2.9
19	下層	(11.0)	6.5	2.9
20	下層	7.7	5.3	2.2
21	下層	8.0	5.7	2.2
22	下層	(8.0)	(5.8)	1.9
23	下層	8.3	5.7	2.1
24	下層	7.5	4.6	1.7
25	下層	7.5	5.0	1.7

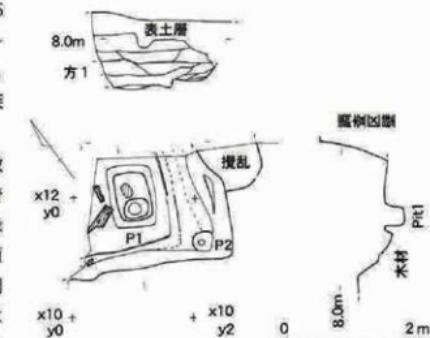


図14 方形堅穴建築址1

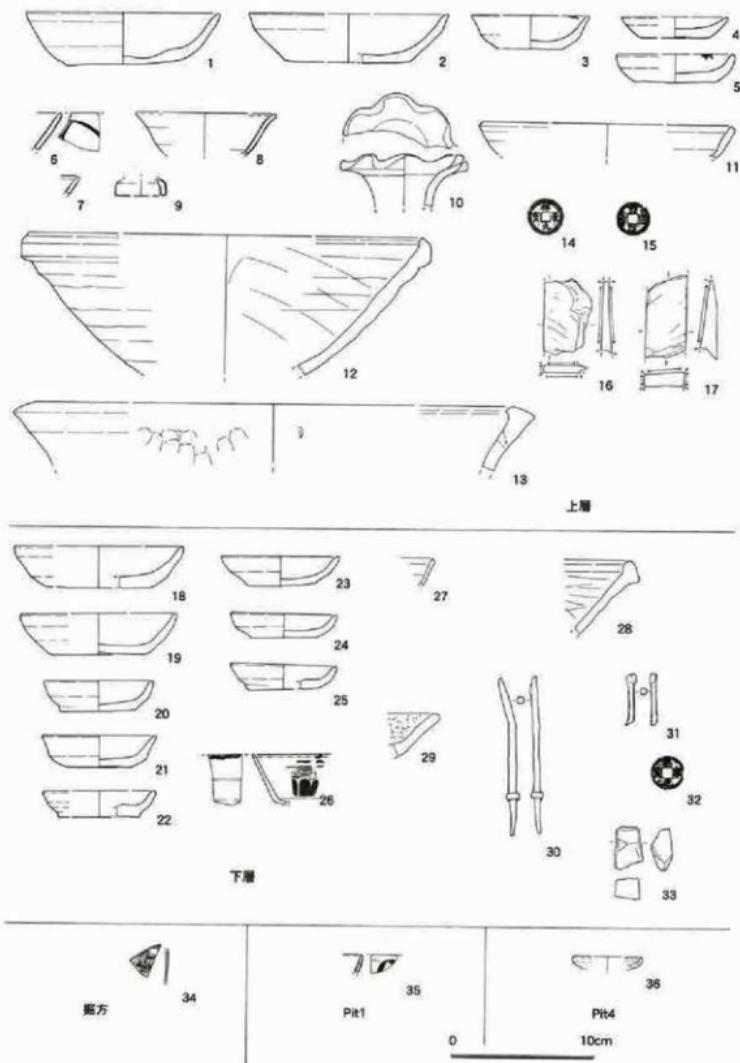


图15 方形竖穴建筑址1出土遗物

灰白色を呈し、堅致である。図15-28は魚住のこね鉢である。胎土は灰色を呈し、白・黒の微石粒が多く含み粗い。口縁外面に自然釉がかかる。図15-29はとりべである。口縁外面から内側面にかけてやけただれ、黒色に変色及び変質している。図15-30・31は鉄製の釘である。図15-32は熙寧元寶である。図15-33は火打石。

図15-34は掘り方出土の白磁碗の胸部片。内面には型押しで花文が付けられ、釉調は透明度の高い白色で、光沢は優れる。素地は白色を呈し緻密。

図15-35はPH1出土の青磁の蓮弁文碗である。口縁端は若干内湾する。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、緻密。

図15-36は内折かわらけである。口径は復元で4.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、火を受け部分的に灰色を呈す。胎土はきめ細かい。

土壤1 (図16)

土壤1は(x12, y6)グリッド付近、海拔7.6m前後に検出された。東部は擾乱されている。検出された規模は東西156cm、南北130cm、深さは検出面から30cm前後を測る。

土壤1出土遺物 (図17)

図17-1～3は糸切りかわらけである。各々、口径は12.0cm・7.8cm・7.0cm、底径は8.0cm・5.4cm・4.5cm、器高は2.8cm・1.8cm・1.8cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂・小礫を含み粉質である。3は灯明皿で煤が付着している。図17-4は瀬戸のおろし皿の底部片である。底径は復元で8.0cmを測る。灰釉がかかり、内面中央部は煤けている。胎土は灰白色を呈し、微石粒を含む。図17-5は山茶碗窯系こね鉢である。胎土は赤茶褐色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質である。

道路遺構2・3 (図18)

道路遺構は(x12～0, y6～3)グリッド付近、海拔7.75m前後に検出された南北方向の土丹地業である。道路遺構は補修が行なわれたようで、補修前を道路遺構3、補修後を道路遺構2とした。検出された道幅は良好に遺存する部分で150cmを測り、長さは調査区外に延びその全様は不明である。南北軸線方向はN-27°-Eである。補修は(x12～7)グリッド付近にその痕跡がみられた。道路遺構3は(x11, y4)グリッド付近を中心にかなり窪んでおり、その部分に張り増し補修を行なっている。出土遺物から時期差はほとんど感じられず、早い段階で補修されたようだ。

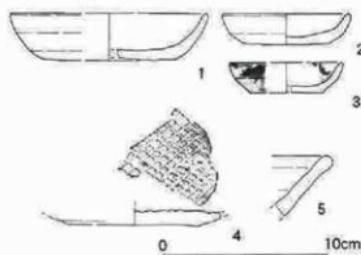


図17 土壤1出土遺物

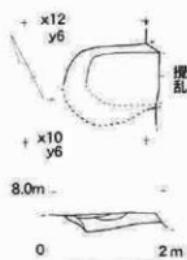


図16 土壤1

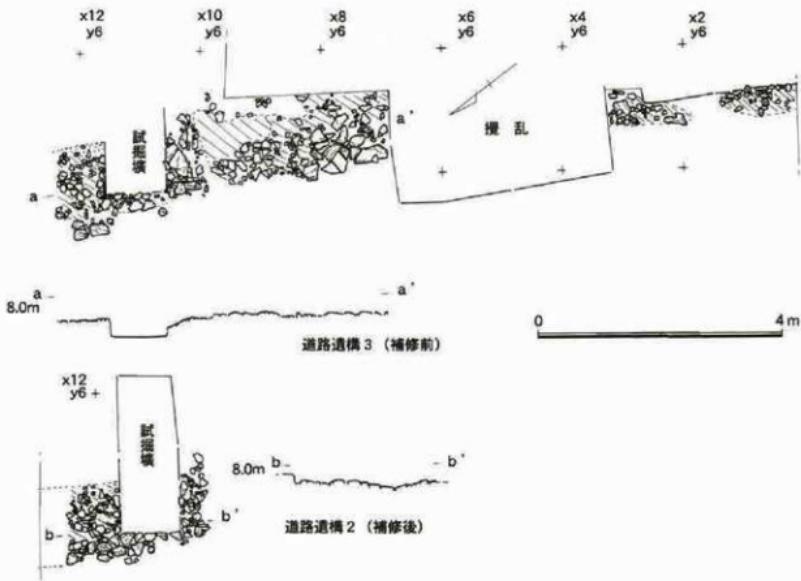


図18 道路造構2・3

内側面に陰刻で蓮弁文が施される。素地は灰色を呈し、堅緻である。6・7は白磁の口兀皿である。口縁端が外反する。釉調は透明度の高い白色を呈し、素地は灰味白色を呈す。8は山茶碗である。口径は復元で18.0cmを測る。胎土は茶褐色を呈し、白色微石粒を多く含み粗い。器表には極僅か自然釉がかかる。9は銚である。銚がひどく詳細は不明。10・11は研磨痕のある陶片である。10は常滑、11は須恵の甕の破片である。

道路造構3出土遺物（図19-12～17）

12～14は糸切りかわらけである。12・13は小皿で、各々、復元で口径は8.6cm・7.8cm、底径は6.0cm・5.6cm、器高は1.7cm・1.7cmを測る。器高は浅い。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含む。12は灯明皿で、口縁部に煤が付着している。14は内折れ皿である。口径は4.8cm、底径は3.4cm、器高は1.0cmを測る。胎土は白っぽい肌色を呈し、微砂を多く含む。15・16は常滑の甕の口縁部片である。15はn字口縁で、器表は光沢のある茶褐色を呈す。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬く焼結まる。16は端部を上に折り返して口縁を形づくっている。器表は光沢のある赤茶褐色を呈し、口縁内側には厚く自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含むが、比較的きめ細かい。17は渥美の甕の肩部片である。外面には若干自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み、硬質である。

2面出土遺物（図20・21）

図20-1～27は糸切りかわらけである。1～8は大皿である。1・2は厚手で、作りはやや粗雑である。胎土は橙色を呈し、微砂・小礫を多く含み、粗い。3～8はやや薄手で、底径が小さく、器高は深い。また、口径は14.0cm前後を測り、大きい。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。1・

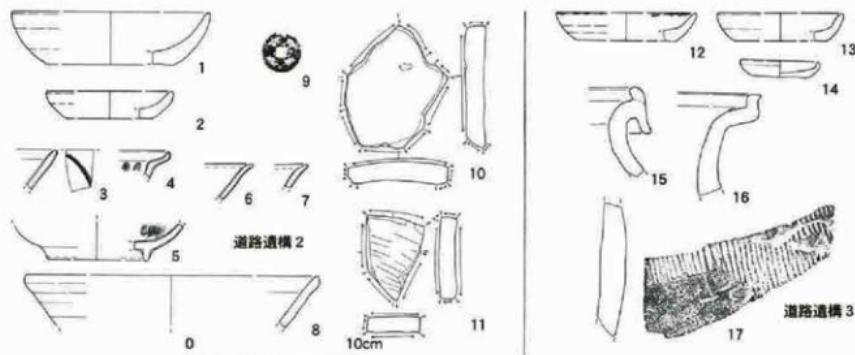


図19 道路遺構2・3出土遺物

3・7は灯明皿で、器表に煤が付着している。9~26は小皿である。9~13は底径が大きく、側面觀は逆台形を呈す。胎土は淡橙色~肌色を呈し、微砂を多く含み、粉質である。比較的の緻密。14~20は薄手で、深く、底径が小さく体部はやや丸味を持って立ち上がる。胎土は肌色を呈し、粉質だが、微砂を多く含む。15・18・19は灯明皿で器表に煤が付着している。27は内折れかわらけである、胎土は淡橙色を呈し、粉質で比較的きめ細かい。

図20~28~43は磁器である。28~35は青磁の蓮弁文碗である。28~34は口縁部の小破片。35の口径は復元で16.8cmを測る。33は口縁端が外反し、蓮弁の幅が狭い。釉調は31・32が緑灰色、その他は緑青色を呈し、いずれも光沢がある。29・30・33は微気泡多く失透している。素地は31・32が灰色、その他は灰白色を呈す。36は青磁の無文碗である。口径は復元で13.8cmを測る。釉調は淡緑灰色を呈し、口縁外側は釉が溜まっている。素地は灰色を呈し、堅緻である。37は蓮弁文鉢である。底径は復元で5.6cmを測る。内面に陰刻で蓮弁文が施される。釉調は濃水青色を呈すが、表面が白濁しているため、不透明だが、光沢は良い。素地は灰白色を呈し、緻密。38は双魚文鉢の底部片である。魚の尻尾の部分のみ遺存している。釉調は水青色を呈し、表面は若干肌荒れしている。素地は灰味白色を呈し、粘性が強く、黒色微粒を含む。39~42は白磁の口兀皿である。39の口径は復元で13.5cmを測る。39・42の口縁は大きく外反する。釉調は透明度の高い白色を呈し、光沢は良い。素地は41が肌色を、その

図20 2面出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高	番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	13.2	8.2	4.0	15	-	(7.6)	(5.0)	1.7
2	-	(13.8)	8.3	3.7	16	-	7.5	5.4	1.5
3	-	12.6	7.7	2.9	17	-	(7.9)	5.0	1.6
4	-	13.1	6.8	3.3	18	-	7.7	4.8	1.6
5	-	(14.7)	8.0	3.7	19	-	(7.8)	(4.8)	1.7
6	-	(14.0)	(8.0)	4.1	20	-	7.2	5.0	1.6
7	-	(14.0)	(8.8)	3.5	21	-	7.8	5.0	1.7
8	-	(12.0)	(7.3)	3.4	22	-	(7.8)	4.8	2.2
9	-	7.2	5.6	1.6	23	-	(8.0)	4.4	1.9
10	-	8.2	5.7	1.5	24	-	7.8	5.0	2.1
11	-	(7.8)	(6.2)	1.6	25	-	(7.8)	(5.0)	2.0
12	-	(7.4)	(5.4)	1.7	26	-	8.4	4.1	2.3
13	-	(7.5)	(5.7)	1.4	27	-	(4.8)	(3.6)	0.8
14	-	(8.0)	6.0	1.8					

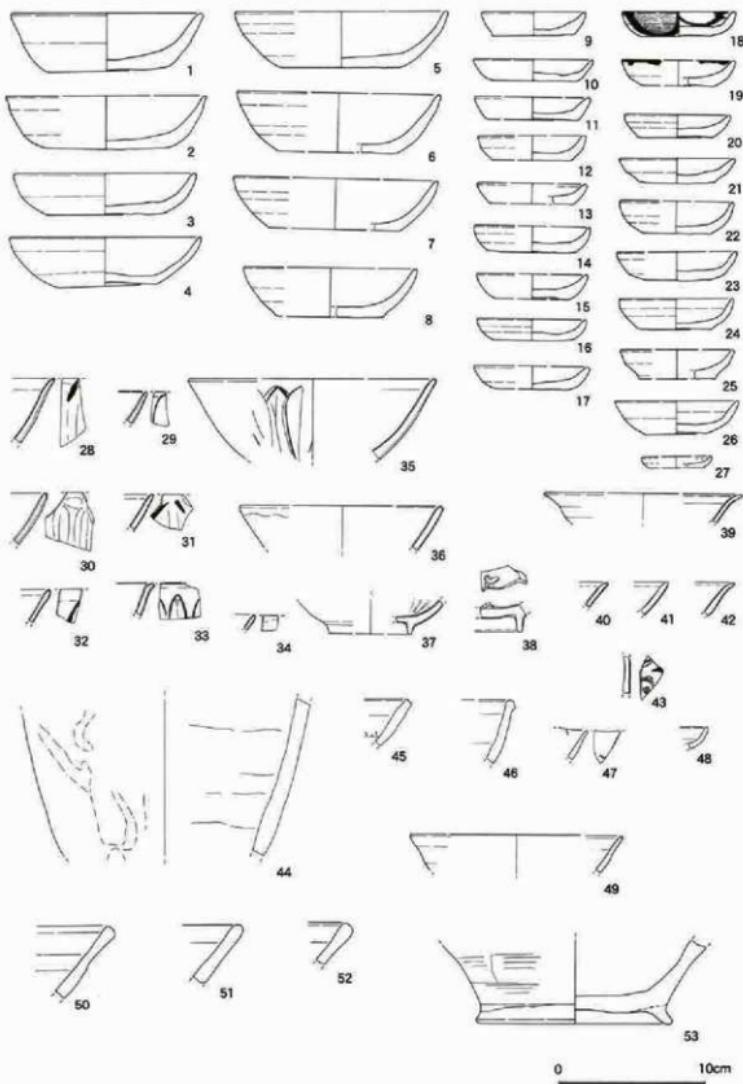


图20 2面出土遗物 (1)

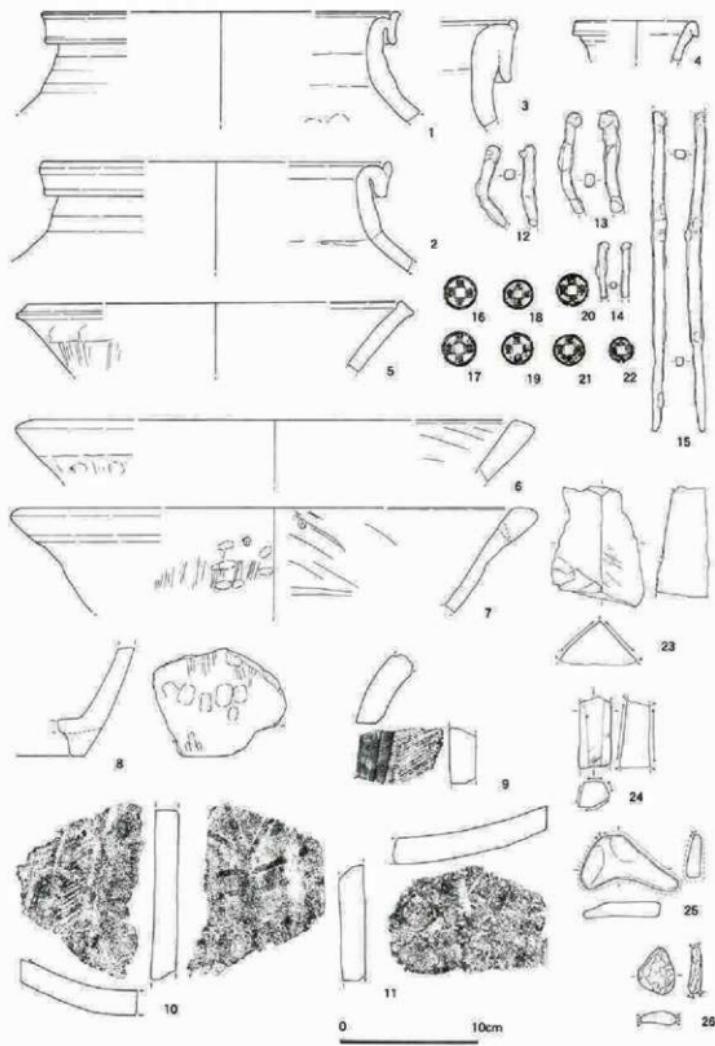


図21 2面出土遺物 (2)

他は灰味白色を呈し、緻密である。43は青白磁の梅瓶である。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈し、緻密である。

図20-44～48は瀬戸である。44は壺の胴部片である。まとまった量が出土しているが、いずれも小破片のため、詳細は不明である。灰釉がたれるように全体にかけられるが、剥離が著しい。胎土は肌色～灰色を呈し、比較的きめ細かい。45はおろし皿の口縁部片である。器表には斑に灰釉がかかる。胎土は灰色を呈し、硬質である。46は鉢の口縁部片である。内外面共に灰釉がかかる。胎土は灰色を呈し、堅緻。47・48は入子の口縁部片である。47は輪花型を呈す。いずれも胎土は灰白色を呈し、堅緻。

図20-49は山茶碗である。口径は復元で14.6cmを測る。胎土は灰味白色を呈し、緻密である。良質な土を使用している。

図20-50～53は山茶碗窯系こね鉢である。50～52は口縁部片、53は底部片である。53の底径は13.4cmを測る。胎土は50が灰色を呈し、白色石粒を含み、硬質である。51・53は灰白色を呈し、大粒の白色石粒を含み、粗い。53の内面は磨滅して滑らかである。52は明茶褐色を呈し、白色石粒を多く含み、やや粗い。

図21-1～5は常滑である。1～3は壺の口縁部片。1・2の口径は復元で26.0cm・25.2cmを測る。いずれもn字口縁で、3は縁帶の幅が広く、器壁に接近している。1面からの混入品であろう。1の器表は暗茶褐色を呈し、少量自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質で粗い。2の器表及び胎部の器表付近は淡橙色を呈し、胎芯部は灰白色を呈す。白色石粒を多く含み、やや焼成不良で軟質である。4は壺の口縁部片。口径は復元で9.0cmを測る。器表は黒褐色を呈し、胎土は灰色を呈し、硬質である。5はこね鉢の口縁部片。口径は復元で27.0cmを測る。器表は赤茶褐色を呈し、胎土は暗褐色を呈す。白色石粒を含み粗い。

図21-6～8は火鉢である。6・7は口縁部片で、口径は復元で37.0cm・38.0cmを測る。6の胎土は灰色を呈し、微砂を多く含み、表面はざらつき、軟質である。7は側面上位に1ヶ所孔が開く。口縁上面から外面にかけては横ナデ、外面は指頭痕と箇ナデ調整痕が残る。胎土は灰色を呈し、胎芯は黒く残る。微砂を多く含み、表面はざらつく。8は脚部である。外面には縦位に粗く磨きがかかる。器表は黒灰色を呈し、胎土は淡橙色を呈す。微砂・小礫を多く含み、粗い。

図21-9～11は瓦である。9は丸瓦。凹面に布目痕が残る。胎土は灰白色を呈し、比較的混入物は少なく、焼結まる。10・11は平瓦である。凸面に格子叩き目が残る。10の胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み、粗く、焼結まる。11の胎土は淡橙色を呈し、白色微石粒を含み、軟質である。断面に研磨痕が残る。再利用されている。

図21-12～15は鉄製品である。12～14は釘、15は火箸か？

図21-16～22は銭である。16・17は皇宋通寶、18・19は元祐通寶、20・21は熙寧元寶、22は不明。

図21-23～26は石製品である。23は天草産の中砥、24は上野（砥沢）産の中砥である。25は土丹を加工したものだが、用途は不明。26は火打石である。

3面（図22）

3面は2面下20cm、海拔7.5m前後に検出された茶褐色砂の面である。中世最終面である。遺構は密に展開し、方形竪穴建築址4棟・溝1条・井戸2基・土壙8基・方形土壙2基・Pitが検出された。また、調査区南東部の張り出し部分は地山の砂層が検出されず、砂をブロック状に含む黒色土層であり、古代層の可能性があったが、掘削深度が設定されていたためその全様は未調査である。

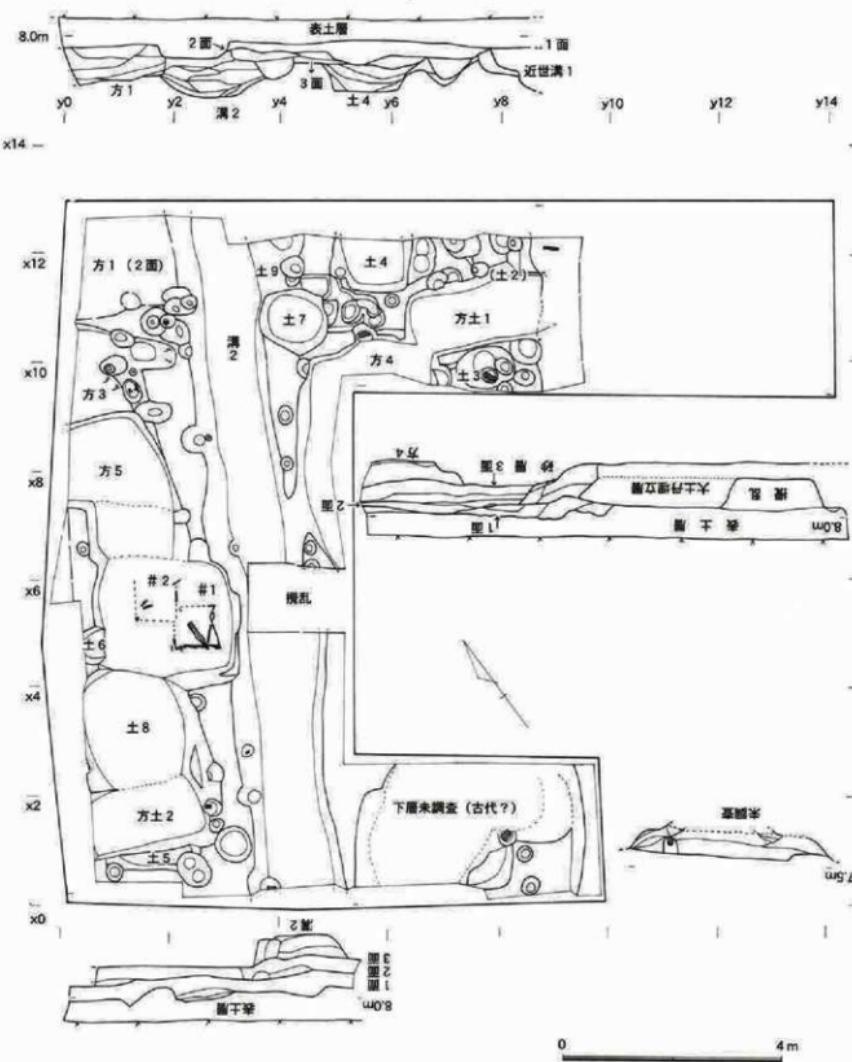


図22 3面遺構配置図



図23 方形堅穴建築址 2・4

方形堅穴建築址 2・4 (図23)

方形堅穴建築址 2・4は(x10, y6)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。お互い切り合っているが、調査区際に検出したためその新旧関係及び、全体像をつかむことは出来なかった。深さは検出面から45cm前後を測る。また、方形堅穴建築址2の壁面は断層のズレが認められた。方形堅穴建築址2の南北軸線方向はN-38°E、方形堅穴建築址4の東西軸線方向はN-52°Wである。

方形堅穴建築址 2 出土遺物 (図24)

1～3は糸切りかわらけである。各々、復元で口径が13.0cm・7.8cm・7.8cm。底

径が9.5cm・6.0cm・4.8cm、器高が2.9cm・1.5cm・1.7cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含み、若干ざらつく。4は山皿の底部片である。胎土は灰白色を呈し、硬質で緻密である。5～7は常滑である。5は壺の口縁部片である。口径は復元で17.8cmを測る。口縁端は外側に折り返され、器壁とは接しない。器表及び胎土は赤茶褐色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。6は甕の口縁部片である。n字口縁で器壁とは距離がある。器表は茶褐色を呈し、自然釉が少量かかる。胎土は黒灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗く硬質である。7はこね鉢の口縁部片である。内側面には灰白色の自然釉が一面にかかり、外側面は暗赤褐色を呈す。胎土は灰色を呈し、白色微石粒を多く含み粗い。8は涅美の甕の口縁部片である。器表には刷毛で施釉されている。胎土は精緻で灰色を呈す。9・10は鉄製の釘である。11は骨製の笄である。

方形堅穴建築址 4 出土遺物 (図25)

1は糸切りかわらけである。復元で、口径は12.8cm、底径は8.3cm、器高は3.4cmを測る。胎土は

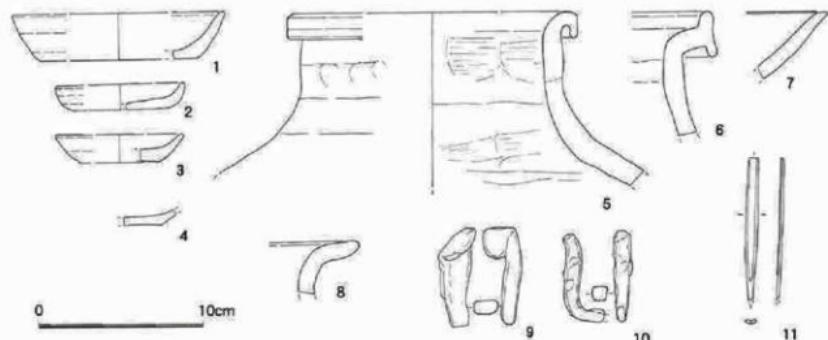


図24 方形堅穴建築址 2 出土遺物

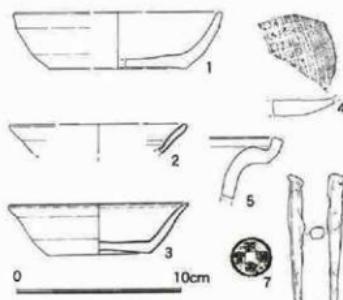


図25 方形堅穴建築址4出土遺物

橙色を呈し、小穂を含むが、比較的精緻である。2・3は磁器である。2は同安窯系の青磁の皿である。口径は復元で10.8cmを測る。釉調は透明度の高い灰緑色を呈し、光沢は優れる。素地は灰色を呈し、緻密。3は白磁の口皿である。口径は11.0cm、底径は6.2cm、器高は3.1cmを測る。釉調はやや青味のある白色を呈し、透明度・光沢共に良い。素地は灰白色を呈し、黒色微粒を含み、緻密である。4は瀬戸のおろし皿の底部片である。灰釉がかかり、胎土は灰白色を呈し、若干粗い。5は常滑の甕の口縁部片である。口縁端は上方に折り返される。器表は暗茶褐色を呈し、内面に自然釉が少量かかる。胎土は茶褐色を呈し、白色微石粒を多く含み粗い。6は鉄製の釘。7は政和通寶である。

方形堅穴建築址3・5(図26)

方形堅穴建築址3・5は(x10, y0)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。方形堅穴建築址3と5の切り合い関係は直上の現代擾乱のため断定はできないが、方形堅穴建築址5が先行するようである。また、西部は調査区外である。床面レベルは方形堅穴建築址3より方形堅穴建築址5のほうが25cm低い。方形堅穴建築址3の北東隅にPitが5口検出された。南北軸線方向はN-25°-Eである。

方形堅穴建築址3出土遺物(図27)

1・2は糸切りかわらけで、器高の深いタイプである。各々、口径は7.9cm・7.6cm、底径は4.8cm・4.8cm、器高は2.1cm・2.3cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み比較的精緻である。3は常滑の甕である。口径は8.6cmを測る。器表は暗茶褐色を呈し、口縁から頸部内側面及び肩部に自然釉が厚くかかる。胎土は灰色を呈し、白色微石粒を含み、硬質である。4は政和通寶である。5は甕。産地は不明。6は鳴滝産の仕上げ紙である。

方形堅穴建築址5出土遺物(図28)

1~8は糸切りかわらけである。底径は広く、器高はやや浅い。いずれも胎土は淡橙色を呈し、微砂・小穂を含む。大皿は作りがやや粗雑である。3・5・6は灯明皿で器表に煤が付着している。9~13は磁器である。9は青磁の蓮弁文碗

図28 方形堅穴建築址5出土遺物 かわらけ法量表()数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(12.5)	8.2	3.5
2	-	(12.5)	(8.0)	2.9
3	-	(12.4)	8.5	3.2
4	-	(12.0)	7.8	3.8
5	-	7.7	5.0	2.0
6	-	(7.5)	4.8	2.0
7	-	8.0	5.4	1.7
8	-	(7.6)	(5.7)	1.4



図26 方形堅穴建築址3・5

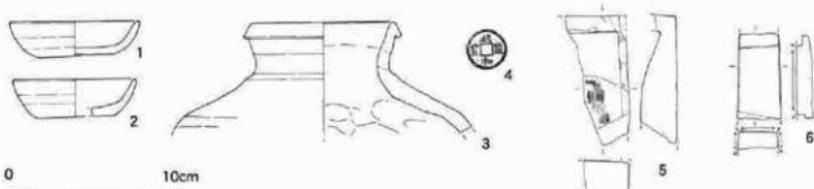


図27 方形竪穴建築址3出土遺物

である。口径は復元で14.5cmを測る。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、緻密。10は青磁の折腰鉢の底部片である。底径は4.2cmを測る。釉調は緑青色を呈し、微気泡のためやや失透する。素地は灰色を呈し、緻密。11は青磁の鉢の口縁部片である。口径は復元で12.6cmを測る。釉調は淡緑青色を呈し、微気泡のため失透する。素地は灰色を呈し、緻密。12・13は白磁の口兀皿である。12の口径は復元で9.8cmを測る。13は口縁が若干外反する。釉調は透明度の高い白色を呈し、素地は12が灰白色、13が灰色を呈し、緻密である。14・15は瀬戸の入子である。14は輪花型を呈す。内側面にはごく薄く自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、堅緻である。15は口径が7.4cm、底径が4.2cm、器高が2.9cmを測る。口縁外側から内側面に自然釉がかかる。内底面は磨滅している。胎土は灰色を呈し、堅緻である。16は山皿である。口縁内側から外側面に薄く自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、硬質でやや粗い。17は山茶碗窓系こね鉢である。胎土は灰白色を呈し、白色微石粒を含み粗い。18は常滑の甕である。口径は復元で51.8cmを測る。器表は茶褐色を呈し、口縁内側から外面にかけて自然釉がかかる。外面には厚くかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含むが、比較的堅緻である。19は土錘である。長さ3.9cm、最大直径1.3cm、孔の直径0.5cmを測る。20は皇宋通寶である。

井戸1・2 (図29)

井戸1・2は(x 6, y 0) グリッド付近、海拔7.5m 前後に検出された。井戸は早い時期に作り直しがされたのか、2基が近接して検出され、掘り方は1ヶ所しか検出されなかった。また、掘削深度の

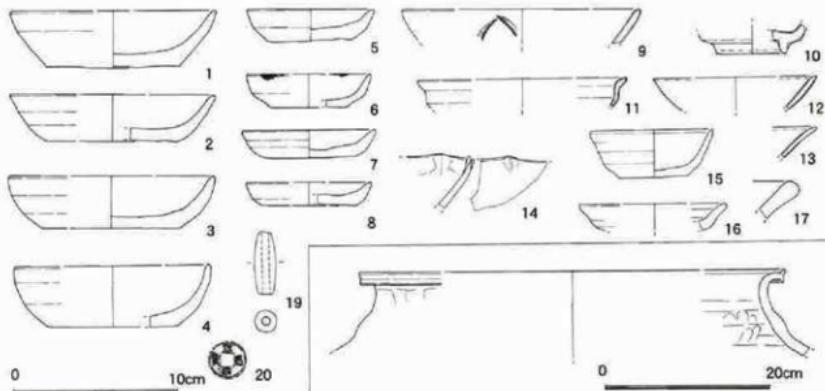


図28 方形竪穴建築址5出土遺物

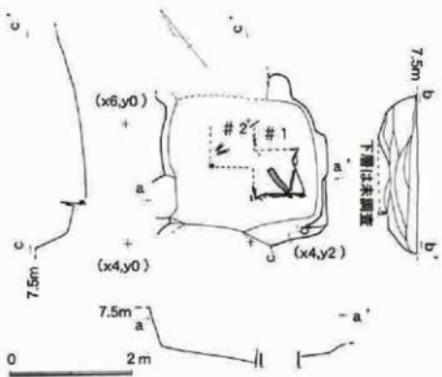


図29 井戸1・2

図30 井戸1出土遺物 カわらけ法量表 () 数値は復元

番号	造構	口径	底径	器高
1	-	13.0	8.5	3.0
2	-	(12.0)	(7.2)	3.3
3	-	(12.8)	(8.5)	3.1
4	-	(7.5)	4.5	1.8
5	-	(8.0)	5.7	1.8
6	-	(7.4)	(5.5)	1.6
7	-	(7.4)	(5.7)	1.4
8	-	(8.3)	(5.6)	1.8

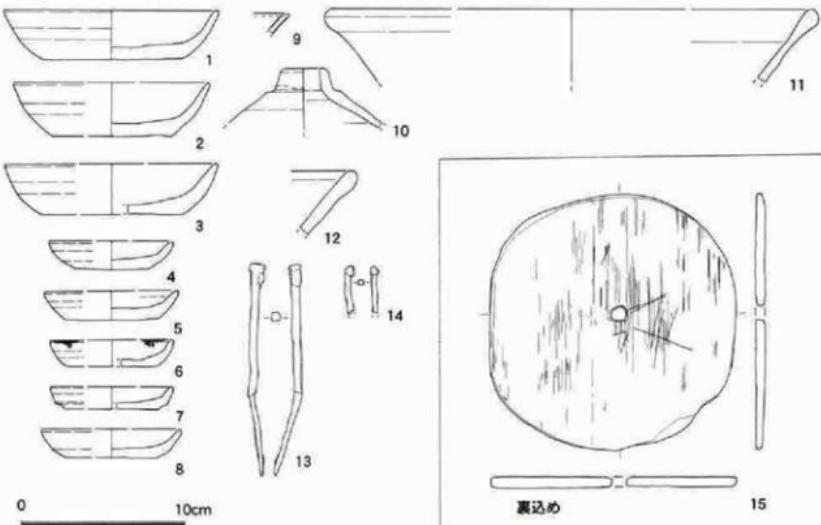


図30 井戸1出土遺物

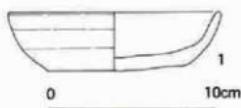


図31 井戸2出土遺物

限界のため下層は未調査である。掘り方は南北共に別の造構によつて切られているが、遺存部で南北230cm、東西270cmを測る。井戸1の本体は南壁及び東壁の板材の遺存状態が良く、南北76cm、東西84cmを測る。井戸2の本体は東壁の板材の一部と隅柱が1本

遺存しており、推定で東西76cmを測る。また、井戸1の東壁外側には木製円板が突き刺さって検出された。

井戸1出土遺物 (図30)

1~8は糸切りかわらけである。大皿は底径がやや広めで、器壁中位に稜線がある。小皿は

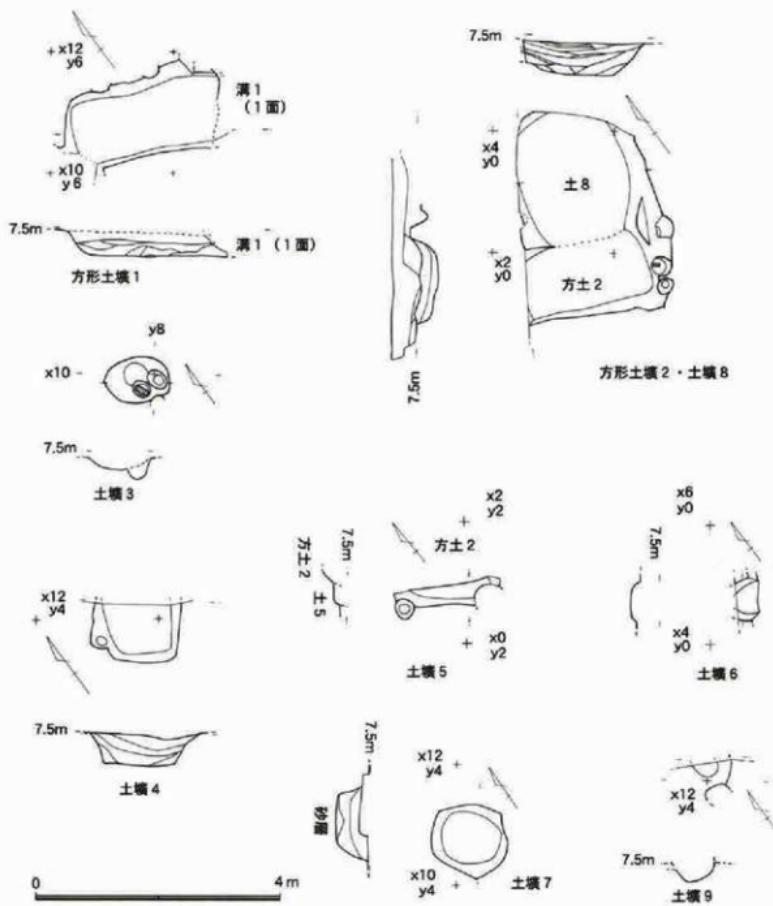


図32 方形土壙1・2・土壙3~9

底径が広く、器高が浅い。胎土は1・5・7・8が肌色、その他が橙色を呈し、微砂・小砾を含み、粉質である。6・7は灯明皿で、器表に煤が付着している。9は白磁の口兀皿の口縁部片である。釉調は若干青味のある白色を呈し、透明だが、光沢は悪い。素地は灰白色を呈し、緻密である。10は褐釉蓋である。口径は2.7cmを測る。器形はなで肩を呈す。釉調は暗茶褐色を呈し、不透明で光沢がある。頸部外面には釉がかからない。胎土は肌色を呈し、白色石粒を少量含み、焼成が甘い。11・12は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片である。11の口径は復元で29.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色石粒多く含み粗い。内面には薄く煤が付着している。12の胎土は灰白色を呈し、微石粒を多く含み粗い。13・14は鉄製の釘である。15は裏込めから出土した木製の円板である。表面には生漆が塗られている。直

径は15.0cm×15.7cm、厚さは0.7cm、中央の穴の直径は0.9cmを測る。この他に井戸1からは木製の箸の破片・果核が出土した。

井戸2出土遺物（図31）

1は糸切りかわらけである。口径は13.0cm、底径は8.2cm、器高は3.5cmを測る。底径は広めで、器壁はやや丸味を持って立ち上がる。胎土は暗灰褐色を呈し、小礫・微砂を含み、粉質である。この他に、果核・サザエの殻が出土した。

方形土壙1（図32）

方形土壙1は(x12, y6)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。平面形は東西に長い方形を呈し、東部が上層の溝1に擾乱されているため長軸は不明。短軸は122cmを測る。深さは検出面から40cmを測る。東西軸線方向はN-64°-Wである。この遺構は3面調査時に確認されたが、2面期の遺構であろう。

方形土壙1出土遺物（図33-1～21）

図33-1～8は糸切りかわらけである。1～4は大皿である。口径は12.4cm前後にまとまり、底部は丁寧に切り離されている。側面下位1/3に強く稜を持って立ち上がる。胎土は橙色を呈し、微砂・小礫を含み、比較的精緻である。5～7は小皿である。器高の浅いタイプである。胎土は淡橙色を呈し、微砂・小礫を含み粉質である。7は灯明皿で器表に煤が付着している。8は内折かわらけである。胎土は淡橙色を呈し、微砂をやや多く含む。図33-9～12は磁器である。9・10は青磁の蓮弁文碗の口縁部片である。共に釉調は緑青色を呈し、再火を受け肌荒れしている。素地は灰白色を呈し、緻密。11は青磁の折縁皿である。内側面に陰刻で蓮弁文が施される。釉調は暗緑灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。内面には擦過傷が多く付く。素地は灰色を呈し、堅緻である。12は白磁の口兀皿の口縁部片である。釉調は透明度の高い白色を呈し、光沢は優れる。素地は白色を呈し、堅緻である。図33-13は瀬戸の壺の胴部片である。4本一組の条線が廻る。外面には灰釉がかかるが、一部剥離している。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。14・15は山茶碗である。14は口縁端が断面三角形を呈し、胎土は灰色で、堅緻。器表には自然釉がかかる。15は胎土が灰色を呈し、白色微石粒を含み、粗い。図33-16は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片である。口径は復元で28.0cmを測る。胎土はやや青味のある灰色を呈し、白色石粒を多く含み、粗い。図33-17は火鉢の口縁部片である。口縁端は内側に摘み出され、釘頭型を呈す。器表は黒色を呈し、胎土は橙色で微砂を多く含む。図33-18・19は鉢である。18は皇宋通寶、19は紹聖元寶である。図33-20は火打石である。図33-21は骨製の笄である。

方形土壙2（図32）

方形土壙2は(x2, y0)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。平面形は東西に長い隅丸方形を呈し、北部は土壙8に切られている。また、西部の上端は調査区外である。検出された範囲で東西240cm、南北120cmを測る。深さは検出面から30cmを測る。東西軸線方向はN-61°-Eである。

図33 方形土壙1出土遺物 かわらけ法量表() 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	12.5	6.8	3.2
2	-	12.3	7.4	3.0
3	-	(12.4)	7.7	3.0
4	-	12.3	7.2	3.1
5	-	(7.5)	(5.1)	1.6
6	-	(7.8)	(6.1)	1.7
7	-	(7.3)	5.4	1.6
8	-	4.0	2.9	1.0

方形土壙 2 出土遺物 (図33-22~48)

図33-22~36はかわらけである。22~27は糸切りの大皿である。口径は12.0cm 前後にまとまる。底径が大きく、22・23は断面逆台形を呈す。24~27は器壁が外向きに開いて立ち上がる。胎土は22・23・27が肌色、その他は淡橙色を呈し、粉質で微砂・小礫を含む。26・27は比較的きめ細かい。28~35は糸切りの小皿である。底径が大きく、器高は低い。胎土は29・33・34が肌色、その他は淡橙色を呈し、微砂・小礫を含む。30~32は再火を受けている。34は灯明皿で、器表に煤が付着している。36は手づくねの

内折皿である。口縁端は上方に摘まれ、端部は鋭角である。胎土は橙色を呈し、粉質である。図33-37・38は青磁である。37は同安窯系の皿の口縁部片。口径は復元で10.5cm を測る。釉調は透明度の高い黄灰色を呈し、光沢は良い。素地は灰色を呈し、緻密。38は蓮弁文碗の口縁部片である。釉調は緑青色を呈し、微気泡のため失透している。素地は灰白色を呈し、緻密である。図33-39は山茶碗窯系こね鉢である。口径は20.8cm、底径は11.5cm、器高は8.4cm を測る。口縁外面から内面にやや厚く自然釉がかかる。内底面は磨滅している。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗く、硬質である。図33-40~45は常滑である。40~43は甕の口縁部片である。40の口径は復元で19.4cm を測る。いずれも八字口縁を呈し、42は縁帯の幅が広い。40・43の胎土は黒灰色を呈し、白色石粒を多く含み硬質である。41の器表は暗褐色を呈し、口縁内側に自然釉がかかる。胎土は赤橙色を呈し、微石粒を多く含む。42の器表は暗褐色を呈し、外面には厚く自然釉がかかる。胎土は暗灰色を呈し、微石粒を多く含み堅緻である。44・45はこね鉢である。44の口径は復元で28.8cm を測り、口縁端は断面が角張る。胎土は灰色~赤橙色を呈し白色石粒を多く含み、粗い。45は注ぎ口の部分である。内側に自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色微石粒を多く含み、粗い。44・45共に内面は磨滅している。図33-46は研磨痕のある常滑片である。図33-47・48は鉄製品である。47は扁平な棒状を呈すがその用途は不明。48は釘である。

土壙 2

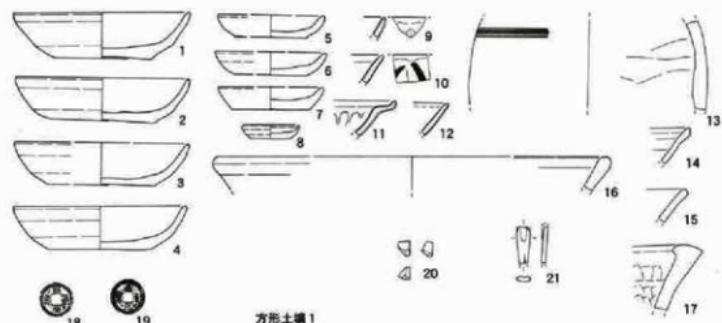
土壙 2 は (x 12, y 8) グリッド付近に検出された土壙だが、方形土壙 1 の覆土内に含まれてしまい、遺存していない。

土壙 2 出土遺物 (図34-1~6)

図34-1~3は糸切りかわらけである。各々、口径は12.0cm・8.0cm・7.0cm、底径は7.0cm・5.5cm・4.0cm、器高は3.0cm・1.6cm・1.7cm を測る。胎土は1が橙色、2・3が淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。3は灯明皿で器表に煤が付着する。図34-4は白磁の皿である。口径は復元で5.5cm を測る。釉調は白色を呈し、透明度は高いが、光沢は無い。素地は白色で緻密である。内面には型押して草花文が施される。図34-5は青白磁の梅瓶の胴部片である。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈し、緻密。図34-6は瀬戸の華瓶或は壺の高台部分である。灰釉がかかる。

図33 方形土壙 2 出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
22	-	(11.8)	(8.0)	3.0
23	-	11.5	7.8	3.3
24	-	(11.7)	(8.0)	2.2
25	-	(12.8)	(7.0)	2.8
26	-	(12.8)	(8.0)	2.9
27	-	(12.5)	(8.0)	2.8
28	-	7.7	5.5	1.7
29	-	7.7	6.0	1.5
30	-	(7.9)	(5.8)	1.4
31	-	7.8	(5.5)	1.3
32	-	7.8	5.8	1.6
33	-	(7.8)	(5.7)	1.2
34	-	7.3	5.6	1.4
35	-	7.6	6.0	2.0
36	-	(6.8)	-	1.4



方形土壤 1

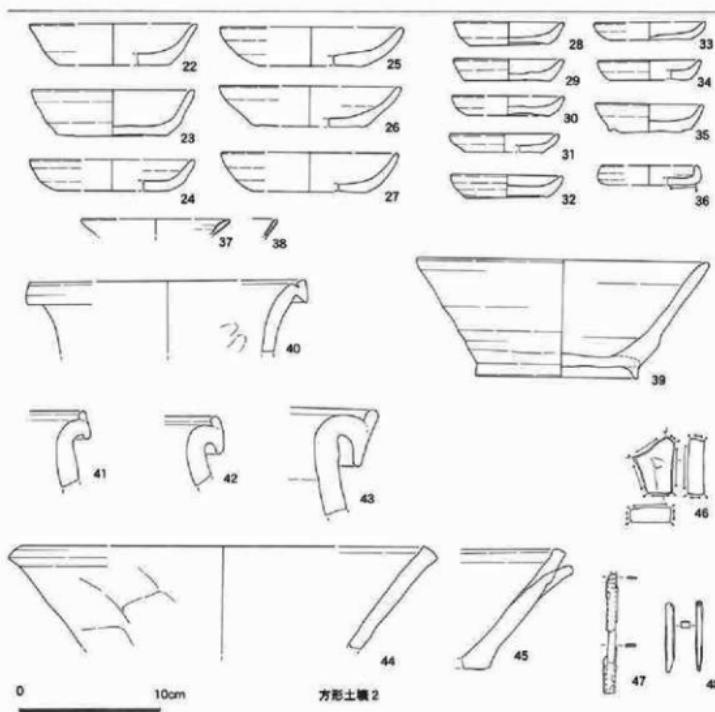


图33 方形土壤 1·2 出土遗物

土壤3 (図32)

土壤3は(x10, y8)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。平面形は橢円形を呈し、南北75cm、東西108cmを測る。深さは検出面から20cmを測り、底部に2口のPitが検出された。その内南のPit底からは礎板が検出している。

図34 土壌4出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
8	-	(12.5)	(9.3)	3.4
9	-	12.4	7.5	3.2
10	-	(11.8)	(7.7)	3.0
11	-	12.8	8.2	3.0
12	-	8.6	7.0	1.7
13	-	(8.0)	5.7	1.6

土壤3出土遺物 (図34-7)

図34-7は糸切りかわらけである。口径は12.2cm、底径は7.7cm、器高は3.4cmを測る。胎土は橙色を呈し、微砂・小礫を含む。

土壤4 (図32)

土壤4は(x12, y4)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。平面形は隅丸の方形を呈し、北部は調査区外である。幅は東西が145cmを測る。深さは検出面から50cmを測る。

土壤4出土遺物 (図34-8~15)

図34-8~13は糸切りかわらけである。8~11は大皿。体部器厚は厚手で、器壁中位に強い稜を持ちそこから角度を変えて立ち上がる。胎土は淡橙色を呈し、粉質で、小礫・微砂を含む。12・13は小皿である。底径が大きく、器高は浅い。胎土は肌色~淡橙色を呈し、微砂を多く含む。11・12は灯明皿で器表に煤が付着している。図34-14は軽石である。図34-15は火打石である。

土壤5 (図32)

土壤5は(x2, y0)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。北部は方形土壤2に切られている。遺存する東西長は175cmを測る。深さは検出面から15cmを測る。

土壤6 (図32)

土壤6は(x6, y0)グリッド付近、海拔7.2m前後に検出された。西部は調査区外、東部は井戸1・2に切られている。遺存する南北長は70cmを測る。深さは検出面から16cmを測る。

土壤7 (図32)

土壤7は(x12, y4)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。平面形は不整円形を呈し、直径は120cm前後を測る。深さは検出面から52cmを測る。糸切りかわらけの小皿が出土したが小破片のため図示できなかった。

土壤8 (図32)

土壤8は(x4, y0)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。大型の土壤で、平面形は円形を呈すと思われるが、西側上端は調査区外、南部は方形土壤2、北部は井戸1・2に切られている。遺存部で南北長が220cm、東西長が230cmを測る。深さは検出面から55cmを測る。

土壤8出土遺物 (図34-16~33)

図34-16~23は糸切りかわらけである。16・17は大皿で底径が大きく、器壁上位に稜を持つ。胎土

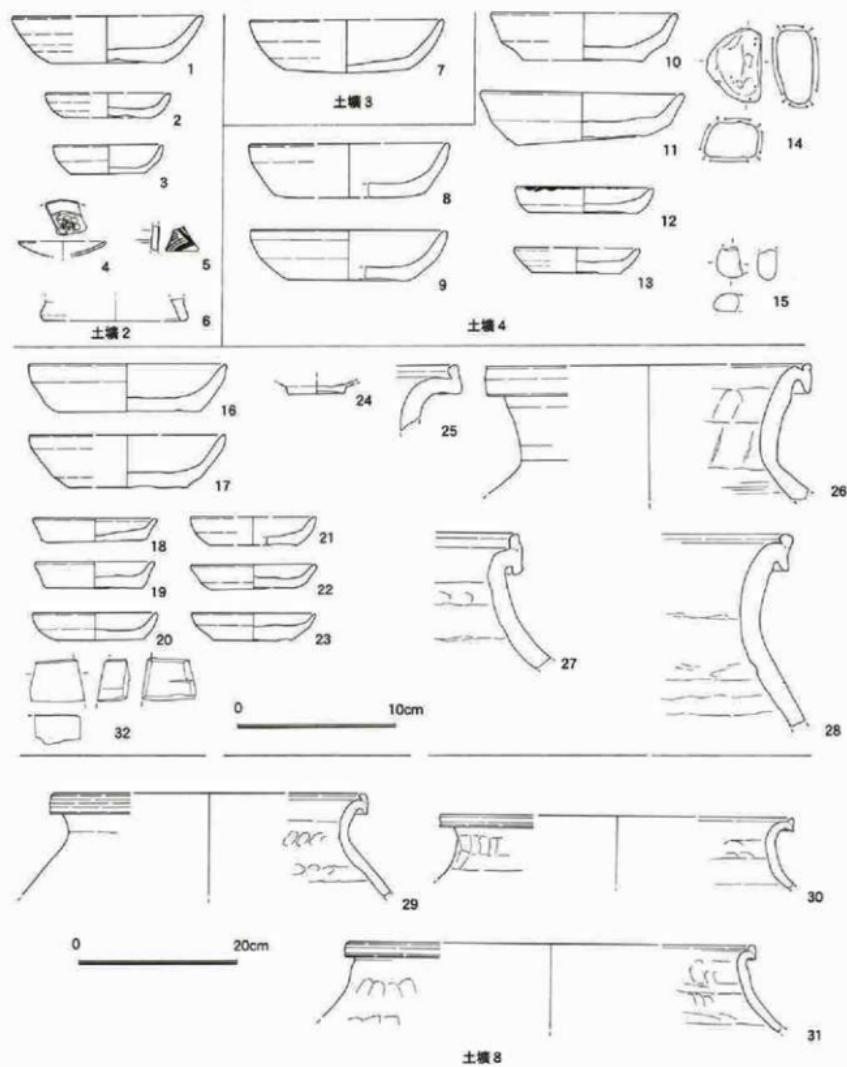


図34 土壤2・3・4・8出土遺物

は橙色を呈し、微砂を多く含む。作りはやや粗雑である。18~23は小皿である。18~20は底径が大きく、器高は浅い。側面観は逆台形を呈し、口縁端がわずかに外反する。21~23は器壁が若干丸味を持つ。胎土は20が橙色を呈し、その他は肌色を呈す。微砂を含み紛質である。18は比較的精緻である。22は灯明皿で器表に煤が付着する。図34~24は青白磁の小壺の底部片である。底径は3.5cmを測る。釉調は淡水青色を呈し、口径だが肌荒れする。外面は露胎。素地は灰白色を呈し緻密である。図34~25~31は常滑の壺の口縁部片である。25は口縁端が上方に折り返されている。26~31はn字口縁である。胎土はいずれも白色石粒を多く含み硬質である。25の器表は赤褐色を呈し、薄く自然釉がかかる。胎土は淡橙色を呈し、粗い。26の口径は復元で20.8cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、粗い。器表には極僅か自然釉がかかる。27の外面には厚く自然釉がかかり、白濁・剥離している。胎土は黒灰色を呈し、比較的堅緻である。28の器表は暗褐色を呈し、自然釉が肩部に厚くかかる。胎土は灰色を呈す。29の口径は復元で40.4cmを測る。外面には厚く自然釉がかかる。胎土は灰色~淡橙色を呈し、比較的堅緻である。縁帯中位が盛上っている。30の口径は復元で45.0cmを測る。器表は赤茶褐色を呈し、薄く自然釉がかかる。胎土は黒灰色を呈し、やや粗い。31の口径は復元で52.2cmを測る。器表には自然釉がかかる。胎土は黒灰色を呈し、やや粗い。図34~32は笹口産の荒砥である。

土壤9(図32)

土壤9は(x12, y4)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された。北部は調査区外、西部は溝2に切られている。遺存部で東西長は60cmを測る。深さは検出面から35cmを測る。

図34 土壌8出土遺物 カワラケ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高
16	-	12.4	9.0	3.0
17	-	(12.4)	(7.6)	3.3
18	-	7.8	6.6	1.5
19	-	7.5	6.2	1.7
20	-	7.8	5.5	1.8
21	-	(7.8)	(5.5)	1.8
22	-	7.8	5.5	1.6
23	-	7.8	5.0	1.8

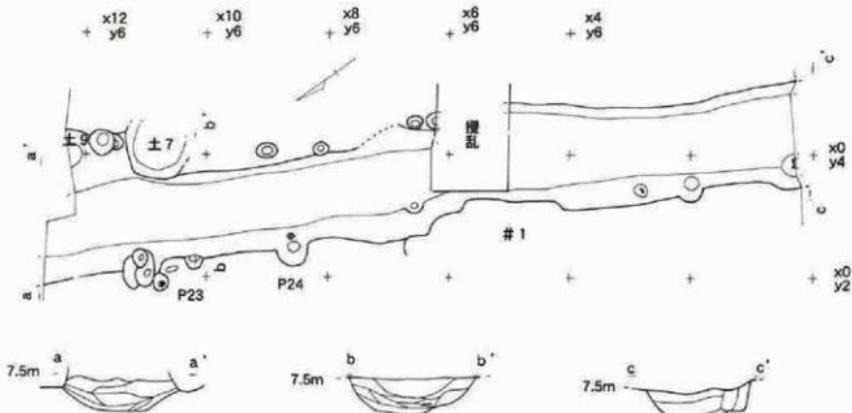


図35 溝2

溝2(図35)

溝2は(x12~0、y2~6)グリッド付近、海拔7.5m前後に検出された南北方向の溝である。検出し得た全長は12.4mを測るが、南北共に調査区外へ延びる。上端幅は170cm前後、下端幅は100cm前後を測る。調査区内では底面レベルはほとんど変わらない。西岸にはPitが4口検出され、南端の2口と北端の2口(Pit23・24)は芯々で180cmを測るが、井戸1に切られてしまい中央が空白であるため護岸等の施設の詳細は不明である。また、東岸にPitは検出されなかった。南北軸線方向はN-28°-Eである。

溝2出土遺物(図36)

図36-1~23はかわらけである。1~3・9~17・23は手づくね、その他は糸切りである。1~3は手づくねの大皿で、1は器壁が垂直気味に立ち上がる。2・3は器壁が外に開いて立ち上がり、3は外側面中位、指痕痕との境に強い稜を持つ。胎土は肌色を呈し、1は微砂が多く含み砂質である。2・3は微砂を含むが比較的精緻で粉質である。4~8は糸切りの大皿である。底径が大きく、胎部器厚はやや厚手で、5の外側面には稜線が強く残る。胎土は7が橙色、その他は肌色を呈し、4・5・7・8は灯明皿で器表に煤が付着する。9~17は手づくねの小皿である。9~13は底部は平底で底径が広く、側面観は逆台形を呈す。また、器高はとても浅く、器壁は直線的に立ち上がる。14~17は平底に近いが、若干丸味を持つ。また、9~13が底部と器壁の境がはっきりとしていたのに対し、底から丸味を持ってなだらかに外向きに開いて立ち上がっている。胎土は14が橙色、その他は肌色を呈し、9~13は微砂が多く含み砂質で、その他は粉質で比較的精緻である。10・12は器表に薄く煤が付着している。18~22は糸切りの小皿である。底径が大きく、器高は浅い。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。18・19は器表に薄く煤が付着している。23は内折れかわらけである。口縁端は上方に折り返され、断面は鋭角である。胎土は橙色を呈し、微砂を含む。図36-24~32は磁器である。24・25は青磁の割花文碗。24の口径は復元で15.6cmを測る。釉調は透明度の高い緑灰色を呈し、光沢に優れる。素地は灰色を呈し、粘性があり緻密である。25は底部片で、底径は6.5cmを測る。釉調は透明度の高い緑青色を呈し、光沢は良い。胎土は灰色を呈し、黒色微粒を含み、緻密である。26は青磁の蓮弁文碗の口縁部片である。釉調は水青色を呈し、微気泡多くやや失透する。光沢は良い。素地は灰色を呈し、堅緻である。27は青磁の折縁鉢の口縁部片である。無文である。釉調は緑青色を呈し、微気泡多く失透する。光沢は良い。素地は灰白色を呈し、緻密である。28~30は青白磁の碗である。28は口縁部片で、口径は復元で16.8cmを測る。29・30は底部片で、29の底径は5.5cmを測る。いずれも文様は雲

図36 溝2出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高	番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(13.0)	-	3.4	13	-	(8.4)	7.5	1.6
2	-	(14.0)	-	3.6	14	-	(9.5)	(7.5)	1.8
3	-	(12.8)	-	3.5	15	-	10.0	-	2.1
4	-	12.5	7.8	3.5	16	-	9.5	-	1.6
5	-	12.4	8.3	3.3	17	-	(9.7)	-	2.1
6	-	13.3	8.6	3.6	18	-	9.6	7.3	1.6
7	-	(12.4)	(8.6)	3.1	19	-	8.2	6.3	1.6
8	-	13.0	8.0	3.3	20	-	8.2	6.4	1.5
9	-	8.8	7.7	1.4	21	-	8.5	6.4	1.8
10	-	9.2	8.0	1.8	22	-	8.0	5.8	1.7
11	-	9.4	8.0	1.8	23	-	(8.3)	-	1.5
12	-	(9.4)	8.5	1.8					

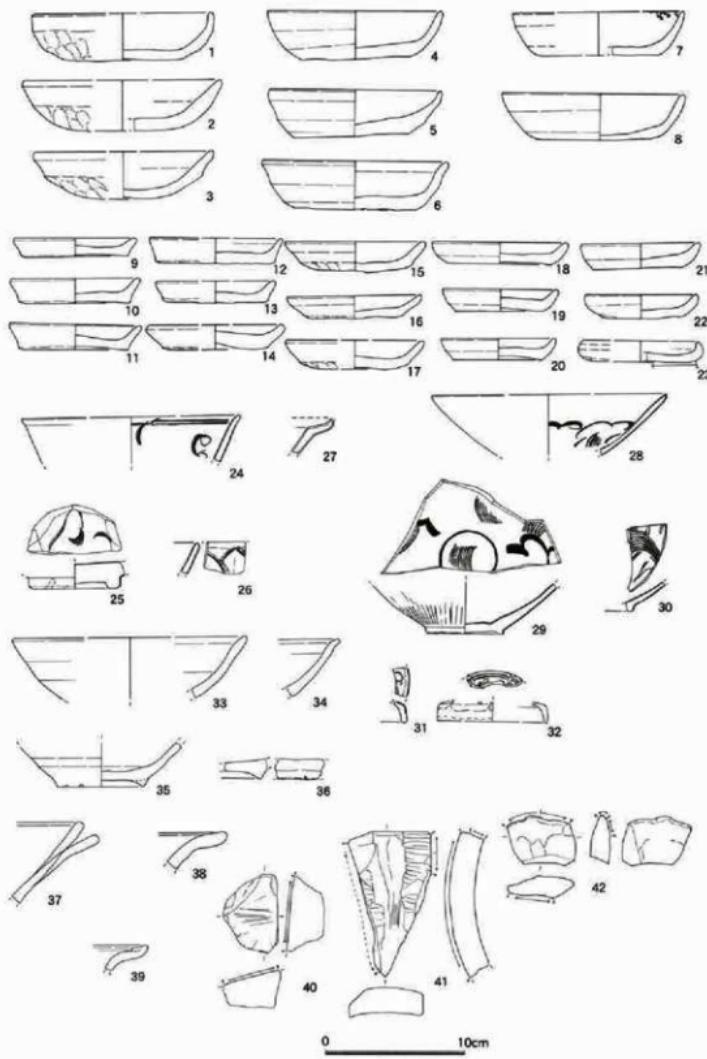


图36 满2出土遗物

状文と櫛書き文で形成されている。釉調は透明度の高い水青色を呈し、光沢に優れる。中でも28は透明度が高く、粗く貫入が入る。素地は白色を呈し、黒色微粒を含み堅緻である。31・32は青白磁の合子の蓋である。32の口径は復元で8.0cmを測る。いずれも型押しだが、小破片のため文様は不明である。釉調は透明度があり、31が緑色、32が水青色を呈し、光沢は優れる。31は細かく貫入が入る。口縁端から内側は露胎である。素地は白色を呈し、緻密。31は若干粗い。図36-33～36は山茶碗である。33・34は口縁部片で、33の口径は復元で16.8cmを測る。35・36は底部片で、35の底径は6.0cmを測る。胎土はいずれも灰白色を呈し、微石粒を多く含み粗い。底部には断面三角形の付け高台が付く。また、35の内底部には重ね焼の痕が残る。図36-37は山茶碗窯系こね鉢の口縁、注ぎ口の部分である。胎土は暗灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗く、硬く焼き縮まる。図36-38は渥美の甕の口縁部片である。器表は刷毛塗りで施釉され、胎土は暗灰色を呈し、堅緻である。図36-39は土鍋の口縁部片である。口縁端は内側に折り返されている。胎土は肌色を呈し、胎芯は黒色に残る。微石粒を多く含む。外面には薄く煤が付着している。図36-40～42は石製品である。40は鳴滝産の仕上げ砥である。41・42は滑石鍋の転用品で、用途は不明。産地は41が北九州産、42は西彼杵産である。

図37 3面出土遺物 かわらけ法量表 () 数値は復元

番号	遺構	口径	底径	器高	番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(13.7)	(9.1)	3.2	22	-	(7.3)	(4.9)	1.5
2	-	(12.8)	(7.2)	2.9	23	-	(8.2)	(5.4)	1.9
3	-	(13.0)	(7.5)	3.5	24	-	(7.2)	(4.1)	1.4
4	-	(13.0)	(7.3)	3.0	25	-	8.1	6.5	1.9
5	-	(12.0)	(8.0)	3.5	26	-	8.5	5.8	1.9
6	-	(12.2)	(6.8)	2.8	27	-	7.8	5.4	1.6
7	-	(13.1)	8.8	3.0	28	-	7.7	4.8	1.7
8	-	(13.1)	(6.9)	3.1	29	-	7.8	4.8	1.6
9	-	(12.6)	6.4	3.2	30	-	7.8	5.4	1.5
10	-	(13.4)	(7.3)	3.3	31	-	8.0	5.0	1.7
11	-	(14.6)	7.5	3.6	32	-	8.1	5.6	1.8
12	-	8.6	6.4	1.6	33	-	(7.6)	(5.0)	1.5
13	-	9.0	6.1	1.9	34	-	(7.7)	(4.8)	1.8
14	-	(8.2)	(6.4)	1.7	35	-	(8.2)	(5.5)	2.0
15	-	8.0	5.8	1.4	36	-	(7.8)	(5.1)	1.8
16	-	(8.6)	(6.1)	1.3	37	-	(8.0)	5.2	1.8
17	-	(9.2)	(7.4)	1.7	38	-	(8.0)	5.1	1.5
18	-	8.2	6.0	1.6	39	-	7.4	4.8	2.0
19	-	(8.1)	(5.8)	1.7	40	-	8.1	5.4	1.8
20	-	(8.4)	(6.7)	1.6	41	-	7.4	4.8	1.7
21	-	(8.2)	6.0	1.8	42	-	7.3	4.4	1.4

3面出土遺物 (図37～38)

図37-1～42は糸切りかわらけである。1～11は大皿。1～7は底径が大きく、器壁は若干広がり気味で、作りはやや粗雑。8～11は底径が小さく、口径は13～14cm前後を測り、器壁は比較的丸味を持つ。胎土は2が肌色、6が橙色、その他は淡橙色を呈し、概ね、粉質で微砂・小礫を含むが、1・4は微砂が多く含まれる。1・10・11は灯明皿で器表に煤が付着する。12～42は小皿である。12～21は底径が大きく、器高は低い。側面観は逆台形を呈し、器壁は直線的である。22～42は先のグループより底径が小さくなる。器壁はやや丸味を持って立ち上がる。胎土は12・14・15・21・22・24～16・31～38が肌色、40～42が橙色、その他が淡橙色を呈し、粉質で、微砂・小礫を含む。13・16・20・27は微砂を多く含み、ざらつく。40～42は硬く焼き縮まる。16・17・20・25・42は灯明皿で、器表に煤が付着する。

図37-43～68は磁器である。43～57は青磁である。43は櫛搔文の皿。底径は4.2cmを測る。釉調

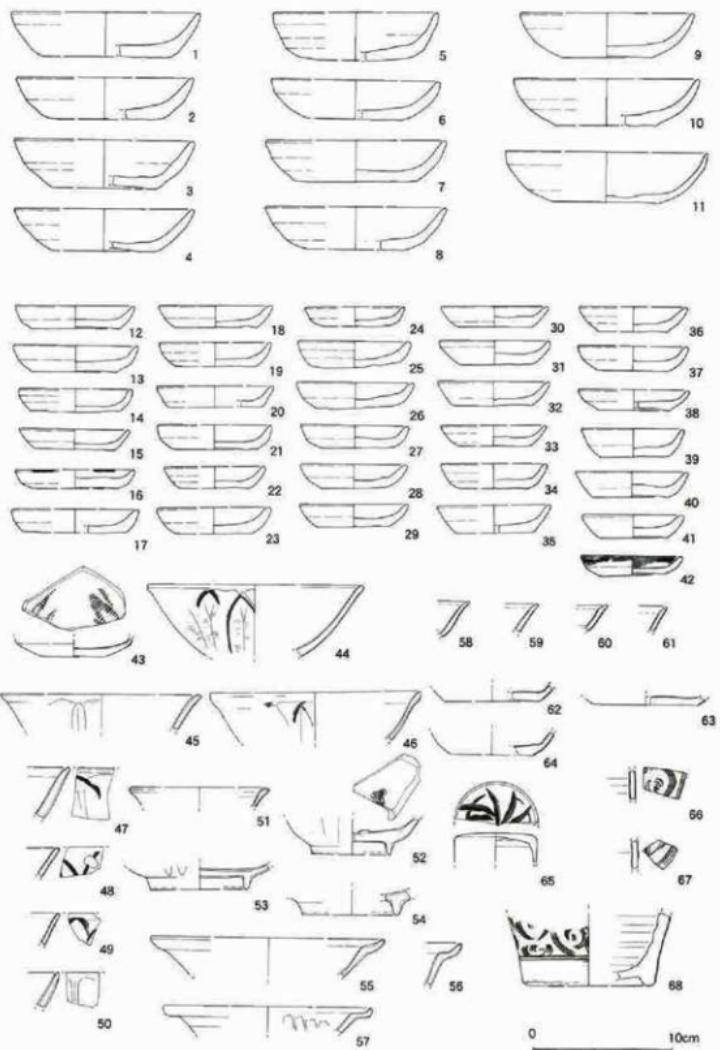


图37 3面出土遗物（1）

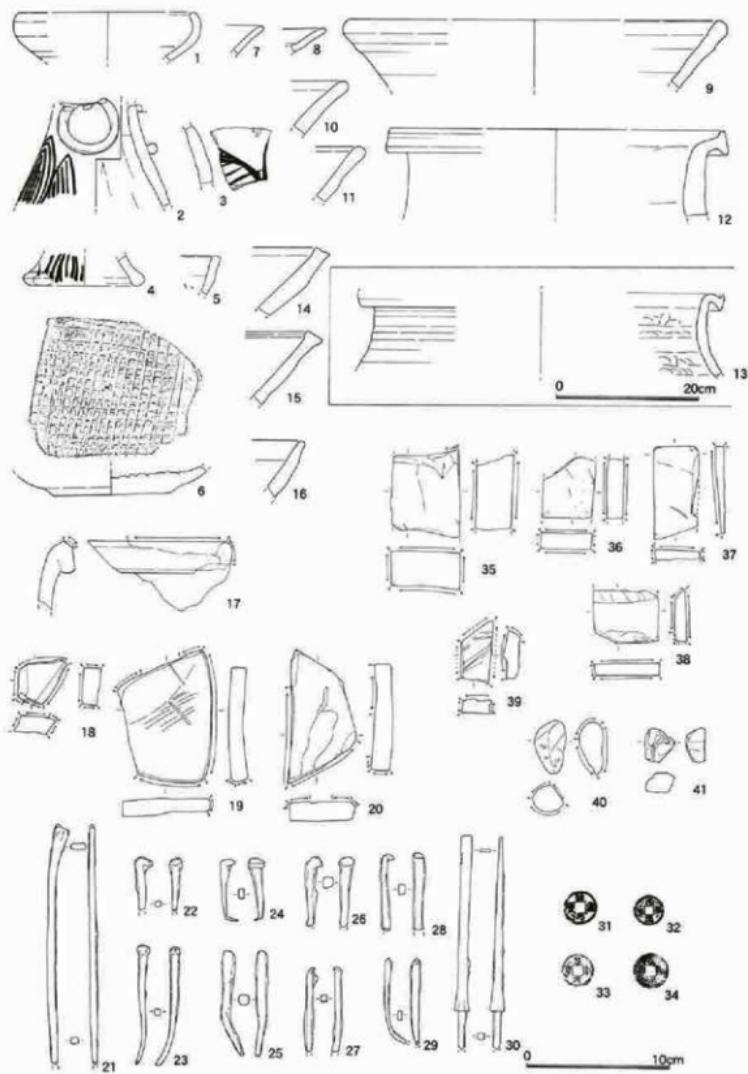


图38 3号出土遗物(2)

は水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、黒色微粒を多く含む。44~50は蓮弁文碗の口縁部片である。口径は復元で44が15.4cm、45が14.4cm、46が15.0cmを測る。45・50は蓮弁の幅が狭い。釉調は44・48・49は緑灰色、45・46・50は緑青色、47は灰褐色を呈す。概ね、光沢・透明度共に良いが、45・50は微気泡多く失透する。素地は48・49が灰色、その他は灰白色を呈し、緻密である。51は折腰鉢の口縁部片である。口径は復元で10.0cmを測る。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透する。素地は灰白色を呈し、緻密である。52~54は鉢の底部片である。底径は復元で各々、5.6cm・7.0cm・7.0cmを測る。52は外面に蓮弁文が施され、内底面には魚文が貼り付けられる。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透する。素地は灰白色を呈し、黒色微粒を多く含み、粘性がある。53は外面に蓮弁文が施される。釉調は青灰色を呈すが、微気泡のため失透・白濁する。光沢は良い。素地は灰色を呈し、堅緻である。54の釉調は緑青色を呈す。再火を受け、肌荒れし、不透明である。素地は灰色を呈し、緻密。55~57は折縁鉢の口縁部片である。55・56は無文、57は内側面に陰刻で蓮弁文が施される。口径は復元で、55が16.8cm、57が15.0cmを測る。釉調は55が改褐色、56が暗緑灰色、57が緑灰色を呈す。いずれも光沢は良いが、微気泡多く失透する。素地は灰色を呈し、堅緻である。58~64は白磁の口元皿である。釉調は若干青味のある白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈し、緻密である。65は青白磁の梅瓶の蓋である。径は5.8cmを測る。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈す。66~68は青白磁の梅瓶である。68の内側には釉はかからない。底径は復元で9.6cmを測る。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈し、緻密である。

図38-1は褐釉の鉢の口縁部片である。口径は復元で12.2cmを測り、口縁は内湾する。光沢があり、不透明の褐釉が薄く両面にかかり、素地は肌色を呈し、白色石粒を含む。焼成が甘い。

図38-2~6は瀬戸である。2~4は同一個体の破片である。4は脚部片で径は復元で、8.6cmを測る。外面には透明で光沢のある灰釉がかけられる。草葉文が線刻され、不遊環が付く。5・6はおろし皿である。6の底径は8.0cmを測る。5の器表には灰釉がかけられる。共に胎土は灰白色を呈し、比較的緻密で、硬く焼き締まる。

図38-7は山茶碗、図38-8は山皿の口縁部片である。器表にはまばらに自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、硬質で微石粒を多く含み粗い。

図38-9~11は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片である。9の口径は復元で27.2cmを測る。10・11の器表には薄く自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質で粗い。

図38-12~15は常滑である。12・13は甕の口縁部片で、各々、口径は復元で24.0cm・52.0cmを測る。12の器表は自然釉がかかり、灰茶褐色を呈し、胎土は暗灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。13の器表は口縁内側から外面に自然釉がかかり、赤茶褐色を呈す。胎土は橙色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。14・15はこね鉢の口縁部片である。共に口縁端は両側に僅かに引き出される。胎土は橙色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。図38-16は渥美のこね鉢の口縁部片である。器表は自然釉が薄くかかり、光沢がある。胎土は黒灰色を呈し、比較的堅緻である。

図38-17~20は研磨痕のある陶片である。

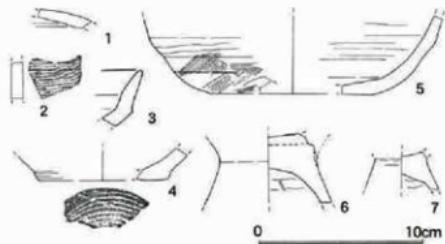


図39 中世層出土の古代遺物

17~19は常滑の甕の破片、20は渥美の甕の破片である。

図38~21~30は鉄製品である。21~29は釘。30はのみ頭の鉄鎌である。遺存する全長は15.2cm、本体は12.3cm、幅0.8cmを測る。

図38~31~34は錢である。31は熙寧元寶、32は元祐通寶、33は聖宋元寶、34は皇宋通寶である。

図38~35~41は石製品である。35は天草産の荒砥。幅4.8cm、厚さ2.5cmを測る。36は伊予産の中砥。幅3.5cm、厚さ1.1cmを測る。37・38は鳴滝産の仕上げ砥。38の幅は4.5cmを測る。39は北九州産の滑石で、鍋の転用品である。40は軽石。41は火打ち石である。

中世層出土の古代遺物（図39）

図39-1・2は須恵器である。1は壺蓋、2は甕の胴部片である。3~7は土師器である。3は壺の口縁部片で、黒彩されている。器壁に強く稜を持ち、内面から稜まで磨かれ、稜以下はケズリである。4は壺の底部片である。底径は復元で7.8cmを測る。口クロ成形である。5は鉢の底部片である。内面はナデ、外面下位から底部はケズリ調整がなされている。火を受け、内面及び、外底面の一部は黒色に変色している。6は台付甕の脚部。7は高壺の脚部。外面は赤彩されている。いずれも奈良・平安期の遺物であろう。

不明遺構（図40）

(x 12, y 0) グリッド付近、海拔7.3m 前後に検出された。平面形は不整方形を呈し、深さは検出面から25cmを測る。3面検出遺構のさらに下層から検出され、古代遺構の可能性があるが、詳細は不明である。

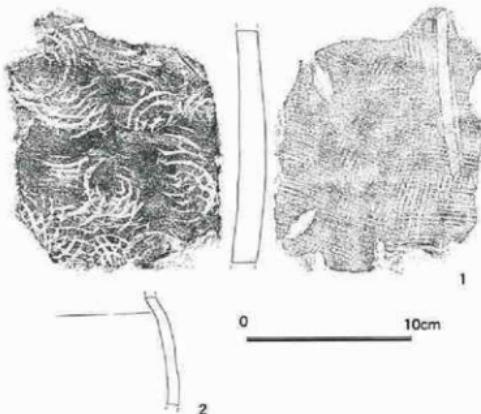


図41 3面下出土遺物

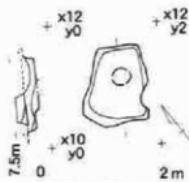


図40 不明遺構

3面下出土遺物（図41）

図41は調査区南東の張り出し部分の黒色土層から出土した遺物である。掘削深度の関係もあり、具体的な遺構の検出はなかったが、図示し得た遺物を報告する。図41-1は須恵の甕の胴部片である。内面には青海波、外面には格子状に叩き目が残る。図41-2は土師の甕の胴部片である。小破片のため詳細は不明である。

第4章 まとめ

今回の調査地点の周辺には多くの遺跡が存在している。主な遺跡としては約30m北に「今小路西遺跡（由比ガ浜一丁目148番1地点）」、約80m北東に「今小路西遺跡（社会福祉センター用地）」、約200m北に「今小路西遺跡（御成小学校内）」等の遺跡がある。（以下、上記の3地点については「今小路西遺跡」の名称は省略する。）「御成小学校内」遺跡は足掛け10年余にわたる調査が実施され、鎌倉時代の大規模な高級武家屋敷や古代の鎌倉郡衙の遺構が発見されている。「社会福祉センター用地」遺跡からは、古代から近世にかけての遺構が発見され、中世前期（13世紀前葉頃）には南北道路遺構を中心とした土地開発の様相が明らかにされている。また、「由比ガ浜一丁目148番1地点」遺跡では近現代の削平で、中世の生活面は遺存していなかったが、中世基盤層から、掘立柱建物2棟が検出され、さらに、遺構の検出はないものの、奈良・平安時代の土師器・須恵器の破片が検出されている。今回の調査はこのような周辺の状況を踏まえて実施された。以下、当調査地点における遺構の変遷を概観する。

古代

中世包含層から古代遺物が出土し、さらに、中世層下からは古代遺物、或は古代遺構の可能性の高い遺構が1ヶ所検出されたが、振削深度等の事情から下層は調査が出来ず、具体的にこの地の性格を示す発見はされなかった。出土した土師器・須恵器はいずれも小破片のため詳細は不明だが、奈良・平安時代の遺物であろう。

中世

中世の生活面は3面が確認された。3面からは密に遺構が検出されたが、中世地山面上に確認された遺構群であるため、遺構間に年代幅があった。最も古い遺構は溝2で、出土したかわらけの編年觀は手づくねの平底皿を中心とし13世紀前半を示している。その他、方形竪穴建築址・井戸・土壙が多数検出しているが、いずれの遺構も遺構構築面よりも下層で検出され、本来の深さを残しておらず、下層部分のみが遺存していた。編年觀は13世紀末葉から14世紀前半代を示している。溝2とこれら遺構群の間には空白期間が存在するが、これは、この時期、頻繁に造成が行なわれ、その際に遺構が失われたためであろう。2面の時期になると、前代の過密とも言える遺構展開に比べ、検出された遺構数は少なくなる。しかし、南北方向の道路遺構は土丹により舗装されたしっかりとした造りであった。調査地点から30m北、現在、東西に走る御成中学校へ至る道と直交する位置関係にあり、当時も本道からの路地的役割を持った通路であったのである。1面の時期になると、遺構はさらに疎となり、道路遺構の造りもやや粗雑になる。出土遺物の編年觀から、14世紀中頃の時期が当たられよう。

これらの事柄から、中世期のこの地の様相は13世紀前半から開発がはじまり、14世紀前半までの間、頻繁に造り替えが行なわれ、「社会福祉センター用地」発掘調査報告書でも述べられているように、この周辺地域での開発開始時期、つまり、「御成小学校内」遺跡で発見された高級武家屋敷の造営開始時期にあたっていおり、この周辺地域が鎌倉で最も都市化の進む地区ひとつであったという事と矛盾しない結果であると言えよう。また、2面・1面の時期（14世紀中頃から後半）になると一変して衰退の様相を呈するところも、周辺遺跡と同様である。

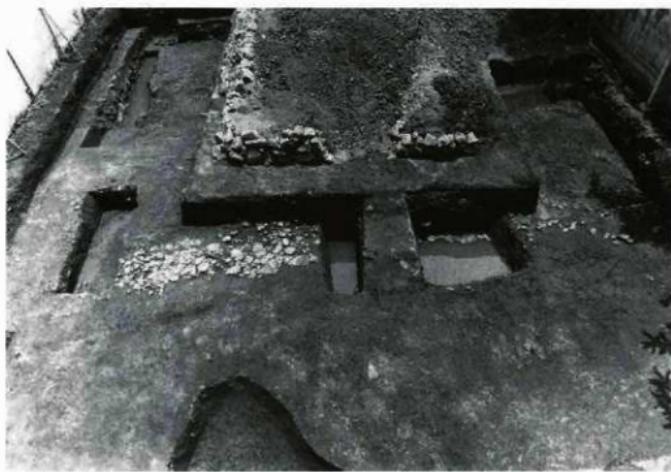
今回の調査では古代から中世、そして近世に至るまでの遺構群が確認された。古代と近世は資料が少ないため詳細は不明だが、中世期には方形竪穴建築址等が建つ町屋としての土地利用と、その盛衰の様相が明らかにされた。今後、さらに周辺の調査が進む事によって、道路遺構や、溝の役割が明らかにされれば、この地域の都市としての規格性や成立、利用価値がさらに判明していくであろう。

《参考文献》

- 「今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）」今小路西遺跡発掘調査団 編 宮田真・清水菜穂 平成5年7月 鎌倉市教育委員会発行
- 「今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書」1990.1.31 今小路西遺跡発掘調査団 編 鎌倉市教育委員会発行 河野眞知郎 他
- 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 （今小路西遺跡（No.201）由比ガ浜一丁目148番1地点）」野本賛二 平成14年3月 鎌倉市教育委員会発行



▲A. 作業風景（東より）



▲B. 1面全景（西より）

図版2



▲A. 1面近世溝1（西より）



▲B. 1面近世溝1（北より）



▲ A. 1面道路遺構 1 (北より)

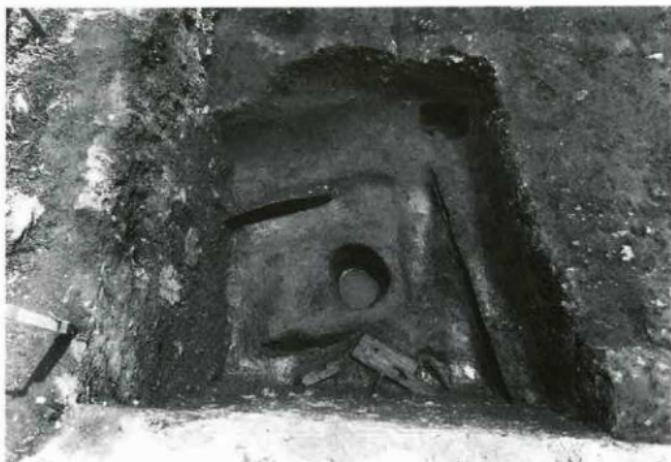


▲ B. 道路遺構 1・2・3 東西断面

図版4



▲A. 2面全景（西より）



▲B. 2面方形堅穴建築址1（北より）



▲A. 2面道路造構2・3（西より）



▲B. 2面道路造構2・3 貼増状況

図版 6



▲ A. 3面全景（西より）

► B - 3面方形堅穴建築址 2 (南より)





▲A. 3面井戸 1 (西より)



▲B. 3面井戸 1 (北より)

図版 8



▲A. 3面溝2（南より）



▲A. 3面方形土壌1（東より）



▲B. 3面方形土壌1・土壌3・4（北より）

図版10



▲A. 3面土壤4（北より）



▲B. 3面土壤7（北より）

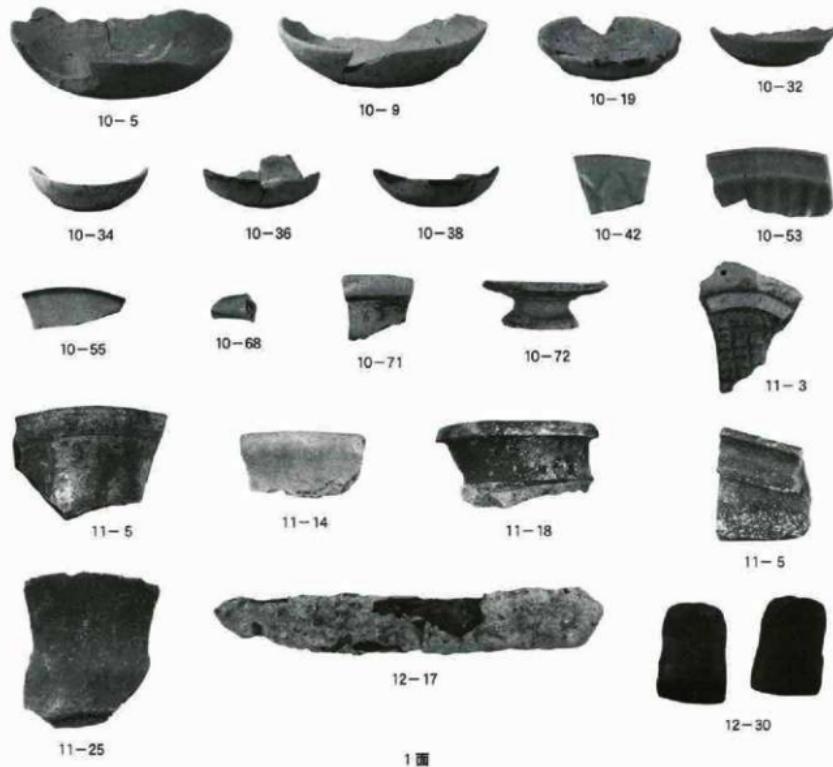


▲A. 3面調査区南東部（東より）



▲B. 不明遺構（西より）

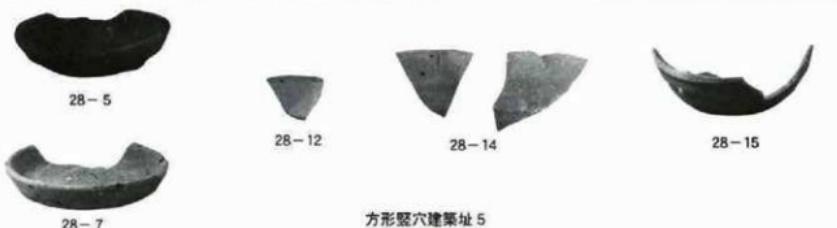
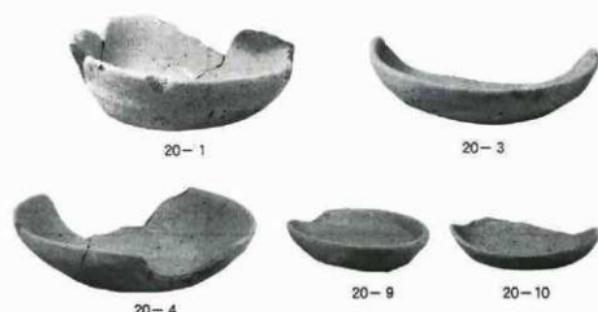
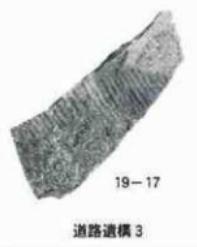
図版12



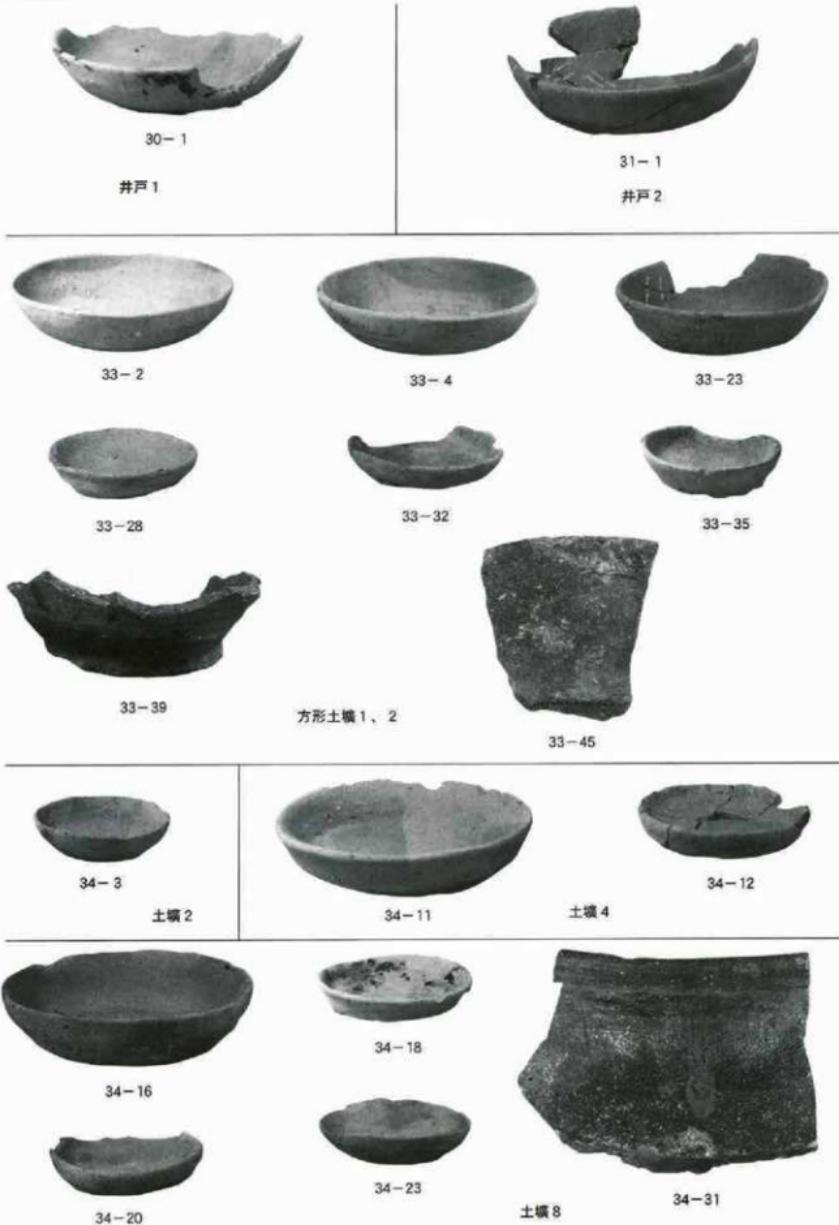
1面



方形窓穴建築址 1



図版14





36-1



36-4



36-5



36-9



36-10



36-15



36-18



36-19



36-21



36-24



36-25



36-26



36-28



36-29



36-32



36-33



36-35

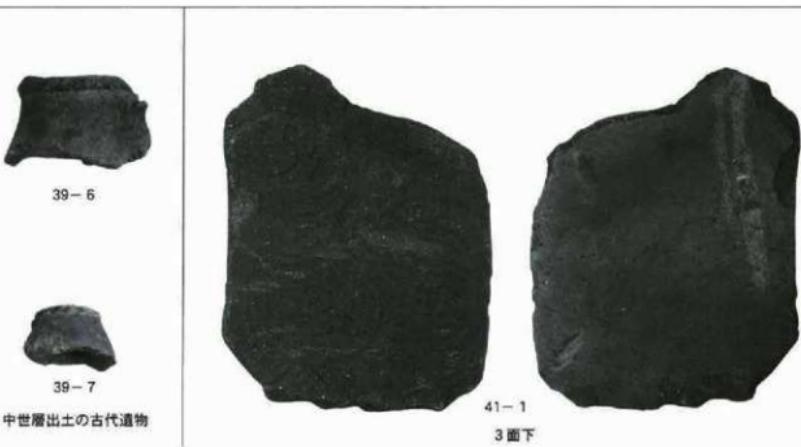


溝2



36-37

図版16



こめまち い せき
米町遺跡 (No.245)

大町二丁目2324番1外地点

例　　言

1. 本報は「米町遺跡（No.245）」内、大町二丁目2324番1外地点における、個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間 平成13年8月6日～同年9月29日
調査面積 67.21m²
3. 調査体制
担当者 馬淵和雄
調査員 鍛治屋勝二
調査補助員 松原康子・沖元道・吉田智哉・渡辺美佐子・田畠衣理
調査協力者 奥山利平・柴崎英輔・清水光一・石井清司・小口照男（以上（社）鎌倉市シルバーハウスセンター）
4. 本報作成分担
遺構図整理 馬淵・鍛治屋
遺物実測 松原・沖元・吉田
同墨入 松原・沖元・吉田
同観察表 松原・沖元・吉田
同集計表 沖元
同写真撮影 鍛治屋
原稿執筆 馬淵・鍛治屋（担当箇所末尾に記名）
編集・総括 馬淵
5. 本文中に用いる「ANC」は、常滑焼における赤羽／中野編年（赤羽／中野1994）の略称である。
6. 図34～24の観については硯司・堀尾信夫氏（日本工芸会山口支部常任幹事・重要無形文化財保持者）のご教示を賜った。また汐見一夫氏の助言も得た。感謝の意を表する。

目　　次

第1章 調査地点をめぐって	84
1. 位置と地勢	84
2. 歴史的環境	84
第2章 調査の概要	94
1. 調査にいたるいきさつ	94
2. 調査方法	94
3. 調査経過	94
第3章 調査の成果	95
第1節 概要	95
1. 異序	95
第2節 各説	95

1. I面上層	95
2. I面下層	99
3. II面	102
4. III面	116
5. IV面	119
6. 採集遺物	131
第4章まとめと考察	145
1. 遺跡の変遷と年代	145
2. 遺構主軸方位について	149
3. 繊維質腐食土について	149

挿図目次

図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡	85	図23 土坑6・9・10・11・12・18	113
図2 明治15年ごろの鎌倉中心部	86	図24 III面遺構全図、同出土遺物(1)	114
図3 調査地点とその周辺	89	図25 III面出土遺物(2)	115
図4 近世～近代の大町村	92	図26 柱穴列1、同出土遺物(1)	116
図5 調査区設定図	93	図27 柱穴列3出土遺物(2)	117
図6 調査区壁土層図、同出土遺物	96	図28 柱穴列4、同出土遺物	118
図7 I面上層遺構全図、同面上出土遺物	97	図29 溝2、同出土遺物	119
図8 溝1、同出土遺物	98	図30 溝3・土坑15・37、同出土遺物	120
図9 据甕1、同出土遺物	99	図31 土坑28・64、同出土遺物	121
図10 I面下層遺構全図、同遺構出土遺物	100	図32 IV面遺構全図	122
図11 I面下層面出土遺物	101	図33 IV面柱穴出土遺物	123
図12 柱穴列1・2、同出土遺物	102	図34 IV面出土遺物	124
図13 土坑2・7・14・16・17、 同出土遺物	103	図35 建物1、同出土遺物	125
図14 II面遺構全図、 同遺構出土遺物(1)	104	図36 建物2・3・柱穴5・6、 同出土遺物	126
図15 II面遺構出土遺物(2)	104	図37 柱穴列7・8、同出土遺物	127
図16 II面上層出土遺物	105	図38 井戸2・土坑53・土坑55、 同出土遺物	128
図17 井戸1、同出土遺物	106	図39 土坑48・49・50、同出土遺物	129
図18 据甕2、同出土遺物	107	図40 土坑41・56・58・65～69、 同出土遺物	130
図19 土坑13・20・22・23、 同出土遺物	108	図41 土坑61・62、同出土遺物	131
図20 P.102・土坑29～35・38、 同出土遺物	109	図42 採集遺物	132
図21 土坑21・40、同出土遺物	111	図43 遺構変遷図	146
図22 土坑26・27、同出土遺物	112	図44 主軸方位対比図	148
		図45 繊維質腐食土分布図	149

表 目 次

表1 調査区土層断面出土遺物観察表	133	表22 Ⅲ面出土遺物観察表(2)	139
表2 I面上層出土遺物観察表	133	表23 Ⅲ面出土遺物観察表(3)	139
表3 溝1出土遺物観察表	133	表24 Ⅲ面柱穴列3出土遺物観察表	140
表4 据壠1出土遺物観察表	133	表25 Ⅲ面柱穴列4出土遺物観察表	140
表5 I面下層遺構出土遺物	133	表26 溝2出土遺物観察表	141
表6 I面下層出土遺物観察表(1)	134	表27 土坑37出土遺物観察表	141
表7 I面下層出土遺物観察表(2)	134	表28 土坑64・28出土遺物観察表	141
表8 I面下層柱穴列1・2出土遺物	135	表29 IV面遺構出土遺物観察表	141
表9 土坑14・16・17出土遺物観察表	135	表30 IV面出土遺物観察表(1)	141
表10 II面遺構出土遺物観察表	135	表31 IV面出土遺物観察表(2)	142
表11 II面上層出土遺物観察表	135	表32 IV面建物1出土遺物観察表	143
表12 井戸1出土遺物観察表	136	表33 IV面柱穴列5出土遺物観察表	143
表13 据壠2出土遺物	136	表34 柱穴列7出土遺物観察表	143
表14 土坑23・13出土遺物	136	表35 IV面柱穴列8出土遺物観察表	143
表15 P.102、土坑29・30・32~34・38 出土遺物観察表(1)	136	表36 井戸2、土坑53・55 出土遺物観察表	143
表16 P.102、土坑29・30・32~34・38 出土遺物観察表(2)	137	表37 土坑49・50出土遺物観察表	143
表17 土坑21・40出土遺物観察表	137	表38 土坑58・56出土遺物観察表	143
表18 土坑26・27出土遺物観察表(1)	137	表39 土坑61出土遺物観察表	144
表19 土坑26・27出土遺物観察表(2)	138	表40 採集遺物観察表	144
表20 土坑6・11・12出土遺物観察表	138	表41 遺物集計表(1)	151
表21 Ⅲ面出土遺物観察表(1)	138	表42 遺物集計表(2)	152

図 版 目 次

図版1-1 調査地点鳥瞰	153	図版3-5 同掘方(南から)	155
1-2 国道134号線大町四ツ角側から 名越方面を望む	153	3-6 I面下層柱穴列1東側南北列 (手前から)P.6・7・8(南から)	155
1-3 調査地点近景(北東から)	153		
図版2-1 北壁土層断面	154	図版4-1 Ⅱ面井戸1中央部土層断面 (南から)	156
2-2 南壁土層断面	154	4-2 Ⅱ面据壠2検出状況(北から)	156
2-3 西壁土層断面	155	4-3 同底部残存状況(南西から)	156
図版3-1 I面全景(西から)	155	4-4 Ⅱ面土坑20(東から)	156
3-2 I面上層据壠1検出状況 (南から)	155	図版5-1 Ⅲ面全景(西から)	157
3-3 I面上層溝1上層部(北から)	155	5-2 Ⅲ面柱穴列4(手前から)	
3-4 同下層石列(南から)	155	P.1・2・3(北から)	157

図版 5 - 3	Ⅲ面（手前から）柱穴列 3 P.2 + 柱穴列 4 P.1（西から）	157	図版 6 - 6	同 P.3（西から）	158
5 - 4	Ⅲ面土坑64土層断面（東から）		図版 7 - 1	IV面井戸 2（東から）	159
		157	7 - 2	IV面土坑 50（北から）	159
5 - 5	Ⅲ面 P.325上層鳥帽子出土状況 (東から)	157	7 - 3	IV面土坑 41・67, P.315 曲物出土状況（西から）	159
5 - 6	Ⅲ面漆器椀出土状況（北西から）		7 - 4	IV面土坑 62（北から）	159
		158	7 - 5	IV面土坑 58（南から）	159
図版 6 - 1	IV面全景（上が北）	158	7 - 6	IV面土坑 61（西から）	159
6 - 2	IV面柱穴列 5 P.6（南から）	158	図版 8	I面出土遺物	160
6 - 3	IV面柱穴列 8（手前から）	158	図版 9	II面出土遺物	161
	P.3・2・1（東から）	158	図版 10	II・III面出土遺物	162
6 - 4	柱穴列 8 P.1（西から）	158	図版 11	III・IV面出土遺物	163
6 - 5	同 P.2（西から）	158	図版 12	IV面出土遺物	164
			図版 13	繊維質腐食土内自然遺物	165

第1章 調査地点をめぐって

1. 位置と地勢

位置

旧国道134号線は、長谷から鎌倉中心部に入り、今小路・若宮大路・小町大路という3本の南北幹線道路と交差したあと、名越隧道を抜けて逗子市に抜ける。小町大路との交点である大町四ツ角交差点を過ぎ、120mほど行くと、日蓮宗寺院上行寺の手前、時宗別願寺のちょうど反対側に、右に入る小道がある。南を流れる逆川に向かって傾斜していくこの路地を30mほど下ったところで、さらに右に分け入る狭い路地がある。その路地は約20mで南北約30m、東西12mほどの空閑地に突き当たる。空閑地の北半部が今回の調査地点である。鎌倉市大町二丁目2324番1および2。空閑地は逆川に向かって緩やかにくだり、南端を逆川に接する。調査区から現在の川岸までは、20mほどの距離を測る。

調査地点は鎌倉市教育委員会の設定した「米町遺跡」(鎌倉市No.245)に含まれる。遺跡範囲は、旧国道134号線以南および以西、教恩寺前から材木座上河原に抜ける道以東、横須賀線線路以北とされている。遺跡南限が1889年開通の鉄道である理由はわからない。調査地点はその範囲のなかでは西北寄りに位置している。現在は上行寺の地所となっている。若宮大路からは約450m東になる。

地勢

鎌倉中心部の東南を流れる逆川は、その源を衣張山および名越の山塊に発し、名越ヶ谷あるいは名越大谷と呼ばれる大きな谷を開析したあと市内大町の中心部を流れ、材木座上河原で滑川に合流する。名越ヶ谷の中で南に向かって流れているこの川は、谷を出るとすぐ直角に近い角度で西に方向を変える。材木座海岸の形成した砂丘が前方に立ち塞がって、越えることができないためである。川は砂丘北側の裾に沿って約300m西に流れ、今度は北に向きを変える。そして40mほどで大きく南に向かい、やがて上河原橋を過ぎたあたりで滑川に流れ込む。途中で西ないし北に流れるところがあたかも逆流しているように見えるので、この名がついたらしい。江戸時代の延宝年中(17世紀後半)に編纂された地誌『新編鎌倉志』に、「逆川は、名越坂より流て西北に行。故に逆川と云」とあり(卷之七、『大日本地誌大系』本)、同じく文政十二年(1829)成立の『鎌倉攬勝考』にもほぼ同様の記述がある(卷之一、同前)。

上本進二は中世の調査地点付近を、逆川によって形成された砂質低湿地もしくは砂丘間低地としている。調査時に確認した基盤層の海拔は約4.8mである(上本2000)。

調査地点は、この川が八雲神社裏山の山麓を削って形成した崖線の中・下段面にある。地表面の標高は6.7mあたりにあり、現在の逆川河床からの比高は約1.7mである。北側の旧国道134号線の路面が8.6m前後なので、調査区は2mほども低い。一帯が逆川方向に急激に下っていることがわかる。標高は川のへりで6m弱にまで落ちたあと、ふたたび海成砂丘に向かって上りはじめ、砂丘頂部で8mを超える。ここから材木座海岸まではちょうど1kmぐらいで、上本進二によれば、その間は滑川が河口近くで形成した砂泥質平野となっている(上本2000)。

2. 歴史的環境

古東海道と大町大路

この一帯は大町大路と呼ばれる幹線道路沿いにあって、中世以来賑わいの絶えなかった場所だという。

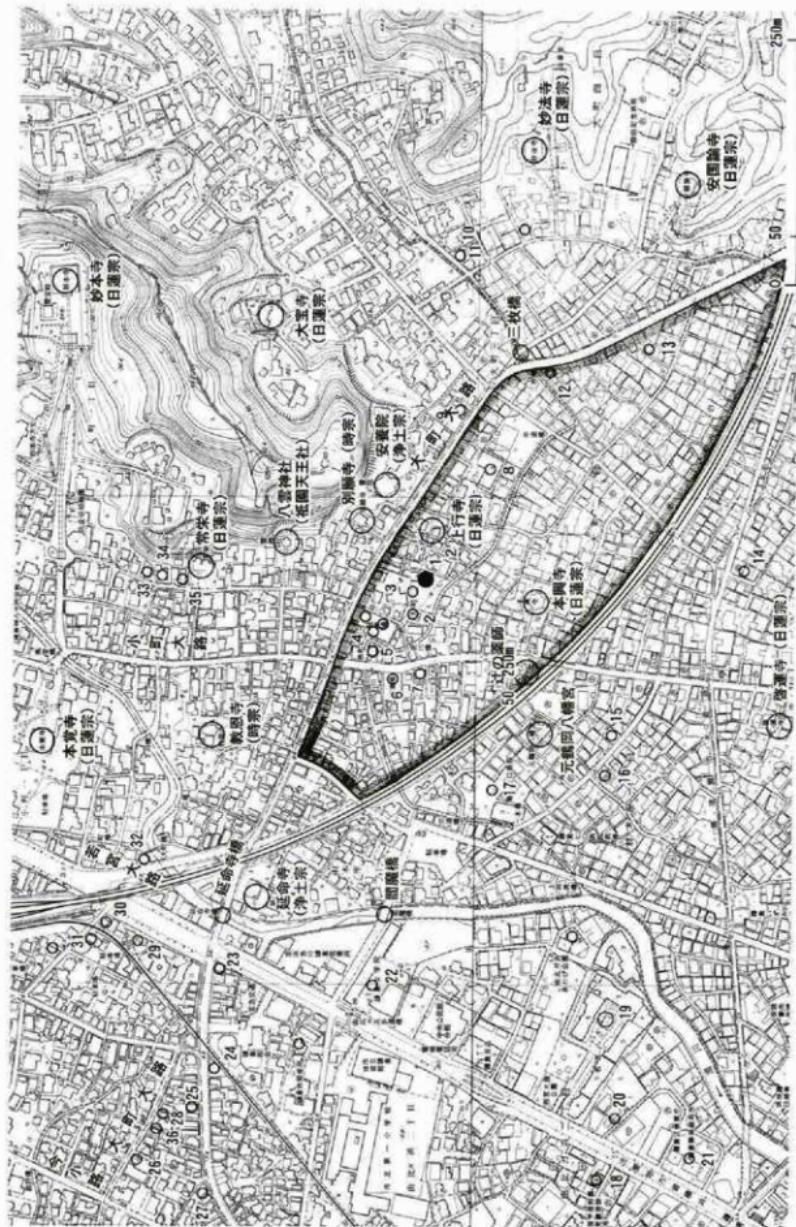


図1 調査地点と近辺の道跡・旧跡



図2 明治15年ごろの鎌倉中心部（『迅速測図第一測期第十測図』より）

図1調査地点名（図3と共に）

1. 米町道跡 大町二丁目2324番1・2地点（本調査地点） 2. 米町道跡 大町二丁目2315番ほか地点（馬渕1995a） 3. 米町道跡 大町二丁目2312番4・10地点（原ほか2000） 4. 米町道跡 大町二丁目2313番15地点（瀬田2001a） 5. 米町道跡 大町二丁目2308番1地点（瀬田2001b） 6. 米町道跡 大町二丁目933番ほか地点（原ほか1990） 7. 米町道跡 大町二丁目931番1地点（田代ほか1997） 8. 米町道跡 大町二丁目2338番1地点（宮田ほか1991） 9. 名越ヶ谷道跡 大町三丁目1217番1地点（菊川1996） 10. 名越ヶ谷道跡 大町四丁目1880番6地点（田代1995） 11. 名越ヶ谷道跡 大町四丁目1888番地点（沙見2000） 12. 米町道跡 大町二丁目2411番2地点（福田1989） 13. 米町道跡 大町二丁目2404番の一部地点（福田2000） 14. 材木座町屋道跡 材木座二丁目217番6ほか地点（瀬田1995） 15. 材木座町屋道跡 材木座一丁目890番7地点（沙見2000） 16. 材木座町屋道跡 材木座一丁目144番3地点（木村ほか1991） 17. 材木座町屋道跡 材木座一丁目910番地点（森ほか2001） 18. 由比ヶ浜中世集団墓地道跡 由比ヶ浜二丁目1203番20地点（原ほか2000） 19. 由比ヶ浜中世集団墓地道跡 由比ヶ浜二丁目1034番1ほか地点（原ほか1993） 20. 由比ヶ浜中世集団墓地道跡 由比ヶ浜二丁目1015番29ほか地点（大河内1991） 21. 材木座中世道跡（鈴木ほか1956） 22. 下馬周辺道跡 鎌倉女学院地点（大河内1998） 23. 下馬周辺道跡 由比ヶ浜二丁目2番12地点（熊谷ほか1998） 24. 下馬周辺道跡 東京電力鎌倉営業所地点（宗室ほか1992） 25. 若宮大路周辺道跡群 由比ヶ浜1-117-1地点（木村1991） 26. 若宮大路周辺道跡群 由比ヶ浜一丁目123番5ほか地点（馬渕1995） 27. 若宮大路周辺道跡群 由比ヶ浜一丁目128番7地点（馬渕1988） 28. 若宮大路周辺道跡群 由比ヶ浜一丁目118番7地点（遠藤1997） 29. 若宮大路周辺道跡群 銀町884番内地点（宮田ほか1999） 30. 若宮大路周辺道跡群 銀町872番14地点（木村ほか1993） 31. 若宮大路周辺道跡群 鎌倉市御成町868番地点（木村1998） 32. 若宮大路周辺道跡群 小町一丁目1028番1地点（大河内1997） 33. 紗本寺道跡 大町一丁目1146番地点（鈴木ほか1994） 34. 紗本寺道跡 大町一丁目1158番1地点（福田1988） 35. 紗本寺道跡 大町一丁目1158番5地点（宗室1991）

（引用文献は第四章末尾に一括した）

大町大路の東半分は、律令時代に鎌倉を通っていた東海道がもとになっている可能性がある。そこでまず、東海道についてみておきたい。

鎌倉を東海道が通過していたのは、宝亀二年（771）の五畿七道制の改編までである。相模国府から鎌倉郷に入り、沼浜郷（現逗子市）から三浦半島の脊梁部を縦断し、横須賀市駒水（現走水）から房総半島に渡って、終点の常陸国府（石岡市）にいたった。五畿七道制改編の際、常陸國と武藏國が入れ替わるかたちで、前者が東山道に、後者が東海道に編入される（『続日本紀』三十一「光仁天皇」、『神奈川県史 資料編』1-159）。それにともない、東海道は相模国府から相模原を横切り、多摩丘陵を越えて武藏府中（府中市）に出る経路に変更される。鎌倉はその道筋から外れたわけだが、なおこの道が房総往還の幹線として重要なことは間違いない。しかし、経路の詳細は明らかではない。

野口実や馬淵は、海岸沿いから極楽寺坂辺・稻瀬川河口付近を経て鎌倉に入り、六地蔵交差点から下馬四ツ角交差点を横切って名越に抜ける、現在の国道134号線（旧道）をそれと想定する（野口1993／馬淵1994）。これに対し、先に高柳光寿は『鎌倉市史 総説編』中で、134号線の1本南側を通る、六地蔵交差点から東に折れる道路を充てている（高柳1959）。そして、それが中世の「車大路」であろうというが、その根拠は明確ではない。この道路は名越で国道134号線に接続するものの、現在では連続性を見出しきくなっている。いや、すでに明治15年の迅速測図制作時点においても、痕跡が明瞭でない（図3）。とはいっても、後述するように、高柳の説自体は決して無稽ではない。

いずれの経路を探るべきかについて、現時点で決めることはできない。どちらの側にも、補強となりうるような材料が存在するからである。

野口や馬淵の説にとっては、次の点が傍証となる。すなわち、ほぼ方格制を企図した中世の町割の中にあって、六地蔵交差点から下馬四ツ角交差点にかけてそれを無視したかのような斜行道路（国道134号線）が、少なくとも10世紀前半以来存在する事実（地点25、原広志氏教示）である。

高柳説には『吾妻鏡』に有力な記事がある。それは小山下野入道生西の家の位置からの類推である。安貞二年（1228）十月十二日条（以下、文書の条文を示す日付は漢数字を、地の文中の日付は算用数字を用いる）でその家は車大路に面していることがわかるのだが、同時にそれは嘉禎二年（1236）四月四日条では若宮大路にも面していることになっている。つまり小山生西家は若宮大路と車大路の交差点北東角になくてはならない。馬淵はかつて、大町大路と若宮大路の交差点北東角を試掘調査したことある。だが、そこは中世には滑川の河川敷で、住宅を営むことは地勢上とうてい不可能な状況にあることがわかった。これに対して、高柳のいう道を車大路として小山生西家を想定すれば、そこは滑川から約100m離れた乾燥の平坦地で、現在私鉄バスの待機場になっているように、大身の武士の住宅としても十分な空間が確保できる。そして、この道が車大路だとすれば、古東海道である可能性は決して小さくない。「車大路」の地名は、古街道の呼称であることが多いからである。

なお、東海道の鎌倉への入口についても、野口・馬淵らの稲村経由説（前出野口1993／馬淵1994）と、木下良の深沢経由説（木下1997）のふたつがあり、結論は得られていない。

治承四年（1180）源頼朝が鎌倉に入る。大倉に新亭が完成した12月12日の『吾妻鏡』には、「閑巷直路。村里授号」とある。これにより、鎌倉は中世都市としてのあらたな枠組に移行する。大町大路の敷設がこのときであったかどうかはわからない。しかし、西は御成山南側支尾根の麓（現市立御成中学校前）から、東は名越山塊南端の山麓（現安国論寺門前）にいたる直線的な街路が通じたのは、それからほどなくのことだったはずだ。和田合戦について記した『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条に、「米町辻、大町大路等之切処」とみえ、この頃にはもうあることがわかる。この道は西半部ではほぼ直線をなしているのに対し、東半部では大町四ツ角を過ぎたあたりからやや南に曲がっている。これは地形

的制約によるというよりも、古街道の名残とみるべきかもしれない。

みてきたように、古東海道がどこを通っていたか、簡単に結論を出すことはできない。しかし、中世都市鎌倉の生成過程を知る上で、この問題がきわめて重要であることは明らかである。今後の資料の蓄積に期待したい。

大町大路は西から出て、今小路・若宮大路・小町大路と交差しながら東の名越にいたる。それぞれの交差点には、「塔の辻」・「下馬四ツ角」・「大町四ツ角」の名称が付されている。「塔の辻」は宝戒寺門前の横大路と小町大路との交差点にもあったという名称で、鎌倉中心部にとっての鬼門と裏鬼門として、境界鎮守の石塔が立っていたことからついたという。「下馬四ツ角」は、騎乗の者がここで下馬の礼をとるのでこの名がある。いわば、ここから北が聖域と認識されていたことがわかる。大町大路は中世都市鎌倉にとて、中心部と周縁とを区別する境界線であった。

中世の大町と米町

鎌倉時代以後大町は賑わいの絶えない場所となつた。鎌倉の多くが田畠と化していた近世にあってさえ、数少ない町場として繁栄していたようである。しかし「大町大路」と同じく、「大町」や「米町」の地名がいつ成立したかは詳らかではない。先述の「米町辻、大町大路等之切処」という『吾妻鏡』建保元年五月二日条の記事から、ここで激しい戦闘がおこなわれたことがわかる。「米町辻」とは現在の「大町四ツ角」のことだろうか。

大町については、承久二年（1220）二月十六日条に「大町以南焼亡」と記されている。十日後の二十六日条にも「大町上失火」とある。また、寛喜三年（1231）一月十六日条には「及横町南北六町余災、出羽前司（中条家長）宅在此内」とみえ、人家の立込んでいる一方で有力御家人の屋敷もあったことがわかる。『新編鎌倉志』は「大町は、夷堂橋と逆川橋との間の町なり」（巻之七）といっている。

米町については、建保元年の和田合戦を記述した『吾妻鏡』仁治二年（1241）十二月二十七日条に「若宮大路東頬米町前」を海岸に向かった、とある。明応年間（1492～1501）頃成立したとされる著名な「善宝寺寺地図」（津久井光明寺蔵）には、大町大路が若宮大路と直交する手前の両側に家並が描かれ、それに「米町」と注されている。米町の位置に関して両者の記述に齟齬ではなく、大町四ツ角付近から西寄りの大町大路沿いの一帯としていいだろう。なおこの点については、『新編鎌倉志』も大町の項の中でさきの文章に続けて、「大町の四辻より西へ行横町を、米町と云。」としている。

この地は鎌倉時代以来、商・職人の町であった。津久井光明寺には「善宝寺寺地図」とともに、明応六年（1497）七月二十五日付「善法（宝）寺分年貢注文」が存在する。そこには寺領内の作人十数人の年貢額が記されている。作人の肩には米町をはじめ中座・塗子または辻子といった地名、日常物屋・紙屋・銀細工・塗などの職業が書かれている（『神奈川県史 資料編』3-6410）。善宝寺は現在の教恩寺の場所にあったという。中世末期における門前の、それもおそらくは通り沿いの賑わいがよくうかがえよう。繁栄の基盤は、鎌倉時代に出された市内の商業地区を指定する二度の法令にある。

周知のように、鎌倉幕府は建長三年（1251）12月3日と文永二年（1265）3月5日の二度、市内の商業地区を指定する法令を出した。その指定地は次のとおりである。以前にも何度か書いたことだが（馬淵1991・1994・1998ほか）、ここには幕府の市中統治策の変化と、そのなかでの大町一帯の位置付けがよくうかがえるものがあるので、いま一度書いておこう。

建長三年一大町・小町・米町・亀谷辻・和賀江・大倉辻・氣和飛坂山上

文永二年一大町・小町・魚町・穀町・武藏大路下・須地賀江橋・大倉辻（法令の地の文には9ヶ所とあるが、表示は以上の7ヶ所）

後者の「穀町」は前者の「米町」であろうか。「武藏大路下」は、位置的に近い「亀谷辻」と「氣和

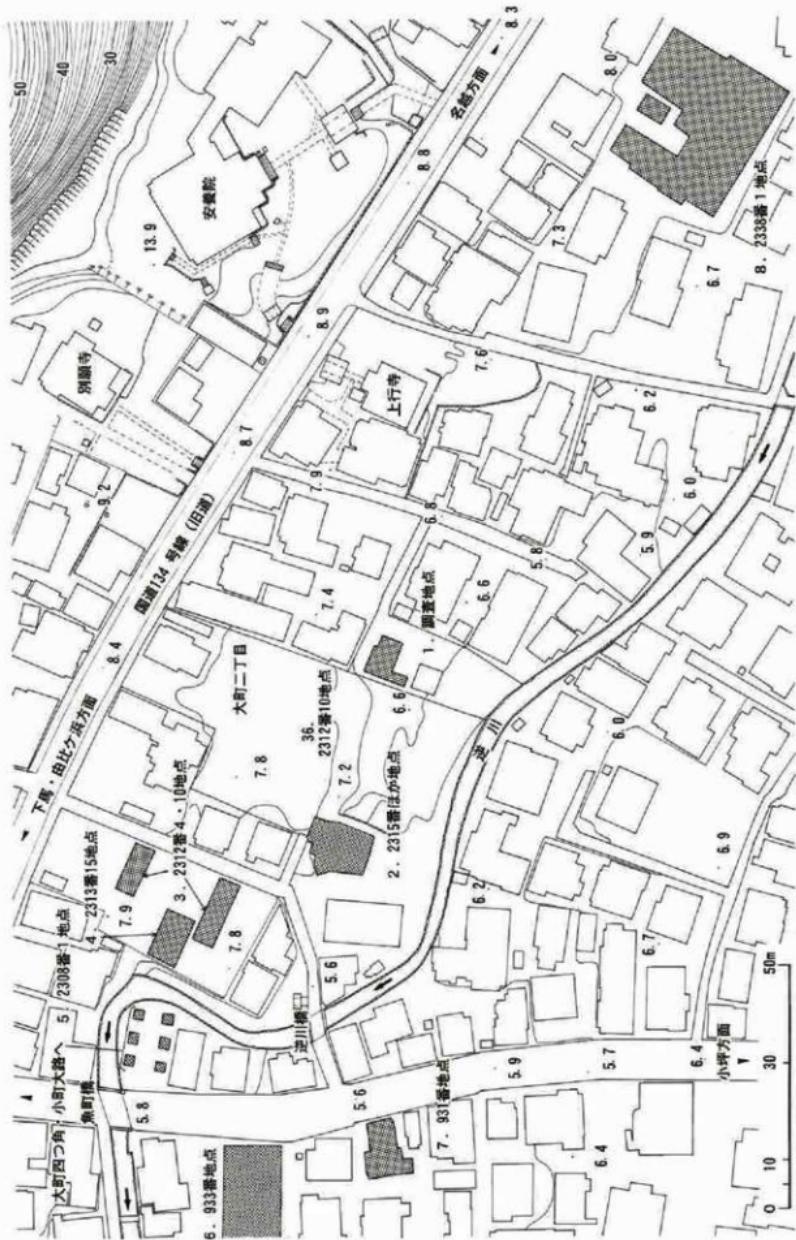


図3 調査地点とその周辺（地点はすべて大町二丁目）

飛坂山上」を統廃合したものとみていいだろう。すると両者の基本的な違いは、「和賀江」が消えて「魚町」と「須地賀江橋」が新設されたことにある。注目したいのは後者の時点と和賀江が消えた事実である。すなわち、この時点で鎌倉幕府は和賀江における商業権益を放棄したことになる。鎌倉時代後期以後、和賀江島と前浜が真言律宗寺院極楽寺の全面的な支配下に入っていたことはよく知られた事実であるが、文永二年の法令こそ、そのことを幕府が宣言したものにはかならない（馬淵1994・同1998）。

大町以南は街中の死穢の遭乗先であった前浜地区となる。また、名越四つ角交差点の東にある「三枚橋」はおそらく三昧橋の謂であり、その先に葬地の存在を予想させる。現に1980年代前半、横須賀線線路脇の立会い調査時に複数の人骨が発見されている。名越一帯も前浜と同じく、都市の周縁部であり、ここもまた死者の空間であった（石井1981）。大町大路界隈は都市における中核部と周縁との境界的な領域であり、この点において「下馬四つ角」の存在意義とも整合する。そして忘れてならないのは、商人・職人の活動が許された両義的な地でもあったことである。

大町は中世後期にも商人・職人らいわゆる「町衆」の賑やかに行き交う町であった。「鎌倉祇園会」と呼ばれた八雲神社の祭礼を担ったのは彼らである。天正14年（1586）6月12日、北条氏直は鎌倉祇園祭における喧嘩口論や押買等についての禁制を出している（『鎌倉市史 史料編』1-403）。町衆の多くは日蓮宗門徒だったという（松尾1993、ただし浄土宗徒もいた一湯浅1994）。

鎌倉時代後期、法華経を奉じる日蓮は名越山麓を拠点として盛んな布教活動をおこなった。その宗派は当初名越付近に押しとどめられていたが、鎌倉幕府崩壊後徐々に鎌倉市内中心部に進出する。調査地点の東にある日蓮宗上行寺は、正和二年（1313）日範によって建立されている。調査地点はその寺域内であった可能性もある。日蓮宗の教導拡大の実態と、そのなかでの大町・名越一帯の位置付けは、今後の重要な課題である。

近世の大町

近世の地誌『新編相模国風土記稿』によると大町は夷堂橋以南であると明記されている。町小路・米町・辻町・魚町・名越町・長谷小路・元田代・峰岸・岩崎・かけ澤・中座町・松殿町・傘町などがあった。明治初期の『相模国鎌倉郡大町村誌』ではより具体的に大町村の領域が示されている。米町・辻町・傘町・魚町・松殿町・町小路・中座町・反目久保・高番屋・塔の辻・佐々目力谷・天狗堂・千葉地・裁許橋・藏屋舗・松葉・名越等の地を合わせて一村となし大町村という（または本郷と称せしことあり）とあり、現在よりもかなりの広範囲を指し示していたと考えられる。図4は吉田友一著『大町名越ゲエもネエ話』の中にある大町字名略図を元に、現代地図上にかつての町割を再現したものである。近世の地名をとどめているとみられるので参考にしてほしい。

（「近世の大町」項 鍛冶屋）

近隣の社寺

付近には社寺が多い。代表的なものを紹介しておきたい。

【大町八雲神社】 本地点北約150mにある大町の鎮守社。かつては天王社（「徳川家康社領寄進状案」『鎌倉市史 史料編』1-404）、松堂祇園社（寛永八年棟札）、松殿祇園天王社（寛延元年棟札）、佐竹天王（社伝）などと称した。社伝に、永保年中（1081～1084）新羅三郎義光が攘災のため京都の祇園社を勧請したという。それが本当だとすると、長治元年（1104）建立という佳柄天神社や坂ノ下御盡神社・佐助稻荷社などとともに、鎌倉の四隅を守る鎮守社のひとつであった可能性が高い（馬淵1994）。中世後期、この神社の祭礼が「鎌倉祇園会」と呼ばれておおいに騒わったことは知られている（藤木1993）。

【上行寺】 法久山大前院上行寺と号する。日蓮宗。もと京都本国寺末。正和二年（1313）開山日範。

【安養院】 調査地点からは大町大路をはさんで北東約80mに位置する。祇園山長楽寺安養院と号し、

現浄土宗、もと律宗。開山順行房憲靜。関東形式成立期の典型として知られる、徳治三年（1308）七月銘、総高333cmの宝篋印塔がある。東寺大勧進として知られる憲靜は泉涌寺に学んだ法律家で、鎌倉幕府とも強い結びつきがあった。伝承によれば文永頃（1264～1275）鎌倉に入り（弘長年間説もある）、稻瀬川のほとりで念仏会を修して一院を設けたという（網野1978・橋本1990など）。安養院宝篋印塔は大和大藏派の石工「心阿」の作であり（銘文）、長谷寺にも同一人物と目される「信阿」作の同年五月銘宝篋印塔陽刻板碑がある。長谷寺は稻瀬川に至近の位置にある。こういった石造品のありかたが憲靜の動向と関連するのかどうか、注目されるところである。

【別願寺】 調査地点から大町大路に出たところの対面位置にある。福荷山超世院と号する。現在時宗、藤沢清淨光寺末。「新編相模國風土記稿」によれば、もと能成寺という真言宗寺院だったが、弘安五年（1282）住僧公忍が一遍に帰依して改宗、寺号を別願寺とし、自身も覚阿と改めたという。室町時代には、関東公方の足利氏から何度か寺領の寄進を受けている。なかで注目されるのは、応永二十七年（1420）、持氏が寺の門前畠を寄進していることである（『関東公方足利持氏寄進状』、『神奈川県史 資料編』3-5609）。この寺の門前といえば、上行寺付近か本調査地点一帯ということになるが、前者は前述のようにすでに正和二年（1313）からこの地にある。したがって、「門前」とは本地点に至近の場所と考えざるを得ない。なお、寺にある足利持氏墓とされる石造宝塔は、実際には鎌倉時代後期の作品として知られる。伝承は彼の厚い保護を受けたことの名残であろう。

近隣の発掘調査

米町遺跡やその周辺でこれまでにおこなわれた発掘調査のうち、おもなものを概観しておきたい。

【米町遺跡 大町二丁目2315番ほか地点】（地点2、馬淵1995a） 本地点の西約30mにある。北半部に掘立柱建物の載る厚い泥岩地行があり、南半部は逆川に向かって徐々にさがっていく様子が見受けられた。後者から鉛錆やふいごの羽口が数多く出土したことから、金属生産に関連した場所であったと推測できる。また便槽らしい土坑も検出され、日常生活空間の一部を調査したこともうかがえる。

【米町遺跡 大町二丁目2312番10・同4ほか】（地点3、降矢ほか2000） 地点2のほぼ北に位置する。2ヶ所の調査区が設定され、そのうち北側から鎌倉時代後～末期の泥岩版築層が検出された。報告者はこれを道路遺構として、「車大路」あるいは「古い東海道」であると結論づけている（降矢ほか2000, pp.20）。その続ぎと思われる版築面が、地点3と本地点とにはさまれた地点36（大町二丁目2315番地点）でも見つかっており、調査者はそれを大町大路と推測した上で、「東海道」であろうと発表した（2001年6月2日『朝日新聞』朝刊「湘南版」／同年6月27日『毎日新聞』朝刊）。鎌倉時代後期の道路が検出されただけで、なぜそれより500年も前の東海道が発見されたことになるのか理解に苦しむが、何よりこれを大町大路とする前提自体が確実とはいがたいのではないか。というのも、この版築面は現在の国道134号線から30mほども南にある。前出『善寶寺寺地図』からは、延命寺橋の位置は現在と変わっていないよう見える。したがって、検出された版築面がもし大町大路だとすると、どこかで北に曲がって現在の道に接続しなければならない。そうでなければ、最低でも30mを越える幅員を持つか、あるいは、大町四ツ角も延命寺橋も、ひいては下馬四ツ角までもが、今より30mも南の位置にあったことになる。それらの可能性のどれもが、地形的にも、他の道路との比較からいっても（若宮大路でさえ幅33m）、考えにくい。この版築面の性格についてはまだ検討の要があろう。地点36では、大町大路とされた鎌倉時代版築面の下は掘られていないので、この地点における古街道の存否は結局不明である。なお、ここからは製作途上の木製品がたくさん出土している。留意すべき点である。

【米町遺跡 大町二丁目2338番1地点】（地点8、宮田ほか1999） 本地点東約120mに位置する。



図4 近世～近代の大町村（一部）

12世紀末～14世紀前半（馬淵による年代観）に属する生活面が2枚報告され、遺構は下層面が圧倒的に多いとされている。下層面には多数の柱穴と長方形土坑がみられ、また井戸の多いことを特徴とする。しかし、上下2枚の平面図を検討すれば、下層の井戸とされているもののいくつかは上層造構面からの切込みであった可能性が認められる。ただしこの点については、調査区全体の土層断面が掲示されていないため、詳細はわからない。なお、ここでは中世層下に古式土器から律令時代の遺物の出土する遺構が発見されているが、部分的な調査区設定にとどまっているので、全容を知り得ない。

【名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1217番1地点】（地点9、菊川1995）米町遺跡北東に広がる名越ヶ谷遺跡の南端に位置し、大町大路に面している。深度規制があって基盤層まで調査がおよんでいないものの、年代は13世紀初頭（馬淵による年代観）から15世紀におよぶ。発見された遺構には、数棟の建物跡のほか、土間状の硬化面や便槽らしき穴など、日常生活を強く感じさせるものが多い。またその一方で、茶臼といった寺院との関連を示唆する遺物も出土している。

【材木座町屋遺跡 材木座一丁目910番地点】（地点17、森ほか2001）本地点から200mあまり西南西にある。ここからは中世の長方形土坑群や律令期の掘立柱建物群が見つかっている。前者は前浜に共通する様相を示し、後者はその規模から公的機関の倉庫の可能性も考えられる。中世は12世紀末期ごろから営為があり、若宮大路や小町大路南半部（「小坪道」か）などと輪線を異にする道路・溝が検出されている。これについて報告者は、近在の元八幡宮の主軸方位による規制を想定しているが（pp. 107）、前面の道路（高柳1959にいう「車大路」）による可能性も考慮されるべきだろう。

（馬淵）

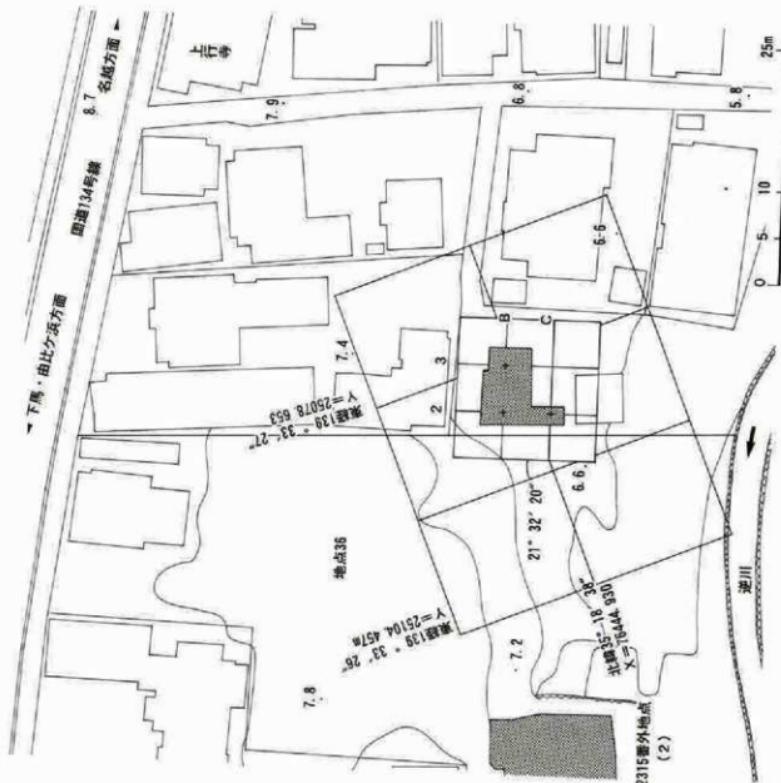


図5 調査区設定図

第2章 調査の概要

1. 調査にいたるいきさつ

平成13年7月に個人専用住宅の建設工事についての事前相談があり、基礎工事の掘削計画が現地表下10m50cmまで及ぶ計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下1m20cm以下に中世包含層及び遺構面の存在することが明らかになった。これにより当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、事業者との協議を経て文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年8月6日から4月29日までを調査期間として現地での発掘調査を開始した。

2. 調査方法

方眼設定

調査区が変形のカギ形をしているため、方眼軸線は測量の利便性を優先させるかたちで、調査区の形状に即して設置した。したがって国土座標系には一致していない。

まず調査区外北西に任意の点1-Aを設け、そこから東と南に5m間隔の軸線を配し、東西軸線にはアルファベットを、南北軸線には算用数字の名称をついた。それぞれの方眼区画は北西角の軸線交点により呼称される。また、調査にあたっては、大町大路方向を便宜上の北と認識した。

交点3-Bにおける座標成果は次のとおり。

〔AREA 9〕 X-76444.930 Y-25078.653 (北緯35° 18' 38"・東経139° 33' 27")

方眼南北軸とY系との偏差は次のとおり。

N-21° 32' -E

若宮大路の方位が約N-26° 40' -Eなので、この方位は約5° 西に傾いていることになる。

3. 調査経過

調査は2001年8月6日から同年9月29までを要した。その間のおもな作業内容はつぎのとおり。

- 8月6日（月） 機材搬入、平行して地表下約1mまで重機により表土掘削
- 9日（土） 測量方眼設定
- 13日（月） 第I面版築部分写真撮影
- 25日（土） 第I面全景写真撮影と平面実測
- 28日（火） 第II面土坑群掘削
- 9月6日（木） 土坑群写真撮影
- 12日（水） 第III面精査
- 19日（水） 第III面全景写真撮影と平面実測
- 21日（金） 基盤層上面（第IV面）精査と遺構掘削
- 27日（木） R Cヘリコプターによる航空写真撮影と平面実測
- 28日（金） 平面と調査区壁断面の実測
- 29日（土） 機材撤収

(馬淵)

第3章 調査の成果

第1節 概要

1. 層序

近・現代整地層と近世の耕作土を除くと、地表下約60~120cmで泥岩地行面があらわれる。この面にはいくつかの造構が掘り込まれており、調査対象とすべき最初の面と認定した。以下、基盤層まで大きく4枚の造構面が確認された（図6）。

I面は標高約5.6から6mと幅があり、緩やかに西南方向へと下っている。周辺地形からみて逆川に向かって全体的に落ちているのであろう。I面を構成する版築層や包含層の厚みは場所によりかなり異なる。下層の脆弱な地盤を改良するため、結果的にこうなったのだろう。泥岩はおおむね拳大~人頭大のものが使われ、大きいことを特徴とする。この面の少し下、標高5.6~5.7m前後に、炭化層の広がったもう一枚の泥岩地行面（上面に比べ薄くて脆弱）が認められた。最初の面とは場所によって1枚に収斂するので、これもI面と見做し、それぞれ「I面上層」・「I面下層」と名づけた。

II面は標高5.2~5.6mにある。調査区の大半は大型の土坑群で占められ、面として確認できる場所が少なかった。やはり上層と同じく脆弱な地盤を補強するために、造構の充填土が泥岩地行で固められている場合が多く、面の部分との違いを見分けるのには困難がともなった。I面と同じく面に起伏がある。この面も上下2時期に分けることができるが、調査時には時間的制約から一括で扱った。

III面は標高5m~5.3mにある。上面には炭化層が広がる。この面も起伏があり、また上下2時期に分けられるが、II面と同じく一括で調査した。上層は5.1~5.3m辺りに位置し、図6でいえば灰褐色砂質土（土層No.11・12）・暗褐色弱粘質土（No.20）・明褐色弱粘質土（No.36）・暗褐色弱粘質土（No.37）・褐色粘質土（No.47）・明黄褐色砂質土（No.49）・泥岩地行で構成され、それらの上面がIII面上層に相当する。下層は5.0~5.1mにある。この辺りから面の起伏がなくなり、ほぼ平らになる。灰褐色粘質土（No.14）・明褐色弱粘質土（No.29）・明褐色弱粘質土（No.38）・暗褐色粘質土（No.50）・泥岩地行の上面がIII下層に相当する。

IV面は基盤層のよく締まった青灰色砂層上にある。造構検出は標高4.8m前後の基盤層でおこなったが、土層断面の観察から標高4.9~5mに造構の切込み肩を確認でき、これも上下2面あることがわかる。上層面構成土は、暗茶褐色粘質土（図6 土層No.8）・黒色粘質土（No.16）・明褐色粘質土（No.23）・暗褐色弱粘質土（No.26）・暗褐色粘質土（No.30）・暗褐色弱粘質土（No.39）・暗褐色粘質土（No.40）・明黄褐色粘質土（No.58）・炭層・泥岩地行などである。下層は基盤層の直上にある。場所によって、明褐色粘質の馬糞のような纖維質腐食土（No.52）の堆積が認められる。また多くの造構（特に土坑）埋土にこの土が見られた。

（鍛冶屋・馬淵）

第2節 各説

1. I面上層

全体的に造構は少ない。調査区中央部に据壊、東壁沿いに溝状の落ち込みが検出された。下層の同じ位置に同様のものが存在するため（II面据壊2・III面溝3）、同一の地割が継承されていた可能性を示

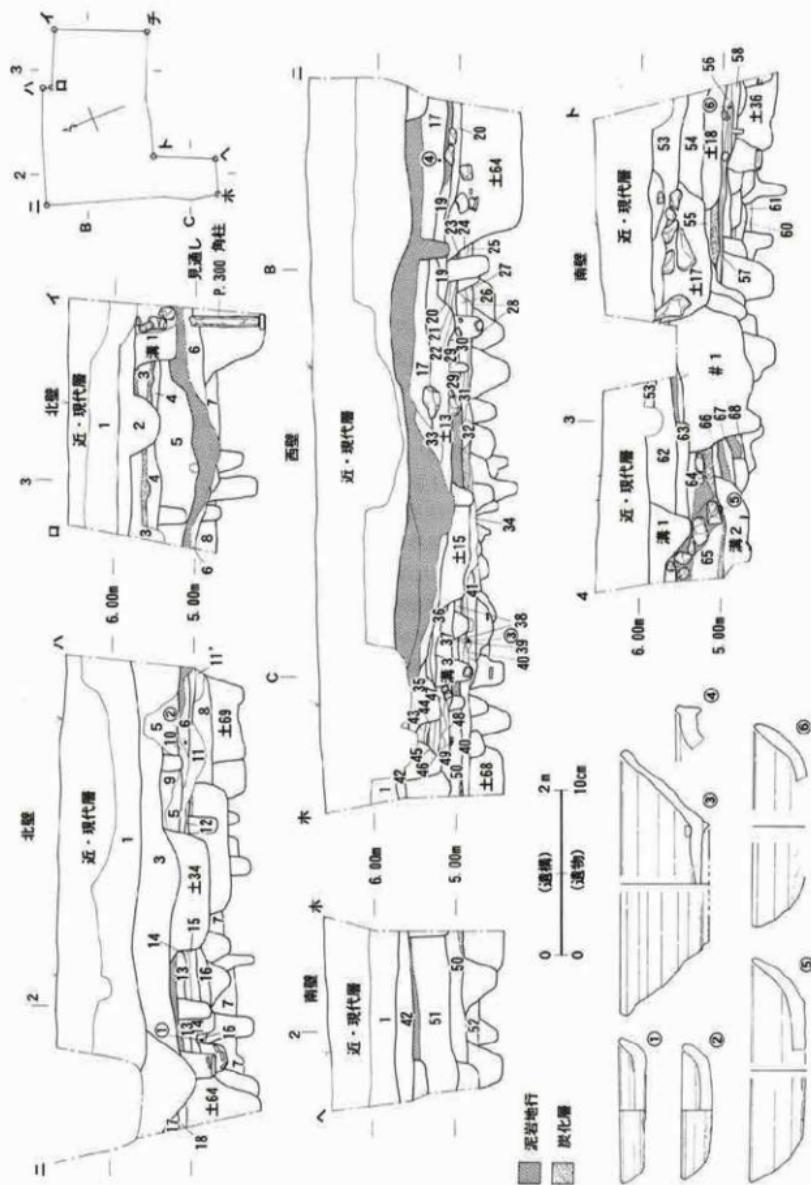


図 6 調査区壁土層図、同出土遺物

図 6 土層説明

1. 近赤褐色土
2. 暗褐色砂質土 記岩小塊・炭化物・遺物を含む (上面= I 面上層)
3. 暗褐色砂質土 (上面= I 面上層)
4. 黄褐色沙と暗褐色土の混合土
(上面= II 面)
5. 黄褐色粘質土 (上面= II 面)
6. 明褐色粘質土 木製品を含む
7. 黒褐色粘質土 地山崩移層
(上面= III 面)
8. 黄褐色粘質土 (上面= IV 面)
9. 黄褐色粘質土
10. 炭化物と暗褐色土の混合土
11. 黑褐色砂質土 きめ細かな土
(上面= III 面)
12. 黑褐色砂質土 泥岩塊を含む
(上面= III 面)
13. 黑褐色粘質土
14. 黑褐色粘質土 (上面= III 面)
15. 黑褐色砂質土
16. 黑褐色粘質土 (上面= IV 面)
17. 黑褐色砂質土
18. 黑褐色粘質土 軟質化した泥岩地帯
(上面= II 面)
19. 明褐色砂質土 泥岩片・遺物・炭化物を多く含む (上面= II 面)
20. 暗褐色粘質土 泥岩片・炭化物を
多く含む (上面= III 面)
21. 暗褐色粘質土
22. 明褐色粘質土 遺物を多く含む
23. 明褐色粘質土
24. 暗褐色粘質土 (上面= IV 面)
25. 暗褐色粘質土
26. 暗褐色粘質土 泥岩片・炭化物を
多く含む (上面= IV 面)
27. 暗褐色粘質土
28. 青灰色砂 泥岩粒・鉄分・炭化物を含む
29. 明褐色粘質土 (上面= III 面)
30. 暗褐色粘質土 (上面= IV 面)
31. 明褐色粘質土
32. 黑褐色粘質土
33. 暗褐色粘質土 泥岩片を多く含む
34. 明青灰色砂質土
35. 明褐色粘質土 (上面= III 面)
36. 明褐色粘質土
37. 暗褐色粘質土 泥岩片を多く含む
(上面= III 面)
38. 明褐色粘質土 (上面= III 面)
39. 暗褐色粘質土
40. 暗褐色粘質土 黄褐色沙と炭化物を
少量含む (上面= IV 面)
41. 暗褐色粘質土
42. 暗褐色粘質土 (上面= I 面)
43. 暗褐色粘質土
44. 暗褐色粘質土
45. 暗褐色粘質土 (上面= II 面)
46. 暗褐色粘質土
47. 明褐色粘質土 黄褐色沙と炭化物、
泥岩片を含む (上面= III 面)
48. 明褐色粘質土 黄褐色沙と炭化物を
49. 少量含む
50. 暗褐色粘質土 黄褐色沙と炭化物を
少量含む (上面= III 面)
51. 暗褐色粘質土 泥岩粒・遺物・炭化物を含む
52. 明褐色粘質土 50と同質
(上面= IV 面)
53. 明褐色粘質土 泥岩片・遺物・炭化物を多く含む (上面= I 面上層)
54. 明褐色粘質土 (上面= I 面下層)
55. 暗褐色粘質土 炭化物を多く含む
56. 暗褐色粘質土 腐食土のような軟質
の土。炭化物を多く含む
57. 暗褐色粘質土 木片・炭化物を多く含む
58. 明褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・
遺物片を含む (上面= IV 面)
59. 鉄鉢 (鉄化塊) 層 (上面= III 面)
60. 暗灰色粘質土
61. 暗灰色粘質土
62. 明褐色土 大小の泥岩を多量に含む
(上面= I 面上層)
63. 明褐色粘質土 62と同質。落ち込み
層土
64. 明褐色粘質土 泥岩片を多く含む
65. 明褐色粘質土 64と同質
66. 暗褐色粘質土 炭化物・泥岩粒を多く
含む
67. 暗褐色粘質土 66と同質
68. 暗灰色粘質土

9

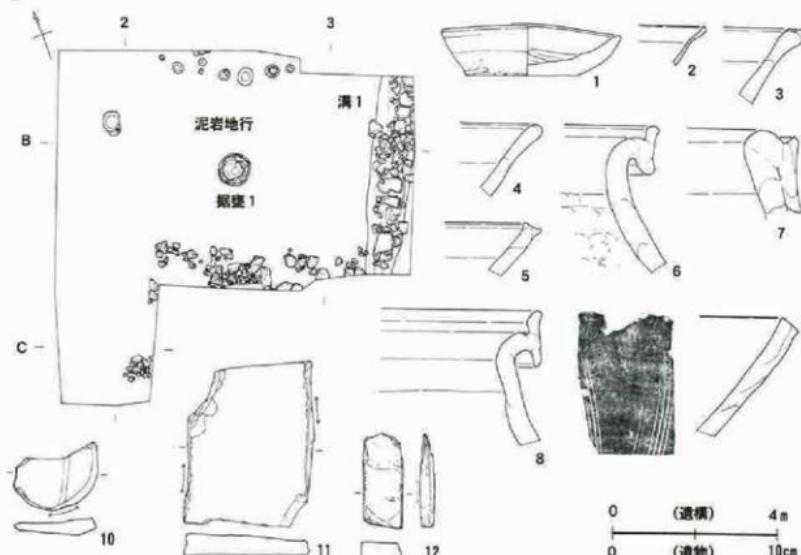
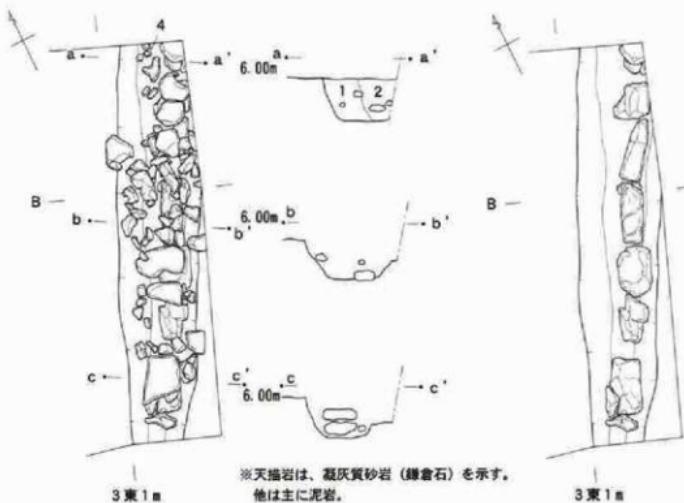


図 7 I 面上層遺構全図、同面上出土遺物



1. 暗褐色砂質土・泥岩・遺物片・炭化物を多く含む。
2. 暗褐色砂質土・泥岩・凝灰質砂岩(鎌倉石)・安山岩などが含まれる。

底面石列

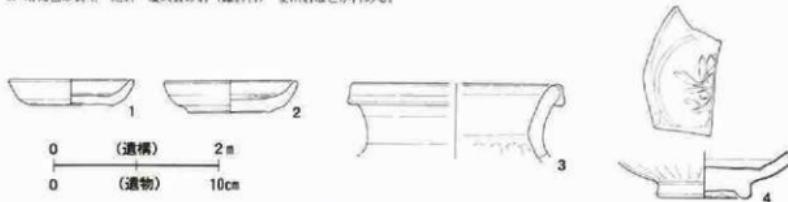


図8 溝1, 同出土遺物

す。また南壁沿い溝1に直交して不定形の泥岩がならんでいたが、一部の検出にとどまった(図7)。

溝1(図8)

位置: 3-A・B 規模: 幅約60~100cm×深さ50cm前後 主軸方位: N-27.5°-E 流下方向: 南→北 充填土: 図に記載 出土遺物: 土師器皿R種小型(1・2)・常滑壺(3)・竜泉窯青磁画花文碗(4)

全体に、岩が投げ込まれたように乱雑に埋まっている。泥岩が石材の主体で、凝灰質砂岩(鎌倉石)や僅かながら安山岩も含まれている。底面には、それまでの廃棄的な状況と変わり、細長く整形された切石が長軸方向に並んでいる。底面の石列が当初から造構にともなう施設であり、上部の石は廃絶時に投棄されたものだろう。調査区南壁沿いに泥岩列が溝と直交して検出されたが、全容は不明。出土遺物のうち搬入品(3・4)の年代は、13世紀第2四半期~中葉。

据壠1(図9)

位置: 2-B 平面形: 円形 断面形: すり鉢形 規模: 直径75cm×深さ35cm 出土遺物: 常滑壺(1)

泥岩地行面に据えられている。壺の上部は欠失。ほぼ下半分が土坑に埋められている。

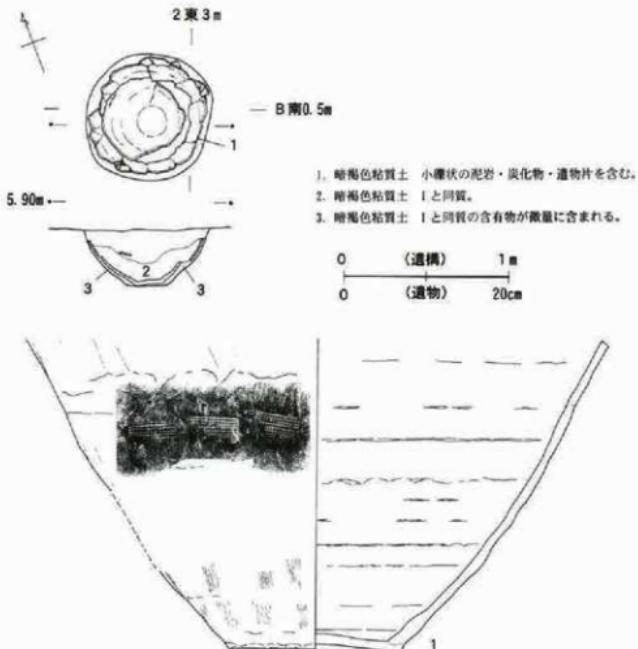


図9 据壇1, 同出土遺物

I面上層出土遺物(図7)

土師器皿R種(1)・北部系山茶碗(2)・常滑こね鉢I類(3・4)・常滑こね鉢II類(5)・常滑甕(6・7・8)・備前すり鉢(9)・土師器皿転用品(10)・磨耗陶片(11)・砥石仕上げ砥(12)
搬入品の年代は13世紀第3四半期を中心に、15世紀としてよいもの(7)を含み、幅が広い。

2. I面下層

面自体失われている部分が多いが、柱穴列など境界性を持つ造構が出現している(図9)。

柱穴列1(図12)

位置: 1~3-A・B 横規格: 東西3間(平均柱間距離183cm)×南北2間2列(平均柱間距離西側182cm、東側166cm) 南北軸方位: 東側N-23.5°-E、西側N-31.5°-E 充填土:P.1~6
暗褐色粘質土 泥岩片・炭化物・遺物片を多く含むしまりの良い土 P.7・8 暗褐色粘質土 混入物がより少ないやや軟質の土 出土遺物: 土師器皿種極小型(1)掘立柱建物の一部である可能性がある。柱穴の大半が礁石を含む。P.5・7・8は方形に成形された凝灰質砂岩を使用している。柱穴規格は径が40cm前後、深さが20~40cm程度と大きくはない。

柱穴列2(図12)

位置: 2・3-B 横規格: 東西3間(平均柱間距離約177cm) 東西軸方位: N-68°-W

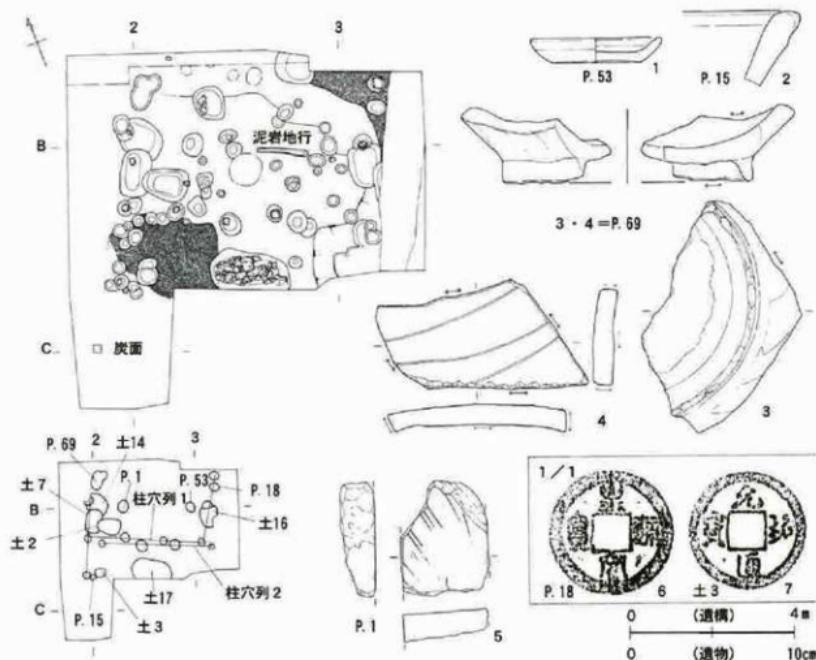


図10 I面下層遺構全図、同遺構出土遺物

充填土：P.1～3 暗褐色粘質土 泥岩片・炭化物・遺物片を多く含みしまりが良い P.4 暗褐色砂質土 泥岩片・炭化物・遺物片を含む軟質の土 **出土遺物：**開元通宝（2）

土坑2（図13）

位置：2-B **平面形：**長円形 **断面形：**皿形 **規模：**長径110cm×短径60cm×深さ12cm

主軸方位：N-55°-W **重複関係：**土坑7を切る **充填土：**図に記載

泥岩地帯で埋められている。上層生活面構築時の造作であろう。こうした特徴はI面遺構に多い。

土坑7（図13）

位置：1・2-B **平面形：**長円形 **断面形：**逆台形 **規模：**長径115cm×短径74cm×深さ51cm

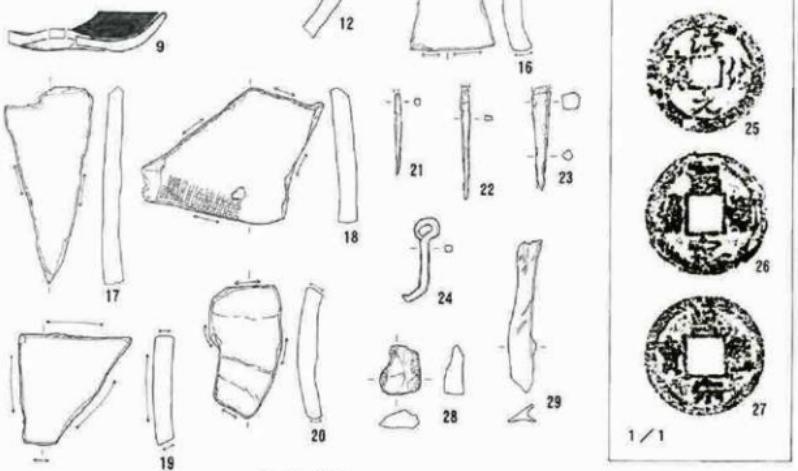
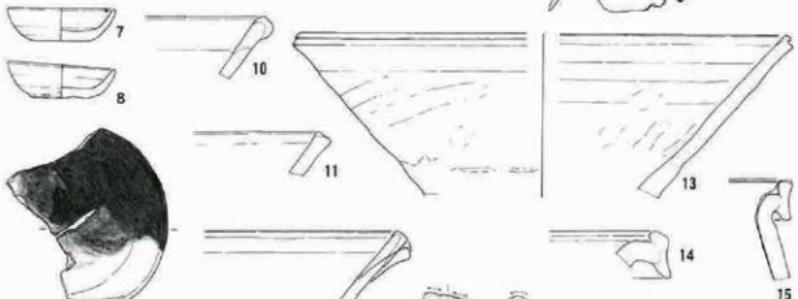
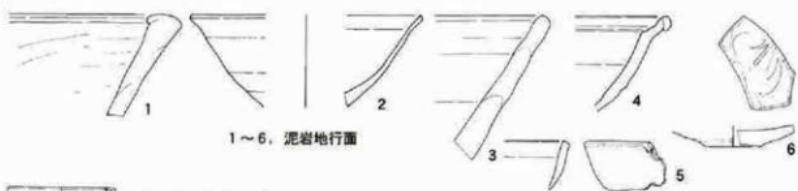
主軸方位：N-25°-E **重複関係：**土坑2に切られ、土坑14を切る **充填土：**図に記載

土坑14（図13）

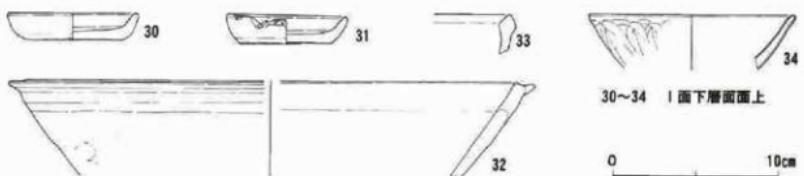
位置：1・2-A・B **平面形：**楕円形 **断面形：**逆台形 **規模：**長径（約110）cm×短径約86cm×深さ44cm **主軸方位：**N-42°-W **重複関係：**土坑7に切られる **充填土：**暗褐色粘質土 **出土遺物：**土器皿R種小型（1）・常滑こね鉢II類（2）・磨耗陶片（3・4）・竜泉窯青磁無文鉢（5）・至道元寶（6）

出土遺物のうち2は13世紀中葉前後、5は13世紀中葉～後半を示す。

土坑16（図13）



7 ~ 29. 炭層



30 ~ 34 1面下層面上

0 10cm

圖11 1面下層面上出土遺物



図12 柱穴列1・2, 同出土遺物

位置: 3-B 平面形: 四角長方形 断面形: 箱形 規模: 長辺105cm×短辺80cm×深さ40cm

主軸方位: N-18°-E 重複関係: 土坑40を切る 充填土: 図に記載 出土遺物: 磨耗陶片(7)
土坑17(図13)

位置: 2-B 平面形: 不整長円形 断面形: 逆台形 規模: 長辺202cm×短辺(-)×深さ66cm

主軸方位: N-62°-W 充填土: 図に記載 出土遺物: 土師器皿R種(8・9)・瀬戸折縁鉢(10)

埋め戻しの際に多量の岩石が投棄されている。主体は泥岩で、凝灰質砂岩(鎌倉石)・安山岩などが混入する。

I面下層遺構出土遺物(図10)

- [P.53] 土師器皿R種小型(1) [p.15] 瓦器火鉢(3) [P.69] 磨耗陶片(3・4) [P.1] 砥石中砥
(5) [P.18] 皇宋通宝(6) 土坑3 元祐通宝(7)

3・4のみならず、いったいに本地点出土の磨耗陶片は通常とは異なる。すなわち、過去の出土例は縁辺部・表裏とともに凸部が磨耗していることが圧倒的に多かったが、ここでは凹部にも顕著に認められる。このことは、磨耗陶片をすりこ木の代用品とする馬淵和雄の意見(馬淵1993)にも、部分的な修正を求めるものであろう。

I面下層面出土遺物(図11)

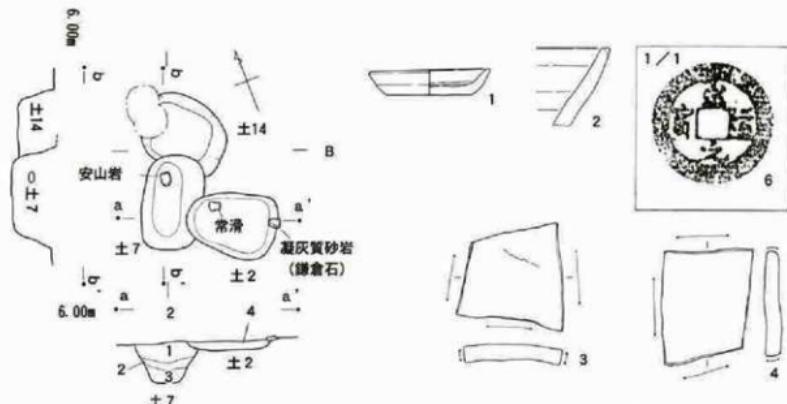
- [泥岩地行面] 瓦器火鉢(1)・北部系山茶碗(2)・常滑こね鉢I類(3)・瀬戸折縁鉢(4)・瀬戸おろし皿(5)・竜泉窯青磁花文皿(6) [炭層] 土師器皿R種小型(7・8)・同大型転用とりべ(9)・常滑こね鉢I類(10・11)・同II類(12・13)・同甕(14・15)・磨耗陶片(16~20)・鉄釘(21~23)・船釘(23)・掛金具(24)・淳化元宝(25)・皇宋通宝(26・27)・チャート火打石(28)・獸骨(29)

- [I面下層面上] 土師器皿R種小型(30・31)・常滑こね鉢II類(32)・綠釉洗(33)・竜泉窯青磁連弁文碗(34)

搬入品の年代は13世紀後半~14世紀初頭を示す。

3. II面

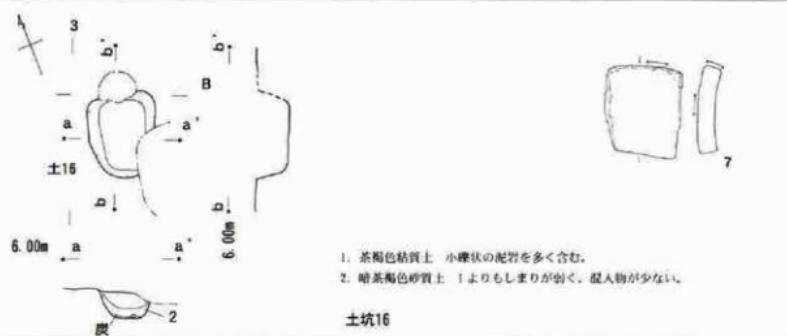
検出遺構として井戸1・据甕1・土坑20・柱穴等がある。土坑の多いことを特徴とする(図13)。



1. 茶褐色粘質土：泥岩粒・炭化物・遺物片を多く含む。
 2. 茶褐色粘質土：小塊状の泥岩を含む。
 3. 暗茶褐色粘質土：やや軟質の土。
 4. 泥岩地帯：小塊状の泥岩が散在する。(土坑7)

土坑2・7・14

1~6 土坑14



1. 茶褐色粘質土：小塊状の泥岩を多く含む。
 2. 暗茶褐色砂質土：よりもしまりが鋭く、混入物が少ない。

土坑16



図13 土坑2・7・14・16・17, 同出土遺物

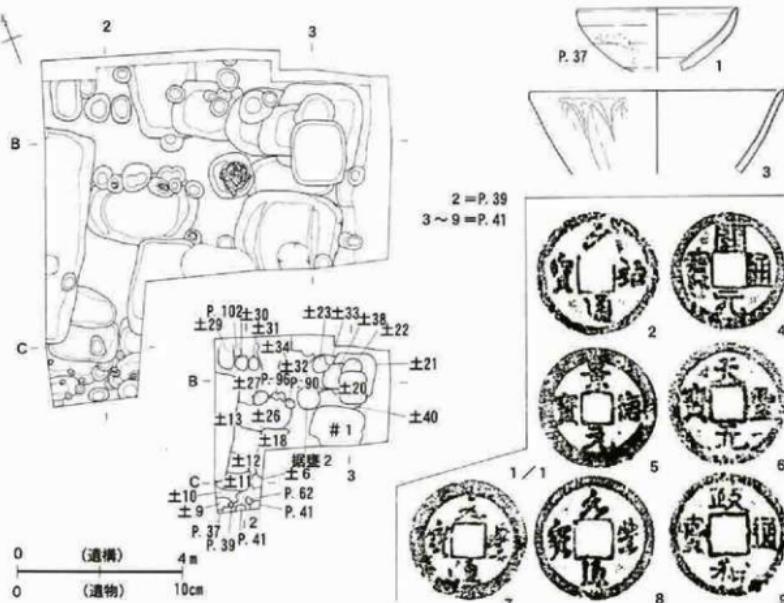


図14 II面遺構全図、同遺構出土遺物（1）

II面遺構出土遺物（図14・15）

- [P.37] 建窯天目茶碗（1） [P.39] 元祐通宝（2） [P.41] 竜泉窯青磁鎮連弁文碗（3）・開元通宝（4）・景德元宝（5）・天聖元宝（6）・元豐通宝（7・8）・政和通宝（9） [P.42] 土師器皿R種小型（10・11）・るっぽ（12）・祥符通宝（13） [P.61] 土師器皿R種小型（14） [P.90] 常滑こね鉢I類（15） [P.96] 竜泉窯青磁鎮連弁文碗（16）

15はANC 5ないし 6a形式で、13世紀中葉～第3四半期としてよく、16もほぼそれに並行する。全体に13世紀後半として大過なかろう。

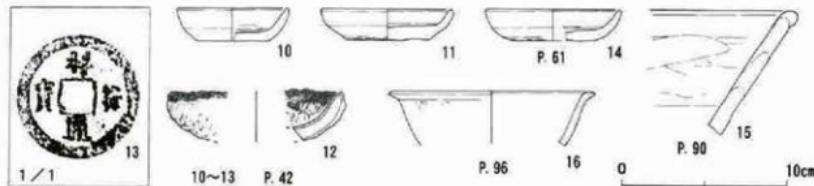


図15 II面遺構出土遺物（2）

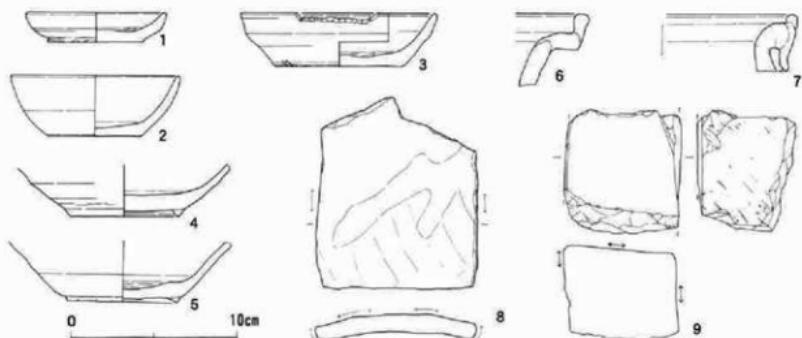


図16 II面上出土遺物

II面上出土遺物(図16)

土師器皿R種小型(1)・同中型(2)・同大型(3)・東遠系山茶碗(4)・南部系山茶碗(5)・常滑甕(6・7)・磨耗陶片(8)・砥石中砥(9)

遺物年代にはややばらつきがあるが、おおむね13世紀中葉～後半とみてよいだろう。

井戸1(図17)

位置：2・3-B 平面形：隅丸方形(推定) 断面形：逆台形 規模：長辺254cm×短辺(-)×深さ100cm 主軸方位：N-63.5°-W 重複関係：土坑17(I面下)に切られる 充填土：図に記載

出土遺物：土師器皿R種小型(1～3)・常滑こね鉢I類(4)・常滑甕(5)・磨耗陶片(6・7)・竜泉窯青磁無文碗(8)・同輪花碗(9)・鉄釘(10)

堆積土上層の泥岩地行は造構内全体を厚く覆っている。井戸を封したのち生活面として地固めしたものと推測できる。井戸枠らしい腐食した木片がわずかに残っていた。底面には段差があり、中央部南壁際に溜り部らしい浅いすり鉢状の落込みが見られる。搬入品の年代は、13世紀中葉(4・9)～同後半(5・8)を示す。9は内面に白土ようの材料による縱方向の界線をもつが、韓國松廣寺聖寶博物館韓盛旭・同国立中央博物館姜大奎両氏によれば、高麗のものではないとのこと。やはり竜泉窯産であろう。

据壠2(図18)

位置：2-B 平面形：楕円形 断面形：深皿形 規模：長径107cm×短径105cm×深さ27cm 充填土：図に表記 出土遺物：常滑甕(1)・土師器皿R種小型(2)・常滑片口碗(3)・同こね鉢II類(4)

先に検出した据壠1(I面上層)とは、若干南東にずれるもののほぼ同位置にあるといってよい。掘方は1よりも広く、段差をつけて掘り込まれ、甕自体も一回り大きい。口縁部がないのは、1を構築する際壊されたのであろう。時期差があるにもかかわらず同位置で検出されたことは、造構周辺の居住空間が継承されていた可能性を示している。3・4はANC5形式(13世紀第2四半期～中葉)か。

土坑13(図19)

位置：1-A・B 平面形：長方形(推定) 断面形：浅鉢形 規模：長辺524cm×短辺(-)×深さ20cm

主軸方位：N-30°-E 充填土：図に記載 出土遺物：常滑甕(4)・皇宋通宝(5・6)・治平元

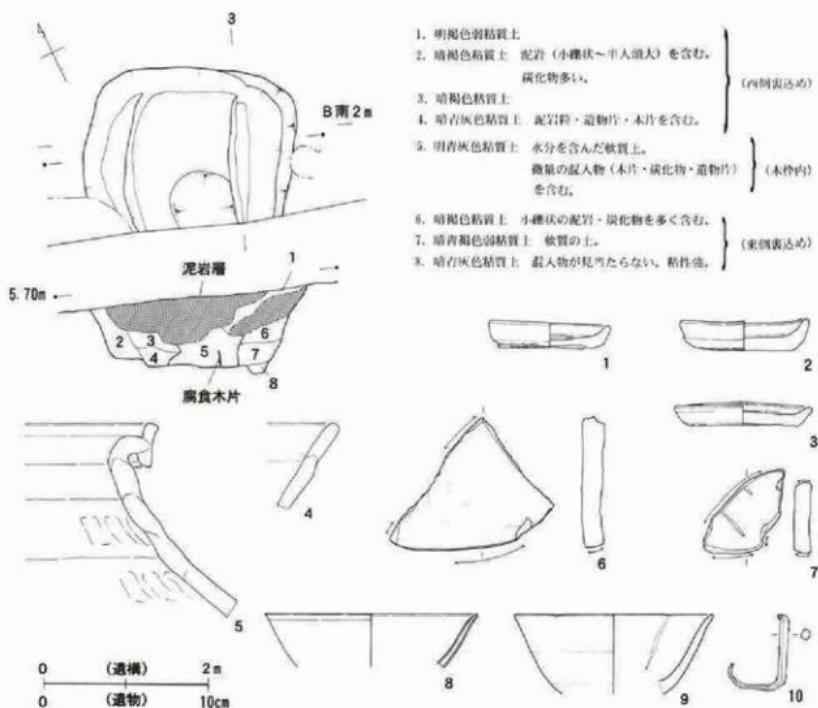


図17 井戸1、同出土遺物

宝 (7)

造構のおよそ西半分が調査区外のため全容が明らかではないが、大型の方形土坑と判断した。上部は上層の地行の際削られ、消失している。上層造構か。

土坑20 (図19)

位置：2・3-A・B 平面形：隅丸長方形 断面形：逆台形 規模：長辺158cm×短辺134×深さ40cm 主軸方位：N-21°-E 重複関係：土坑22を切る 充填土：図に記載

土坑22 (図19)

位置：2・3-A 平面形：楕円形 断面形：逆台形 規模：長径(98)cm×短径88cm×深さ48cm 主軸方位：N-49°-E 重複関係：土坑20に切られる 充填土：暗褐色粘土質

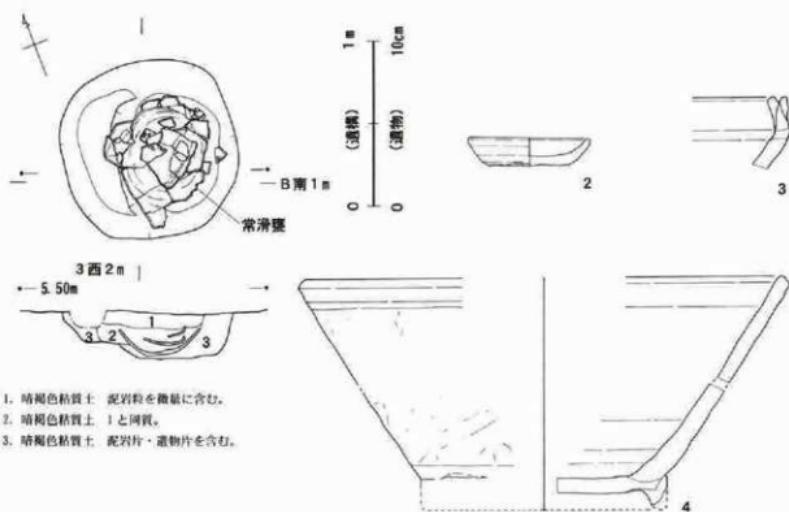
出土遺物：常滑こね鉢I類(1)・常滑甕(2)・青白磁皿(3)

土坑23 (図19)

位置：2-A 平面形：不整楕円形 断面形：浅鉢形 規模：長径84cm×短径72cm×深さ20cm

主軸方位：N-55°-E 充填土：図に記載

充填土の明灰色砂質土は灰のようなさらさらとした土で、土坑内だけでなく周囲の面上一帯に薄く堆積していた。



1. 喷褐色粘質土 花岩片を微量に含む。
2. 喷褐色粘質土 1 と同質。
3. 喷褐色粘質土 花岩片・遺物片を含む。

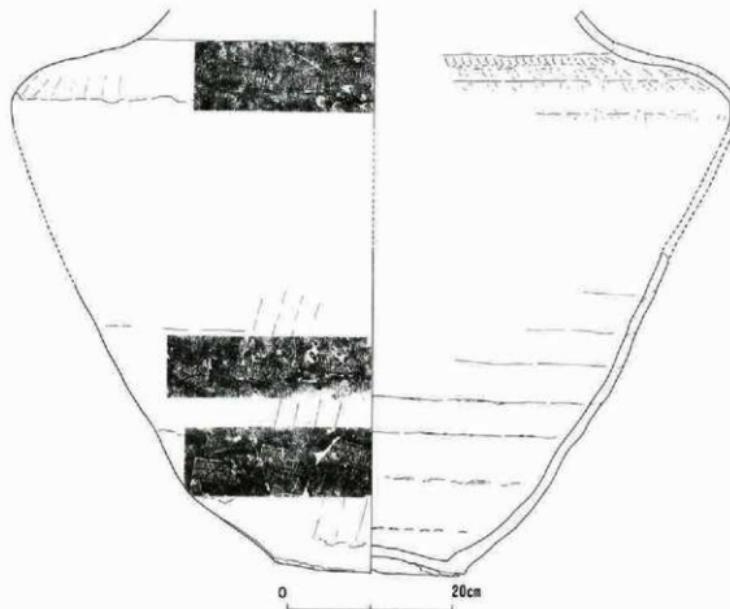
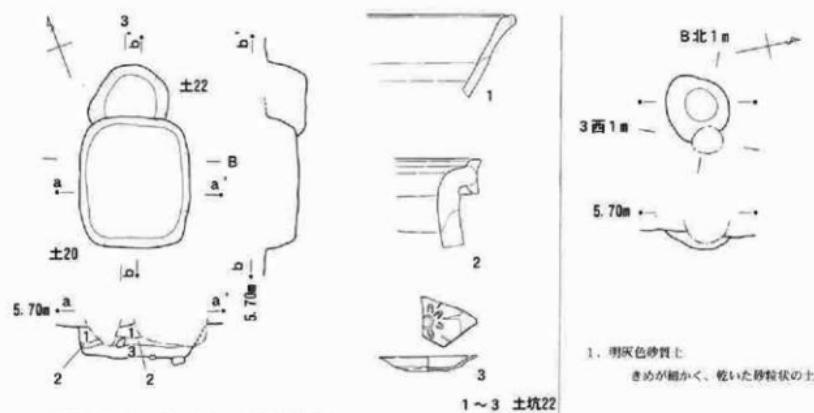


図18 挖堀2, 同出土遺物



1. 灰茶褐色砂質土 小礫状の泥岩・遺物片を少量含む。
2. 茶褐色砂質土
3. 暗褐色砂質土 岩化物を多量に含む。他、泥岩粒が混入する。

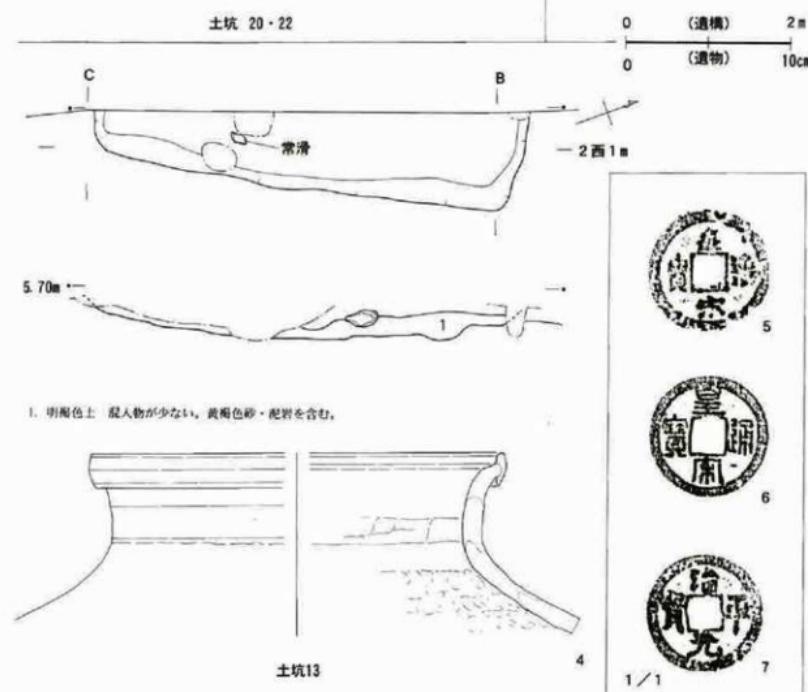
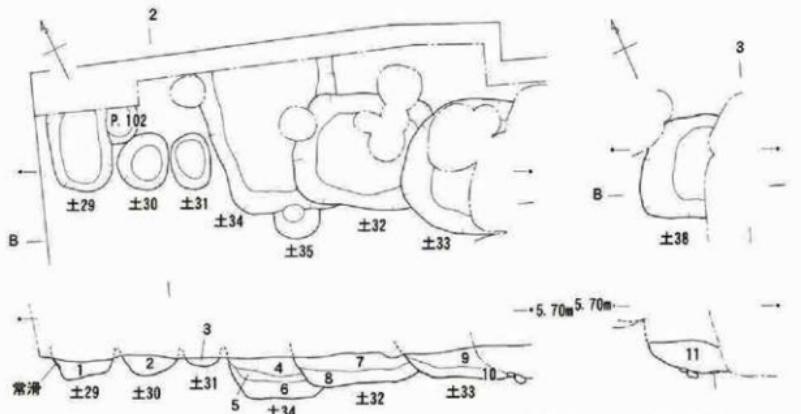


図19 土坑13・20・22・23、同出土遺物



1. 茶褐色泥質砂質土 脊岩粒・小礫・炭化物を含む。(土坑29)
 2. 茶褐色泥質質土 小塊状の脊岩を含む。(土坑30)
 3. 茶褐色粘質土 木片を含むほか、混入物少ない。(土坑31)
 4. 茶褐色泥質質土 1・2と同質。
 5. 咳茶褐色泥質質土 4よりも脊岩粒が少ない。 } (土坑34)
 6. 咳茶色粘質土 3と同質。5より軟質。
7. 咳茶褐色泥質質土 砂が凝じる。遺物片・炭化物を含む。 } (土坑32)
 8. 咳茶褐色粘質土 より多くの砂と木片を含む。
 9. 茶褐色粘質土 脊岩粒を少し含む。
 10. 茶褐色粘質土 砂が多く凝じる。やや軟質。
 炭化物・脊岩粒を含む。 } (土坑33)
 11. 茶褐色粘質土 10と同質。(土坑38)

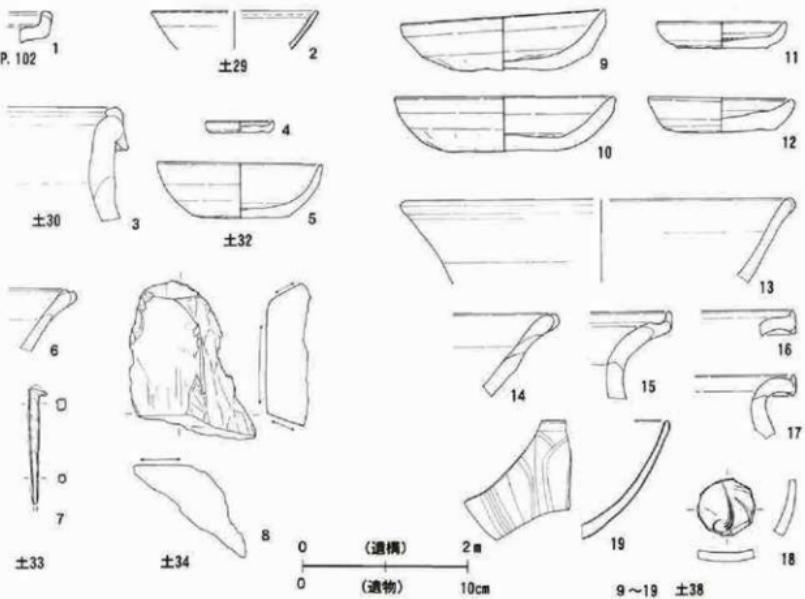


図20 P. 102・土坑29~35・38、同出土遺物

土坑29 (図20)

位置：1-A 平面形：長楕円形 断面形：逆台形 規模：長径（-）×短辺74cm×深さ22cm

主軸方位：N-20° -E 重複関係：P.101を切る 充填土：図に記載 出土遺物：白磁口はげ皿（2）

土坑30 (図20)

位置：1・2-A 平面形：円形 断面形：皿形 規模：長径69cm×短径60cm×深さ24cm

主軸方位：N-27° -E 充填土：図に記載 出土遺物：常滑甕（3）

土坑31 (図20)

位置：2-A 平面形：長円形 断面形：皿形 規模：長径68cm×短径48cm×深さ10cm

主軸方位：N-22.5° -E 充填土：図に記載

土坑32 (図20)

位置：2-A 平面形：隅丸長方形 断面形：逆台形 規模：長辺（174cm）×短辺138cm×深さ41cm 主軸方位：N-61° -W 重複関係：土坑34を切り、土坑33に切られる 充填土：図に記載

出土遺物：土師器皿R種極小型（4）・土師器皿R種中型（5）

土坑33 (図20)

位置：2-A・B 平面形：楕円形（推定） 断面形：浅鉢形 規模：南北径165cm×深さ40cm

主軸方位：N-62° -W（推定） 重複関係：土坑32を切り、土坑22・23・38に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：常滑こね鉢I類（6）・鉄釘（7）

土坑34 (図20)

位置：2-A 平面形：隅丸長方形 断面形：逆台形 規模：長辺208cm以上×短辺168cm×深さ50cm 主軸方位：N-20.5° -E 重複関係：土坑35を切り、土坑32に切られる 充填土：図に記載

出土遺物：砥石中砥（8）

土坑35 (図20)

位置：2-A・B 平面形：楕円形 断面形：逆台形 規模：東西径54cm×深さ52cm 主軸方位：不明 重複関係：土坑34に切られる 充填土：茶褐色粘質土 砂・炭化物が混じり、泥岩片を多く含む

土坑38 (図20)

位置：2-A・B 平面形：不整隅丸方形（推定） 断面形：深皿形 規模：南北辺125cm×深さ68cm

主軸方位：不明 重複関係：土坑20・22・23に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿T種大型（9・10）・同R種小型（11・12）・常滑こね鉢I類（13・14）・常滑甕（15～17）・竜泉窯青磁画花文碗転用円盤（18）・竜泉窯青磁輪連弁文碗（19）

14～17は13世紀第2四半期（ANC第5形式）で、18は13世紀前半、19は連弁の幅の広さからみて、13世紀第2四半期頃に遡行させることができよう。

P. 102出土遺物 (図20)

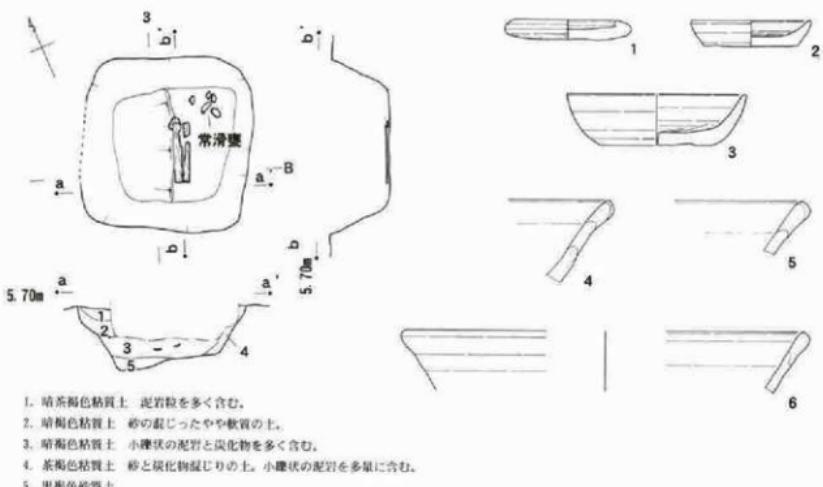
常滑甕（1）

ANC第5形式で、13世紀第2四半期頃に位置付けられる。

土坑21 (図21)

位置：2・3-A・B 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長辺212cm×短辺204cm×深さ72cm 主軸方位：N-23.5° -E 重複関係：上部を土坑20・22・38に切られ、土坑33・40を切る

充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿T種内折型（1）・同R種小型（2）・同大型（3）・常滑こね鉢I類（4～6）



土坑21



図21 土坑21・40、出土遺物

底部中央に礎板が南北に敷かれている。また本址の下にあるIV面・土坑50にも同様に礎板がある。

土坑40(図21)

位置：2・3-B 平面形：隅丸長方形 断面形：箱形 規模：長辺(212cm)×短辺(120cm)×深さ52cm 主軸方位：N-71°-W 重複関係：井戸1・据窓2・土坑20・21・38に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：常滑こね鉢II類(7)

II面遺構群のうちでは下層に属する。7はANC5ないし6a形式(13世紀第2四半期～同第3四半期)。
 土坑26(図22)

位置：1・2-B 平面形：長円形 断面形：浅い逆台形 規模：長辺(273cm)×短辺(177cm)×深さ50cm 主軸方位：N-64°-W 重複関係：土坑13に切られ、土坑27を切る 充填土：図に記

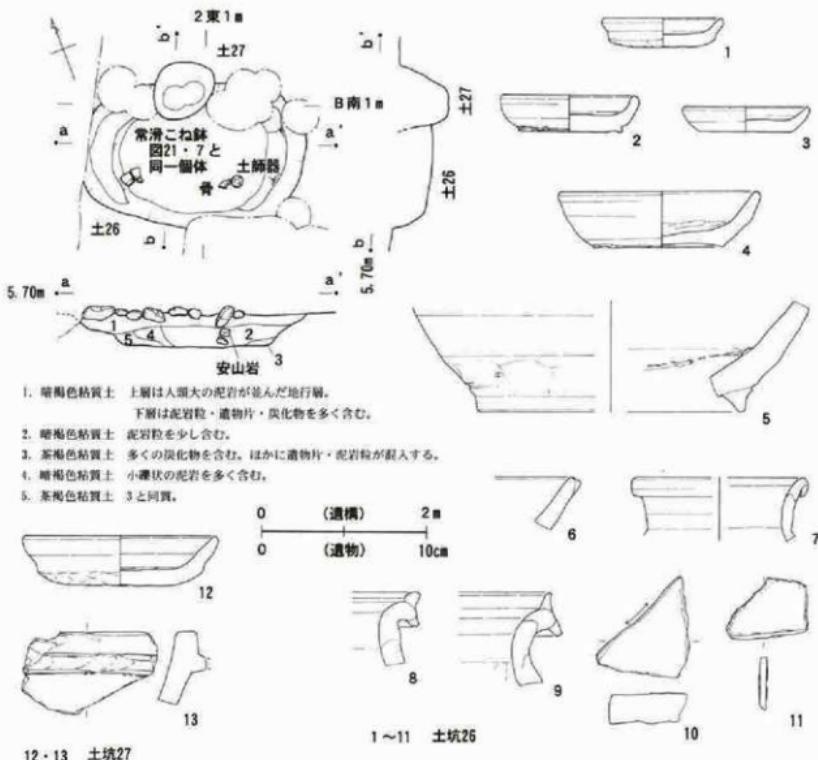


図22 土坑26・27、同出土遺物

載 出土遺物：土師器皿T種小型（1）・同R種小型（2・3）・同大型（4）・常滑こね鉢I類（5）・同II類（6）・常滑壺（7）・同甕（8・9）・磨耗陶片（10）・鉄片（11）

上部が泥岩層で固められている。II層遺構群中では層位的に上位にある。5～8はANC6aか7形式。
土坑27（図22）

位置：2-B 平面形：不整円形 断面形：逆台形 規模：長径74cm×短径70cm×深さ60cm 重複関係：土坑26に切られる 出土遺物：土師器皿T種大型（12）・滑石鍋（13）

12・13はおむね13世紀前半。

土坑6（図23）

位置：2-B, C 平面形：楕円形？ 断面形：逆台形 規模：長径(103cm)×短径(−)×深さ30cm
主軸方位：N-21°-E（推定） 重複関係：土坑18に切られる 充填土：黒褐色粘質土 炭化物を多量に含む 出土遺物：土師器皿R種小型転用とりべ（1）・同大型転用とりべ（2）・瀬戸折線鉢（3）

3はFc古瀬戸中I期で、13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられよう。

土坑9（図23）

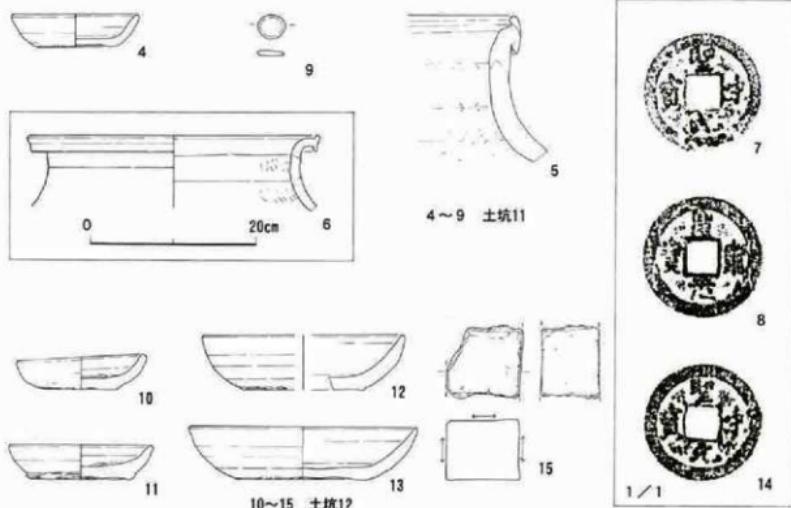
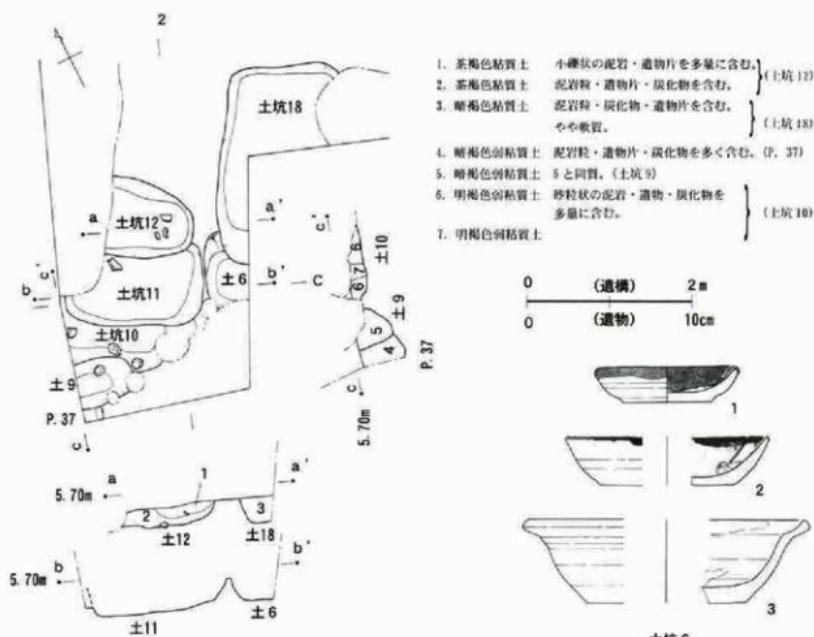


図23 土坑6・9・10・11・12・18

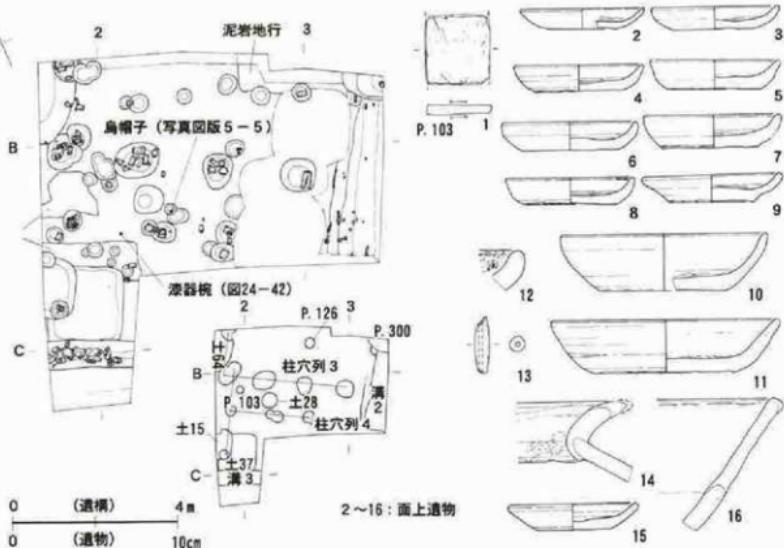


図24 Ⅲ面遺構全図、同出土遺物（1）

位置：1～C 平面形：長円形（推定） 断面形：深鉢形 規模：長径（-）×短径58cm×深さ45cm
主軸方位：N-80°-W 重複関係：土坑10・P.37を切る 充填土：図に記載

土坑10（図23）

位置：1～B・C 平面形：不明 断面形：皿形 規模：長径（-）×短径（-）×深さ23cm
主軸方位：N-64°-W（概測） 重複関係：土坑9・11・13等に切られる 充填土：図に記載

土坑11（図23）

位置：1・2～B・C 平面形：隅丸長方形 断面形：深皿形 規模：長径（168cm）×短径（110cm）
×深さ24cm 主軸方位：N-63°-W 重複関係：土坑10を切り、土坑12・13に切られる 充填土：図に記載
出土遺物：土師器皿R種小型（4）・常滑窯（5・6）・聖宋元宝（7・8）・石製碁石（9）
5・6はANC 6形式で、13世紀後半。

土坑12（図23）

位置：1・2-B 平面形：長円形（推定） 断面形：皿形 規模：長径（-）×短径96cm×深さ24cm
主軸方位：N-59°-W 重複関係：土坑11を切り、土坑13に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿R種小型（10・11）・同大型（12・13）・砥石中砥（14）・聖宋元宝（15）

10～13の在地系土器は、これまでの共伴関係からみて、13世紀後半～14世紀初頭に属しよう。

土坑18（図23）

位置：2-B 平面形：隅丸長方形 断面形：逆台形 規模：長径139cm×短径（-）×深さ32cm
主軸方位：N-30°-E 重複関係：土坑6を切る 充填土：図に記載

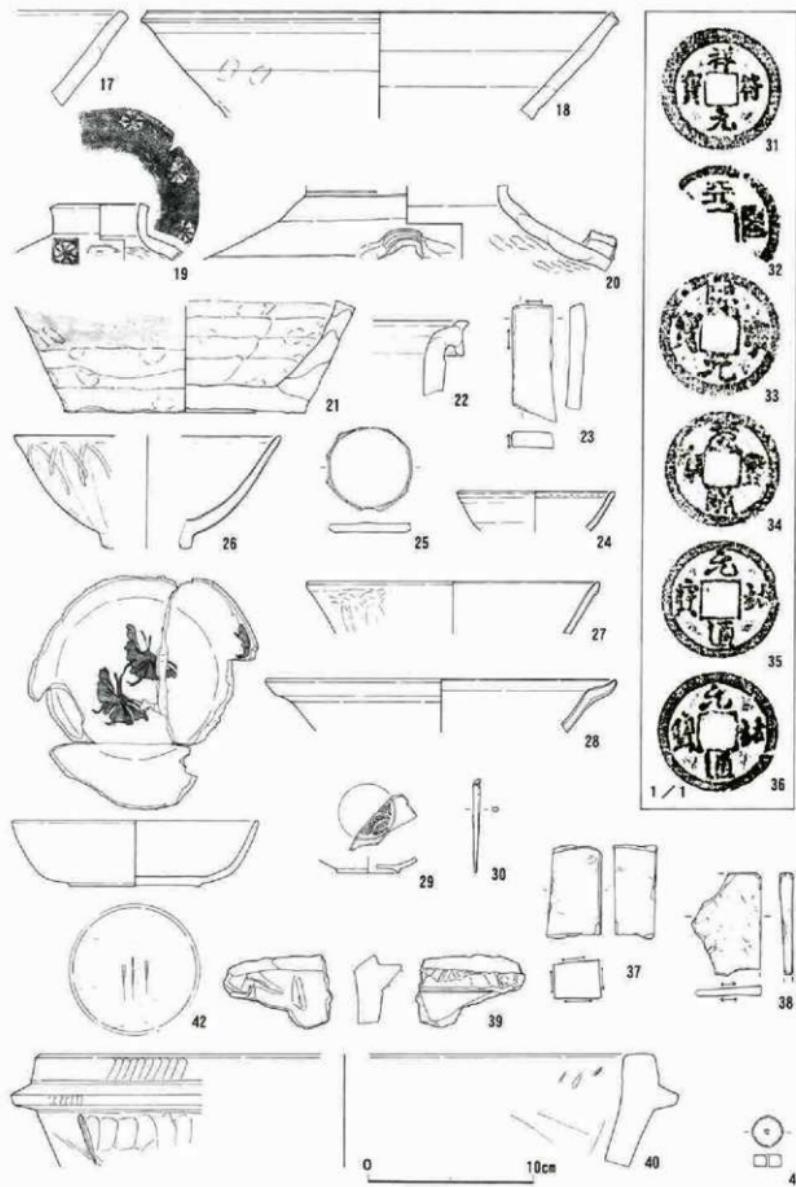


图25 三面出土遗物 (2)

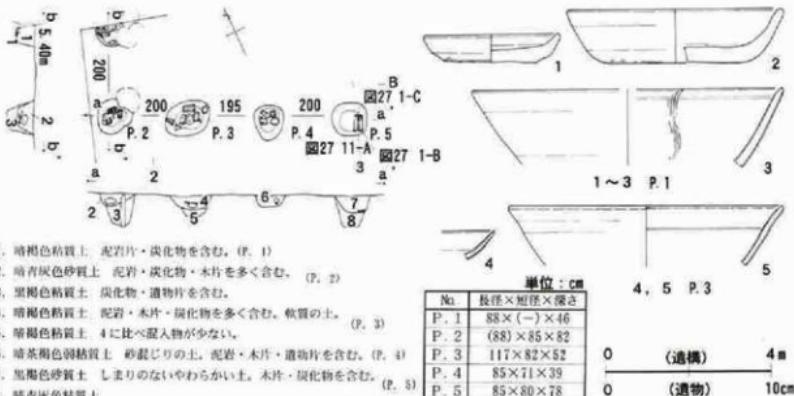


図26 柱穴列1, 同出土遺物(1)

4. III面

柱穴列2列・溝2条・土坑4基などがある。

III面遺構出土遺物 (図24)

P.103 砥石仕上砥 (1)

III面出土遺物 (図24・25)

白色系土師器皿R種小型(2)・土師器皿R種大型(3~9)・同大型(10・11)・るつぼ(12)・土錘(13)・渥美甕(14)・南部系山皿(15)・常滑こね鉢I類(16)・同こね鉢II類(17・18)・同水注(19)・同耳付蓋(20)・同甕(21・22)・磨耗陶片(23)・白磁口はげ皿(24)・同軸用円盤(25)・竜泉窯青磁鏡連弁文碗(26・27)・同折縁鉢(28)・青白磁皿(29)・鉄釘(30)・祥符元宝(31)・天聖元宝(32)・熙寧元宝(33)・元豐通宝(34)・元祐通宝(35・36)・砥石中砥(37)・同仕上砥(38)・滑石鍋(39・40)・骨製円盤(41)・漆器椀(42)

大体13世紀第2四半期~中葉にかけてのものといつてよい。

柱穴列3 (図26・27)

位置: 1~3-A・B 規模: 東西3間(平均柱間距離198cm)×南北1間(柱間距離200cm) 東西軸方位: N-63°-W 南北軸方位: N-26.5°-E 充填土: 図に記載 出土遺物: P.1 土師器皿R種小型(1)・同大型(2)・竜泉窯青磁画花文碗(3) P.2 土師器皿R種小型(6)・同T種小型(7)・滑石軸用品(8)・角柱(9) P.3 青白磁皿(4)・白磁口はげ碗(5) P.4 折敷(10)・曲物底(11)

柱根の大きさ: 21cm×10cm×(78cm)

上層構造によりいくつかの柱を失っているが、大型掘立柱建物の一部であろう。状況からみて西側の隣地に伸びることは確実である。柱穴はいずれも大型で、礎板や礎石を多数含む。土層断面から建替えがあったことがわかる。P.2には柱根が残存していた(図26-9)。建替え時に上部が切断されている。

柱穴列4 (図28)

位置: 1・2-A・B 規模: 東西2間(平均柱間距離194cm)×南北2間(平均柱間距離209cm)

南北軸方位: N-26.5°-E 充填土: P.1・2・3 暗青灰色土 泥岩粒・木片・炭化物を含む P.4

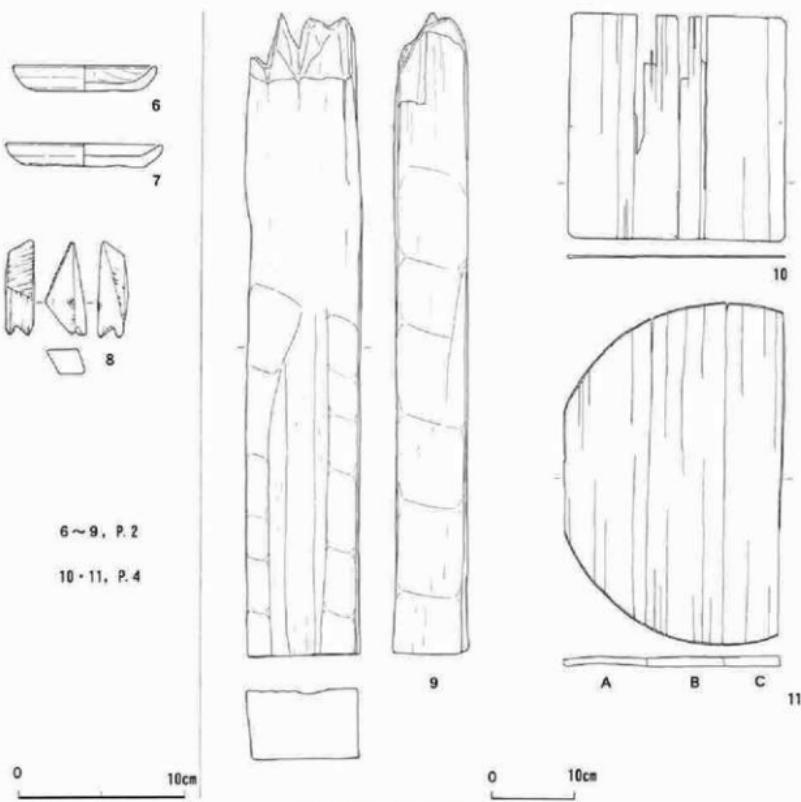


図27 柱穴列3出土遺物(2)

暗青褐色 砂混じりの土。泥岩片を含む [P.5] 茶褐色土 黄茶色砂・泥岩粒を多く含む 出土遺物：
 [P.3] 角柱(4) [P.5] 土師器皿R種小型(1)・渥美こね鉢(2)・同安窯系青磁碗(3) 柱根の大きさ:P.1 15cm×15cm×(42cm) P.2 12cm×15cm×(43cm) P.3 10cm×14cm×(49cm)
 P.5 11cm×12cm×(27cm)

いずれも柱穴内には複数の礎板が敷かれている。これも大型掘立柱建物の一部であろう。やはり西側隣地に伸びることは間違いない。搬入遺物の年代は13世紀前半を示す。

溝2 (図29)

位置：3-A・B 断面形：逆台形 規模：幅110cm以上×深さ36~58cm 主軸方位：N-25°-E 流下方向：南→北 重複関係：P.300に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・常滑窯(2)・へら状木製品(3) 東柱の大きさ：6cm×16cm×51cm

遺構上部には炭化物が部分的に厚く堆積していた。位置的には溝1(1面上)と同じで軸方位もほぼ共通していることから、地割が継承されていた可能性がある。構造は異なり、溝1のような石列は存在せず、溝沿いに側板や土留め杭(いずれも腐食が激しい)・東柱らしき柱穴も検出された。本址は北に

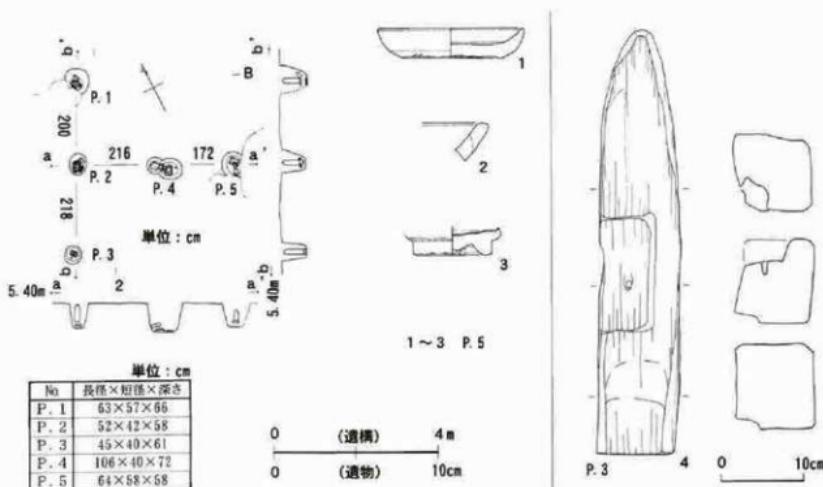


図28 柱穴列4、同出土遺物

向かって深くなっているが、逆川は反対の南側に位置しており、計測期間の短いことに起因しているのでなければ、単純に排水溝と考えるには疑問が残る。2はANC第5形式で、13世紀第2四半期ごろ。

溝3(図30)

位置：1・2-B・C 断面形：V字形 規模：幅70cm×深さ44cm 主軸方位：N-67°-W 流下方向：東→西 重複関係：土坑37を切る 充填土：図に記載

泥岩が多量につまつた東西の小溝。溝2とほぼ直交しているが、位置が離れているので関係は不明。

Ⅲ面造構群中では層位的に上位に属する。

土坑15(図30)

位置：1-B 平面形：楕円形 断面形：皿形 規模：長径148cm×短径（-）×深さ33cm 主軸方位：N-29°-E 重複関係：土坑37を切る 充填土：図に記載

Ⅲ面造構群中では層位的に上位に属する。

土坑28(図31)

位置：2-B 平面形：楕円形 断面形：すり鉢形 規模：長径72cm×短径70cm×深さ39cm 主軸方位：N-70°-W 充填土：暗褐色粘質土 出土遺物：土師器皿T種小型(1)・鉄釘(2・3)

土坑37(図30)

位置：1・2-B 平面形：方形 断面形：皿形 規模：長辺(200cm)×短辺183cm×深さ25cm 南北軸方位：N-25°-E 重複関係：溝3・土坑15に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿T種大型(1)・同R種小型(2)・南部系山茶碗(3)・常滑三筋壺(4)・童泉窯青磁錦連弁文碗(5)・充填土中には多量の泥岩と遺物が含まれ、直下に土坑41がある。搬入系遺物の年代は13世紀第2四半期(3・4)～同後半(5・6)。

土坑64(図31)

位置：1-A 平面形：不明 断面形：箱形 規模：長径(-)×短径(-)×深さ92cm 主軸方位：

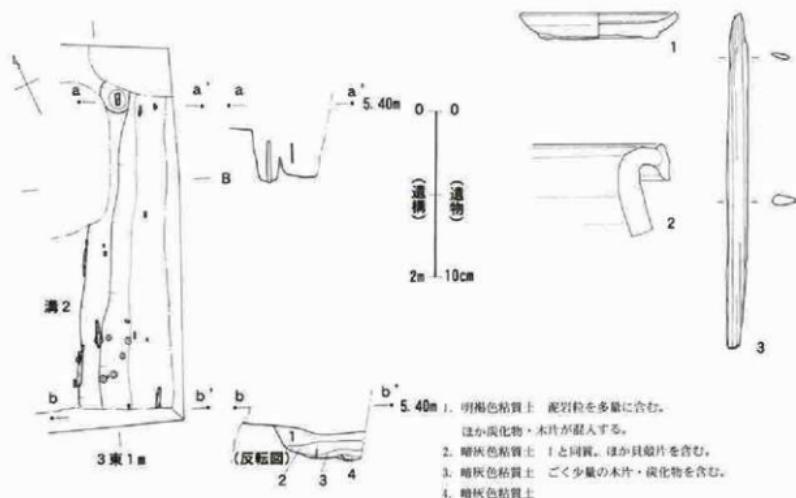


図29 溝2、同出土遺物

不明 重複関係：柱穴列1のP.1に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：曲物底（4）・箸（5）

充填土上部には地固めの泥岩地行が敷かれていた。充填土は柔弱で、馬糞を思わせる明黄褐色の繊維質土と砂層が互層を成し、最下層には明黄褐色～明灰茶褐色の繊維質腐食土が堆積していた。ウリ科の種子やウジの殻が含まれており、ごみ穴兼用の便槽である可能性がある。

5. IV面

本地点の中でもっとも多くの遺構が検出された。掘立柱建物2・柱穴列4・井戸1・土坑15・柱穴多数のほか、面上からは閉炉裏の可能性の考えられる板組みも見つかっている（図32）。

板組遺構（図32）

位置：2-B 規模：南北（32cm）×東西（35cm）×高さ（7cm） 南北軸方位：N-21.5°-E

板の頂部が4.83mで、底部は4.76mとなる。上層からの掘り込みは確認できなかった。板組みは南北方向がよく残り、東西に木片の一部が残存している。前者は桶状に湾曲して連なっている。炭などの集積はなく確定は難しいが、形態上はこれまで閉炉裏とされてきたものに似ている。

IV面柱穴出土遺物（図33）

P.180	鉄釘（1）	P.185	掛け金具（2）	P.187	刀子柄（3）	P.192	常滑こね鉢I類（4）
P.218	常滑甕（5）	P.266	曲物底（6）	P.303	不明木製品（7）		

7は紡錘車または独楽の未完成であろうか。4・5はANC第4もしくは第5形式で、13世紀前半。

IV面出土遺物（図34）

土師器皿T種小型（1～3）・同大型（4）・土師器皿R種小型（5～8）・同大型（9）・常滑こね鉢I類（10）・涅美甕（11）・常滑片口碗（12）・同甕（13～16）・竜泉窯青磁鏡連弁文碗（17・18）・青白磁皿（19）・鉄釘（20～22）・開元通宝（23）・硯（24）・獸骨（25）・木製扇骨（26・27）・不明木製品（28）・板草履（29）・箸（30）

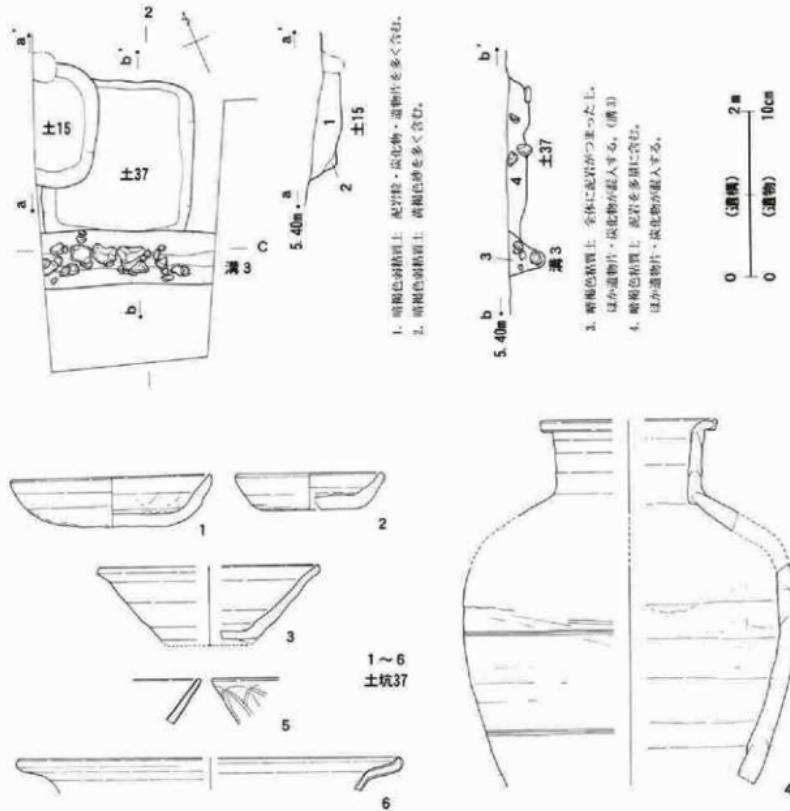


図30 溝3・土坑15・37. 同出土遺物

搬入品のなかでも常滑はANC第4ないし第5形式ばかりで、13世紀前半が主体であることを示す。17・18に13世紀後半の要素を見出せるが、同第2四期後半（1240年代）にまで遡行させることは可能で、だとするととさほどの齟齬はない。24は精円窓で、石材はやや紫味を帯びた暗茶褐色を呈する。厚さはもっとも薄いところで1.7cm、縁は2mm弱と低く、背面には浅い穹窿形に刃りが入り、使用痕をとどめる。山口県赤間の硯司・堀尾信夫氏（重要無形文化財保持者）によれば、このような制作技法・形状・石材は国産品ではなく、中国産の可能性が高いが、端渢硯の特徴は乏しいという。

建物1（図35）

位置：1～3－A～C 横幅：東西最大3間（平均柱間距離215cm）×南北最大3間（平均柱間距離217cm） 面積：11.03m²（現況） 南北軸方位：N-27°-E 充填土：P.1 暗青褐色土 砂混じりの土 [P.2・7] 黒褐色粘質土 泥岩片・木片・砂を多く含む [P.3・4・5] 暗褐色粘質土 混入物が少ない [P.6・10] 暗青褐色粘質土泥岩片を含む [P.8] 暗褐色粘質土 少量の砂・茶色粘土塊・

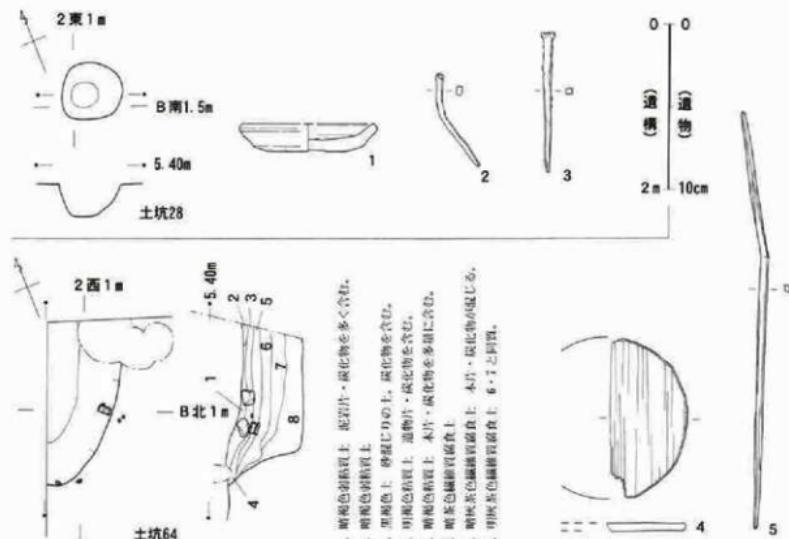


図31 土坑28・64、同出土遺物

木片を含む ※P.9 不明

出土遺物 : [P.4] 童泉窯青磁画花文碗 (1) [P.6] 連歛下駄 (2) [P.9] 磨 (3)

層位的にはIV面でも古い部類に入る。

建物2 (図36)

位置 : 1 ~ 3 - A・B 規模 : 東西最大3間 (平均柱間距離202cm) × 南北最大2間 (平均柱間距離205cm) 面積 : 8.28m² (現況) 南北軸方位 : N-26°-E 充填土 : [P.2] 暗褐色粘質土 混入物少ない [P.3] 繊維質腐食土 [P.5・7・9] 暗青褐色粘質土泥岩塊を含む [P.6] 暗青褐色土 砂が混じる ※[P.4] 不明

調査区外に延びる。検出高が4.9mで、土層観察から層位的にIV面でも上位にあると確認された。

建物3 (図36)

位置 : 2・3-A・B 規模 : 東西1間 (平均柱間距離203cm) × 南北2間 (平均柱間距離197cm) 面積 : 7.99m² (現況) 南北軸方位 : N-29°-E 充填土 : [P.1・2] 暗褐色粘質土 砂・茶色粘土塊・木片を含む [P.4] 黒褐色粘質土 炭化物を多く含む [P.5] 青褐色砂質土 混入物が少ない ※[P.3] 不明

層位的には建物2よりもさらに上位にある。これも調査区外に拡がることは確実である。

柱穴列5 (図36)

位置 : 1~3-B・C 規模 : 東西3間 (平均柱間距離202cm) × 南北2間 (平均柱間距離203cm) 東西軸方位 : N-64.5°-W 南北軸方位 : N-24°-E 充填土 : [P.1・2] 暗青褐色粘質土 砂を含む、ほか混入物が少ない [P.3・6] 暗青褐色粘質土粘性強、泥岩片を含む [P.4] 暗青灰色砂質土

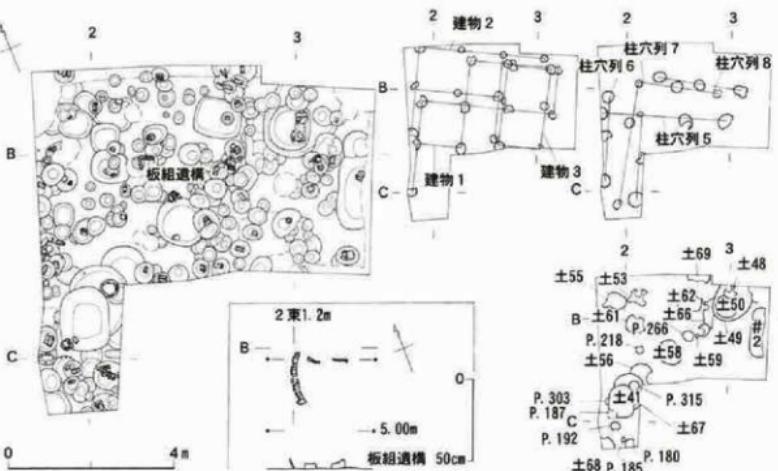


図32 IV面遺構全図

混入物が見あたらない ※P.5 不明 出土遺物 : P.1 土製品 (1)・土師器皿T種 (2)・白磁碗 (3) 遺存柱根の大きさ : P.4 12cm×13cm×(35cm) P.6 9cm×17cm×(51cm)

柱穴はいずれも大きく、掘立柱建物の一部であろう。調査区外に延びることは確実である。P.4・6には柱の一部が残っていた。IV面遺構中では層位的に上位にある。

柱穴列6 (図36)

位置 : 1-B・C 規模 : 南北2間 (平均柱間距離203cm) 南北軸方位 : N-23.5°-E 充填土 : P.1 茶褐色粘質土と黄茶色砂の混合土 P.2・3 暗灰色粘質土木片・炭化物・繊維質土を含む 層位的にはIV面遺構の中で下位にある。

柱穴列7 (図37)

位置 : 1~3-A~C 規模 : 東西2間 (平均柱間距離 194cm) 南北(3)間 (平均柱間距離 199cm) 南北軸方位 : N-30°-E 東西軸方位 : N-60.5°-W 充填土 : P.2・4・5 暗青褐色粘質土 砂を含む、ほか混入物が少ない P.3 茶褐色粘質土と黄茶色砂の混土 ※P.1 不明 出土遺物 : P.2 土師器皿R種大型 (1)

柱穴列8 (図37)

位置 : 2・3-A・B 規模 : 東西2間 (平均柱間距離205cm) 東西軸方位 : N-60°-W 充填土 : P.1 暗青褐色粘質土 砂を含む、ほか混入物が少ない P.2 暗青褐色粘質土 粘性強、泥岩片を含む P.3 暗褐色粘質土 多くの泥岩片・炭化物・遺物片を含む 遺存柱根の大きさ : P.1 16cm×19cm×40cm P.2 10cm×16cm×74cm P.3 14cm×14cm×58cm 出土遺物 : 柱根 (2・3) 各々の柱は多角形状に形成されているという共通点を持つが、具体的な加工状況や材質についてはかなりの相違がある。柱上部は海拔約4.7mの高さで切断されている。

井戸2 (図38)

位置 : 3-A・B 平面形 : 四角形 断面形 : 箱形 規模 : 南北辺240cm×東西(-)×深さ80cm

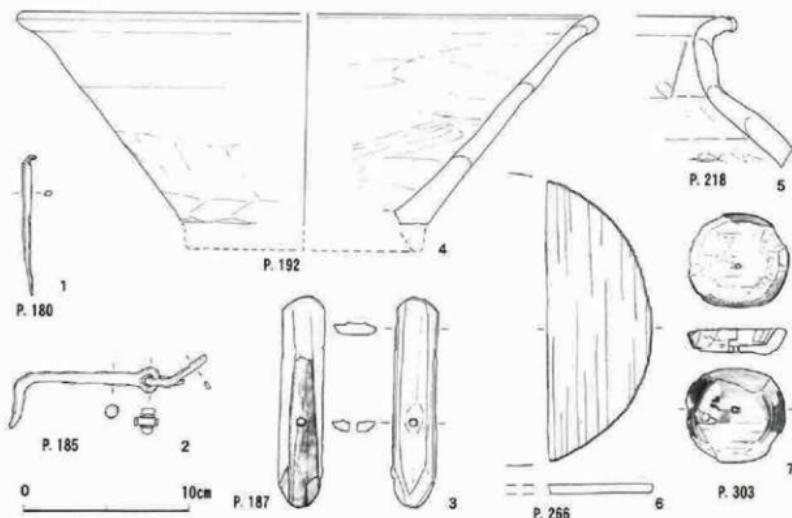


図33 IV面柱穴出土遺物

南北軸方位：N-23.5°-E 充填土：図に記載 出土遺物：渥美甕（1）・ヘラ状木製品（2）・不明木製品（3）

Ⅲ面溝2の下からみつかったため、埋土上部がえぐられている（土層図参照）。実際の掘り込み面は検出高より上層に存在していたと推測できる。下層部は馬糞のような纖維質腐食土で占められる。北側の土坑状の張出しが同一の造構かどうか判断しかねたが、裏込めのための掘り込みの可能性もある。

土坑41（図40）

位置：1・2-B 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長辺157cm×短辺120cm×深さ52cm 主軸方位：N-21.5°-E 重複関係：土坑67を切る 充填土：図に記載

土坑37（Ⅲ面）の下に検出した。37と本址との間には薄い炭化物の層が形成されていた。

土坑48（図39）

位置：2・3-A 平面形：楕円形 断面形：皿形 規模：長径63cm×短径56cm×深さ18cm 主軸方位：N-51°-E 重複関係：土坑49・建物2-P.4に切られ、土坑50を切る 充填土：図に記載

土坑49（図39）

位置：2・3-A 平面形：楕円形 断面形：皿形 規模：長径（-）×短径172cm×深さ32cm 主軸方位：N-46.5°-E 重複関係：土坑48・50・建物1-P.3・建物2-P.4・建物3-P.2を切る 充填土：図に記載 出土遺物：木製しゃもじ（1）・曲物底（2）

明確な上端は検出できなかったが楕円形状に纖維質腐植土が堆積していた。IV面遺構群のなかでは層位的に上位にある。

土坑50（図39）

位置：2・3-A 平面形：楕円形 断面形：逆台形 規模：長径（110cm）×短径101cm×深さ58cm 主軸方位：N-31°-E 重複関係：土坑49・土坑48に切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土

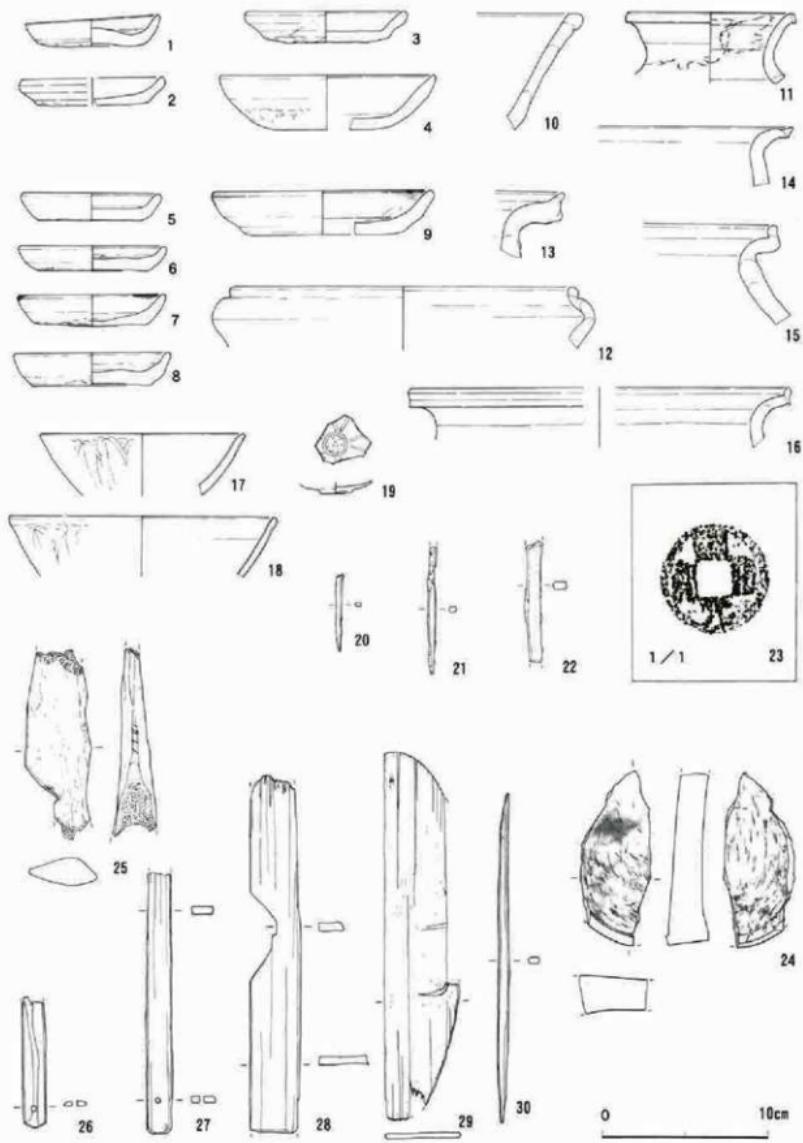


图34 IV面出土遗物

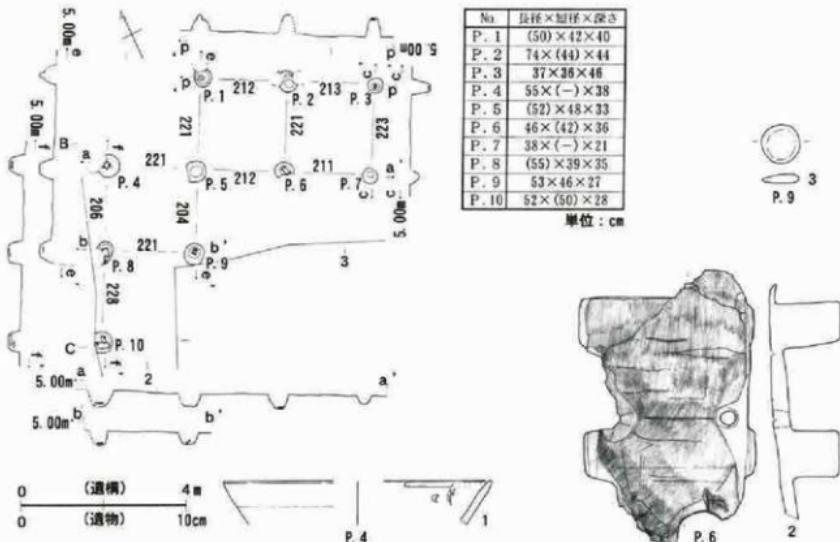


図35 建物1、同出土遺物

師器皿T種大型(3)・礎板(4)

多数の礎石(泥岩質)と礎板(一番大きなもので41cm×25cm×3cm)を含む。IV面造構群のなかでも層位的に最下層の遺構と推測され、平安時代末～鎌倉時代初期にしばしば発見される大型柱穴列の一部である可能性がある。

土坑53(図38)

位置: 2-A 平面形: 不整椭円 断面形: 盒形 規模: 長径(約100cm)×短径82cm×深さ13cm
主軸方位: N-57°-W 重複関係: 周辺遺構に切られる 充填土: 暗青褐色粘質土 砂を含む、混入物少ない 出土遺物: 鉄釘(4)・刀子(5)

土坑53を含め2-Bより北東に群集する土坑は、共通して掘り込みが浅い。

土坑55(図38)

位置: 1-A 平面形: 円形 断面形: 深皿形 規模: 長径(120cm)×短径82cm×深さ28cm 主軸方位: 不明 充填土: 暗青褐色粘質土 粘性強、泥岩片を含む 出土遺物: 土師器皿T種大型(6)
北側にもうひとつの椭円形土坑が連なる(55')

土坑56(図40)

位置: 2-B 平面形: 椭円形 断面形: 逆台形 規模: 長径(-)×短径(106cm)×深さ41cm
主軸方位: N-20°-E 重複関係: 建物1-P.9・土坑67に切られる 充填土: 図に記載 出土遺物: 木製鳥形(3)

土坑18(II面)の下に検出した。3は翼をもたない鳥形であろう。

土坑58(図40)

位置: 2-B 平面形: 椭円形 断面形: 箱形 規模: 長径(118cm)×短径115cm×深さ35cm

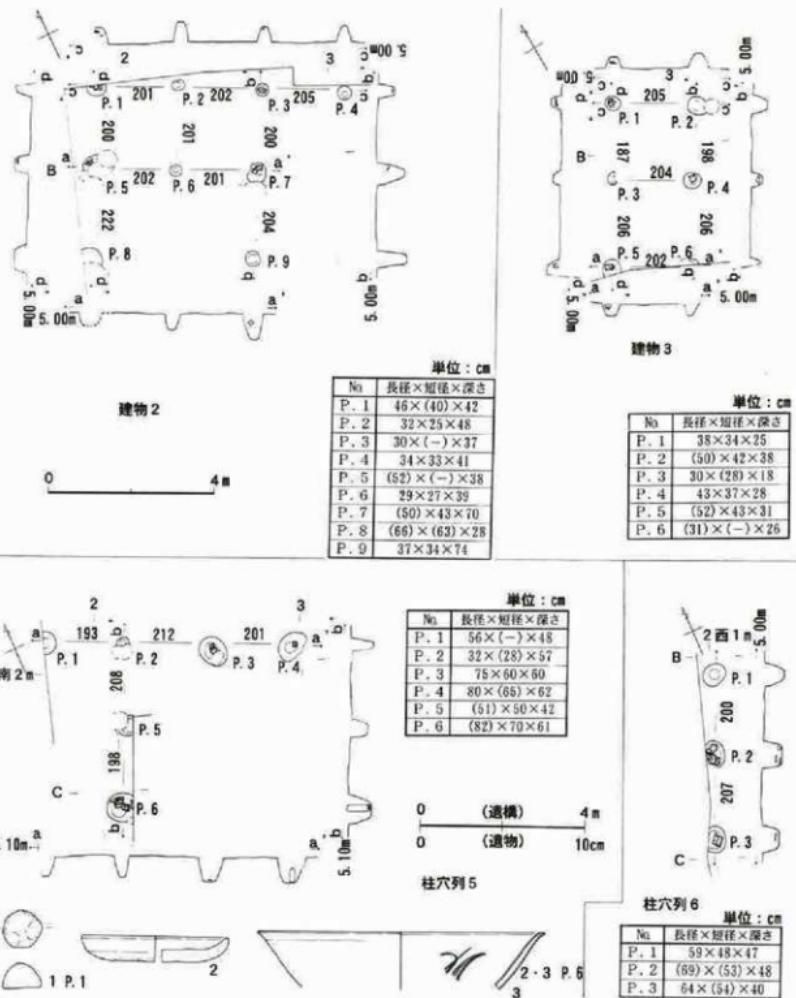


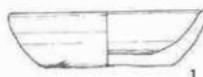
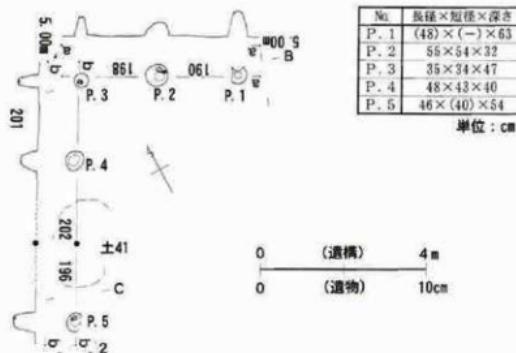
図35 建物 2・3, 柱穴 5・6, 同出土遺物

主軸方位: N-58° -W 重複関係: 柱穴列 1-P.3などに切られる 充填土: 図に記載 出土遺物: 土錐(1)・鉄釘(2)

ほかの土坑と違い多量の貝殻片が含まれていた。IV面遺構のなかでは層位的に下位にある。底部からアワビ出土。

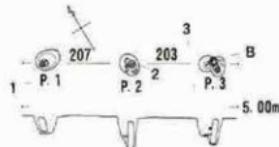
土坑61 (図41)

位置: 2-A・B 平面形: 楕円形 断面形: U字形 規模: 長径 (97cm) × 短径 80cm × 深さ 62cm



柱穴列 7

P. 2

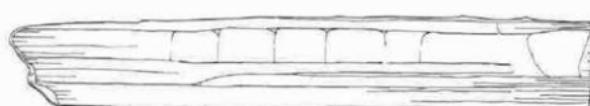


P. 1



2

単位 : cm	
No.	長径×短径×深さ
P. 1	60 × 48 × 40
P. 2	57 × 44 × 50
P. 3	54 × 40 × 58



3

柱穴列 8

図37 柱穴列 7・8、同出土遺物

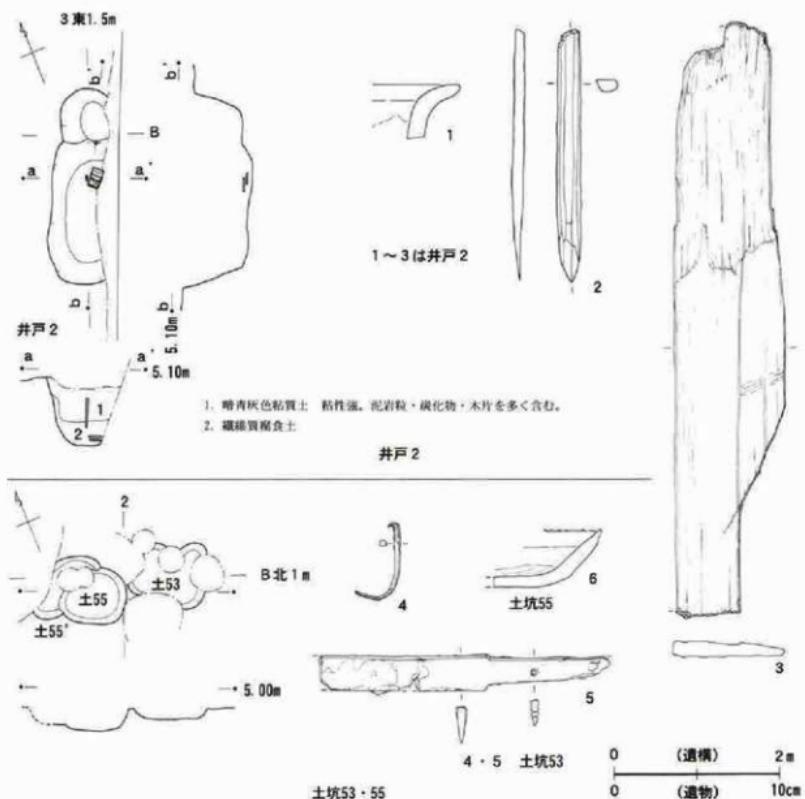


図38 井戸2・土坑53・土坑55、同出土遺物

主軸方位：N-67.5°-W 重複関係：柱穴などに切られる 充填土：図に記載 出土遺物：土師器皿

T種大型（1）・骨製兜飾り（2）・箸状木製品（3）

土坑62（図41）

位置：2-A 平面形：方形 断面形：箱形 規模：長辺114cm×短辺95cm×深さ48cm

主軸方位：N-58°-W 重複関係：柱穴に切られる 充填土：図に記載

上部を土坑32（Ⅱ面）にかなり削り取られている。

土坑65（図40）

位置：2-A 平面形：梢円形（推定） 断面形：逆台形？ 規模：長径（-）×短径（-）×深さ23cm

主軸方位：不明 重複関係：建物1-P.2・土坑49・66などに切られる 充填土：図に記載

土坑66（図40）

位置：2-A・B 平面形：長円形（推定） 断面形：浅鉢形 規模：長径（114cm）×短径（-）×深さ34cm 主軸方位：N-20°-E 重複関係：柱穴列3-P.1・土坑49・59などに切られ、土坑

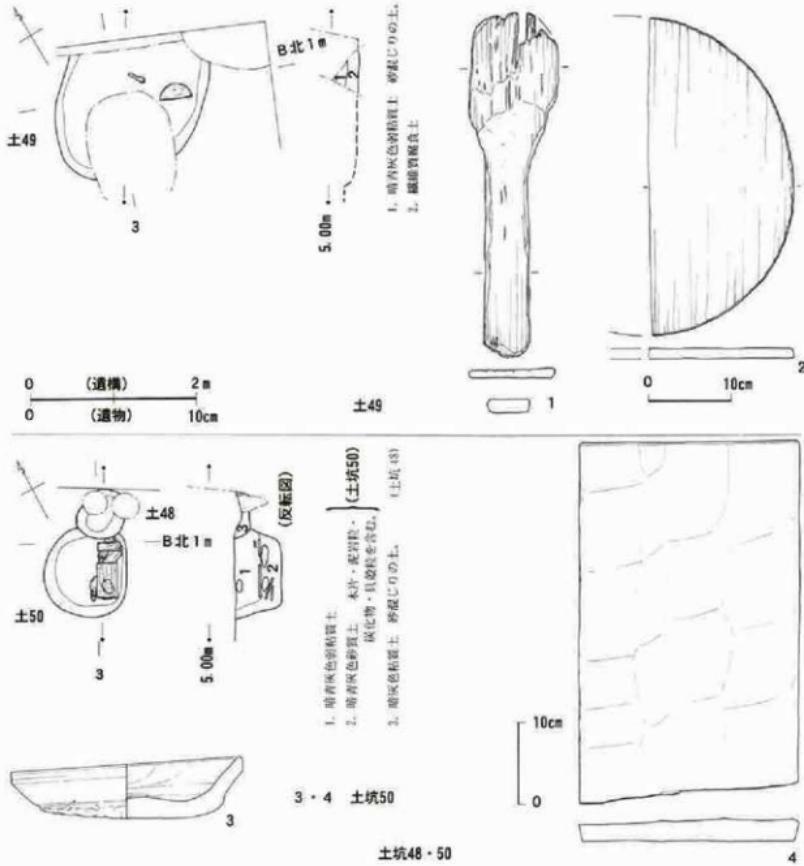


図39 土坑48・49・50、同出土遺物

65を切る 充填土：図に記載

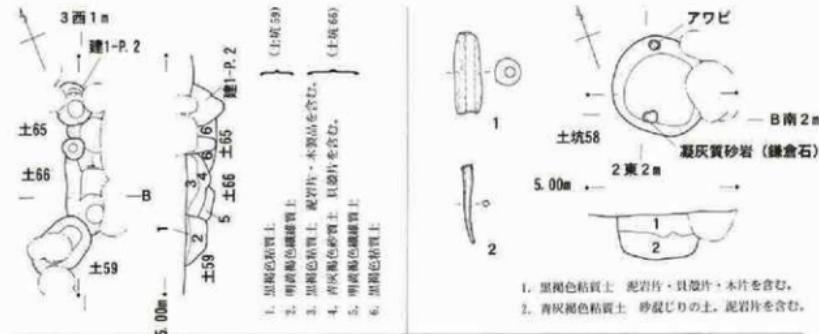
土坑57（図40）

位置：1・2-B 平面形：梢円形 断面形：逆台形 規模：長径（178cm）×短径（140cm）×深さ22cm 主軸方位：N-20°-E 重複関係：土坑56を切り、土坑41に切られる 充填土：暗青灰色砂質土 混入物が少ない 出土遺物：曲物（図40遺構図面のみ）

土坑56と同じく土坑18（Ⅱ面）の下に検出。底部東寄りに直径30cm程度（推計）の曲物が径45cm×深さ約21cmの浅い穴（P.315）に据えられていた。曲物は復元不可能な状態であった。

土坑68（図40）

位置：1-C 平面形：円形（推定） 断面形：逆台形 規模：長径（-）×短径（-）×深さ42cm 主軸方位：不明 重複関係：柱穴に切られる 充填土：図に記載



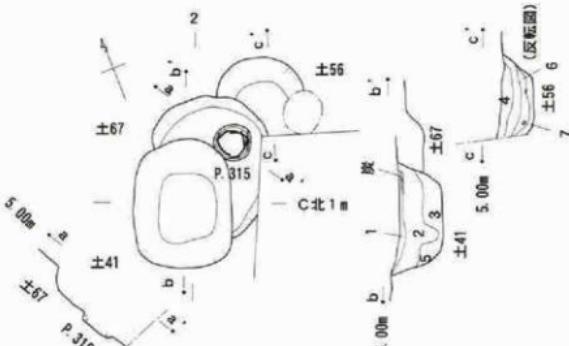
1. 黒褐色粘質土 貝殻片・木質片を含む。
2. 青灰褐色粘質土

土坑58 2東2m

凝灰質砂岩(錐合石)



1. 黒褐色粘質土 貝殻片・木質片を含む。
2. 青灰褐色粘質土

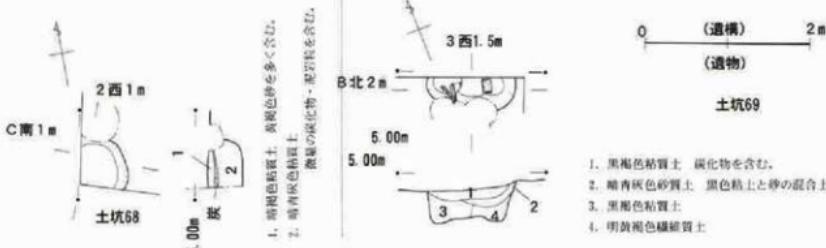
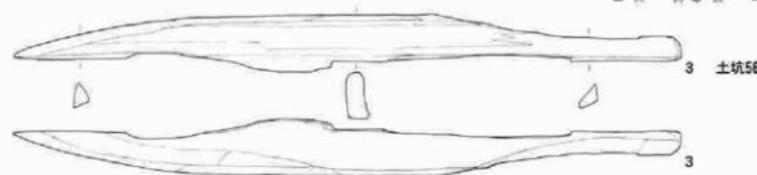


1. 黒茶褐色粘質土
2. 青灰褐色粘質土
3. 多量の木片・貝殻片・炭化物を含む
4. 黒褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土
6. 黑褐色粘質土
7. 青灰褐色粘質土

(反訳図) (上坑 41)

1. 黒茶褐色粘質土
2. 青灰褐色粘質土
3. 多量の木片・貝殻片・炭化物を含む
4. 黒褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土
6. 黑褐色粘質土
7. 青灰褐色粘質土

(上坑 56)

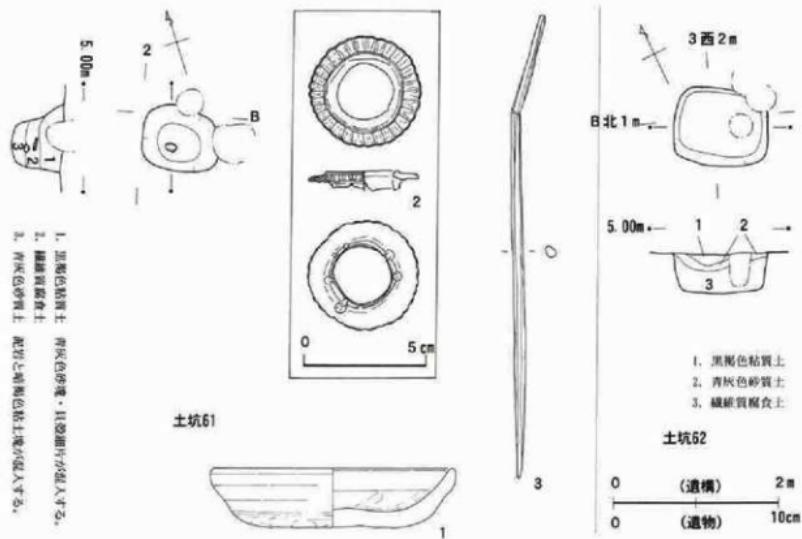


1. 黒褐色粘質土 炭化物を含む。
2. 青灰褐色砂質土 黒色粘土と砂の混合土
3. 黑褐色粘質土
4. 明黃褐色粘質土

0 (遺構)
2m (遺物)

土坑69

図40 土坑41・56・58・65～69、同出土遺物



IV面造構群のなかでは層位的に下位に属する。堆積土中に炭化物の層が1層ある。

土坑69（図41）

位置：2-A 平面形：楕円形（推定） 断面形：箱形 規模：長径109cm×短径（-）×深さ42cm
主軸方位：N-64°-W（推定） 重複関係：建物2-P.3などに切られる 充填土：図に記載

6. 採集遺物

壁際の深掘りからの採集品や表探遺物のうち、おもなものを図示する。13世紀代を中心とした遺物が採集されている。磨耗陶片が多いことが注目されよう。

深掘り溝Ⅱ面相当層採集遺物（図42）

白磁口はげ皿（1）・硯（2）

深掘り溝Ⅲ・Ⅳ面相当層採集遺物（図42）

土師器皿R種大型（3）・刀子（4）

深掘り溝一括採集遺物（図42）

土師器皿R種大型（5）・常滑窯（6）・磨耗陶片（7～10）・竜泉窯青磁香炉（11）・不明木製品（12）
表探品（図42）

北部系山茶碗（13）・南部系山茶碗（14）・常滑窯（15）・磨耗陶片（16）・瀬戸合子蓋（17）・元祐通宝（18・19）・滑石鏡板用品（20）・不明骨製品（21）

（鍛冶屋／馬淵一補綴）

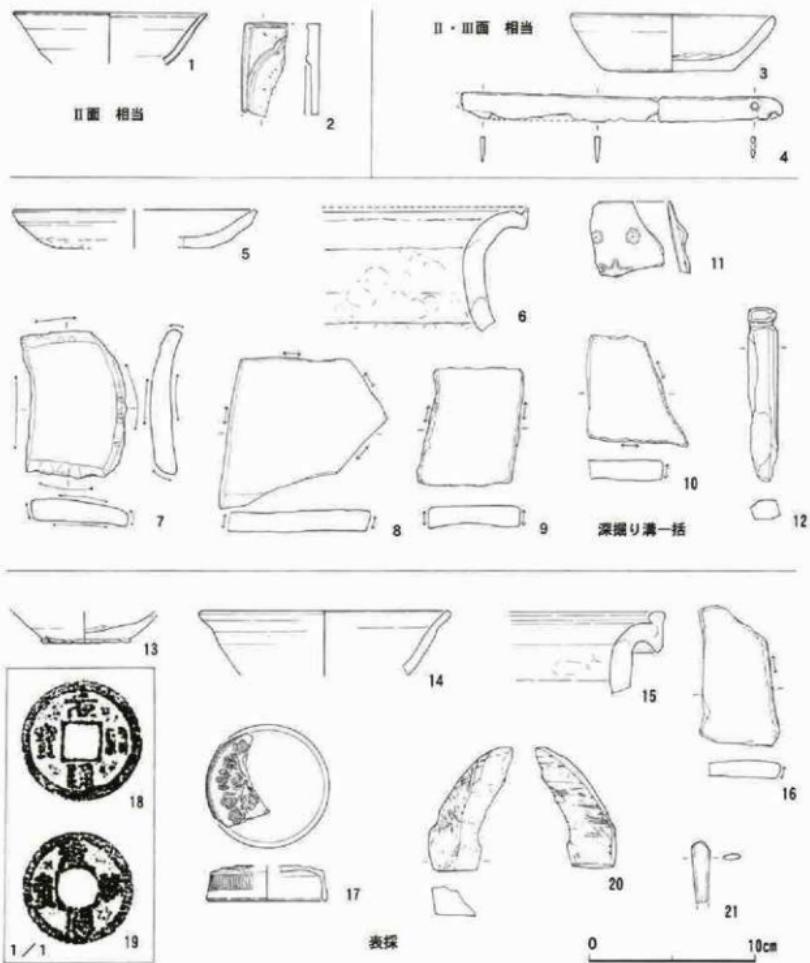


図42 採集遺物

番号		種別	大きさ	せいいけい	素地・胎土	その他特徴など
調査区 土層断面	1	土師器皿 R種 小型	口径8.7cm 底径6.6cm 器高1.6cm	右回転ロクロ	底部系切り 内底部ナデ	胎土は黄灰色で黒雲母・白色針状物質を含む
	2	T種 小型	口径8.2cm 底径2.5cm 器高1.8cm	手づくね後内底部ロ線部ナデ	内底部に同心円状のナデ	胎土は赤褐色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
	3	南部系 山茶碗	口径15.8cm 底径8.0cm 器高5.3cm	右回転ロクロ	底部系切り 付高台に粉體痕 内底部指捺ナデ	胎土は灰白色で長石の吹き出しあり 内面に剥離高台付着 尾張型
	4	常滑	口縁部片 輪積み成形	外表面は茶褐色 内表面は褐色	胎土は灰色で非常に粘性強い 降灰あり	
	5	土師器皿 R種 大型	口径13.5cm 底径6.4cm 器高3.3cm	底部系切り	外底部板状压痕 内底部ナデ	胎土は赤褐色で白色針状物質を含む
	6	T種 大型	口径12.1cm 手づくね後内底部ロ線部ナデ			胎土は暗褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む

表1 調査区土層断面出土遺物概観表

I 面上層	1	土師器皿 R種 大型	口径10.8cm 底径6.7cm 器高3.1cm	右回転ロクロ	底部系切り 内底部ナデ	胎土は褐色で砂粒・黒雲母・白色針状物質を含む 機成良好
	2	北部系 山茶碗	口縁部片	ロクロ成形		胎土は黄褐色でキメ細かい 降灰あり 東濃型
	3	常滑	口縁部片	輪積みロクロ成形	口縁部ナデ	胎土は灰白色で砂粒・黒雲母・白色粒子を含む 焼成甘い
	4	こね鉢 I類	口縁部片	輪積みロクロ成形	口縁部ナデ	胎土は暗灰色で長石・白色粒子・礫片を含む
	5	常滑	口縁部片	輪積み成形	口縁部ナデ	胎土は暗灰色で長石・礫片を含む
	6	こね鉢 II類	口縁部片	輪積み成形	口縁部ナデ	胎土は暗灰色で長石・礫片を含む
	7	常滑	口縁部片	輪積み成形	口縁部ナデ	胎土は暗灰色で長石・礫片を含む
	8	常滑	口縁部片	輪積み成形	口縁部ナデ	胎土は暗灰色で長石・石英を含む 降灰あり
	9	備前 すり鉢	口縁部片	輪積み成形	内面に7条の崩れ、本末に7条か	胎土は暗灰色から暗褐色 胎土は黄褐色 施成不良のため瓦質になっている
	10	土師器皿 転用品	上部器皿R種の底部を加工	右回転ロクロ	底部系切り 内底部ナデ	胎土は赤褐色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成普通
	11	磨耗陶片	常滑薄破片を使用	輪積み成形		胎土は茶褐色 胎土は灰色で黒雲母・長石を含む
	12	砥石 仕上げ瓶	底径5.75cm 厚さ0.9cm	側面に切り出し痕		底径5.75cm 厚さ0.9cm 側面に切り出し痕

表2 I面上層出土遺物観察表

I 中層	1	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.6cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ	胎土は赤褐色で砂粒・黒雲母・白色粒子を含む 焼成良好
	2	土師器皿 R種 小型	口径7.9cm 底径5.0cm 器高2.0cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ	胎土は灰茶色で砂粒・黒雲母・白色針状物質を含む
	3	常滑	口径12.6cm 輪積み成形			胎土は暗褐色で長石を含む 気泡あり 降灰あり
	4	龜泉窯青磁 輪窓外文瓶	底径5.8cm ロクロ成形 削り出高台 外面に片切削の彫刻弁文 製作 内底面に画花文			胎土は灰白色でキメ細かい 製作は灰緑色で透明 外底部露胎

表3 溝1出土遺物観察表

掘 1	1	常滑 甕	底径21.2cm 輪積み成形	外表面タテヘラナデ及び押印文	内面ヨコナデ	
			外表面は暗褐色で内表面は灰褐色	胎土は灰褐色で長石・小石を含む		

表4 掘1出土遺物観察表

P. 53	1	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.5cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ	胎土は灰茶色で黒雲母・白色針状物質・白色粒子を含む 焼成普通
P. 15	2	瓦器鉢	口縁部片 輪積み成形	内外面ともにヨコナデ		胎土は赤褐色で白色針状物質・白色粒子・砂粒を含む 焼成良好
P. 69	3	磨耗陶片	これ鉢 I類の底部を使用	底径14.8cm 輪積みロクロ成形	外面下位回転ヘラ削り 付高台	胎土は灰色で石英・白色粒子・黑色粒子を含む 養付と割れ口に使用痕
	4	磨耗陶片	常滑もしくは壺破片を使用	3条の沈線		外表面は淡褐色で自然釉・墨クソ付着 内表面は灰褐色 胎土は灰色

表5 I面下層遺構出土遺物(1)

	番号	種別	大きさ	せいりい	素地・胎土	その他特徴など
P. I 18	國10 5	磁 石 中 瓷	残長7.0cm 幅5.2cm 厚さ2.1cm 灰緑色 上野? 瓷面2面			
P. I 18	6	皇宋通寶	初鉄1038年 北宋 宋書			
土壤 3	7	元祐通寶	初鉄1086年 北宋 行書			

表6 I面下層遺構出土遺物(2)

泥岩地 帯	図11 1	瓦 磁 火 鉢	口縁部片 輪積み成形 内面及び口縁部コナデ 胎土は淡灰褐色で黒雲母・赤色粒子を含む 燃成良好
	2	北部系 山茶碗	口径(14.0cm) ロクロ成形 口縁部シメナデ 胎土は灰白色でキメ細かい 若干の降灰あり
	3	常滑 こね鉢 I種	口縁部片 輪積みロクロ成形 口縁部ナデ 胎土は灰白色で砂粒・長石・白色粒子・繊片を含む
	4	瓢箪鉢 折枝鉢	口縁部片 輪積み成形後ロクロ成形 淡緑色の灰釉ハケ塗り 胎土は灰白色で細かい
	5	瓶 おろし皿	口縁部片 ロクロ成形 黄緑色の灰釉を厚くハケ塗り 胎土は黄白色
	6	電気窯青磁 画花文皿	底部片 底径(3.3cm) ロクロ成形 内面画花文 裏地は灰白色 軸裏は淡灰緑色で不透明 外底部が黒く変色
	7	土師器皿 R種 小型	口径6.4cm 底径3.6cm 高さ2.0cm 右開口ロクロ 底部あ切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 口縁部油煤付着 燃成良好
	8	土師器皿 R種 小型	口径6.5cm 底径3.4cm 高さ2.0cm 右回転ロクロ 底部あ切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色粒子・赤色粒子を含む 燃成良好
	9	土師器皿 R種 大型転用とりべ	右回転ロクロ 底部あ切り 外底部板状圧痕 胎土は灰茶色 被熱部は灰黒色 熱によりゆがみ亀裂が入る 鉛錆、緑青及び赤い溶けた金属が付着
	10	常滑 こね鉢 I種	口縁部片 輪積みロクロ成形 口縁部ナデ 胎土は灰白色で白色粒子を含む 内面に降灰
炭層	11	常滑 こね鉢 I種	口縁部片 輪積みロクロ成形 口縁部ナデ 胎土は灰白色で繊片を含む 降灰あり
	12	常滑 こね鉢 II種	口縁部片 輪積み成形 外表面及び胎土は淡褐色で長石・小石を含む 内表面は灰褐色 内面に磨耗して小石が剥落
	13	常滑 こね鉢 II種	口径29.9cm 輪積み成形 内面指頭痕 外表面は褐色 胎土は暗褐色で長石・石英を含む 降灰あり
	14	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面及び胎土は灰褐色で長石・石英を含む 降灰あり
	15	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は淡褐色 胎土は灰色で長石を含む 降灰大量にかかる
	16	磨耗陶片	常滑磨破片を使用 外表面には自然釉 内表面及び胎土は灰色で繊片を含む 2辺が磨耗
	17	磨耗陶片	常滑磨破片を使用 内外面とも降灰がかかる 外表面は暗褐色 内表面は淡赤褐色 胎土は灰色 2辺および内面が磨耗
	18	磨耗陶片	常滑磨破片を使用 外面押印 外表面は茶褐色 内表面は淡灰褐色 胎土は灰色で長石・黒雲母・黑色粒子を含む 2辺および内面磨耗
	19	磨耗陶片	常滑磨破片を使用 外表面は茶褐色 内表面は淡灰褐色 胎土は灰色で長石・小石を含む 3辺および内外面とも磨耗
	20	磨耗陶片	常滑磨破片を使用 外面へナラ内面ヨコナデ 外表面は暗褐色 内表面は灰褐色 胎土は灰色で長石を含む 4辺磨耗
	21	鉄釘	残長5.0cm 幅0.35cm 厚さ0.45cm 重量2.4g
	22	鉄釘	残長7.0cm 幅0.56cm 厚さ0.3cm 重量4.6g
	23	船釘	残長6.35cm 幅0.55cm 厚さ10cm 重量17.2g 鉄
	24	掛け金具	長さ6.5cm 幅0.5cm 厚さ1.0cm 重量8.5g 鉄 棒状のものを折り曲げている
	25	淳化元寶	初鉄990年 北宋 行書
	26	皇宋通寶	初鉄1038年 北宋 宋書
	27	皇宋通寶	初鉄1086年 北宋 真書

表7 I面下層出土遺物観察表(1)

	番号	種別	大きさ	せいいかい	素地・胎土	その他特徴など
庚 層	図11 28	チャート 火打石	長さ3.05cm 幅2.55cm 厚さ1.2cm	暗赤褐色	右辺・左辺に使用痕集中	
	29	灰骨	長さ9.3cm 幅1.7cm 厚さ1.1cm	刃物による切り傷有り	原因は不明	
	30	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.7cm 高さ1.5cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ	
I面下層 層面 面上	31	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径5.5cm 高さ1.7cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ	
	32	常滑 こね鉢 II類	口径(32.7cm) 輪縁み成形	外表面は淡褐色 内表面は褐色	胎土は灰色で長石を含む	
	33	緑釉 洗	口径部片	口縁は玉縁状	胎土は淡灰色 緑釉は緑で不透明	
	34	竜泉窯青磁 輪連弁文鏡	口径(12.4cm)	ロクロ成形 片切り彫りの輪連弁文	複数 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 緑釉は青緑色で半透明 気泡を含む	

表8 I面下層出土遺物観察表(2)

柱穴1	図12 土師器皿 R種 横小型	口径(5.5cm) 底径(4.6cm) 高さ0.7cm	右回転ロクロ	底部系切り	内底部1回ナデ
柱穴2	開元通寶	初鉄621年 唐 真書	あるいは	初鉄960年 南唐 真書	

表9 I面下層柱穴列1・2出土遺物

土 坑 14	1	土師器皿 R種 横小型	口径7.1cm 底径5.2cm 高さ1.5cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ	
	2	常滑 こね鉢 II類	口径部片	輪縁み成形	外表面はラナダ	
	3	磨耗陶片	器表面は暗褐色	胎土は暗灰色で長石・石英を含む		
土 坑 15	4	磨耗陶片	常滑磨破片を使用	胎土は褐色	胎土は暗灰色で長石・石英を含む 内面に降灰 2辺および外表面磨耗	
	5	竜泉窯青磁 無文鉢	常滑磨破片を使用	胎土は褐色	胎土は暗灰色で長石・石英を含む 2辺および内面磨耗	
	6	至道元寶	底径(10.8cm)	ロクロ成形	素地は灰色 軸製は灰緑色で不透明 高台置付處胎	
土 坑 16	7	磨耗陶片	常滑磨破片を使用	外表面は暗褐色 内表面は褐色	胎土は暗灰色で長石を含む	
	8	土師器皿 R種 小型	口径8.0cm 底径5.0cm 高さ1.5cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ	
土 坑 17	9	土師器皿 R種 小型	口径8.0cm 底径5.3cm 高さ1.7cm	右回転ロクロ	底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ	
	10	漸戸 折疊鉢	口径部片	ロクロ成形 漆緑色の灰輪ハケ塗り	胎土は黄白色	

表10 土坑14・16・17出土遺物観察表

P. 37	1	建業 天目茶碗	口径(9.7cm)	外面下笠へラ耐	
	2	元祐通寶	初鉄1086年 北宋 行書		
P. 39	3	竜泉窯青磁 輪連弁文鏡	口径(15.5cm)	外面に片切り彫りの輪連弁文	複弁
	4	開元通寶	初鉄621年 唐 真書	あるいは	初鉄960年 南唐 真書
P. 41	5	景祐元寶	初鉄1004年 北宋 真書		
	6	天聖元寶	初鉄1023年 北宋 真書		
	7	元豐通寶	初鉄1078年 北宋 行書		
	8	元豐通寶	初鉄1079年 北宋 行書		
	9	政和通寶	初鉄1111年 北宋 分冊		

表11 II面遺構出土遺物観察表(I)

	番号	種別	大きさ	せいけい	産地・出土	その他の特徴など
P. 42	15 10	土師器皿 R種 小型	口径(7.8cm) 底径5.0cm 器高1.9cm	右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で砂粒・白色針状物質を含む 燐成良好		
	11	土師器皿 R種 小型	口径(6.6cm) 底径(4.2cm) 器高2.0cm	右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 燐成良好		
	12	るっぽ	口径(10.3cm)	内面～口縁部外側にかけて歯溝が密着 全体が高温にあり、暗褐色を呈す		
	13	祥符通寶	切銘1009年 北宋 真書			
P. 61	14	土師器皿 R種 小型	口径(8.0cm) 底径(4.9cm) 器高1.95cm	右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む 燐成良好		
P. 90	15	常滑 二ね鉢 I類	口縁部片	輪積みロクロ形 内面ナデ 胎土は灰色で長石・砂粒・繩を含む		
P. 96	16	竜泉窯青磁 輪花碗	口径(12.0cm)	ロクロ形 外面に片切切りの輪積文 单丸 口縁部折り返し 素地は灰白色で黒色・白色微粒子を含む 色釉は青緑色で半透明 気泡を含む		

表12 II面選出出土遺物観察表(2)

II 面 面上	16 1	土師器皿 R種 小型	口径8.4cm 底径5.9cm 器高1.8cm	右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・黑色粒子を含む 燐成良好		
	2	土師器皿 R種 中型	口径10.2cm 底径5.6cm 器高3.7cm	右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・黑色粒子を含む 燐成良好		
	3	土師器皿 R種 大型	口径11.75cm 底径7.8cm 器高3.5cm	右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む 燐成良好		
	4	東達系 山茶碗	底径(6.6cm)	ロクロ形 富高台 外底部ナデ 内底面を除く内面に降灰 器表面は茶褐色 胎土は灰～灰褐色でキメ細かい		
	5	南朝系 山茶碗	底径7.2cm	右回転ロクロ 富高台に粉體痕 内底部指頭ナデ 胎土は灰褐色で長石・小石を含む 内面磨耗 尾張型		
	6	常滑 甕	口縁部片	輪積み成形 器表面は輪積 片口縁部 粉體痕 胎土は灰色でキメは粗と細かい		
	7	常滑 甕	口縁部片	輪積み成形 器表面は輪積 片口縁部 粉體痕 胎土は灰色で白色粒子を含む 内面一部磨耗		
	8	磨耗陶片	口縁部片	常滑燒桐部の破片を使用 外面ナデ 器表面は褐色 胎土は暗灰色 2辺と外面が磨耗		
	9	既中 石瓶	長さ(7.3cm) 幅7.0cm 厚さ6.0cm 灰白色に赤い斑点 天草 須田四面			

表13 II面上出土遺物観察表

井戸 1	17 1	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径5.8cm 器高1.55cm	右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・小石・繩片を含む 燐成良好		
	2	土師器皿 R種 小型	口径7.6cm 底径(5.4cm) 器高1.8cm	右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で砂粒・黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む 燐成普通		
	3	土師器皿 R種 小型	口径(8.2cm) 底径(6.6cm) 器高1.2cm	右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色粒子・繩片を含む 口縁部スリット付 燐成良好		
	4	常滑 こね鉢 I類	輪積みロクロ成形			
	5	常滑 甕	口径(4.0cm) 輪積み成形			
	6	磨耗陶片	外表面は滑 瓦表面は赤褐色	常滑燒桐部の破片を使用 外面ナデ 内面指頭痕 器表面は褐色 胎土は灰褐色で長石・石英・小石を含む 1辺磨耗		
	7	磨耗陶片	常滑破片を使用			
	8	竜泉窯青磁 無文碗	器表面は滑			
	9	竜泉窯青磁 輪花碗	器表面は滑	器表面は滑 胎土は灰褐色で長石を含む 2辺磨耗		
	10	鉄釘	長さ8.2cm 幅0.6cm 厚さ0.7cm 重量1.7g 銛			

表14 井戸I出土遺物観察表

掘 壁 2	18 1	常滑 甕	底径23.2cm 輪積み成形 内面押印文 内面指頭痕とナデ 器表面は暗灰褐色 胎土は灰色で長石・小石を含む 内面に降灰あり 外底部窓ク付着痕			
	2	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径4.8cm 器高1.2cm	右回転ロクロ 底部系切り 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・白色粒子を含む 燐成良好		

表15 据壠2出土遺物(2)

	番号	種別	大きさ	せいせい	素地・胎土	その他特徴など
摘要 2	3	常滑 片口碗	口縁部片	器表面は灰白色	胎土は灰白色で長石を含む	降灰あり
	4	常滑 こね鉢Ⅱ類	口径(29.2cm)	輪積み成形	付高台	胎土は暗青灰色で長石を含む 燃成不良

表16 摘要2出土遺物(2)

土坑 22	1	図19 常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石を含む			
	2	常滑 甕	口縁部片 器表面は暗褐色 胎土は灰褐色で長石・石英を含む 降灰あり			
	3	青白磁 皿	口径(5.9cm) 底径2.1cm 器高0.9cm 型入れ 素地は白色 磁漬は青白色で透明 外底部露胎			
	4	常滑 甕	口径(27.8cm) 輪積み成形 表面は褐色 胎土は灰色で長石を含む 長石の吹き出しあり 土12に同一個体あり 自然釉			
土坑 13	5	皇宋通寶	初鑄1038年 北宋 真書			
	6	皇宋通寶	初鑄1038年 北宋 真書			
	7	治平元寶	初鑄1064年 北宋 真書			

表17 土坑20・22・13出土遺物

P. 102	1	図20 常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 外表面は褐色 内表面は灰白色 胎土は灰色で長石・石英を含む			
	2	白磁 口はげ皿	口径(10.2cm) ロクロ成形 口縁部輪面取り 素地は白色 磁漬は透明			
土坑 30	3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は褐色 胎土は灰色で長石・石英を含む 降灰あり			
	4	土師器皿 R種 極小型	口径(4.0cm) 底径3.5cm 器高0.7cm 右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・赤色粒子を含む 燃成良好			
土坑 32	5	土師器皿 R種 中型	口径10.0cm 底径5.3cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む 燃成良好			
	6	常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石を含む			
土坑 33	7	鉄釘	残長7.25cm 幅0.45cm 厚さ0.6cm 重量11.45g 鉄			
	8	砥石 中砥	残長9.6cm 残幅7.7cm 残厚5.6cm 白色に黒い斑 草木灰底面と共に暗灰色の砥素			
土坑 34	9	土師器皿 T種 大型	口径12.4cm 底径6.5cm 高さ3.3cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 外底部に擦れた痕 胎土は淡茶褐色で白色針状物質・石英・泥岩粒・赤色粒子を含む 燃成良好 完形			
	10	土師器皿 T種 大型	口径13.2cm 底径6.4cm 高さ3.3cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 外底部に擦れた痕 胎土は淡茶褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 泥岩粒少量含む			
土坑 38	11	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.6cm 高さ1.65cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 燃成良好			
	12	土師器皿 R種 小型	口径8.65cm 底径6.3cm 高さ2.1cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は茶褐色で黒雲母・石英を含む 内面に石が移動したあと 燃成普通			
土坑 38	13	常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(23.3cm) 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石を含む 外面・内面に降灰 口縁部に降灰			
	14	常滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗青色で長石を含む 内面に煤付着			
常滑 甕	15	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は褐色 胎土は灰色で長石・石英を含む 内面に降灰			
	16	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 外表面は褐色 内表面は暗褐色 胎土は暗灰色で長石・石英を含む 自然釉			
常滑 甕	17	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は褐色 胎土は灰色で長石を含む			
	18	竈具窯青磁 圓花文碗	内面圓花文 素地は灰色 輪脚は灰緑色で透明 円盤状に加工したか			
竈具窯青磁 窯井文碗	19	竈具窯青磁 窯井文碗	口縁部片 ロクロ成形 外面に片切り彫りの輪脚弁文 復弁			

表18 P.102、土坑29・30・32～34・38出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいせい	素地・胎土	その他特徴など
土坑 21	土 師 器 盆 T種 内折型	口径6.3cm 底径3.3cm 器高1.2cm	手づくね後口縁部内底部ナデ	胎土は暗褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む	焼成良好
	土 師 器 盆 R種 小型	口径7.2cm 底径(5.8cm) 器高1.6cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質・石英・泥岩粒・赤色粒子を含む 焼成良好
	土 師 器 盆 R種 大型	口径(10.8cm) 底径(6.6cm) 器高3.1cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質・石英・赤色粒子を含む 焼成良好
	常 滑	輪積みロクロ成形			
	こね鉢 I類	胎土は灰色で長石・礫片を含む			
	こね鉢 II類	輪積みロクロ成形			
土坑 40	常 滑	口径(24.4cm)	輪積みロクロ成形		
	こね鉢 I類	胎土は灰色で長石・石英を含む	口径部に自然釉		
土坑 40	常 滑	口径(30.1cm)	輪積みロクロ成形	胎土は褐色で長石・石英を含む	口縁部に自然釉
	こね鉢 II類	器径16.2cm 器高10.9cm	輪積み成形	胎土は褐色で長石・石英・小石を含む	外面は磨き面で裏面は磨き難が著しい 内面に隕灰

表19 土坑21・40出土遺物観察表

土坑 26	土 師 鋼 盆 T種 小型	口径7.2cm 底径3.5cm 器高1.8cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	土 師 鋼 盆 R種 小型	口径(8.0cm) 底径6.0cm 器高2.26cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 外面に指痕痕 焼成良好
	土 師 鋼 盆 R種 小型	口径7.45cm 底径5.6cm	器高1.5cm 右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好
	土 師 器 盆 R種 大型	口径12.0cm 底径7.5cm 器高3.4cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好
	常 滑	底部片 底径(15.8cm)	輪積みロクロ成形	外面下位回転ヘラ削り 付高台	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好
	こね鉢 I類	器表面は淡褐色 胎土は灰色で長石を含む			胎と同様の焼成
土坑 27	常 滑	口縁片 輪積み成形			
	こね鉢 II類	器表面は暗褐色 胎土は暗褐色で長石・礫片を含む			
	常 滑	輪積み片 輪積み成形			
	常 滑	器表面は暗褐色 胎土は暗褐色で長石を含む			
	常 滑	輪積み片 輪積み成形			
	常 滑	表面は暗褐色 胎土は暗褐色で長石を含む	波紋		
土坑 27	磨耗破片	口縁部片 輪積み成形			
	常 滑	表面は暗褐色 胎土は暗褐色で長石を含む			
	常 滑	口縁部片 輪積み成形			
	常 滑	表面は暗褐色 胎土は暗褐色で長石を含む			
土坑 27	磨耗破片	口縁(4.95cm) 幅(3.6cm) 厚さ0.4cm	重量30.05g	火打ち金?	
	铁 片	長さ(4.95cm)			
	土 師 器 盆 T種 大型	口径(11.6cm) 底径6.4cm 器高3.0cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
土坑 11	土 師 器 盆 R種 小型転用とりべ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む			
	上部器皿 R種 大型転用とりべ	口径(12.2cm) 底径(8.0cm) 器高2.95cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 烧によりがみ亀裂が入る 内面に綠青付着 黒く変色し硬化
	蓋 戸 折 鉢	口径(16.8cm) 底径(9.4cm) 器高5.1cm	底部系切り	灰釉をつけがけ	胎土は黄色色で外底部躍動
	土 師 器 盆 R種 小型	口径7.6cm 底径4.6cm 器高2.0cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕 内底部ナデ	胎土は褐色で黒雲母・黑色・赤色粒子を含む 焼成良好
	常 滑	輪積み片 輪積み成形			
	常 滑	口縁部片 輪積み成形			
	聖 宋 元 寶	初跡1101年 北宋 行書			
	聖 宋 元 寶	初跡1101年 北宋 筆書			
	石 製 基 石	長さ1.7cm 幅1.5cm 厚さ0.3cm			

表20 土坑26・27出土遺物観察表

土坑 6	図23 土師器皿 R種 小型転用とりべ	口径(8.2cm) 底径(5.35cm) 器高2.1cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕	
	上部器皿 R種 大型転用とりべ	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 内面全体に転津及び綠青付着 烧により硬化			
	蓋 戸 折 鉢	口径(12.2cm) 底径(8.0cm) 器高2.95cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕	胎土は褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 烧によりがみ亀裂が入る 内面に綠青付着 黒く変色し硬化
土坑 11	土 師 器 盆 R種 小型	口径(12.2cm) 底径(8.0cm) 器高2.95cm	右回転ロクロ 底部系切り	外底部板状圧痕	
	常 滑	輪積み片 輪積み成形			
	常 滑	口縁部片 輪積み成形			
	聖 宋 元 寶	初跡1101年 北宋 行書			
	聖 宋 元 寶	初跡1101年 北宋 筆書			
	石 製 基 石	長さ1.7cm 幅1.5cm 厚さ0.3cm			
		川原石を使用 暗青灰色 潜耗の原因が自然か人工かは不明			

表21 土坑6・11・12出土遺物観察表(1)

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・胎土	その他特徴など
土 坑 12	土 師 器 盆 R 種 小 型	口径7.6cm 底径4.5cm 器高1.9cm	右回転ロクロ 底部糸切り	外底部板状压痕 内底部ナデ	
	胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・白色・赤色粒子を含む 焼成普通				
	土 師 器 盆 R 種 小 型	口径8.6cm 底径6.0cm 器高2.1cm	右回転ロクロ 底部糸切り	外底部板状压痕 内底部ナデ	
	胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・黑色粒子を含む 焼成良好				
	土 師 器 盆 R 種 大 型	口径12.1cm 底径7.4cm 器高3.4cm	右回転ロクロ 底部糸切り	外底部板状压痕 内底部ナデ	
	胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・黑色粒子を含む 焼成良好				
	土 師 器 盆 R 種 大 型	口径13.7cm 底径8.0cm 器高3.2cm	右回転ロクロ 底部糸切り		
	胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好				
	砥 石 中 砥	赤白色に白いしま 天草	砥面は1もしくは2面	砥面は黒ずむ	
	型 宋 元 實	初跡1101年 北宋 行書			

表22 土坑6・11・12出土遺物観察表(2)

P. 103	図24 磐 石 1 仕上げ 砥	長さ(4.3cm) 幅3.9cm 厚さ0.6cm 赤色に白い筋 喚凧(奥歴か) 砥面は2面			
	2 白色系土器皿 R 種 小 型	口径7.5cm 底径4.0cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 外底部糸切り 内底部ナデ 器表面は肌色 胎土は灰黒色で精良 口縁部油煤付着 焼成良好			
	3 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径7.6cm 底径4.9cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は赤褐色で白色針状物質・白色・赤色粒子・塵片を含む 焼成普通			
	4 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径7.6cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む			
	5 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径7.7cm 底径5.7cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・黑色粒子を含む 焼成普通			
	6 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
	7 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径8.1cm 底径5.8cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
	8 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 口縁部油煤付着 焼成良好			
	9 土 師 器 盆 R 種 小 型	口径8.3cm 底径5.2cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
	10 土 師 器 盆 R 種 大 型	口径12.4cm 底径7.7cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
	11 土 師 器 盆 R 種 大 型	口径13.8cm 底径8.5cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好 口縁部黒く変色			
	12 るつぼ	外表面は灰白色 内表面は褐色 胎土は暗灰色でもろい つくりが粗雑			
	13 土 緊	長さ3.5cm 幅0.9cm 厚さ0.95cm 手づくね 側面に指痕痕 胎土は赤灰色			
	14 雪 美 兜	口縁部片 口縁部欠損 輪積み成形 灰釉を薄くハケ塗り 器表面は黒褐色 胎土は灰色 外面に降灰			
	15 南 部 系 山 盆	口径(8.0cm) 底径4.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部指顔ナデ 胎土は灰色で長石を含む 内面磨耗			
	16 常 清 滑 こね鉢 I 種	口縁部片 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石・礫片を含む			
	17 常 清 滑 こね鉢 II 種	口縁部片 輪積み成形 成形 外面タテ・ラナデ 器表面は褐色 胎土は灰色で黒雲母・長石・白色粒子を含む 口縁部から内面にかけて陥沢			
	18 常 清 滑 こね鉢 II 種	口径(28.6cm) 輪積み成形 外表面は暗褐色 胎土は灰褐色で長石・石英を含む 内面一部麻耗			
	19 常 清 滑 水 注	口径6.6cm 輪積み成形 器表面は褐色 胎土は灰色で長石・石英を含む 菜花押印紋を6つ確認 7つ目は?			
	20 常 清 滑 耳 付 爪	肩部片 輪積み成形 耳貼り付け 耳には櫛状工具による3条の沈線 器表面は褐色 胎土は灰黒色で長石・石英を含む 自然釉			
	21 常 清 滑 變	底部片 輪積み成形 器表面、胎土共に暗褐色で石英を含む 外面に火をつけた痕			
	22 常 清 滑 變	口縁部片 輪積み成形 器表面は褐色 胎土は灰色で白色・赤色粒子を含む 口縁部に降灰			
	23 磨耗 開 片	常清II類・こね鉢ログ片を使用 外面にタテ・ラナデ 器表面・胎土ともに灰褐色で長石を含む			
	24 白 磨耗 開 片	口径(9.4cm) ロクロ成形 口縁部側面取り 素地は灰白色 菜花押印紋			

表23 三面出土遺物観察表(1)

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・胎土	その他特徴など
図25 25	白釉口はげ皿 転用円盤	底径4.3cm 高さ1.7cm	円盤状に加工したか 素地は灰白色 軸裏は透明		
26 27	電泉窯青磁 輪連弁文碗	口径(16.0cm) 底径(3.6cm) 器高6.6cm	ロクロ成形 外面に片切り彫りの輪連弁文 複弁 素地は灰緑色 軸裏は灰緑色で透明		
28 29	電泉窯青磁 輪連弁文碗 折縁鉢	口径(17.8cm) 口径(21.5cm)	ロクロ成形 外面に片切り彫りの輪連弁文 複弁 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 軸裏は青緑色で半透明 気泡を含む		
30	鉄釘	口径(3.6cm) 型入れ	素地は白色で堅 軸裏は淡青白色で不透明 外底部まで施釉 内底部印花文	長さ6.0cm 幅0.45cm 厚さ0.25cm 重量1.85g 鉄	
31	祥符元寶	初鑄1009年 北宋 真書			
32	天聖元寶	初鑄1023年 北宋 真書			
33	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 真書			
34	元豐通寶	初鑄1078年 北宋 真書			
35	元祐通寶	初鑄1086年 北宋 行書			
36	元祐通寶	初鑄1086年 北宋 行書			
37 38	磁中磁 磁石上昇紙	長さ(5.8cm) 幅3.3cm 厚さ2.6cm 長さ(6.1cm) 幅(4.2cm) 厚さ0.8cm	灰色に赤い縞 紙面4面 2面が赤化 淡褐色 呼吸 側面に切り出し痕 磁面2面		
39	滑石鏡	外面にカンナ痕 内面に彫り廻めた痕	赤白銀色 清石		
40	滑石鏡	口径(14.2cm) 外面に穿孔未遂の痕 外面にカンナ痕 内面にV字状工具痕 青灰銀色 滑石 内面に煤付着			
41	骨製円盤	長さ1.9cm 幅0.7cm 厚さ0.75cm	中心に穿孔		
42	漆器椀	口径(15.8cm) 底径8.0cm 器高4.1cm	内外面黒漆 内面に赤漆で蝶の模様を描く 外底部に切り傷		

表24 Ⅲ面出土遺物観察表(2)

P. 1	1 2 3	図26 土師器皿 R種 小型 R種 大型 電泉窯青磁 画花文碗	口径8.2cm 底径5.5cm 高さ1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子を含む 施成良好		
P. 3	4 5	青白磁皿 白磁口はげ碗	ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 軸裏は青白色で透明 内底部にやや厚くたまる 口径(16.6cm) ロクロ成形 口縁部輪面凹入 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 軸裏は淡青灰色で透明 内面口縁下に1条の弦線		
P. 2	6 7 8 9	図27 土師器皿 R種 小型 土師器皿 T種 小型 滑石転用品 角柱	口径8.5cm 底径6.0cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・白色粒子を含む 施成良好 口径(9.3cm) 底径(7.3cm) 高さ1.4cm 手づね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で白色針状物質・白色・赤色粒子を含む 施成良好 長さ5.9cm 幅2.3cm 厚さ1.7cm 灰白色 不規則な多面体(6面体) 1面に切り出しがないし成形痕		
P. 4	10 11	折敷 曲物底	長さ27.5cm 幅26.3cm 厚さ0.2cm 径41.8cm 厚さ1.3cm		

表25 Ⅲ面柱穴3出土遺物観察表

	番号	種別	大きさ せいりい 素地・胎土 その他の特徴など
P. 5	図28 1	土師器 盆 R種 小型	口径8.8cm 底径6.0cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む 燃成普通
	2	雅 美 こね鉢	口縁部片 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石・白色粒子を含む
	3	同 安 置 系 青 錦 瓶	底径(4.8cm) ロクロ成形 刷り出し高台 素地は灰色で白色粒子を含む 色葉は淡緑灰色で透明 外底部露胎
P. 3	4	角 柱	長さ51.8cm 幅9.8cm 厚さ10.4cm 棍太等の軸用か

表26 Ⅲ面柱穴列4出土遺物観察表

溝 2	図29 1	土師器 盆 R種 小型	口径9.3cm 底径7.2cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・白色・赤色粒子を含む 砂多い 燃成普通
	2	常 清 銘	口縁部片 輪積み成形 器表面は茶褐色 胎土は暗灰色で長石・小石含む 陶灰 気泡含む
	3	へら状木製品	長さ20.5cm 幅1.2cm 厚さ0.6cm

表27 溝2出土遺物観察表

土坑 37	図30 1	土師器 盆 T種 大型	口径12.2cm 底径5.0cm 器高3.05cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰黄色で白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒・小石を含む 燃成良好
	2	土師器 盆 R種 小型	口径8.7cm 底径(6.2cm) 器高2.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・白色・赤色粒子を含む 燃成良好
	3	南 部 置 山 茶 瓶	口径(13.6cm) 底径(5.8cm) 器高1.5cm ロクロ成形 付高台刺繡 胎土は暗灰色で小石を含む 内面磨耗
	4	常 清 三筋壺	口径(10.6cm) 輪積み成形 器表面は暗褐色 胎土は暗紫灰色で粘性強くしまる、長石を含む 陶灰 3型式の新しい時期に相当
	5	童泉窯 青 瓶 鐵連弁文碗	口径(16.6cm) ロクロ成形 外面に片切り彫りの彫道年文 横弁 胎土は暗褐色で透明 買入あり
	6	童泉窯 青 瓶 折 緑：鉢	口径(23.2cm) ロクロ成形 胎土は灰色で茶色(米色)で不透明 買入あり

表28 土坑37出土遺物観察表

土坑 28	図31 1	土師器 皿 T種 小型	口径(8.0cm) 底径(4.8cm) 器高1.7cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質を含む
	2	鉄 釘	現長6.1cm 幅0.4cm 厚さ0.55cm 重量3.7g
	3	鉄 釘	現長8.55cm 幅0.45cm 厚さ0.35cm 重量6.75g
土坑 64	4	曲 物 底	長さ(9.7cm) 幅(4.76cm) 厚さ0.5cm
	5	箸	長さ25.8cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm 両口

表29 土坑28・64出土遺物観察表

	番号	種別	大きさ せいりい 素地・胎土 その他の特徴など
P. 180	1	鉄 釘	長さ8.6cm 幅0.3cm 厚さ0.45cm 重量4.2g
P. 185	2	掛け金具	掛け金具 長さ11.4cm 幅0.8cm 止め金具 幅0.4cm 厚さ0.25cmの帶状 共に鉄 重量22.3g
P. 187	3	刀 子 柄	長さ12.8cm 幅0.6cm 厚さ(0.7cm) 刀子のおさまっていた部分が炭化 木製
P. 192	4	常 清 こね鉢 I型	口径(34.8cm) 底径(15.0cm) 器高12.7cm 輪積みロクロ成形 外面中程から下に回転ヘラ削り 胎土は灰色で白色粒子・繩を含む 高台刺繡 外面重ね焼き痕 内面磨耗
P. 218	5	常 清 銘	口縁部片 輪積み成形 器表面黒褐色 胎土は暗褐色で長石・石英・黒色粒子を含む 外面に降灰
P. 266	6	曲 物 底	長さ17.1cm 幅(6.4cm) 厚さ0.6cm
P. 303	7	不明 木 製品	口径6.0cm 底径5.7cm 器高1.6cm 内面を櫛状工具でえぐる 外側の炭化している部分の一部に黒塗残存

表30 IV面遺構出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せりげ	素地・胎土	その他の特徴など
図34 1	土師器皿 T種 小型	口径(8.05cm) 底径(4.7cm) 器高1.8cm 手づくね後口縁部ナデ 内底中心にナデがない 外底部に掠れた痕 胎土は灰褐色で黒雲母を含む 焼成良好			
2	土師器皿 T種 小型	口径(8.6cm) 底径(4.6cm) 器高1.6cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
3	土師器皿 T種 小型	口径(9.6cm) 底径(4.8cm) 器高2.0cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・砂粒を含む 焼成良好			
4	土師器皿 T種 大型	口径(13.0cm) 底径(6.4cm) 器高3.3cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡褐色で砂粒・黒雲母・白色針状物質・砂粒を含む 焼成良好			
5	土師器皿 R種 小型	口径(8.2cm) 底径(6.3cm) 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む 焼成良好 接合に上りぼかし完形			
6	土師器皿 R種 小型	口径(9.8cm) 底径(6.6cm) 器高1.5cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 焼成良好			
7	土師器皿 R種 小型	口径(8.8cm) 底径(6.8cm) 器高1.9cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・白色粒子を含む 内底中央丸く削む 口縁部油焼付着 焼成良好			
8	土師器皿 R種 小型	口径(9.4cm) 底径(7.2cm) 器高2.0cm 右回転ロクロ 底部系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 内底中央丸く削む 焼成良好			
9	土師器皿 R種 大型	口径(13.2cm) 底径(8.5cm) 器高2.5cm 右回転ロクロ 底部系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で白色針状物質・白色粒子を含む 焼成良好			
10	常滑 こね鉢 I種	口縁部片 輪積みロクロ成形 胎土は灰色で長石・石英・黑色粒子を含む 口縁部に降灰 内面磨耗			
11	常滑 燒	口径(9.8cm) 輪積みロクロ成形 表面、胎土ともに暗灰色で長石を含む	輪積みロクロ成形 表面、胎土ともに暗灰色で長石を含む		
12	常滑 片口碗	口径(20.4cm) 輪積みロクロ成形 器表面は暗灰色 胎土は灰色で大きめの白色、黑色粒子を含む 口縁から肩にかけて降灰	輪積みロクロ成形 器表面は暗灰色 胎土は灰色で大きめの白色、黑色粒子を含む 口縁から肩にかけて降灰		
13	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 外表面は褐色 内表面は淡褐色 胎土は黄褐色で粗く、長石・石英・鐵を含む 気泡入る	輪積み成形 外表面は褐色 内表面は淡褐色 胎土は黄褐色で粗く、長石・石英・鐵を含む 気泡入る		
14	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 表面、胎土ともに赤褐色で長石を含む 口縁内側に降灰	輪積み成形 表面、胎土ともに赤褐色で長石を含む 口縁内側に降灰		
15	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は暗褐色 胎土は灰褐色で長石・鐵を含む	輪積み成形 器表面は暗褐色 胎土は灰褐色で長石・鐵を含む		
16	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 器表面は暗褐色 胎土は暗赤褐色で長石・小石を含む	輪積み成形 器表面は暗褐色 胎土は暗赤褐色で長石・小石を含む		
17	常滑青磁 縫連弁文瓶	口径(12.3cm) ロクロ成形 褶弁 素地は灰色で黒色微粒子を含む 色釉は青磁緑色で半透明 気泡入る	ロクロ成形 褶弁 素地は灰色で黒色微粒子を含む 色釉は青磁緑色で半透明 気泡入る		
18	常滑青磁 縫連弁文瓶	口径(15.9cm) ロクロ成形 褶弁 素地は明灰色で黒色微粒子を含む 色釉は灰青色で不透明 気泡入る	ロクロ成形 褶弁 素地は明灰色で黒色微粒子を含む 色釉は灰青色で不透明 気泡入る		
19	青白磁皿	底径1.8cm 型入れ 素地は白色 色釉は青白色で透明 外底部露胎	底径1.8cm 型入れ 素地は白色 色釉は青白色で透明 外底部露胎		
20	鉄釘	長さ4.75cm 幅0.4cm 厚さ0.25cm 重量2.1g	長さ4.75cm 幅0.4cm 厚さ0.25cm 重量2.1g		
21	鉄釘	長さ7.8cm 幅0.45cm 厚さ0.35cm 重量4.4g	長さ7.8cm 幅0.45cm 厚さ0.35cm 重量4.4g		
22	鉄釘	長さ7.4cm 幅0.75cm 厚さ0.4cm 重量8.1g 鉄釘か	長さ7.4cm 幅0.75cm 厚さ0.4cm 重量8.1g 鉄釘か		
23	開元通寶	初鋲621年 唐 真書 あるいは 初鋲960年 南唐 真書	開元通寶		
24	鏡	長さ(10.5cm) 幅(4.4cm) 厚さ2.6cm 大型の楕円鏡 裏面にも使用の痕跡 断面逆台形 暗赤褐色の真岩製 きわめて滑らかな仕上げ 技法と石材からみて中国産だが鑑定ではないとのこと(堀尾信夫氏教示)	鏡		
25	獸骨	長さ11.5cm 幅4.0cm 厚さ2.5cm 切断面あり 刻み等の刃物の痕跡	獸骨		
26	木製骨	長さ(8.1cm) 幅1.4cm 厚さ0.3cm 径0.25cmの孔を穿つ	木製骨		
27	木製骨	長さ(16.0cm) 幅1.5cm 厚さ0.45cm 径0.25cmの孔を穿つ	木製骨		
28	不明木製品	長さ(21.95cm) 幅3.0cm 厚さ0.5cm 中央部に横かかの刀物による加工	不明木製品		
29	板草履	長さ22.6cm 幅(4.6cm) 幅さ0.35cm 径0.2cmの鼻緒の孔 わら圧痕 土踏まずのあとがあるか	板草履		
30	箸	長さ20.3cm 幅0.7cm 厚さ0.4cm 両口	箸		

表31 IV面出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいせい	素地・胎土	その他特徴など
P. 4 1	竜泉窯青釉 画花文瓶	口径(16.3cm) ロクロ成形 内面画花文 素地は灰色 軸部は灰緑色で透明			
P. 6 2	連齒下駄	長さ(20.3cm) 幅(10.8cm) 厚さ(4.3cm) 径1.0cmの鼻緒の孔 歯は削りだし 上面焼化			
P. 9 3	縁	長さ2.3cm 厚さ0.5cm 基石か 灰黒色の川原石			

表32 IV面建物1出土遺物観察表

P. 1 1	土製品	長さ2.3cm 厚さ1.4cm 表面にナデと指壓痕 半球状 胎土は灰褐色
P. 6 2	土師器皿 T種小型	口径(8.9cm) 底径5.5cm 器高1.5cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は淡橙褐色で白色針状物質・赤色粒子・砂粒を含む 燃成良好
P. 6 3	白磁碗	口径(17.5cm) ロクロ成形 内面蓮華の幽花文 口縁部端反 胎土は灰白色で黑色微粒子を含む 軸部は灰緑色透明 貫入あり

表33 IV面柱穴列5出土遺物観察表

P. 2 1	土師器皿 R種大型	口径11.8cm 底径7.3cm 器高3.4cm 右回転クロロ 底部系切り 外底部板状压痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母・白色針状物質・白色・黒色粒子を含む 燃成良好
--------------	--------------	--

表34 柱穴列7出土遺物観察表

P. 1 2	柱根	長さ39.6cm 幅14.4cm 角柱の4つの角を面取りして八角柱にしようとする ただし面取りによっては八角柱とは限らない 表面にうすぐ赤色あり 染料かは不明
P. 2 3	柱根	長さ71.8cm 幅11.8cm 厚さ11.2cm 2隣面取り 戻り2隅は剥離のため確認できず 4面に手斧痕 表面にうすぐ赤色あり 染料かは不明

表35 IV面柱穴列8出土遺物観察表

井戸 2	漆 甕	口縁部 片輪積み成形 灰釉を薄くへケ塗り 器表面は黒色 胎土は灰色 内面に自然釉
土壙 53	木製品	長さ15.4cm 幅1.4cm 厚さ0.7cm
土壙 55	不明木製品	長さ36.5cm 幅6.7cm 厚さ1.0cm 用途不明 羽子板か
土壙 53	鉄釘	長さ7.4cm 幅0.4cm 厚さ0.35cm 重量3.3g
土壙 55	刀子	残長17.8cm 幅2.2cm 厚さ0.5cm 重量64.1g 鉄 長径0.3cmの目鉄釘穴 先端部欠損
土壙 55	土師器皿 T種大型	手づくね後口縁部内底部ナデ 器表面淡褐色 胎土は暗紫褐色で白色針状物質・赤色粒子を含む 口縁部は意図的な打ち欠き

表36 井戸2、土壙53・55出土遺物観察表

土壙 49	木製 しやもじ 曲物 底	長さ(20.6cm) 幅(2.85cm)(5.3cm) 厚さ0.8cm 柄と頭の間に斜行する切り傷(表裏)
土壙 50	土師器皿 T種大型	直径38.65cm 以上 厚さ1.3cm
土壙 50	土師器皿 T種大型	口径14.0cm 底径6.2cm 器高3.3cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は砂粒・黒雲母・白色針状物質を含む 燃成良好
土壙 50	礪版	長さ44.4cm 幅26.8cm 厚さ2.8cm 手斧痕 植鉢板?

表37 土坑49・50出土遺物観察表

土 58	土鍬 2	長さ4.9cm 幅1.6cm 手づくね 胎土は暗褐色で黒雲母を含む 表面を磨いている
土 58	鉄釘 2	長さ4.5cm 幅0.3cm 厚さ0.36cm 重量3.4g
土 58	木製 3	馬形 代 長さ40.7cm 幅3.5cm 厚さ1.0cm 馬形もしくは刀形か

表38 土坑58・59出土遺物観察表

番号		種別	大きさ	せいけい	素地・胎土	その他特徴など
土坑 61	1	土師器皿 T種 大型	口径(14.6cm) 底径(7.8cm) 器高3.65cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰褐色で黒雲母・白色針状物質を含む 燃成良好			
	2	骨製兜飾り	長さ4.6cm 幅4.55cm 厚さ0.8cm 漆塗り			
	3	箸状木製品	長さ28.3cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 大型の箸(両口)または串か			

表39 土坑61出土遺物観察表

深掘溝一括 表採	漆盤 I 直 II 直相当	白漆 口はげ皿	口径(11.7cm) ロクロ成形 口縁部輪面取り 裏地は乳白色で黒色微粒子を含む 製造は乳灰色で不透明 細かい貫入 口縁部油焼付着			
	3	土師器皿 R種 大型	口径12.1cm 底径7.8cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底面板状压痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・白色針状物質・赤色粒子を含む 燃成普通			
	4	刀子	長さ(19.6cm) 幅1.6cm 厚さ0.3cm 重量22.5g 切先は欠損 刀刃の茎の焼が不明瞭 戻部に目鉄釘穴あり			
	5	土師器皿 T種 大型	口径(14.7cm) 底径(9.5cm) 器高2.3cm 手づくね後口縁部内底部ナデ 器表面は淡褐色 胎土は橙褐色で微砂を含む 燃成良好			
	6	常滑	口縁部片 輪積み成形 内表面は褐色で白色蛇子・繩を含む 内外面ともに降灰 外面には厚く降灰がかかる			
	7	磨耗陶片	常滑燒破片使用 器表面、胎土ともに淡灰色で長石・石英・馬銅母を含む 全面が磨耗			
	8	磨耗陶片	長39.5cm 幅9.0cm 厚さ1.3cm 常滑燒破片を使用 器表面淡褐色 胎土は灰色で長石・小石を含む 4辺と内面磨耗			
	9	磨耗陶片	長さ7.2cm 幅5.8cm 厚さ1.3cm 常滑燒破片を使用 外表面は暗茶褐色 内表面は暗褐色 胎土は灰色で長石を含む 2辺と外表面磨耗			
	10	磨耗陶片	長5.6cm 幅6.0cm 厚さ1.3cm 常滑燒破片を使用 外表面は褐色 内表面は淡褐色 胎土は淡灰色で繩片を含む 2辺と外表面磨耗			
	11	竈泉窯青磁香炉	太鉄胴 口縁部片 ロクロ成形 貼り付け菊花文 素地は褐色白色 製造は灰褐色で不透明 貫入 口縁露胎			
	12	不明木製品	長さ(10.65cm) 幅1.8cm 厚さ1.2cm			
	13	北山茶碗	底部片 底径5.6cm ロクロ成形 付高台に粉殻底 外底部糸切り 内底部指頭ナデ 胎土は明灰色地・堅致・内面磨耗			
	14	南山茶碗	口径(15.0cm) ロクロ成形 胎土は灰色でやや粗く長石・大きめの白色、黒色粒子を含む 内面は磨耗している部分がわずかに残るか			
	15	常滑	口縁部片 輪積み成形 外表面は暗茶褐色 内表面は暗黒色 胎土は灰色で長石を含む 内外面ともに若干の降灰			
	16	磨耗陶片	長38.4cm 幅4.9cm 厚さ1.0cm 常滑燒破片を使用 器表面は褐色 胎土は淡褐色で長石と繩片を含む 1辺と外表面磨耗			
	17	漸合子蓋	口径(7.1cm) 底径(6.9cm) 器高2.2cm ロクロ成形 側面変形連弁紋 外上面壓押し牡丹紋 素地は灰黒白色 製造は黄褐色で半透明(外面と内面の中央部のみ)			
	18	元祐通寶	初鑄1086年 北宋 茗書			
	19	元祐通寶	初鑄1086年 北宋 茗書			
	20	漆石鍋 船用	暗灰色 滑石鍋底部の一部を転用 4面に傷あり			
	21	不明骨製品	長さ(3.7cm) 幅1.1cm 厚さ0.2cm 一端は丸く削られ磨かれる 両面滑らかに磨かれている			

表40 採集遺物観察表

第4章 まとめと考察

1. 遺跡の変遷と年代

第1期—IV面

掘立柱建物と柱穴列、およびいくつかの土坑によって構成される基盤層上の遺構群。柱穴は非常に数が多く、建物や列として抽出したもの以外にもかなりの頻度で建替えがあったことが推測される。これらの建物がいすれも調査区外に延びていることは確実である。柱は面取りされて八角形を呈し、いくらか装飾的といってよい要素も認められる。後述するように、年代的には平安時代末～鎌倉時代前期を中心とする。基盤層上に多数の柱穴が検出される状況は、鎌倉旧市内平坦部の該期遺跡において通有の状況である。第3期以降に認められるような職能関連の遺構・遺物はここにはほとんどなく、建物の規模と装飾性からみても、やはり武士の住居とするのが妥当であろう。この状況は次代第2期にも継承され、第3期の変革まで続く。

土坑はそれぞれ建物に付属すると考えたい。便所等の生活施設を想定することもできると思うが、これについては別に触れる。また基盤層上で発見された板組造構は、囲炉裏であるとすればこれまででもっとも古い検出例となる。建物との関係が構造的に興味深いところだが、詳細は不明である。

搬入品からみた年代は12世紀第4四半期(図34-11・14)から13世紀後半まで降りうるもの(図34-17・18)を含む。12世紀第4四半期に営がはじまり、13世紀前半に主体をもつ。基盤層上遺構群の層位的な弁別は大きな課題である。

第2期—I面

礎板をもつ柱穴列と溝により構成される。前代ほどの密集度はないものの、柱穴列のそれぞれの柱は非常に大きく、おそらく大型掘立柱建物の一部であろう。調査区外に拡がるとなれば、東側は居住空間の境界が溝によって明示されているので、西側の隣地であることは間違いない。ここには次の第3期以降出現するとりべや磨耗陶片といった、職能に関わる遺物は出ていない。

このように大きな柱を持つ建物の住民としては、やはり武士階級が相応しいであろう。

搬入遺物からみた年代は、渥美こね鉢(図28-2)や同安窯系青磁など13世紀第1四半期の要素をもつもの、童泉窯青磁籠連弁文碗など13世紀中葉以降の要素をもつもの(図30-5・6)もあるが、おおむね13世紀第2四半期を中心としているといえる。第2四半期のどこかで街構造の大きな変革があり、次代第3期に移行するのである。遺物においてはそのため第3四半期に通じる様相をも含むとみたい。

なお、土坑64に便槽の可能性があるのは、第3章で指摘したとおりである。

第3期—I面

前代までの掘立柱建物中心の遺構群ではなく、たくさんの土坑で構成される面である。

土坑の土層断面は、それらが連続的に掘り続けられていたことを示すが、配置に特徴がある。すなわち、ほぼB軸以北で東西方向に列をなす一群と、南側のやや規則性を欠く大型土坑群である。前者は西から東に移行していることが土層断面から観察できる。両者の間の空白地帯に据置がある。土坑群と据置の組合せというこの様相には、のちに紹介する地点2の状況に通じるものがある。

出土遺物で注意したい点は、この面になってはじめて、とりべや磨耗陶片が含まれることである。とりべの出土は、もちろん金属加工に従事した職人がいたことを示す。前代までの大型建物の住人にはみられなかった要素といわねばならない。この期をもって、居住者に大きな変化があったことになる。

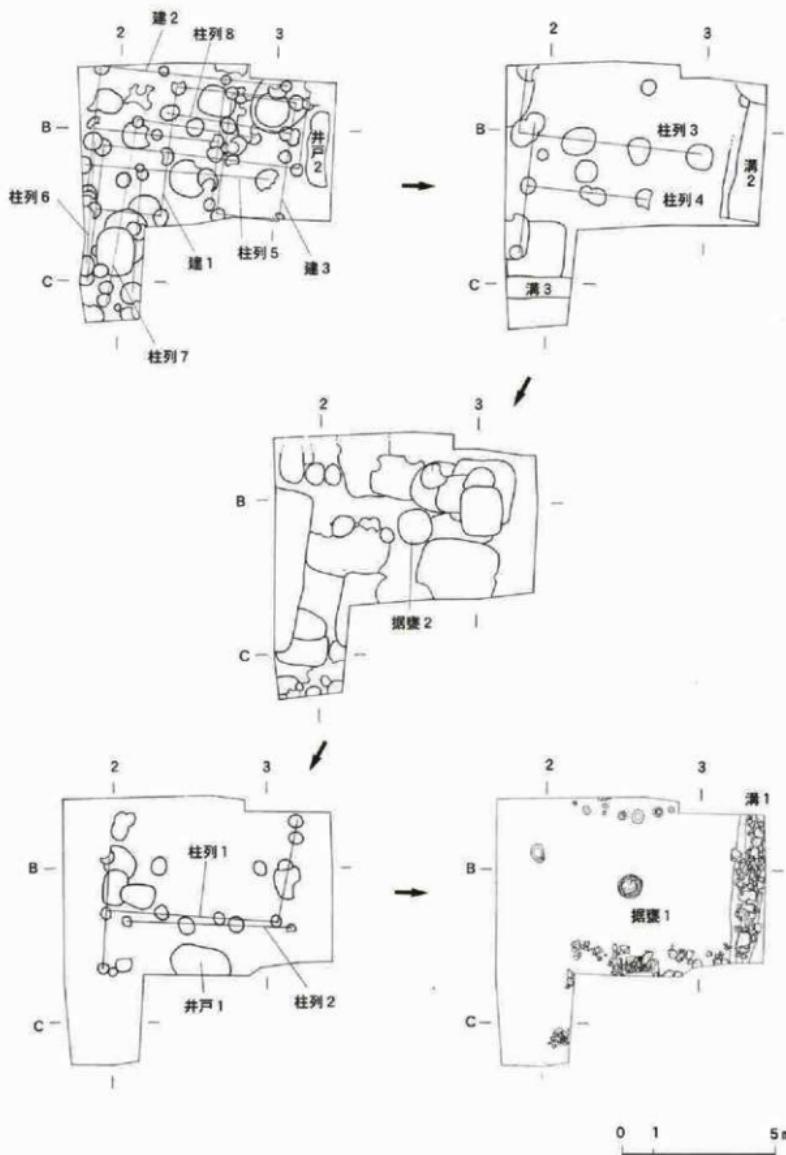


図43 遺構変遷図

搬入品から年代をみてみると、多くの遺構が13世紀第2四半期にはじまることがわかる。土坑6出土の古瀬戸（図23-3）に14世紀初頭まで下る要素を含むが（古瀬戸中Ⅰ期）、全体に13世紀中葉を中心として、第2四半期～第3四半期とみてよいだろう。この年代は、北条泰時以後の街構造の改変を示唆するものかもしれない。

第4期一Ⅰ面下層

破碎泥岩により地形され、面上に掘立柱建物らしき柱列や土坑等の落込みがみられる。出土遺物には磨耗陶片が多い。磨耗陶片について、從来馬淵はすり木の代用品と主張してきた（馬淵1993）。いくつか挙げた根拠のひとつは、ほとんどの磨耗は凸部にのみ認められるというものであった。しかし、本地点出土品には縁辺の凹部にもそれがある。容易に想像できることだが、すり鉢の中で擂り下ろすという使い方ではこの使用痕は残らない。したがって、本地点遺物に関して馬淵の推測は当てはまらないことになる。全体の論旨に変更の必要は感じないものの、この点はいずれ資料増加を待つ修正を期したい。いずれにせよ磨耗陶片を頻繁に使う生活形態があるとなれば、食生活関連でないとすると、結局のところ職能に関わると考える以外にあるまい。これは、出土遺物のなかにとりべなどが含まれていることとあわせ、この地の性格を考える上で重要な要素である。

面の年代は、13世紀後半を中心としているとみて大過ない。

ところで、このような遺構のあり方は、先に馬淵らが調査した大町二丁目2315番ほか地点（図1-地点2）と共通する。そこはここから西30～40mにあり、大町大路から南に60mと、本地点のほぼ並びといつてよい位置にある。そこでも本地点同様、泥岩地形面上に掘立柱建物が存在し、凹部の磨り減った陶片こそないものの、ふいごの羽口等、職能との関連を強く示唆する遺物が出土している。年代的にも13世紀後半を中心とし、本地点と並行する。おそらく鎌倉時代後期、この一帯にはさまざまな職能活動があったのだろう。

第5期一Ⅰ面上層

遺構としては溝と据窓1基のみしかない。面上の搬入品の年代は13世紀第2四半期にはじまり、15世紀におよぶ。表土下の層であり、おそらく近世以降大きく削平されたために、年代的混乱がもたらされたのではないか。しかし、遺構からの出土遺物の年代は、大きくみて13世紀後半を中心とするのが妥当だろう。遺構に恵まれず場の性格は詳らかではないが、下層の据窓2に重なる位置に据窓1があることから両者の連続性は明らかで、Ⅰ面下層との性格的・時間的懸隔はないと考える。

小括

以上をあらためて整理すると次のようになる。

期別	対応する面	年 代	おもな遺構・遺物	性 格
第1期	IV面	12世紀第4四半期～13世紀前半	掘立柱建物・土坑	武士居住区
第2期	Ⅲ面	13世紀第2四半期	大型掘立柱建物	武士居住区
第3期	Ⅱ面	13世紀第2四半期～第3四半期	泥岩地形・土坑群・とりべ・磨耗陶片・据窓	職能活動
第4期	Ⅰ面下層	13世紀後半	掘立柱建物・とりべ・磨耗陶片	職能活動
第5期	Ⅰ面上層	13世紀後半	溝・据窓	職能活動

第2期から第3期への性格変化が正確にはいつごろからか、見きわめる必要がある。というのも、このような性格変化は市内遺跡で広く観察されるので、同時期だとすれば、権力の介入を想定せざるを得ないからである。

（馬淵）

周辺寺社主軸方位
別願寺 N-33.5° -E
安養院 N-31° -W
上行寺 N-25° -E

国道134号線



※ Nは真北を示す

1. 大仏二丁目21番地西	
対象建物	南北軸方位
済1	N-59.5° -W
済2	N-68.5° -W
済3	N-71.5° -W
済4	N-65.5° -W
済5	N-74.5° -W
済6	N-74.5° -W
平均軸方位	N-69° -W

2. 大仏二丁目21番地東	
対象建物	南北軸方位
建物1	N-65° -W
建物2	N-65° -W
建物3	N-75° -W
建物4	N-70° -W
柱穴例1	N-22° -E
柱穴例2	N-22° -E
柱穴例3	N-60° -W
柱穴例4	N-64° -W
平均軸方位	N-70° -W

3. 大仏二丁目21番地(本堂裏地)	
対象建物	南北軸方位
外金造佛	南北軸方位
済1(1面)	-
柱穴例1(1面)	-
柱穴例2(1面)	-
柱穴例3(1面)	-
柱穴例4(1面)	-
柱穴例5(1面)	-
柱穴例6(1面)	-
柱穴例7(1面)	-
柱穴例8(1面)	-
柱穴例9(1面)	-
柱穴例10(1面)	-
柱穴例11(1面)	-
柱穴例12(1面)	-
柱1	-
柱10	-
柱56.1	-
柱56.2	-
柱57.3	-
平均軸方位	N-55.5° -W

4. 大仏二丁目21番地1	
対象建物	東西軸方位
済VA	N-31.5° -E
済VB	N-31.5° -E
済VC	N-31.5° -E
済VD	N-34.5° -E
済VE	N-33.5° -E
済VI	N-55.5° -W
済VII	N-58.5° -W
済VIII	N-60.5° -W
済IX	N-58.5° -W
済X	N-53.5° -W
済XI	N-56.5° -W
済XII	N-54.5° -W
済XIII	N-55.5° -W
済XIV	N-31.5° -E
済XV	N-32.5° -E
済XVI	N-32.5° -E
済XVII	N-30.5° -E
済XVIII	N-31.5° -E
済XIX	N-35.5° -E
済XX	N-32.5° -E
済XXI	N-42.5° -E
平均軸方位	N-56.5° -W

図44 主軸方位対比図

2. 遺構主軸方位について

遺構の主軸方位は、当時の町割を知るための重要な鍵となる。本調査区と近接した調査地点3箇所を現代地図上に照らし合わせて比較・検討を試みた(図46)。各調査地点の軸方位は国道134号線に直交もしくは平行している。また134号線は大町四つ角付近からわずかに湾曲するが、それに伴うように軸方位にもずれが生じている。これらを踏まえてみれば、134号線(大町大路)は遺構造営時の中世から変わらず、町割の中心として存在していたものと想像できる。だが本調査区の遺構主軸方位と現在の周辺建物の軸方位の間には、若干の差異がある。本調査区に隣接する現在の建物の軸方位はN-19°-Eである。これは上行寺の脇道に準じた方位と考えられ、本調査区内遺構との方位のずれは7°近くある。これら134号線から枝木のように派生している小道は変化が著しい。昭和初期の鎌倉の町割を図示した『鎌倉市本町土地辞典』(鎌倉市立図書館蔵)によると、本調査区西隣に南北の小道があるが現在では存在しない。『相模国鎌倉郡村誌』(神奈川県図書館協会本)によると、明治九年の大町村の戸数は148戸(社寺13戸)、人口778人と書かれている。現在の戸数は約2200である。村は町となり都市型へと発展・多様化した。その過程で軸方位の不均衡をまねいたと考えるのが自然だろう。(鎌治屋)

3. 繊維質腐食土について

ここにいう「繊維質腐食土」とは、明褐色～黄褐色をした植物質の腐食土で、繊維質のなかにわらなどが入り混じっていることがある。堆肥状で一見便槽内の人糞のようだが、このような腐食土が含まれている遺構が、すなわち便所遺構とは断定できない。腐食土は鎌倉市内の発掘調査において頻繁に見つかっており、井戸とされる遺構や土坑に多いが、面上に堆積していることも珍しくない。本調査区内においても腐食土を含んだ遺構がみつかっているが、図47に示した通り、これほど多量の腐食土が集中する例は多くはないだろう。そもそも腐植土とは何か、堆肥状ではあるが本当のところはよくわかっていない。住居の床や屋根の材料である可能性も視野に入れておきたい。

今回、これらの腐食土を採取し箇にかけ、目視できる範囲内で動植物の遺存体を確認したがごく少量であった。土坑に堆積したものも、蛆の殻やウリ科の種子などいちおう便所堆積物の目安とされるもの

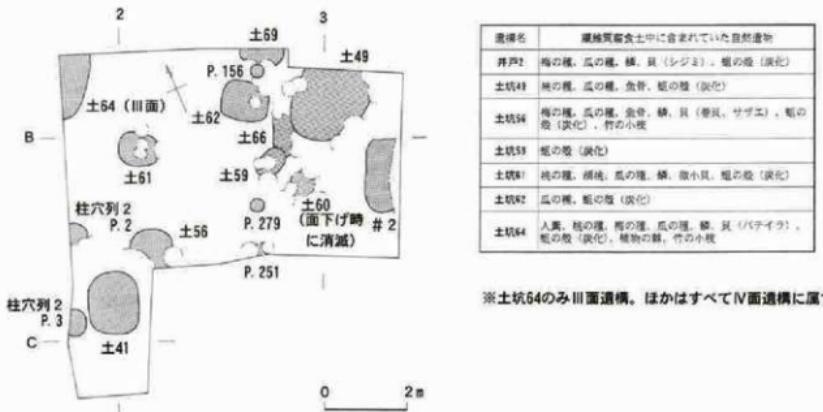


図45 繊維質腐食土分布図

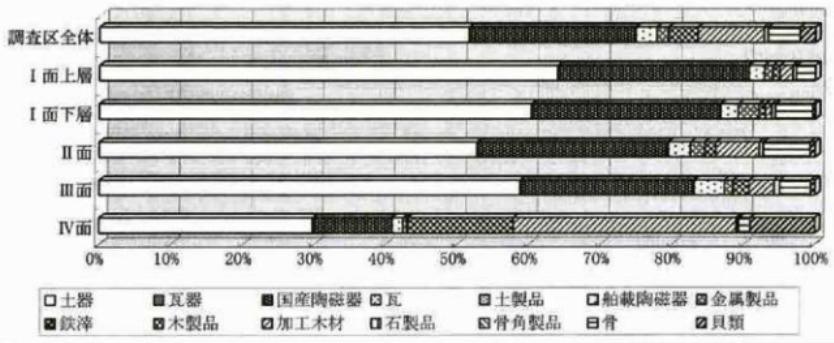
を含む一方で、桃や胡桃の果核といった大きさからみて人の消化器官を通過し得ないものも含まれている。したがって、これらの遺構を純然たる便所遺構とするのは早計で、ゴミ穴との区別が明瞭でなかつたと考えるべきだろう。

(鍛冶屋)

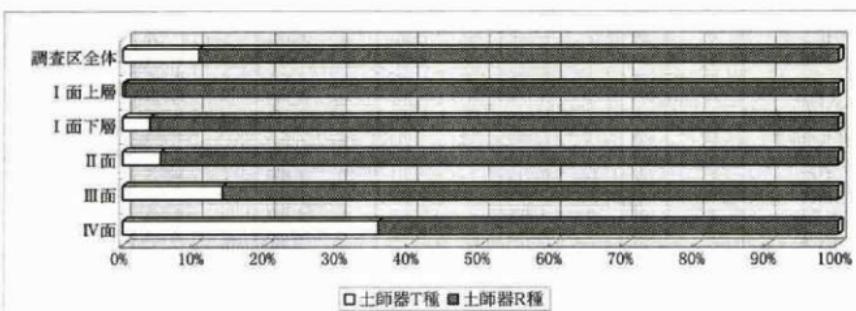
土坑64に関しては、硬化した人糞らしきかたまりが含まれていたほか、砂と繊維質腐食土が交互に堆積している状況から、当初から便槽として存在していた可能性を指摘しておきたい。すなわち、それは排便後に砂によって臭気を絶つ意図に発しているのかもしれないからである。近隣の地点2（馬淵1995）や9（菊川1995）では、便所らしい遺構が報告されている。前者の土坑10では踏板らしい2枚の板材が出土し、埋土は大半が繊維質腐食土であった。また土坑の形状や大きさも本地点土坑64に共通している。後者の土坑2ではやはり植物質の腐食土（報文では「木質腐食土」）が底部に堆積しており、中に多量のハエ幼虫の外皮・殻が含まれていた。年代は馬淵のみるところでは、前者が13世紀第1四半期以前、後者が同第2四半期～中葉であろう。（馬淵）

引用・参考文献（本書全体に共通）

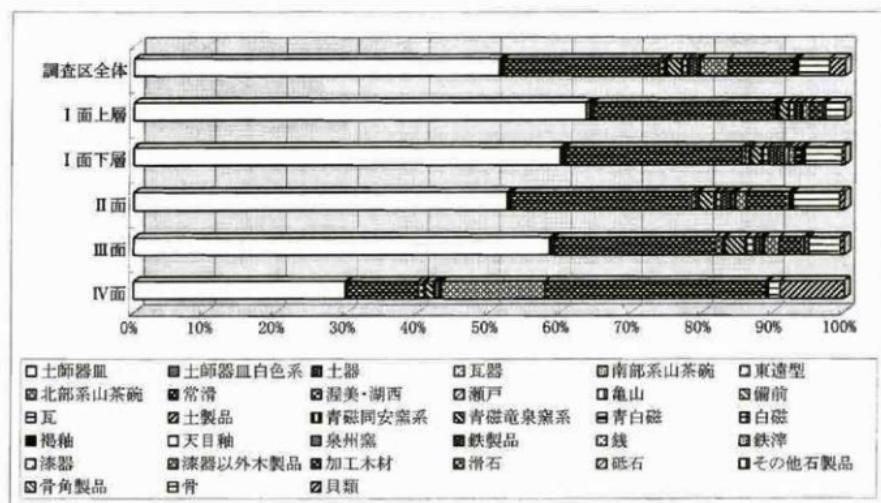
- 赤羽一郎／中野晴久1994 「生産地における編年について」『資料集：中世常滑焼を追って』日本福祉大学知多半島総合研究所
磯野善彦1978 『中世東寺と東寺領莊園』東京大学出版会
石井謙1981 『都市難倉における地獄の風景』『鎌家の人間の研究』吉川弘文館
上本進二2000 「鎌倉・江戸の地形死定と遺跡形成」『神奈川県足柄市 池子桟敷戸遺跡』東國歴史考古学研究所
蓮道雅一1997 「若宮大路周辺跡群」由比ヶ浜一丁目118番7地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」13
大河内健1991 「由比ヶ浜中世集団墓葬遺跡」由比ヶ浜一丁目1015番29外地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」7
大河内健1997 「若宮大路周辺跡群発掘調査報告書」小町一丁目1028番1地点、「若宮大路周辺跡群発掘調査報告書」7
大河内健1998 「下馬周辺跡群発掘調査報告書—鎌倉女学校跡地点」下馬周辺跡群発掘調査報告書
菊川英成1996 「名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
木下良食1997 「她的解説」「神奈川の古代道」藤沢市教育委員会博物館準備課担当
木村英代治ほか1991 「材木座町の古代道」『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会博物館準備課担当
木村英代治ほか1993 「若宮大路周辺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8
木村英代治1993 「若宮大路周辺跡群 発掘調査報告書」鎌倉駅西口第2自転車駐車場及び鎌倉市在福サービスセンター建設に伴う緊急調査報告書
書「鎌倉古跡町898番地跡」鎌倉市教育委員会
橋谷満ほか1998 「下馬周辺跡群発掘調査報告書」由比ヶ浜二丁目2番12地点1～下馬周辺跡群発掘調査
高木秀雄1991 「由比ヶ浜」117～1地点遺跡「若宮大路周辺遺跡群」堤ロビル建設に伴う緊急調査報告書「若宮大路周辺跡群発掘調査報告書」
渡見一夫ほか2000 「材木座町周辺遺跡」材木座一丁目990番7地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」16
渡見一夫2000 「名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1888番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16
宗室秀明1991 「妙本寺遺跡 大町一丁目1158番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7
宗室秀明ほか1992 「下馬周辺遺跡 東京電力藤沢営業所改築工事に伴う発掘調査報告書」下馬周辺跡群発掘調査
鈴木尚ほか1956 「鎌倉市材木座発見の世界遺産とその人」日本人文科学会、岩波書店
瀬田哲夫1995 「材木座町屋跡」材木座二丁目217番6等地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」11
瀬田哲夫2001a 「米町遺跡 大町二丁目2313番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
瀬田哲夫2001b 「米町遺跡 大町二丁目2308番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
高柳光寿1959 「鎌倉古史」施設説「吉川弘文館
田代郁夫1995 「名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1880番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
田代郁夫ほか1997 「米町遺跡 大町二丁目93番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13
原慶志ほか1994 「妙本寺遺跡」(0a232) 大町一丁目1146番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10
野口寅1993 「精朝以前の鎌倉」「古代文化」45 (脚) 古代学会
橋本初子1990 「中世東寺と弘法大师信仰」歴史館出展
原慶志ほか1990 「米町遺跡 大町二丁目93番地」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6
原慶志ほか1993 「由比ヶ浜中世集団墓葬遺跡」由比ヶ浜二丁目1034番1地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」9
原慶志ほか2000 「由比ヶ浜中世集団墓葬遺跡」由比ヶ浜二丁目1203番20地点、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」16
福田誠1988 「妙本寺遺跡 大町一丁目1158番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
福田誠1989 「米町遺跡 大町二丁目2112番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5
福田誠2000 「米町遺跡 大町二丁目2304番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16
藤本久志1993 「中世鎌倉の紙函」『神奈川地城史研究』11 (脚) 神奈川地域史研究会
藤矢照子ほか2000 「米町遺跡 第6地點、第7地點発掘調査報告書」『鎌倉米町遺跡発掘調査報告書』
松尾剛次1993 「中世鎌倉の風景」吉川弘文館
馬淵和雄1988 「若宮大路周辺遺跡群」由比ヶ浜一丁目128番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
馬淵和雄1993 「やり跡のあいかた—アリこごに替わるもの—」『青山考古』第11号 青山考古学会
馬淵和雄1994 「裏の町 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす 新人物往来社
馬淵和雄1995a 「米町遺跡 大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
馬淵和雄1995b 「若宮大路周辺遺跡群」由比ヶ浜一丁目123番5番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
馬淵和雄1995c 「若宮大路周辺遺跡群」由比ヶ浜一丁目118番地点の「発掘調査について」『若宮大路周辺遺跡群』由比ヶ浜一丁目123番5番地点「付録」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11
宮田真理子ほか1999 「米町遺跡発掘調査報告書」鎌倉市大町二丁目2338番1」米町遺跡発掘調査
宮田真理子ほか1999 「若宮大路周辺遺跡群 発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群発掘調査
森孝子ほか2001 「材木座町屋跡発掘調査報告書」鎌倉市材木座一丁目910番」材木座町屋跡発掘調査
高瀬治久1994 「東京の日選舉」中世の風景を読む 2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす 新人物往来社
吉田友一1993 「大町名越ヶ谷もふ」私家版



	I面上層	I面下層	II面	III面	IV面	調査区全体						
土器	588	63.96%	977	60.27%	1784	52.70%	1109	58.77%	677	29.82%	5844	51.54%
瓦器	0	0.00%	2	0.12%	2	0.06%	0	0.00%	1	0.04%	5	0.04%
国産陶磁器	249	26.63%	425	26.22%	901	26.62%	457	24.22%	249	10.97%	2627	23.17%
瓦	1	0.11%	0	0.00%	2	0.06%	1	0.05%	0	0.00%	4	0.04%
土製品	0	0.00%	2	0.12%	1	0.03%	1	0.05%	2	0.09%	7	0.06%
舶載陶磁器	20	2.14%	40	2.47%	104	3.07%	79	4.19%	35	1.54%	330	2.91%
金属製品	11	1.18%	46	2.84%	66	1.95%	23	1.22%	11	0.48%	152	1.61%
鉄滓	0	0.00%	1	0.06%	2	0.06%	0	0.00%	4	0.18%	8	0.07%
木製品	9	0.96%	14	0.86%	53	1.57%	43	2.28%	334	14.71%	461	4.07%
加工木材	17	1.82%	14	0.86%	203	6.00%	65	3.44%	707	31.15%	1044	9.21%
石製品	5	0.53%	9	0.56%	20	0.59%	15	0.79%	8	0.35%	69	0.61%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.04%
骨	25	2.67%	85	5.24%	221	6.53%	83	4.40%	36	1.59%	505	4.45%
貝類	0	0.00%	6	0.37%	24	0.71%	11	0.58%	206	9.07%	248	2.19%
総計	935	100%	1621	100%	3385	100%	1887	100%	2270	100%	11338	100%



調査区全体	土師器T種	土師器R種	総計
I面上層	2	0.34%	592
I面下層	37	3.81%	935
II面	94	5.29%	1682
III面	154	13.96%	950
IV面	241	35.70%	434
			5817
			594
			1776
			1104
			675



	I面上層	I面下層	II面	III面	IV面	調査区全体						
土師器皿	594	63.53%	972	59.96%	1776	52.47%	1104	58.51%	675	29.74%	5817	51.31%
土師器皿白色系	0	0.00%	0	0.00%	3	0.03%	1	0.05%	1	0.04%	5	0.04%
土器	4	0.43%	5	0.31%	5	0.15%	4	0.21%	1	0.04%	22	0.19%
瓦	0	0.00%	2	0.12%	2	0.06%	0	0.00%	1	0.04%	5	0.04%
南部系山茶碗	2	0.21%	2	0.12%	10	0.30%	6	0.32%	3	0.13%	27	0.24%
東造型	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%
北部系山茶碗	3	0.32%	2	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.05%
常滑	237	25.35%	403	24.86%	858	25.35%	429	22.73%	229	10.09%	2483	21.90%
渥美・西湖	4	0.43%	9	0.56%	21	0.62%	18	0.95%	17	0.75%	78	0.69%
瀬戸	2	0.21%	8	0.49%	11	0.32%	4	0.21%	0	0.00%	30	0.26%
亀山	0	0.00%	1	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%
備前	1	0.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%
瓦	1	0.11%	0	0.00%	2	0.06%	1	0.05%	0	0.00%	4	0.04%
土製品	0	0.00%	2	0.12%	1	0.03%	1	0.05%	2	0.09%	7	0.06%
青磁同安窯系	0	0.00%	1	0.06%	0	0.00%	2	0.11%	4	0.18%	7	0.06%
青磁竜泉窯系	12	1.28%	25	1.54%	70	2.07%	53	2.81%	25	1.10%	217	1.91%
青白磁	1	0.11%	2	0.12%	9	0.27%	3	0.16%	1	0.04%	19	0.17%
白磁	7	0.75%	12	0.74%	24	0.71%	20	1.06%	2	0.09%	81	0.71%
梶袖	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%	1	0.01%
天目釉	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	2	0.09%	3	0.03%
泉州窯	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	0	0.00%	2	0.02%
鉄製品	10	1.07%	38	2.34%	52	1.54%	16	0.85%	10	0.44%	147	1.30%
銭	1	0.11%	8	0.49%	14	0.41%	7	0.37%	1	0.04%	35	0.31%
鉄滓	0	0.00%	1	0.06%	2	0.06%	0	0.00%	4	0.18%	8	0.07%
漆器	0	0.00%	0	0.00%	4	0.12%	4	0.21%	5	0.22%	14	0.12%
漆器以外木製品	9	0.96%	14	0.86%	49	1.45%	39	2.07%	329	14.49%	447	3.94%
加工木材	17	1.82%	14	0.86%	203	6.00%	65	3.44%	707	31.15%	1044	9.21%
清石	1	0.11%	2	0.12%	8	0.24%	4	0.21%	0	0.00%	20	0.18%
既石	3	0.32%	4	0.25%	4	0.12%	9	0.48%	2	0.09%	25	0.22%
その他石製品	1	0.11%	3	0.19%	8	0.24%	2	0.11%	6	0.26%	24	0.21%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.04%
骨	25	2.67%	85	5.24%	221	6.53%	83	4.40%	36	1.59%	505	4.45%
貝類	0	0.00%	6	0.37%	24	0.71%	11	0.58%	206	9.07%	248	2.19%
総計	935	100%	1621	100%	3385	100.00%	1887	100%	2270	100%	11338	100%



1. 調査地点鳥瞰 中央を縦走するのが国道134号線（矢印が調査地点、右が北）



2. 国道134号線 大町四ツ角側から名越方面を望む（矢印が調査地点への進入路
名越側隣は上行寺）



3. 調査地点近景（北東から）



1. 北盤土層断面
A軸付近



2. 南盤土層断面
(水系標高は 6m と 5m、3点共通)
B軸以東



3. 西盤土層断面
B軸付近以南



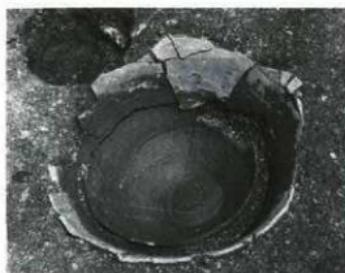
B軸以南



1. 1面全景（西から）



6. 1面下層柱穴列1 東側南北列
(手前から)
P. 6・7・8 (南から)



2. 1面上層据壘検出状況（南から）



3. 1面上層溝1上層部（北から）

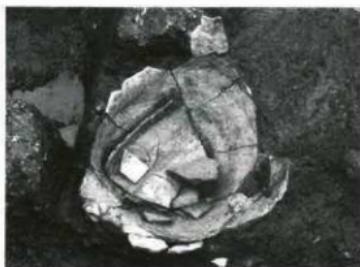


4. 同 下層石列（南から）
5. 同 堀方（南から）

図版 4



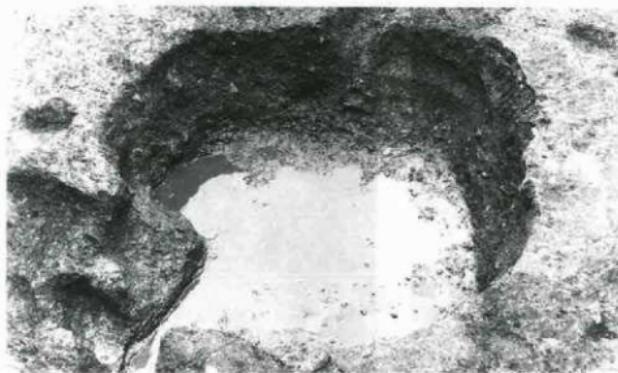
1. II面井戸 1 中央部土層断面（南から）



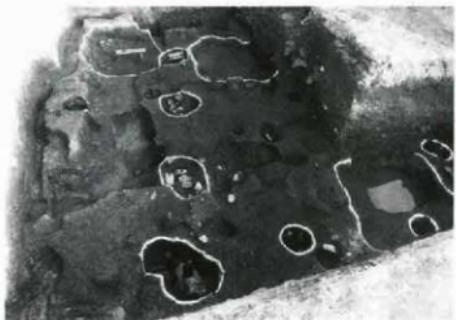
2. II面据妻 2 検出状況（北から）



3. 同底部残存状況（南西から）



4. II面土坑 20 (東から)



1. III面 全景（西から）



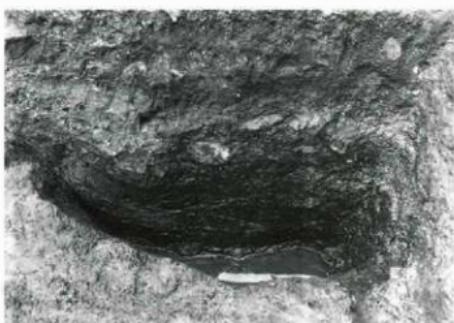
2. III面 柱穴列 4
(手前から) P.1・2・3 (北から)



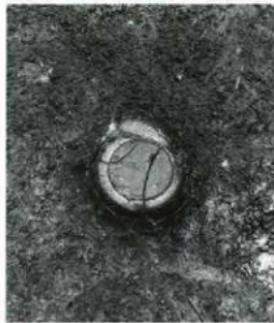
3. III面 (手前から) 柱穴列 3 P.2・柱穴列 4 P.1 (西から)



5. III面 P.325 上層烏帽子出土状況 (東から)



4. III面土坑64土層断面 (東から)



6. III面塗器椀出土状況 (北西から)

図版 6



1. IV面全景（上が北）



2. IV面柱穴列 5 P. 6 (南から)



3. IV面柱穴列 8 (手前から) P. 3 + 2 + 1
(東から)



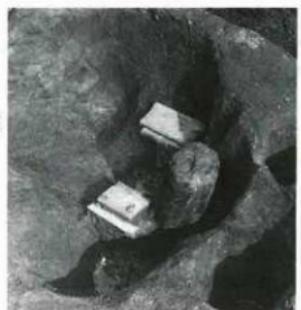
4.
柱穴列 8
P. 1
(西から)



5.
同
P. 2
(西から)



7. IV面圆炉裏状造構検出状況 (東から)



6.
同
P. 3
(西から)



1. IV面井戸 2 (東から)



2. IV面土坑 50 (北から)



3. IV面土坑41・67, P. 315曲物出土状況 (西から)



4. IV面土坑 62 (北から)

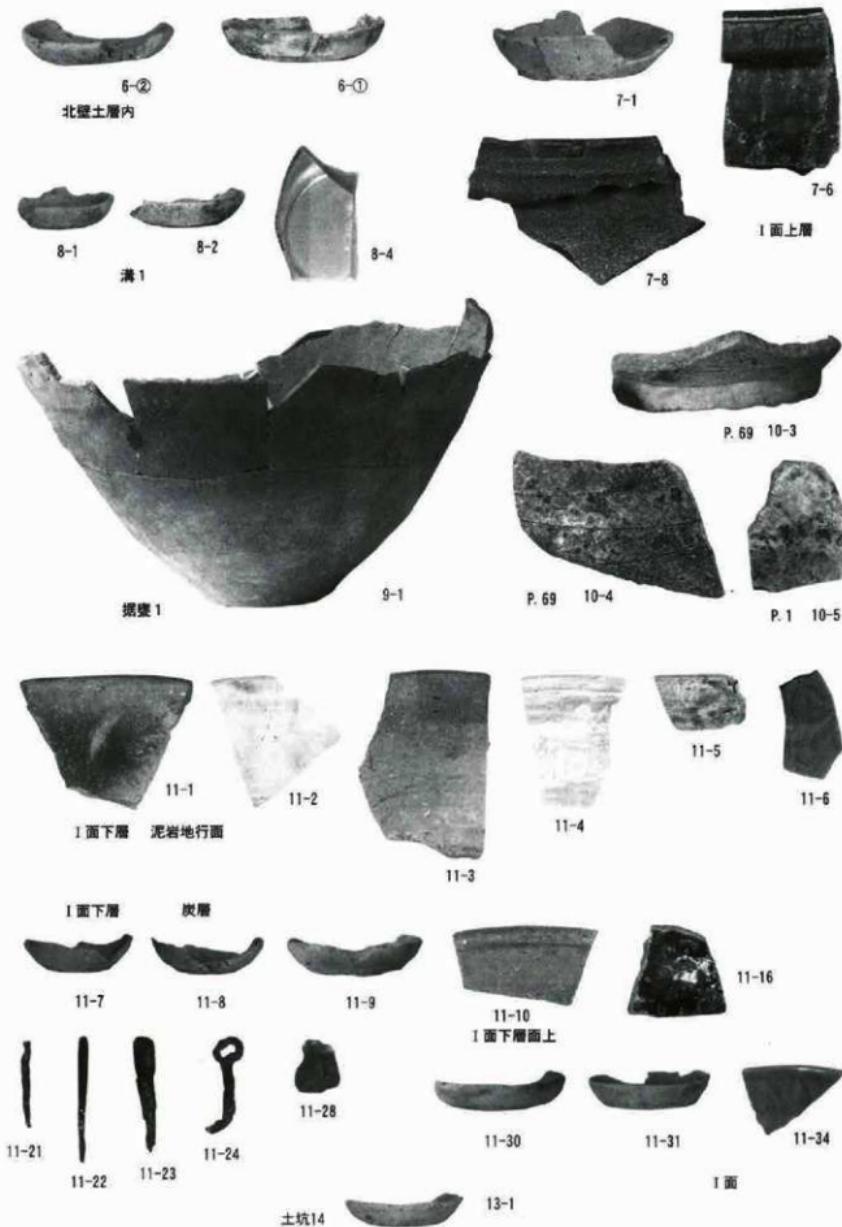


5. IV面土坑 58 (南から)

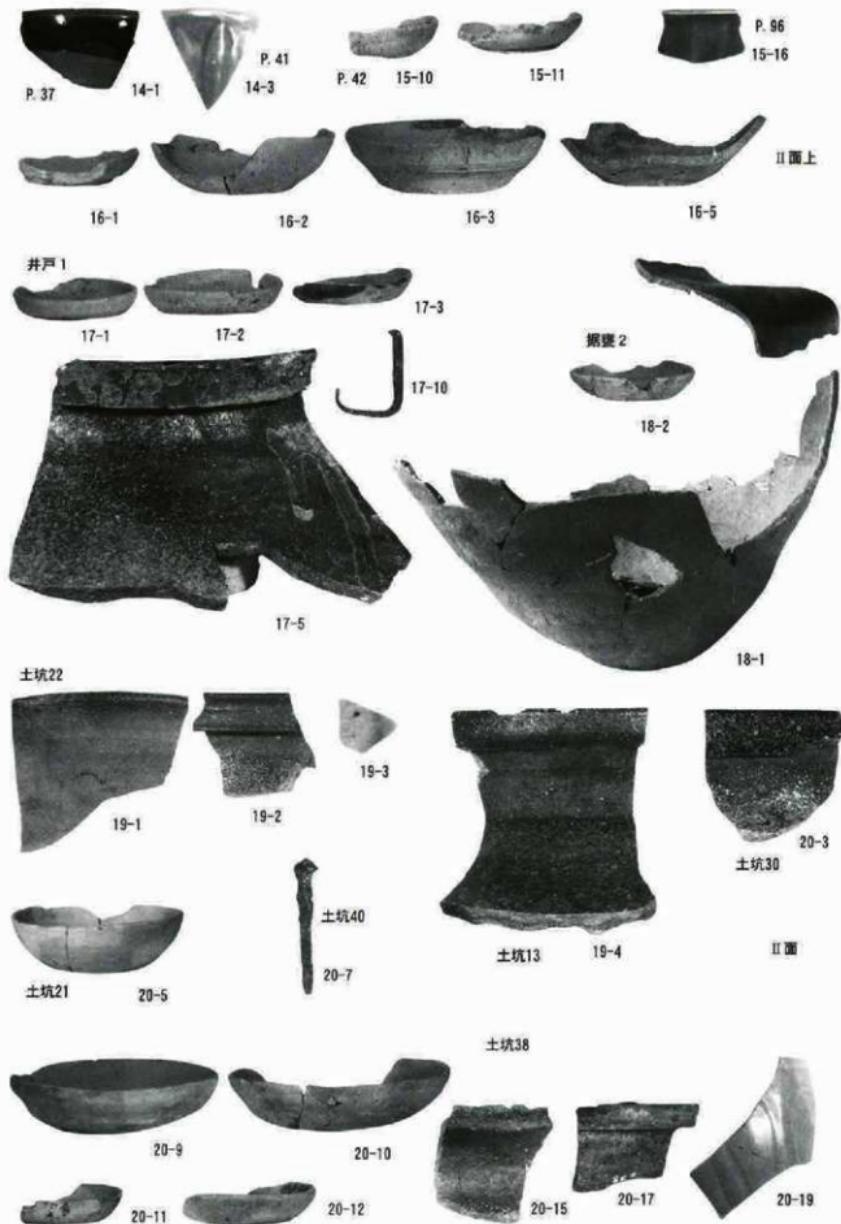


6. IV面土坑 61 (西から)

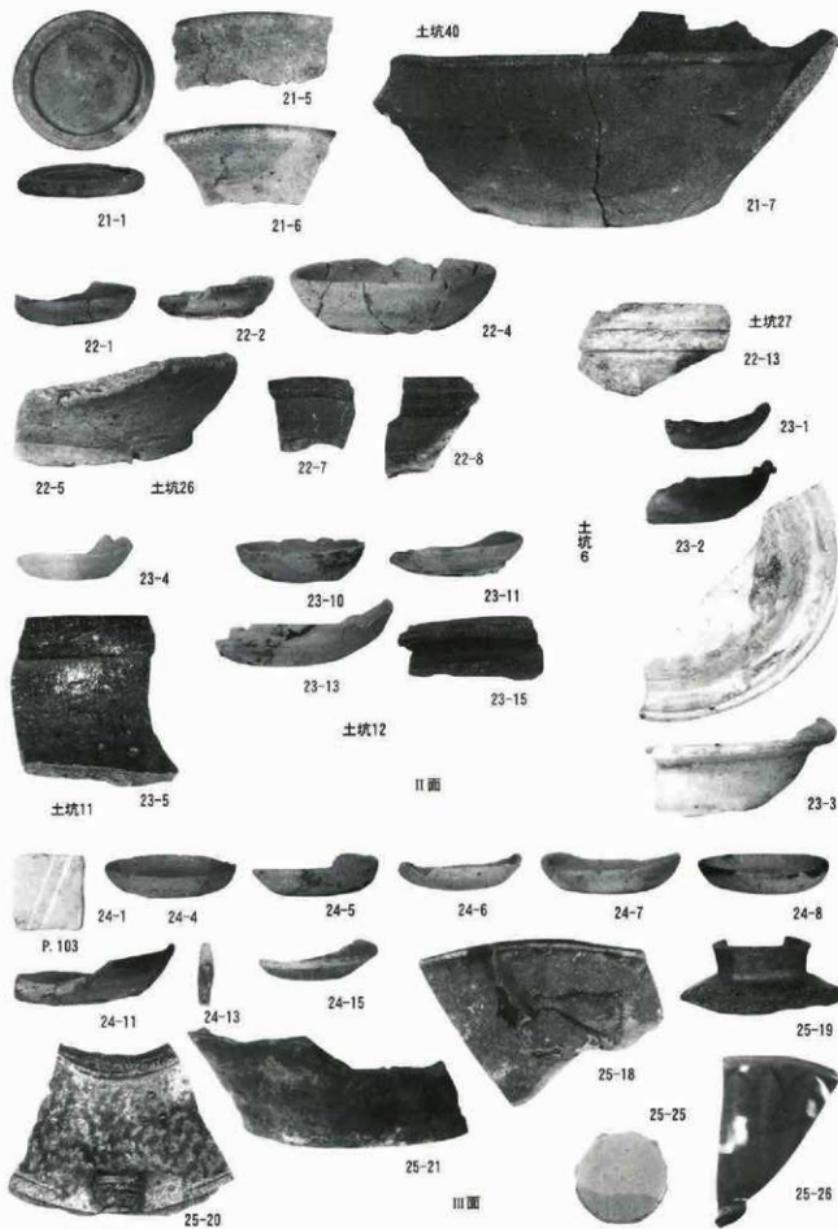
図版8



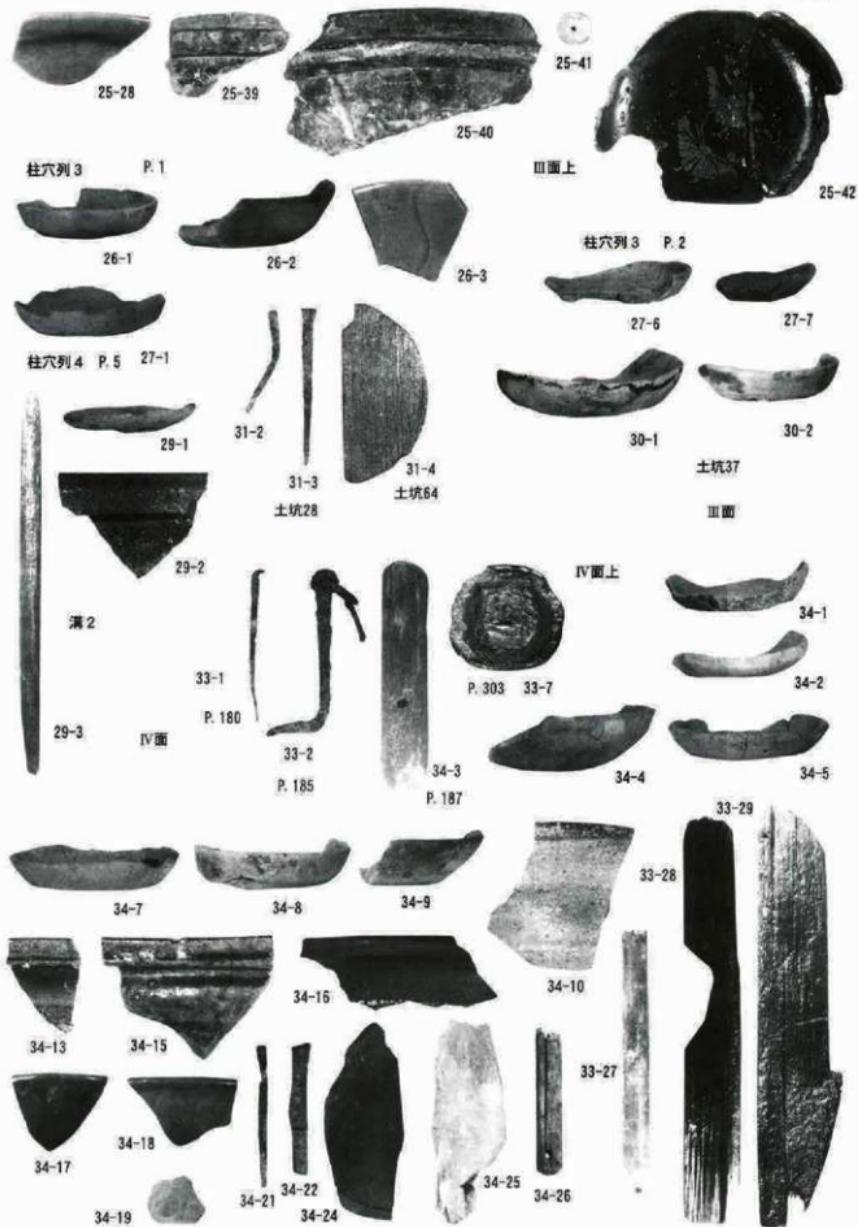
図版9



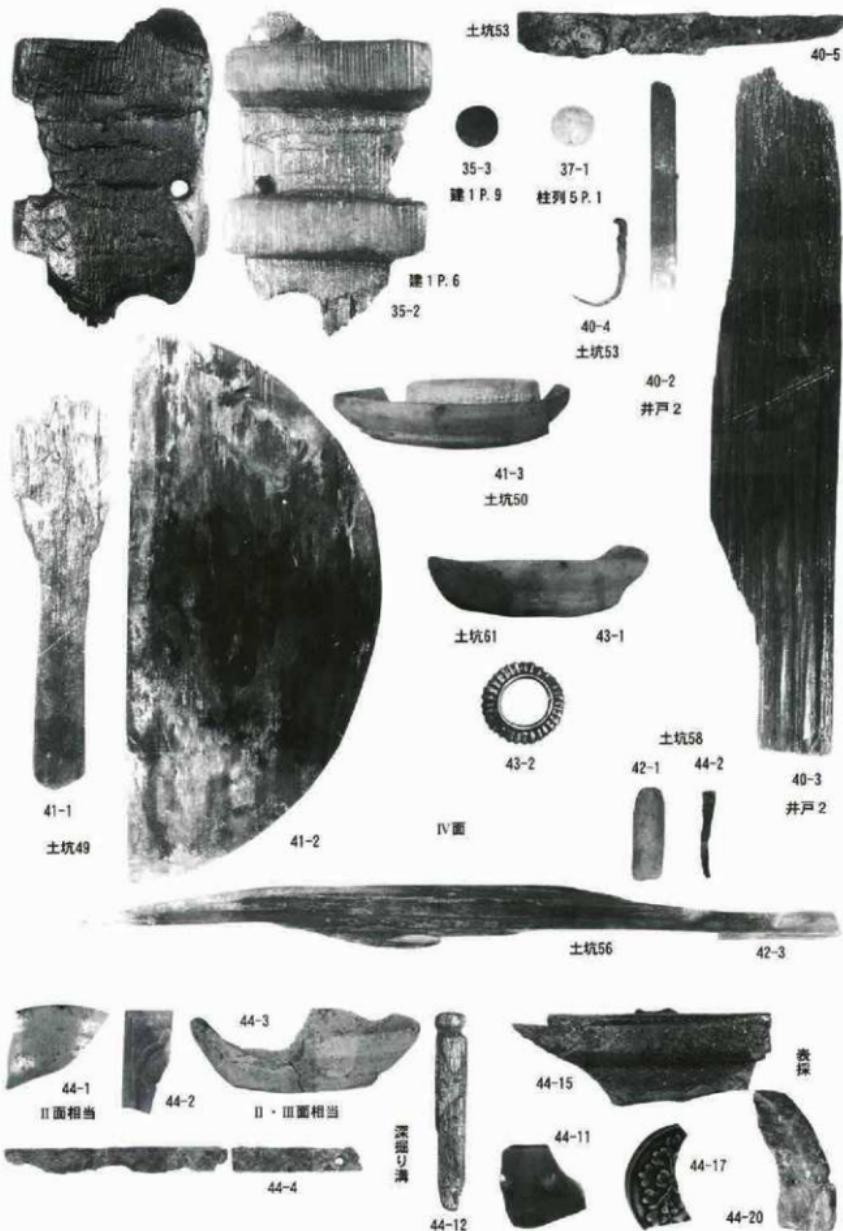
図版10



図版11



図版12



井戸2



左上：梅の種
左下：瓜の種
右上：鱗・貝
(シジミ)
右下：蜆の殻

土坑49



左上：梅の種
左下：瓜の種
右：蜆の殻
右下：魚骨・巻貝

土坑56



左上：梅の種
竹の小枝
左中：瓜の種
右上：魚骨
右中：鱗
下：巻貝

土坑59



蜆の殻

土坑61



左上：梅の種
胡桃
左下：瓜の種
右：魚骨・鱗
微小貝

土坑62



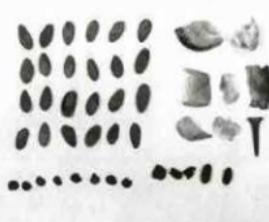
左中：瓜の種
左下：
右中：鱗
右下：蜆の殻

土坑64



左：人糞
中：桃の種
右：梅の種

土坑64



左：瓜の種
右：貝 (バティラ)
鱗・鱗
蜆の殻

なごえがやつはせき
名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町七丁目1615番8地点

例　　言

1. 本書は、鎌倉市大町七丁目1615番8における個人専用住宅新築に伴う埋蔵文化財の調査発掘調査報告である。
2. 調査期間は平成13年9月18日～同年10月13日にかけて実施され、調査対象面積は20.00m²である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査の体制は以下のとおりである。
主任調査員 森孝子
調査補助員 安達澄代・吉原真智子・岩澤智和
作業員 石渡辰男・賀田孝善・多田徳藏・安斎三男（以上、社団法人鎌倉市シルバーハウスセンター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/80・1/40・1/20・1/10（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1/3・1/6

5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。

軸の限界線 ————— 使用痕の範囲 ↗ ← → ↘
調整の変化点 — — — 加工痕の範囲 ↗ ← → ↘

6. 本書の執筆・編集は森孝子が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。

遺構図版 森孝子
遺物図版 河内令子・森孝子
遺構写真 森孝子
遺物写真 森孝子

8. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関に御教示・御協力を賜った。

鎌倉考古学研究所

目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	170
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	172
第3章 検出遺構と出土遺物	175
第4章 まとめ	187

挿 図 目 次

図1 本調査地点及び周辺遺跡	171
図2 遺跡の位置図	173
図3 グリッド配置図	174
図4 基本土層図	175
図5 1面全測図	175
図6 1面かわらけ溜り	176
図7 1面かわらけ溜り出土遺物	177
図8 表土層出土遺物	177
図9 1面出土遺物	177
図10 2面全測図	178
図11 2面据甕	179
図12 2面据甕覆土出土遺物	180
図13 2面東西溝1	181
図14 2面東西溝1出土遺物	181
図15 2面出土遺物	182
図16 3面全測図	183
図17 3面出土遺物	184
図18 4面全測図	185
図19 5面全測図	185
図20 最終面トレンド	186

図 版 目 次

図版1 A. 1面全景〔南から〕	189	図版5 A. 3面P-1・2近景〔南から〕	193
B. 1面かわらけ溜り〔南から〕	189	B. 4面全景〔南から〕	193
図版2 A. 1面かわらけ溜り〔北から〕	190	図版6 A. 5面全景〔南から〕	194
B. 2面全景〔南から〕	190	B. 最終トレンド〔南から〕	194
図版3 A. 2面据甕〔東から〕	191	図版7 出土遺物〔1〕	195
B. 同破片除去後〔東から〕	191	図版8 出土遺物〔2〕	196
図版4 A. 2面東西溝1〔東から〕	192	図版9 出土遺物〔3〕	197
B. 3面全景〔南から〕	192		

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市大町七丁目1615番8地点に所在する。本遺跡地の名称である名越ヶ谷遺跡とは図1に示す黒線で囲んだ地域で、県道鎌倉・葉山線の北東方向一帯、鎌倉市街地で最高峰の衣張山西側の山裾に当たる東西1000m、南北800mの範囲である。遺跡地は大小の支谷が入り組んで、複雑な名越大谷を形成しており、また、中央部には衣張山山麓を水源とし、この谷を作り出した逆川が谷戸筋に沿って西流する。逆川は名越ヶ谷を抜けて南下し、材木座一丁目上河原で滑川と合流し、更に南下して由比ガ浜を抜け、相模湾へと注ぐ。本調査地点は遺跡地の最東末端部、逆川上流域に南臨して所在する。

遺跡地の西限を示す県道鎌倉・葉山線は、鎌倉時代、甘繩～長勝寺あたりまでを大町大路と呼称され、鎌倉の主幹となる若宮大路と交叉しており、鎌倉の都市計画の根幹を為す重要な要素であった。また、古東海道の道筋を継承していると言われており、当時の基幹道路であるとも想定される。また、この道路は防衛上の要衝である名越の切通しへも通じており、重要な軍用路であったとも推察され、この遺跡地がその影響下にあったのは想像に難くない。また、調査地点から500m 北方は北条時政邸があったとの伝承地域である（図1-7）。吾妻鏡代第12建久三年（1192）七月廿四の条に、名越殿と称し頼朝夫婦の渡御を記している。この付近は名越坂切通し方面の防衛拠点でもあり、時政以来、北条氏の居館、或いは、御家人が多く住んでいたと想定される。伝承地背後は「唐糸やぐら」に代表される衣張山やぐら群があり、更に、近辺には「釈迦堂口やぐら群」「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」等、多数のやぐら群が点在している。また、遺跡地内には問注所執事、三善康信氏の屋敷もあったという。吾妻鏡第19、1208年（承元二）正月大十六日の条に、家が焼け、背後の山際に構えた名越文庫内の將軍家御文籍、雑務文書、散位倫兼日記などが、悉く灰燼に帰し、康信が落胆したとの記述がある。

調査地点西方には妙法寺、大寶寺という日蓮宗寺院がある。前者は調査地点より600m の場所に位置しており、楞厳山妙法寺と号す。開山は日蓮、中興開山は5世日叡とする。日蓮の松葉ヶ谷御小庵跡と言われる。また、日叡は大塔宮護良親王の遺児で、幼名を山号、妙法房と称したので寺号としたと伝えられる。また、妙法寺から西に200m 離れて多福山一乗院大宝寺が所在する。開山は日出。この地は新羅三郎義光が後三年の役の後、居館を構え、以後、佐竹一族が居住したと伝える。応永6年、佐竹義盛が鎌倉に多福寺を建てたが早くに廃寺となつたため、日出がここに寺を建造し、旧寺号を山号としたと伝えられる。

遺跡地内では過去に5地点で発掘調査が実施されている。2地点では、13世紀末～14世紀前半には寺院があったと推定される13世紀中葉～14後半の遺構群が確認されている。3地点では13世紀中頃から15世紀にかけての屋敷地の一角を確認している。4地点では14世紀代の布掘り状遺構と方形ピットを確認しているが、性格は不明である。5地点では13～15世紀代の生活の痕跡が確認され、屋敷地の一角であると推定される。6地点では5時期に及ぶ鎌倉時代の遺構群が確認され、寺院または屋敷地の敷地利用の変遷を確認している。

上記のように遺跡地内は武士の邸宅があり、また、寺院やぐらに示されるような宗教的空間でもあった地域であり、本調査地点の性格を十分に窺わせると思われる。

＜参考文献＞

鎌倉市史編纂委員会編纂1979年「鎌倉市史」 『総説編』『考古編』『社寺編』吉川弘文館 白井永二編1992年「鎌倉事典」東京堂出版 黒板勝美編1998年新訂増補「吾妻鏡第2」吉川弘文館 2

地点 宮田真他2001年「名越ガ谷遺跡発掘調査報告書」 3地点 菊川英政「名越ガ谷遺跡」

4地点 田代郁夫「名越ガ谷遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 5地点 沙見一夫他「名越ガ谷遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 6地点 宗臺秀明他「名越ガ谷遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14

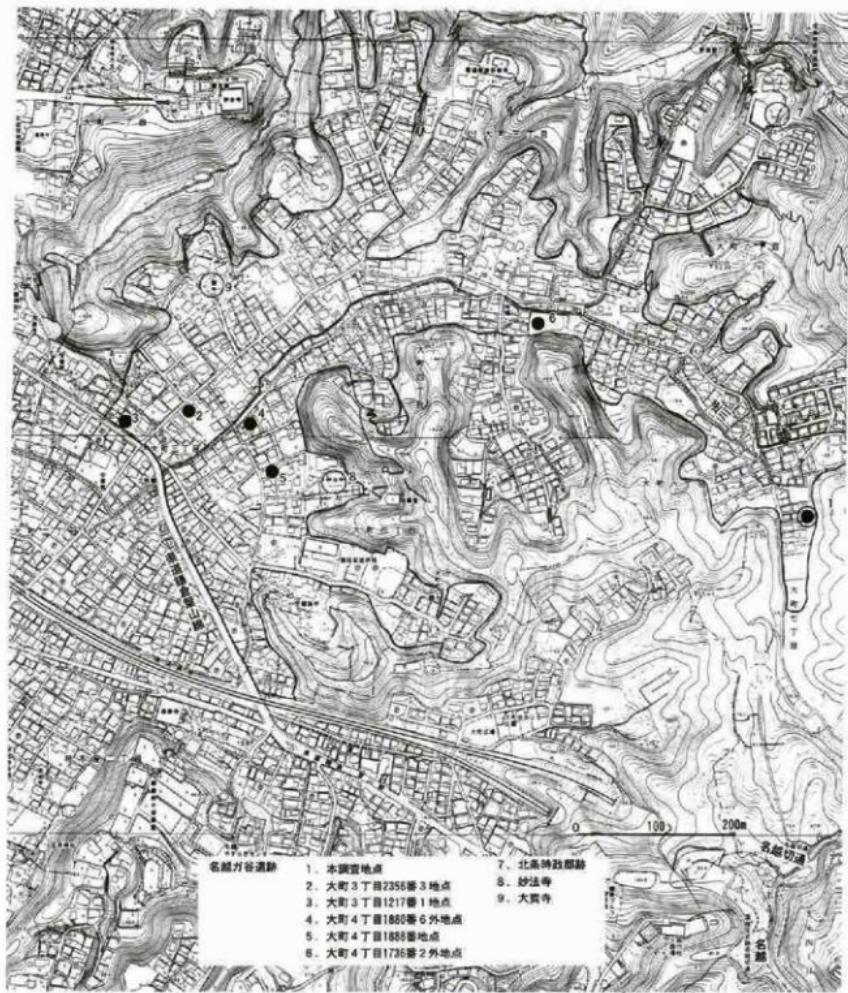


図1 本調査地点及び周辺遺跡

第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層

調査経過

本調査は鎌倉市大町七丁目1615番8地点における個人専用住宅の新築工事の事前調査として、平成13年9月18日～10月13日まで実施した。調査対象面積は20.00m²、掘削深度は現地表から250cmまでである。

- 平成13年9月18日 第1面調査開始。
9月20日 かわらけ溜り検出（試掘時確認）。
9月21日 第1面全景・かわらけ溜りの撮影及び実測。
9月22日 第2面調査開始、平行してかわらけ溜りの実測。
9月25日 東西溝1検出・据置検出。
9月26日 第2面全景撮影・東西溝1、据置近景撮影、及び実測。
第3面調査開始。
9月29日 レベル原点の移動。（本遺跡地の海拔は23.6～8m）。
調査地点を地図に合成するための地形測量。
10月3日 第3面全景撮影及び実測。
第4面調査開始。
10月5日 第4面全景撮影及び実測。
10月9日 第5面（岩盤レベル）調査開始。
10月11日 第5面全景撮影及び実測。
10月12日 トレンチ調査（掘削深度250cmまで下げる）。
全景撮影後、平面実測。調査区北壁、及び東壁の土層図作成。
10月13日 器材撤収。現地調査終了。

遺跡の位置（図2）

今回の調査では近辺の鎌倉市4級基準点が亡失しているため、調査区及び周囲の地形を測量して地図と合成した。

グリッド設定（図3）

測量の基準となるグリッドは調査区の形状に合わせて2×2mの方眼を任意に設定した。南北方向は北からアルファベットを、東西方向は算用数字を用いてその名称とし、各グリッドの名称は北西隅の交点によって表される。また、グリッドの南北の軸方向は磁北より3°8'40"西に傾く。

基本土層（図4）

本調査地点の標高は海拔23.6～23.8mを測り、調査地点の現地形は南東方向から北西方向に緩く傾斜している。今回の掘削深度は現地表下250cmまであり、土層の堆積は下記の通りである。

- 第1層【表土層】 全体に20～30cm前後の堆積である。
第2層【耕作土】 茶色シルト層である。南東方向から北東方向に向って厚く堆積し、10～60cmを測る。
第3層【1面】 暗茶褐色粘質土層で、炭化物、かわらけ粒子、土丹塊が多く混入している。調査区北半は弱い土丹地業がなされていた。

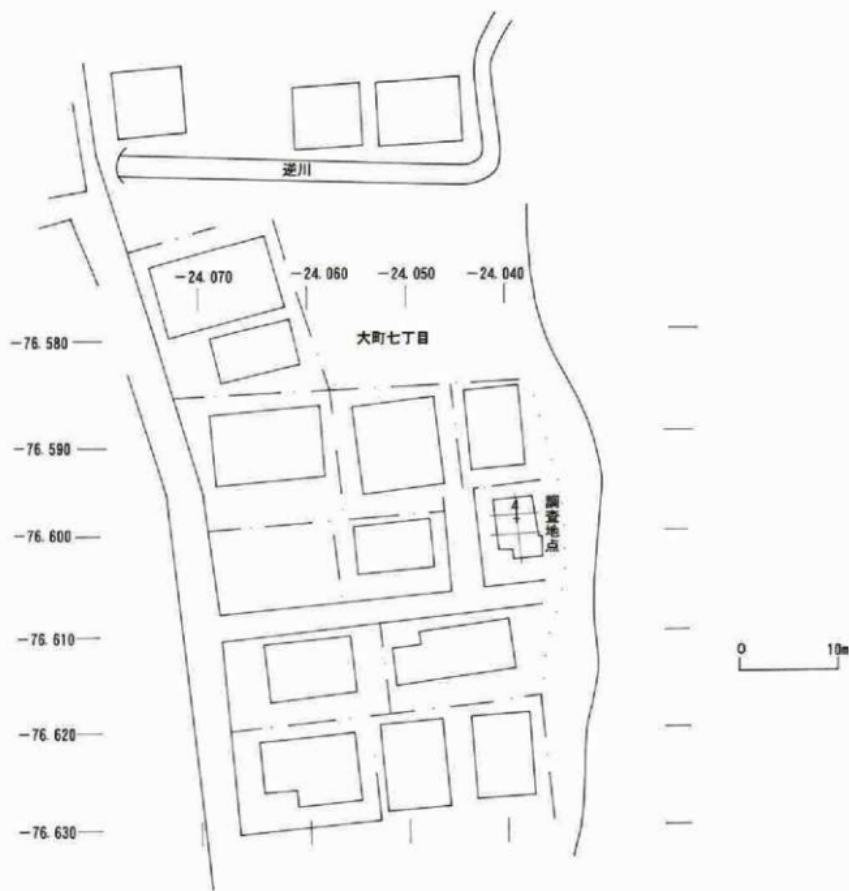


図2 遺跡の位置図

- 第4層 [2面] 小土丹塊を版築した強固な地業層であるが、調査区南半は暗茶褐色粘質土の整地層である。
- 第5層 [炭層] 3面の直上に10cm前後堆積している層である。
- 第6層 [3面] 小土丹を密に突き固めた強固な青黄色土丹地業層である。この面以下は非常に湧水が多い。
- 第7層 [4面] 小土丹を密に突き固めた強固な青灰色土丹地業層である。上層に黒色粘土層が10cm前後堆積する地域もある。
- 第8層 [黒色粘質土層] 南東方向から北西方向に厚くなり、10~30cmの堆積を見る。

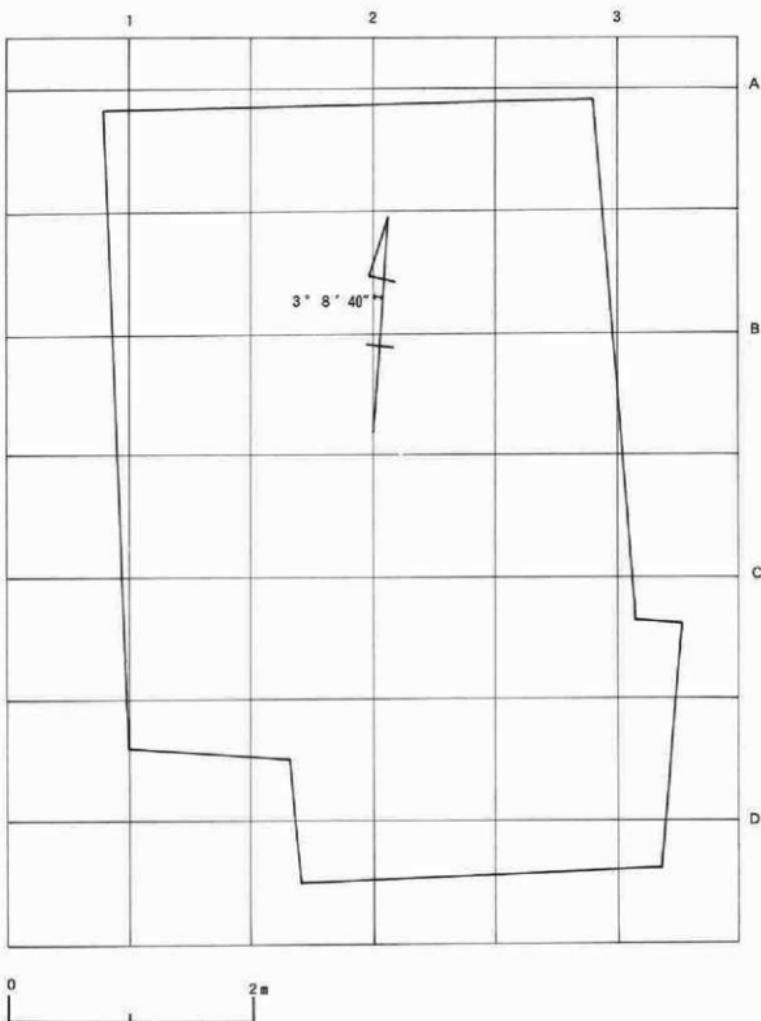


図3 グリッド配置図

第9層 [5面] 調査区南側に検出された岩盤レベルに合わせて地業された青灰色土丹版築層である。

第10層 [黒色粘質土層] 今回の調査の最下層で30cmの堆積が確認された。

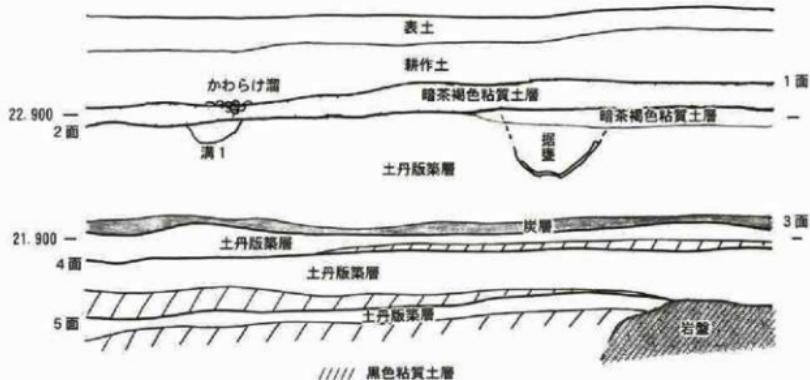


図4 基本土層図

第3章 検出遺構と出土遺物

今回の調査では中世期における5期の遺構群が検出された。各時期共に、生活面は強固な地業、整地が行われており、良好な状態で検出された。また、各時期共に、検出された遺構群は希薄であったが、これは、本調査地点が名越万ガ原遺跡の南端部、谷戸最奥部の狭小な平場という末端部に所在しているためで、本遺跡地の北方向、及び西方向に広がる平場に遺構群は濃厚に存在していると推測され、その一帯が遺跡地の中心部になるだろうと想定される。出土遺物は鎌倉市内の遺跡地のものと、組成、器種共に同様である。また、試掘壕が調査区外の調査区南壁に接したため、それを堀上げた結果、現状、調査区は不正長方形となった。

以下、各面の詳細を述べる。

1.1面の検出遺構と出土遺物

検出遺構（図5）

1面は海拔23.11m～22.95mで検出された。調査区中央付近Bラインから垂直に有段し、Bライン北側（北地区）が低くなり、Bライン南側（南地区）との比高差は16cmを測る。また、北地区と南地区は遺構面の様相が異なり、北地区は土丹が混入した暗茶褐色粘質土で整地がなされており、南地区では土丹により版築が施行

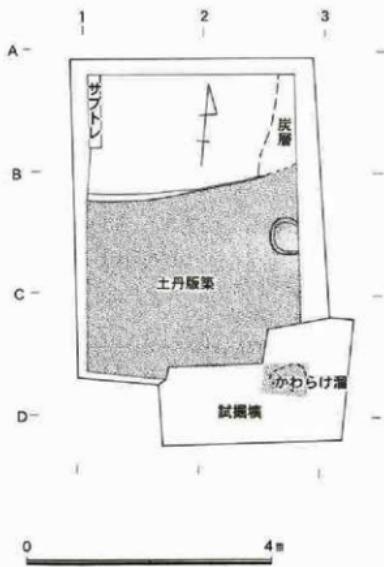


図5 1面全測図

胎土と同様であるが、3、4は黒色粒子の混入が少ない。3、4は器高が低い皿タイプ、5は薄手丸深タイプに近い。口唇端部が端反る。6は白磁碗の口縁部の破片。素地は白色を呈し精緻である。釉調は淡い青白色を呈し、透明度、光沢、艶は良好である。器表は粗く貫入し、気孔が観察される。7～12は瀬戸窯の灰釉製品。7、8は折縁皿。7の復元口径は22.7cmを測るが、8は小片のため口径は不明である。共に胎土は白褐色を呈し、白色粒子を混入する軟質土である。釉は刷毛塗りで、光沢、艶は良好である。8の器表は細かく貫入している。9、10は皿の底部。9の胎土は肌色を呈し、白色粒子を混入する軟質土である。釉調は不透明な灰色である。10の復元底径は5.8cmを測る。胎土は白褐色を呈し、精緻である。釉調は緑色を呈し、透明度、艶、光沢は良好である。器表は細かく貫入している。11は入子の底部片。胎土は肌色を呈し、白色粒子、黒色粒子が若干混入する。底部は笠削り調整である。12は碗の口縁部片。胎土は肌色、釉調は黄白色を呈し、光沢、艶、透明度は良好である。器表は細かく貫入している。13は常滑窯の捏鉢の口縁部片。胎土は灰味橙色を呈し、1mm大の長石を混入する。器表は赤紫色を呈する。口縁部は横なで成形、体部外面は工具による斜め方向の成形、体部内面は指頭による調整である。また、内底面下部の摩滅は顕著である。14は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片。胎土は灰色を呈し、長石、砂粒を含む。口唇端部は丸く收まる。15は錢、嘉泰通寶、背「二」。

2.2面の検出遺構と出土遺物

検出遺構（図10）

2面の遺構群は1面下20cm、海拔22.9～22.7mにおいて検出された。この面は大型土丹塊で版築されており、80～90cmの厚みを持つ。また、遺構面は東側から西側に緩く傾斜しており、その比高差は10cm前後を測る。また、B～Cライン間で様相が異なり、ライン北側は大小の土丹塊を密にした強固な事業面であり、ライン南側は土丹、炭化物、かわらけ粒子により整地した暗茶褐色粘質土の事業面である。また、2面覆土中からは赤く焼けた礎石が検出された。遺構面に火災を受けた様相はないが、少なくとも遺跡地近辺に大火があったと推測される。この遺構面から検出されたのは東西溝1条、据壠1基である。以下、詳細を述べる。

据壠（図11）

この遺構はB～C～1グリッド内に、海拔22.75mで検出された。遺構面に検出された掘方の西側は若干、調査区外に延びる様相を呈するが、ほぼ原状が確認されたと想定される。検出された掘え方の堀方規模は南北77cm、東西89cmを測り、平面形は東西を長軸とする楕円形を呈する。壠は底部から高さ3.5cmまでは原状を呈しており、それ以上～口縁部までは土圧により潰れているが、壠全体の9割が遺存しており、ほぼ全容を把握出来た。壠の上層部にはかわらけ粒子、炭化物、土丹が多く混入しており、

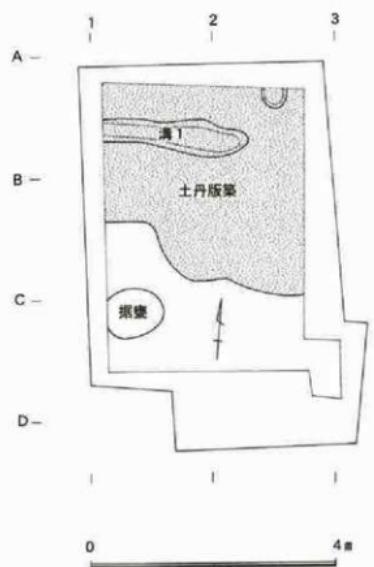


図10 2面全測図

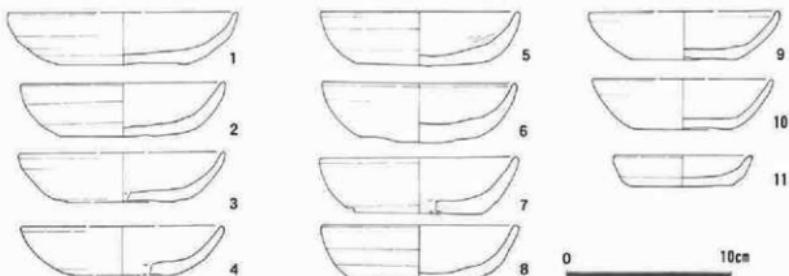


図7 かわらけ窯出土遺物

表土層出土遺物（図8）

1、2は瀬戸窯の灰釉製品。1は折縁皿。胎土は灰色を呈し、精緻であり、また、硬質である。釉調は灰色を呈し、透明度は良いが、艶、光沢は若干劣る。器表は細かい貫入が顕著である。2は入子の底部。復元底径は4.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、精緻な硬質土である。外底部の糸引き痕が明瞭である。3は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片。胎土は暗灰色を呈し、長石粒子を混入する。口縁部内面に若干陥れており、口唇端部は角張る。4、5は錢、4は元符通寶で行書体である。5は建炎通寶で篆書体である。

1面出土遺物（図9）

1～5は輪軸成形のかわらけで、1、2は大皿、3～5は小皿である。大皿の復元口径は13.8cm、13.3cmを測る。胎土は明燈色を呈し、黒色粒子、茶色及び白色軟礫、雲母、白針を含む。薄手丸深タイプに近いが、体部は若干、開いて立ち上がる。3～5の復元口径は8.3～7cmを測る。3、4の胎土は肌色、5は燈色を呈し、混入物は大皿の

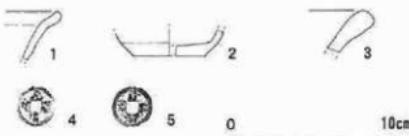


図8 表土層出土遺物

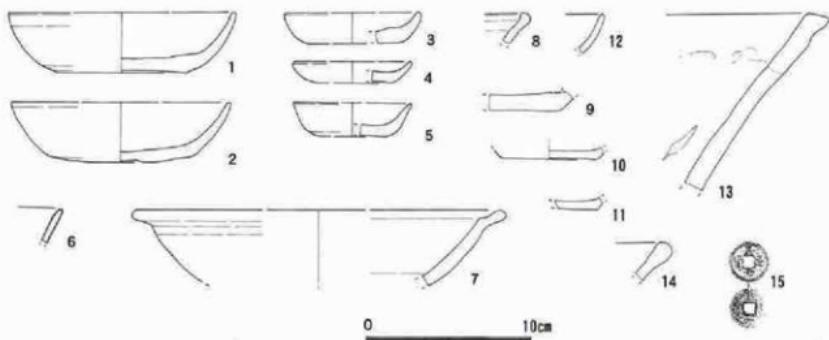


図9 1面出土遺物

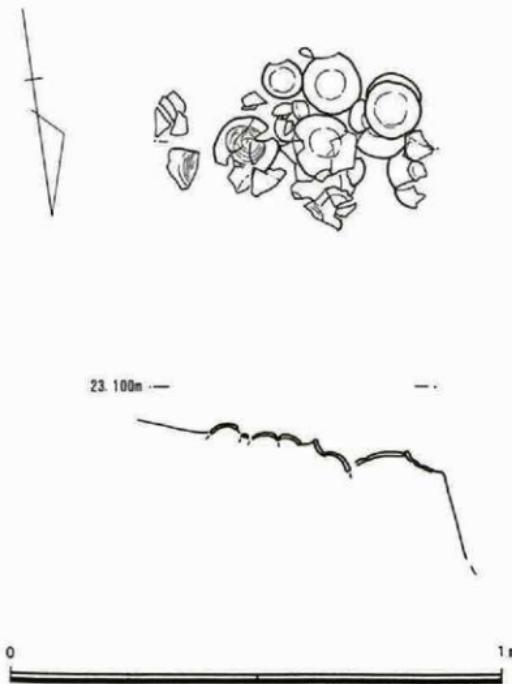


図6 1面かわらけ溜り

され生活面が造成されている。北地区は北東隅、A-2グリッド内に東西幅25~60cm、南北160cmの範囲で炭層が広がる。火災の痕跡の可能性もあるが、この状況からはでは詳細は不明である。また、南地区からは土壤状の落ち込みと、かわらけ溜りが検出された。土壤状の落ち込みは調査区東壁際、B-2グリッド内に確認され、東西45cm、南北55cm、深さは10cmを測る。出土遺物ではなく、単に窓地である可能性が高い。

かわらけ溜り(図6)

試掘時に確認された遺構であり、試掘壕内に検出された。この遺構はC-2グリッド内において、海拔23.1~23.0mで検出された。検出規模は東西60cm、南北40cmを測る。かわらけは概ね2段に重なって検出され、10cm前後の厚みを持つ。また、東側が高く、西側が低く、その比高差は8cmを測る。このかわらけ溜りは全て輪軸成形のかわらけで構成され、出土したのは土圧で割れたものが大半で、遺存状態は良いとは言い難い。

かわらけ溜り出土遺物(図7)

1~11は輪軸成形のかわらけで、1~9は大皿、10は中皿、11は小皿である。大皿の復元口径は14~11.6cm、中皿は11cm、小皿は8.4cmを測る。胎土は燈色~肌色系を呈し、白色、及び茶色軟礫、黒色粒子を多く含み、白針、金雲母が若干混入する。3、4、10、11は器肉が薄く、良く焼き締まる。

下層部には3~5cm大の土丹塊が多く混入している。

据塗覆土出土遺物(図12)

1~3は輪轍成形のかわらけで、1は大皿、2、3は小皿である。大皿の復元口径は11.7cm、小皿は8cm、7.5cmを測る。胎土は橙色を呈し、赤茶色軟繊、雲母、白針を含み、粉質が強い。体部は内湾して立ち上がるが、2は外反して立ち上がる。4~10は磁器。4は割花文白磁皿の底部片。素地は灰白色を呈し、黒色粒子を若干混入し、気孔が観察される。釉調は灰白色を呈し、器表は粗く貫入している。内底面に草花文を割花しており、また、外底部は笠削り調整である。5~10は梅瓶の破片。素地は白色を呈し、白色粒子が混入し、若干気孔が観察される。釉調は淡水青色を呈し、器表は粗く貫入している。5は肩

部、他は体部片。5は牡丹唐草文が丁寧に彫り出されている。6、10は再火を受け器表は爛れている。11~13は常滑窯の甕で、中野編年の7形式である。11の復元口径は19cm、縁帯幅は2.4cmを測る。胎土は茶灰色を呈し、長石粒子が多く混入する。器表は暗紫褐色を呈する。口縁部内部、また、肩部に軽く降灰している。12の口径は51cm、縁帯幅3cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、長石粒子を混入する。口縁部内部~外体部に軽く降灰している。13の復元口径は54.5cm、肩径94cm、高さ81.3cm、縁帯幅3.8cmを測る。胎土は淡褐色を呈し、1mm大の長石、また、小石を若干混入し、中央に黒色の胎芯を残す。器表は暗赤褐色を呈し、口縁部内部~肩部に降灰している。

東西溝1(図13)

調査区北側、A-1グリッド内に海拔22.8mで検出された。溝の西側は調査区外西方向に延びる様相を呈する。検出された堀方規模は東西の長さ246cm、南北幅35~60cmを測り、東側に向かうに従いその溝幅を増す。側壁は開き気味立ち上がり、断面形はU字型を呈する。溝の覆土は黒褐色粘質土で、

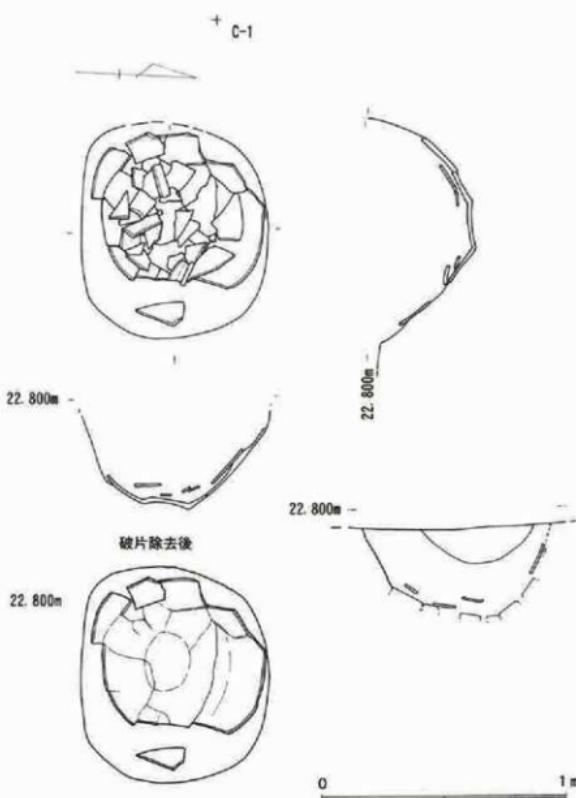


図11 2面据塗

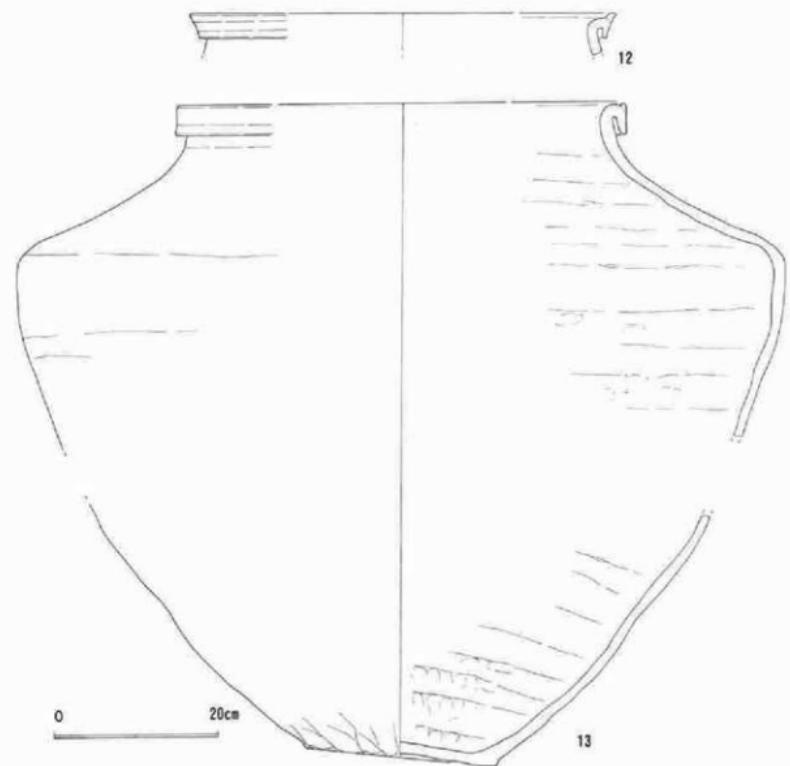
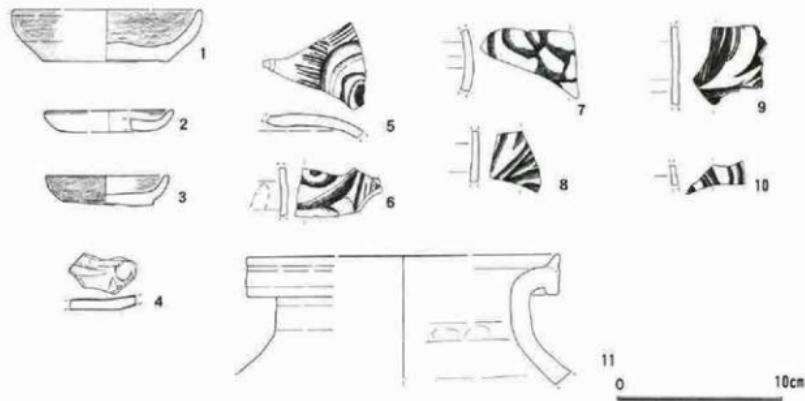


图12 2面据覆土出土遗物

かわらけ粒子、小土丹が多く混入し、縮まりは弱い。この溝の東西の軸方向はN-75°-Eを示す。

東西溝1出土遺物(図14)

1~4は輪轆成形のかわらけで、1、2は大皿、3、4は小皿である。大皿の復元口径は12.7cm、12.8cmを測る。共に薄手タイプであるが、1の胎土は暗橙色を呈し、白針、雲母、赤茶色粒子を含み、2は肌色を呈し、赤茶色粒子、砂粒が多く胎質は異なる。小皿の復元口径は8cmを測る。3の胎土は肌色を呈し、雲母、白針、黒色粒子を含み非常に粉質が強い。4は桃味燈色を呈し、雲母、白針、若干の黒色粒子を含み、焼き縮まる。共に灯明皿である。5は山茶碗窯系捏鉢の底部。復元高台径は12.9cmを測る。胎土は灰色で、1~3mm大の長石、黒色粒子を含む。高台は貼付けられている。内底面の摩滅は顕著である。

2面出土遺物(図15)

1~32は輪轆成形のかわらけで、1~8は大皿、9は中皿、10~32は小皿である。大皿の復元口径は13.6~12.3cm、中皿は10.8cm、小皿は8.6~6.6cmを測る。胎土は肌色~燈色を呈し、3~5mm大の白色軟繊、雲母、赤茶色粒子、白針を含む。若干、砂粒の混入が多く器表はざらつき、18、20、23、26、27はその傾向が強い。大皿は器厚が8mm前後と6mm前後との2種類が半分づつ出土しており、また、体部は丸みを持つが、やや聞き気味に立ち上がる。4~6の口唇端部は直口する。小皿は底部から開いて立ち上がり、体部1/2に稜線を有するものが主流で、あまり開かずに立ち上がるるものも若干出土している。32は薄手丸深タイプである。5、10、21、27、29、30は灯明皿である。33~39は磁器、33~35は青磁連弁文碗の口縁部片で、33、35は錦連弁文である。33の素地は淡橙色を呈し、白色粒子を若干含み、焼成はあまい。釉調は褐緑色を呈し、光沢、艶は良好である。連弁文の幅は広く、器表は細かく貫入している。34の素地は灰色を呈し、若干黒色粒子が混入するが精緻である。釉調は緑灰色を呈し、不透明であり、艶、光沢は無い。35の素地は白色を呈し、若干、気孔が観察される。釉調は緑青色、光沢、艶は良好である。36は白磁口兀皿の口縁部片。素地は白色、釉調は灰白色を呈する。器表には気孔が観察される。37~39は梅瓶。37は頸~肩部で、復元頸部径は5.5cmを測る。素地は白色、釉調は水青色を呈する。器表は細かい貫入が顕著であり、また、再火に遭い、肌荒れしている。38の素地は灰白色を呈し、若干、黒色粒子が混入している。器表は牡丹唐草文であり、粗く貫入している。39の素地は白色、釉調は淡い水青色を呈する。器厚は3mm前後と薄く、器表は再火に遭い、肌荒れしている。40、41は瀬戸の入子。40の復元口径は8.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、若干、白色粒子が含まれる。口唇部から内面全体に降灰している。41の底径は4.2cmを測る。胎土は白褐色を呈し、軟質である。外底部は糸引き痕を有し、また、内面側壁に軽く降灰している。42は東濃型山茶碗。復元口径は13.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、精緻である。側壁は真っ直ぐに開いて立ち上がり、口唇端部に向かうに從い器厚

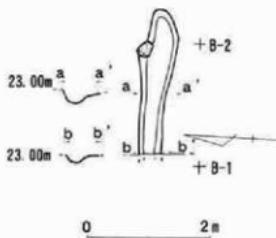


図13 2面東西溝1

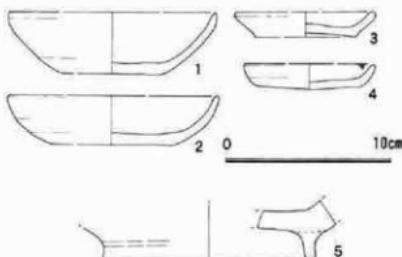


図14 2面東西溝1出土遺物

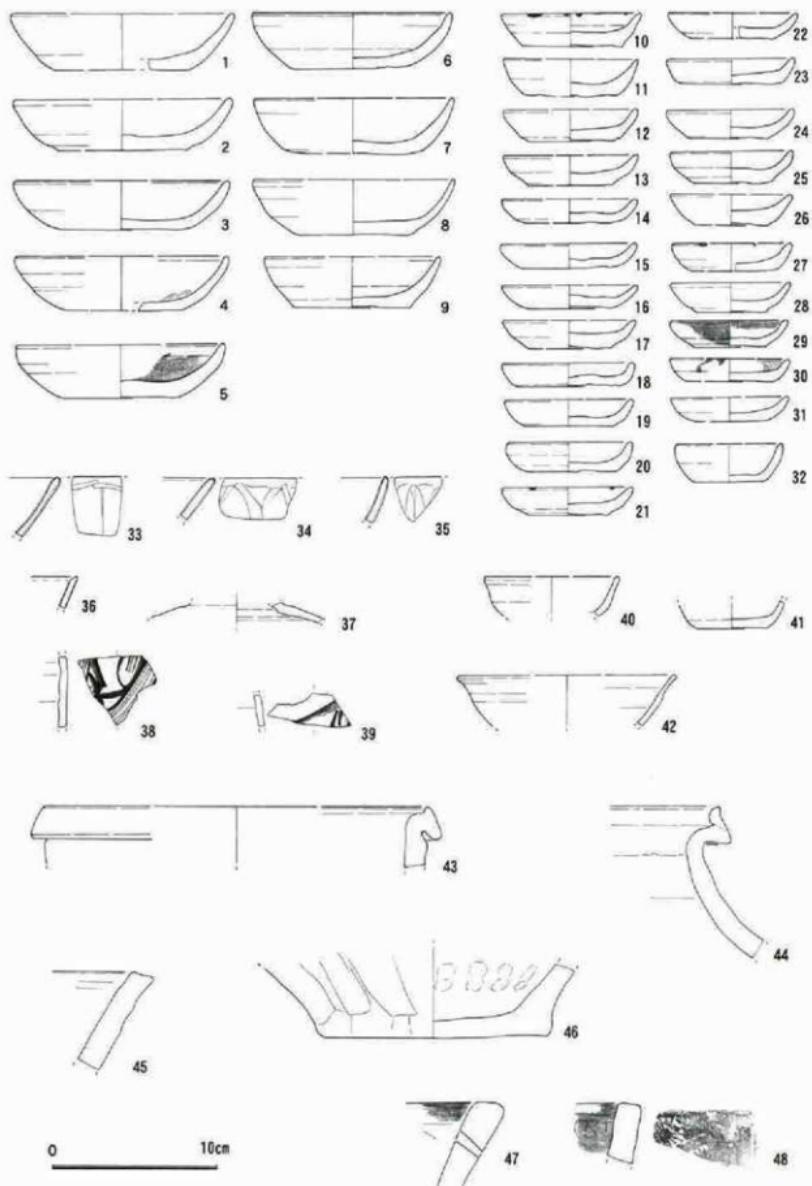


図15 2面出土遺物

が薄くなる。43～46は常滑窯の製品。43、44は甕、45、46は捏鉢。43の復元口径は25cm。縁帯幅2cmを測る。胎土は灰色を呈し、1mm大の長石、黒色粒子を混入する。内面全体に厚く降灰している。44の胎土は黒褐色を呈し、1～2mm大の長石を混入し、硬質である。外面全体に厚く降灰している。45の胎土は燈色を呈し、小石、長石粒子を多く含み、また、中央に黒色の胎芯を残す。口縁部は横なで成形、外体部は工具による斜め方向のナデ成形である。46の底径は14cmを測る。胎土は白褐色を呈し、1～2mm大の長石を混入し、軟質である。内面は指頭による調整、外体部は工具による縦位のナデ、底部脇は横位のなで、また、外底部は丁寧に撫でられている。47、48は瓦質の手培り。47は鉢形。胎土は燈色を呈し、細かい砂を交え、また、黒色の胎芯を残す。体部上方には直径4～7mmの孔を穿つ。口縁部には煤が付着している。48は輪花型。胎土は灰色～桃灰色を呈し、長石が若干混入するが比較的精緻である。内外面共に良く磨かれている。体部外側の口縁下には16弁の菊花スタンプが1個押捺されている。

3.3面の検出遺構と出土遺物

3面検出遺構（図16）

3面は10cm前後の堆積を持つ炭層直下、海拔21.9m前後で検出された。この遺構面以下からは、湧水が多くなり、調査区四周に側溝を掘って調査を実施した。この面は大小土丹を密に版築して、強固に整地がなされており、厚さは20～30cmを測る。この遺構面は平坦であり、また、ピットが4口検出された。覆土は概ね黒色粘土で、炭化物、土丹塊を含み締まりは悪い。P-1・2の堀方規模は40×60cm前後の楕円形を呈し、深さは確認面より15～20cmを測る。また、P-3・4は大半が調査区外にあるため全容は把握出来ないが、様相から判断して、共に平面は隅丸方形を呈すると想定される。P-1とP-2、P-3とP-4は同様相であり、共に南北の軸方向はN-30°-Wを示し、各建造物の1部である可能性もあるが詳細は不明である。

3面出土遺物（図17）

1～11は輪轤成形のかわらけの小皿。復元口径は8.4～7.5cmを測る。胎土は1、2は肌色を呈し、白色軟穢、白針、雲母を含み、比較的きめ細かい。3～11は燈色系で、白針、赤茶色粒子、雲母、若干の白色軟穢を交え、また、砂粒が多く器表はざらつく。概ね口径、底径比の小さい器形が主流を為すが、2、8、9は体部が開き気味に立ち上がり、その比率が若干大きくなる。1、9は灯明皿である。12～17は磁器である。12～15は青磁錦連弁文碗で、連弁文の幅が狭い一群である。12の復元口径は14cmを測る。素地は灰色を呈し、気孔が若干観察される。釉調は灰味緑色を呈し、艶、光沢は良好である。13の口径は12.2cmを測る。素地は青灰色を呈し、黒色粒子を若干混入する。艶、光沢は良好である。14

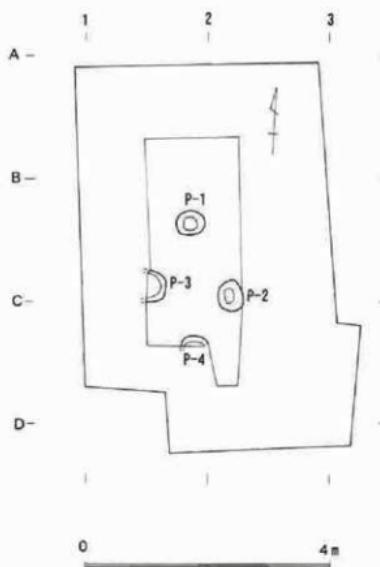


図16 3面全測図

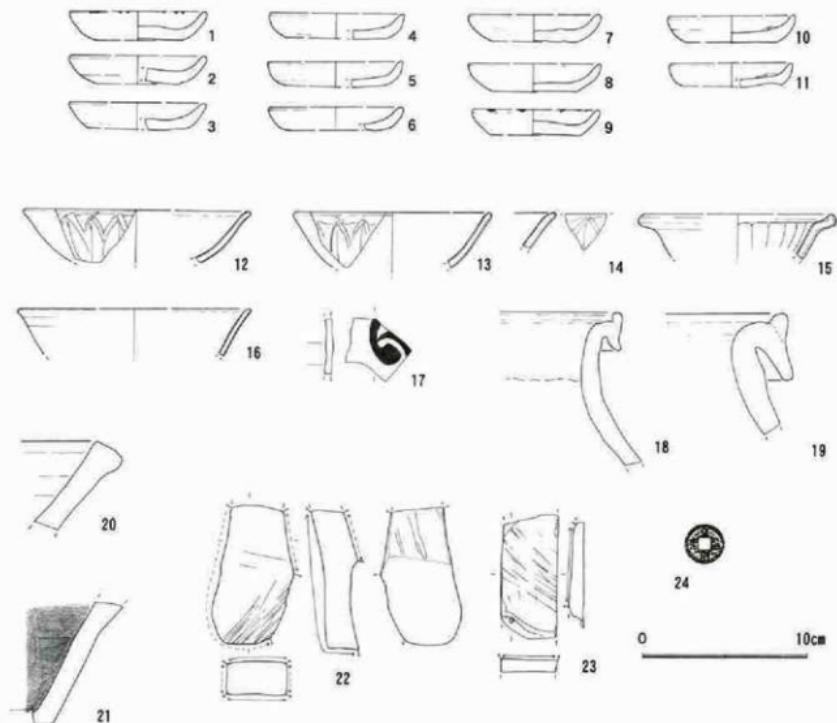


図17 3面出土遺物

は口縁部の破片。素地は白灰色を呈し、釉調は灰味緑色を呈する。口唇端部は端反である。15は青磁双魚文鉢。復元口径は12cmを測る。素地は灰白色、釉調は緑青色を呈する。光沢、艶良く、器表は細かく貫入する。16は白磁口兀碗。復元口径は14.2cmを測る。素地は白色、釉調は緑味白色を呈する。光沢、艶は良好である。17は梅瓶の胴部片。素地は白色、釉調は淡い水青色を呈する。器厚は3mm前後と薄く、器表は再火を受け肌荒れしている。18、19は常滑窯の甕。18の縁帯幅は2.3cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、長石粒子を多く混入する。口縁部に薄く、外体肩部に厚く降灰している。19の縁帯幅は4cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子を多く混入し、黒色の胎芯を残す。口縁部内部に降灰している。20、21は鉢形瓦質手堀りの口縁部片と底部片。胎土は共に燈色を呈し、白色粒子、雲母が含まれ、20には赤茶色粒子も若干観察される。21の内面には煤が全面に付着している。22、23は砥石である。22は凝灰岩製の中砥、23は鳴滝産の仕上砥である。24は銭、皇宋通寶である。

4.4面の検出遺構と出土遺物

4面検出遺構 (図18)

4面は海拔21.67mで検出された。大小の土丹塊で強固に版築されており、厚さ30cm前後を測る。ま

た、50cm以上の大土丹塊も隨所に使用されている。この遺構面は概ね同一レベルではあるが、あまり良好な整地とは言えず、面上は凹凸が顕著である。この面からは遺構の存在は確認されなかつたが、強固な事業の痕跡は確認され、遺構群は調査区外に存在するのであろうと想定される。

5.5面の検出遺構と出土遺物

5面検出遺構（図19）

5面は6~16cm堆積した黒色粘質土の直下に海拔21.2mで検出された。この遺構面は調査区南東隅から検出された岩盤レベルに合わせて事業が行われており、8~16cmの堆積を測る。大小土丹塊を強固に版築して、丁寧な整地が為されている。この遺構面は南東方向から北西方向に向かって緩く傾斜しており、その比高差は最大で15cmを測る。調査区内では遺構は確認されなかつたが、本地点は山際であり、遺構群は調査区外西北域の平坦部にあると推察される。

6.最終面トレンチ調査（図20）

南東隅に確認した岩盤地形の延長を確認するた

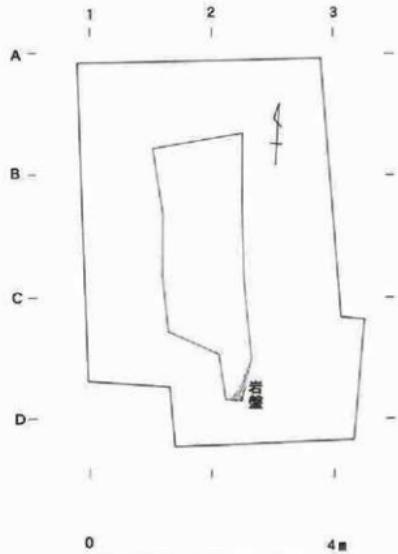


図19 5面全測図

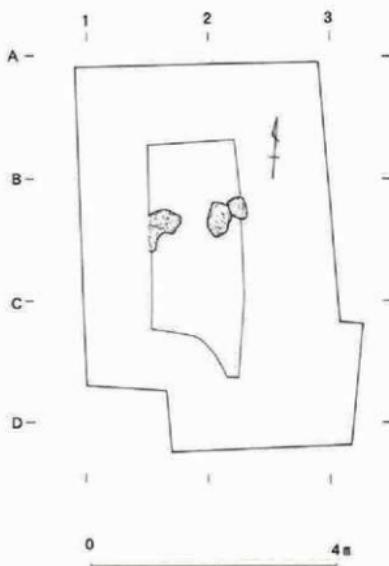


図18 4面全測図

めに、調査区北側と東側の壁際に幅30~40cmのトレンチを設定し、掘削深度の現地表下250cmまでの掘り下げを実施した。岩盤はC-2グリッド内に検出され、それは更に急激に北西方向に落ちてゆくが、北壁際のトレンチ内の北西隅部は更に40cm掘り下げたが、岩盤は検出されず、かなり下に潜り込んでいると予想される。また、5面の版築下には黒色粘土の10cm前後までの堆積が確認された。

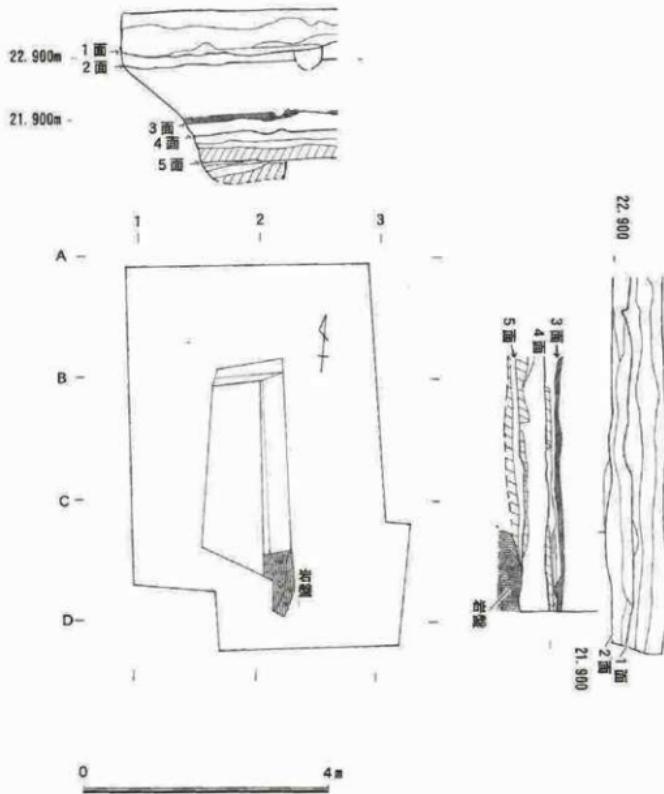


図20 最終面トレンチ

第4章　まとめ

今回の調査では中世期の5面の遺構群が確認された。1～3面までは13世紀末～14世紀中頃までに比定出来る遺物が確認された。下層の4面、5面からはかわらけの小片、常滑の破片のみが出土し、時代を特定出来る遺物は出土していない。また、掘削深度が地表下250cmという制限があり、それ以下の調査は実施されていないため、遺跡の年代の上限は不明である。調査面積が狭く、また、検出遺構も希薄で不明な点が多く、推測の領域は出ないが、以下、若考して、今回の調査のまとめとする。

今回の調査では短期間に頻繁に行われた土地の開発、或いは造成の様相が若干なりとも理解されたと思われる。遺構が確認された3面と1・2面は遺構面の様相が異なり、造成時に土地の利用方法を変えたものと予想される。3面時にはこの地点に建造物が構築されるが、1・2面時には建物はたたず、裏手といった様相を呈する。また、3面の建物の軸方向は大町大路の南北軸と同方向を示すが、2面に造成された東西溝の軸方向は大町大路とは補角関係を取らず、20° 東に傾き、軸方向は調査区北側を流れる逆川の東西軸と同方向を示している。また、3面時から2面時への移行時には大規模な土丹事業が行われており、この造成は基本軸を変える程の大事業であったと想定される。この時期は13世紀末に比定されると推定されるが、調査地点内からは以下の詳細は不明である。

検出された遺構群からはこの遺跡の性格を特徴づける遺構の検出は為されなかったが、舶載陶磁器の青磁連弁文碗、梅瓶の破片が調査面積に比して多数出土していることから、当時この地域には、或いは近隣に寺院、屋敷等が存在したのではないかと想定される。本調査地点の検出遺構、また、山裾隙であるという地形的条件から鑑みても、この調査地点は各時期を通して建物等の裏手に当たるであろうと推定される。

第1章で述べたように本調査地点が所在する名越ガ谷遺跡は開幕直後から造成、開発が実施されている地域である。本調査地点は北方500mには第1代執権北条時政の名越邸、また、南方550mには要塞である名越坂切り通しが在るといった重要拠点の一角に在り、当時から調査地点は確実にその意識下にあったと推察される。また、今回の調査では地山である岩盤も一部しか検出されておらず、5面以下にも遺構面は存在していると想定され、支谷の最末端部ではあるが、鎌倉時代の比較的早期から開発の手は確実に伸びていたのではないかと予想される。



▲A. 1面全景【南から】



▲B. 1面かわらけ掘り【南から】

図版2

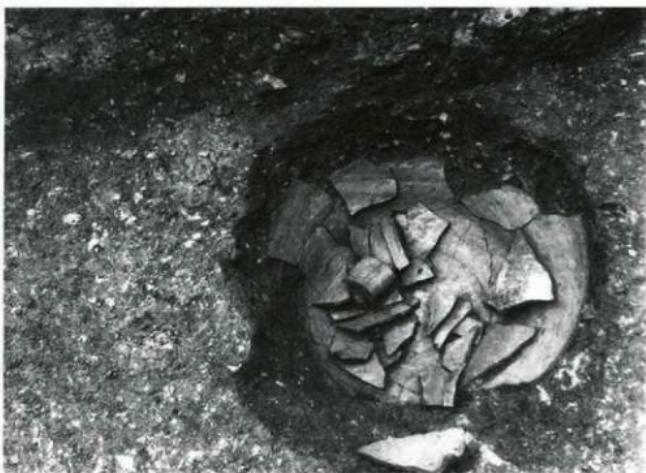


▲A. 1面かわらけ溜り〔北から〕



▲B. 2面全景〔南から〕

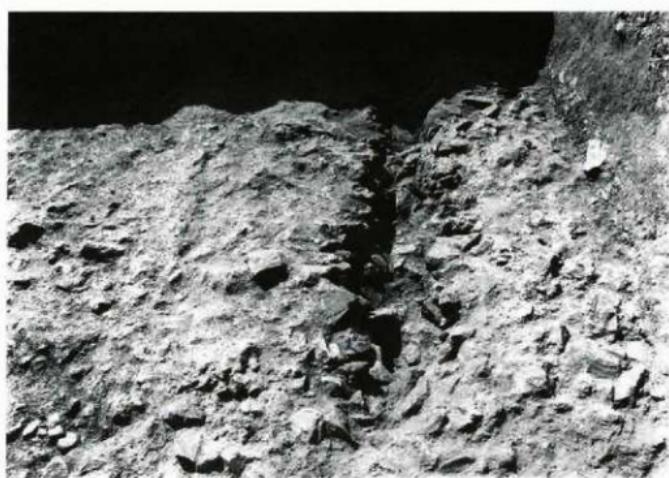
▲ A・2面振葉(東から)



▲ B・同破片除去後(東から)



図版 4



▲ A : 2面東西溝1 (東から)



▲ B : 3面全景 (南から)

図版5

▲ A・3面P-1・2近景〔南から〕(5)

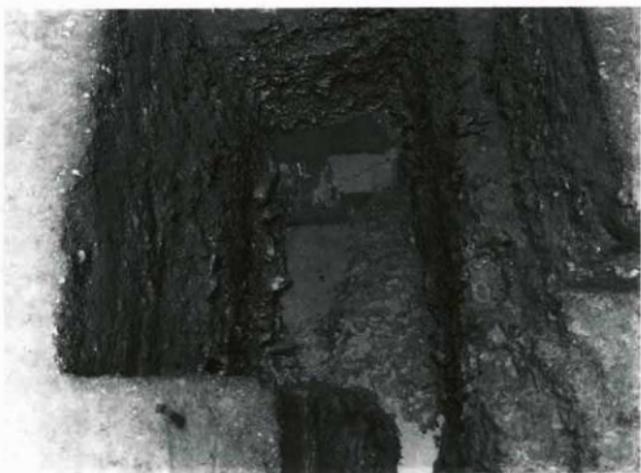


▲ B・4面全景〔南から〕(6)

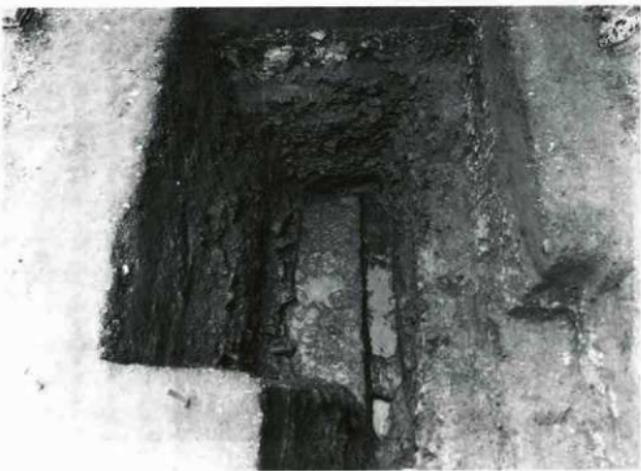


図版 6

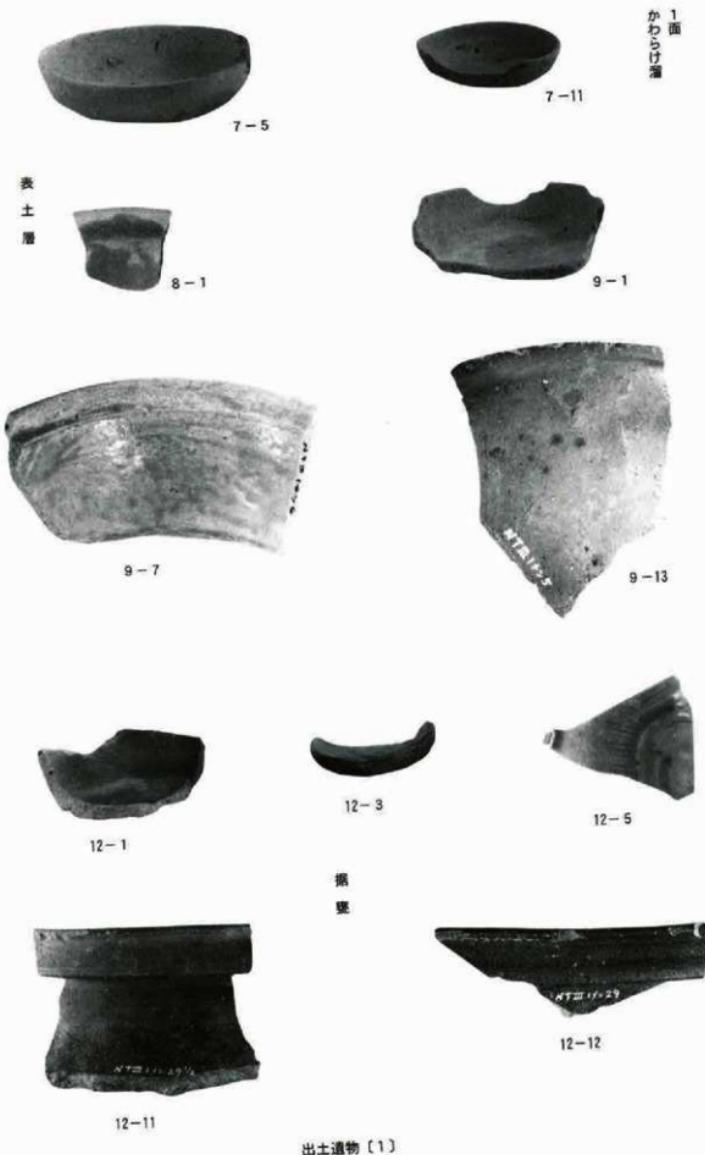
▲ A. 5面全景〔南から〕



▲ B. 最終トレンチ〔南から〕



図版 7



出土遺物 (1)

圖版 8



15-6



15-18



15-21



15-23



15-24



15-29



15-43

2
面



15-46



出土遺物〔2〕



17-7



17-9



17-12



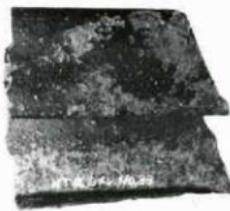
17-13



17-15



17-18



17-19

3面

出土遺物〔3〕

たまなわじょうあと
玉縄城跡 (No.63)

植木字植谷戸198番の一部地点

例　　言

- 1 本報は鎌倉市植木字植谷戸198番の一部地点に所在する玉綱城跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は個人専用住宅に係わる公共下水道工事に先立って実施された。調査面積は73.13m²である。
- 3 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成13年9月25から同年10月31日まで行なった。
- 4 本報の編集・執筆は雑 実・伊丹まどか。図版作成は伊丹・石元道子。写真撮影は遺構を伊丹、遺物を石元。遺物実測・トレースは石元。遺構トレースは伊丹・石元が担当した。
- 5 本文に挿図中に使用した縮尺などは以下の通り。

遺構面全側図···1/120 遺構個別図···1/60・1/80

遺物実測図···1/3

挿図中の水系レベルは海拔高を示す。スクリーントーン等は必要に応じてその都度、文章中に注釈を加えた。

- 6 調査体制は以下の通り。

主任調査員 雜 実

調査員 鍛治屋勝二・伊丹まどか

調査補助員 松原康子・石元道子・渡邊美佐子・田畠衣理

作業員 朝香文保・天野隆男・大戸追猛・河原龍雄・篠原敏夫・照井三喜・中須洋二
沼上三代治

協力機関 犀門倉組・㈲武藏建設・㈱日本土木

- 7 本報作成に際して、田代郁夫・宗基秀明・宗基富貴子（東国歴史考古学研究所）・馬瀬和雄・沙見一夫（鎌倉考古学研究所）川又隆央（鎌倉遺跡調査会）の御教授を賜った。（敬称略）
- 8 調査資料は鎌倉市教育委員会が一括して保管している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	202
第2章 調査の概要	204
第3章 発見した遺構と遺物	205
第4章 調査所見	221

挿 図 目 次

図1 玉綱城範囲と調査地点	203
図2 グリッド設定と国土座標上の位置	204
図3 調査区壁堆積土層図	206
図4 第4面全側図	208
図5 第4面個別遺構図・遺物実測図	210
図6 第3面全側図	211
図7 第3面個別遺構図・遺物実測図	212
図8 第2a面・第2b面全側図	213
図9 第2面・遺構6	214
図10 第2面個別遺構図・遺物実測図	216
図11 第1面全側図・個別遺構図・遺物実測図	217
図12 II区全測図	218
図13 調査地点及び周辺の遺構検出状況	211
表1 調査区壁土層観察註記	207
表2 遺物法量表	219

図 版 目 次

図版1 第4面全景・調査区冠水状況	223
図版2 第3面・第2面全景	224
図版3 第1面全景・遺構6（第2a面）	225
図版4 II区全景・土層堆積	226
図版5 出土遺物	227
図版6 出土遺物	228

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

本調査地点はJR東海道線大船駅の西方約1kmに位置する。遺跡地一帯は標高50~80mの山々の間に複雑に発達した大小さまざまな谷が樹枝状に入り組んだ地形を呈しており、調査地点はその中の一つ、西向きに開口する小谷の開口部に位置する。この谷は、通称「植谷戸¹⁾」と呼ばれる南に向かって開かれた比較的大きな谷の支谷でもあり、植谷戸と相俟つて谷底には広範な湿泥地が形成されている。調査地点の標高は約9.5m、丘陵頂部とは70m前後の比高差を有する。谷内は脆弱な湿泥地であり、かつては田畠が広がっていた。

このように、当該地域は天然の要害として良好な条件を具备しており、戦国時代には後北条氏によって城郭（玉縄城）が築かれている。玉縄城は、三浦氏制圧のため永正9年（1512）に北条早雲により築城された城郭で、三浦氏を討った後、後北条氏は関東一円に支配域を拡大し、4代目の氏政と次の氏直の代には関東の大半を掌握するに至っている。天正18年（1590）には徳川家康を先鋒とする豊臣秀吉の軍勢による小田原攻めにより玉縄城も開城を余儀なくされるが、その間、房州の里見氏、越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄などが相次いで攻め入るもこれによく耐え、江戸城・川越城ともに関東の三名城と呼ばれるような難攻不落の名城であったようである。玉縄城の本丸はいくつもの丘陵が集結する中心部に設けられ（現、清泉女学院校地）、その周囲を堀と土塁によって囲まれている。昭和30年代頃までは城郭形態はあまり損なわれることなく旧状をよく残していたようであるが、その後の度重なる開発によって地形そのものが大きく変貌してしまい、現在では往時の姿はおおよそ窺い知ることはできなくなってしまった。

さて、玉縄城本丸及びその外郭城ではこれまでに20ヶ所に近い地点で発掘調査が実施されている（第1図参照）。これらは主に学校や住宅の建設に伴って実施され、堀・土塁・切岸状遺構といった城郭の防衛遺構の他に、掘立柱建物址・溝・土壌・井戸などの生活遺構などが発見、調査された。調査はこれまで丘陵部に集中し、谷部を主とする周辺低地部の状況は明らかではなかったが、この数年は植谷戸内で相次いで発掘調査が実施され、低地部の状況も次第に明らかとなりつつある。特に平成11年に実施された七曲坂下の調査では、掘立柱建物址・井戸・土壌・溝・やぐらなどの遺構群が発見され、小谷内を造成して生活あるいは寺院空間として利用している状況が確認された（大畠1999）。今回の調査地点は前述調査地点とは尾根一つ挟んだ南側、玉縄城本丸の東南側直下に位置する。

（継 実）

註

- 1) 調査地の地名は「植木字植谷戸」という。地名の由来には「玉縄城防衛のため植木を多くしたので、この名がついたとの言い伝えがある」（源波1979）との説がある。

参考文献

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史・考古編』吉川弘文館。
大河内勉・菊川英政 1994『玉縄城跡発掘調査報告書』玉縄城跡発掘調査団。
大畠明子 1999『玉縄城址（No.63）植谷戸地点発掘調査概報』『東国歴史考古学研究所報』第3号 p.5-6。
源波敏雄 1979『かまくら子ども風土記』中巻 p.70。



図1 玉綱城範囲と調査地点

第2章 調査の概要

1 調査の経緯と経過

本地点は、鎌倉市植木字植谷戸198番の一部地点における既存の個人専用住宅に係る公共下水道埋設工事の事前調査として、平成13年9月25日から10月31日にかけて実施した。調査面積は73.13m²である。調査地の現在の海拔高は9.5m～9.1mを測り、現地表レベルで調査区の北から南に向かって緩く傾斜している。事前の確認調査の成果から、現地表下約90～100cmまでは近現代の遺物を含む客土層であることを確認したため、客土層は重機により除去した。その後人力による掘削、遺構の検出、記録保存、写真撮影を行った。

調査は南北に長軸を持つI区と、I区の東に位置するII区に二分されていたが、排土の処理の関係からII区の調査を先行して行なった。II区の調査終了後、I区の調査を実施。I区は調査区のほぼ中央で土管が調査区内を横断していたため土管下の部分は掘り残して調査をした。調査地は、谷戸内に流れる湧き水の流路上に位置し、水中ポンプ2台を稼働して排水を行ないつつ調査を実施したが、降雨の翌日、翌々日の半日に至るまで、調査区内が冠水し調査に支障をきたす日も多くあった。また、調査区内を横断する土管を界に調査区内の湧水の状況が大きく異なり、土管の南側は湧水量が多く下層の遺構検出が困難であった。

2 調査の方法(図2)

発掘調査実施に当たって遺構測量のためにI区の北位に任意の測量杭A、南位にAから20mの地点にCを設定し、AからCを結び基本軸とした。基本軸に直行する軸線をAから2mの間隔で東西に派生させ2mの方眼を設定した。II区は、基本軸上のB地点(Aから6mの位置)から、基本軸に対して東に110°振り、Bから5mの地点にD、9mの地点にEを設定し遺構測量を行なった。

A～D、それぞれの国土座標値は図2に表記してある。磁北は、測量方眼の基本軸に対して東に21°59' 20" 傾く。
(伊丹まだか)

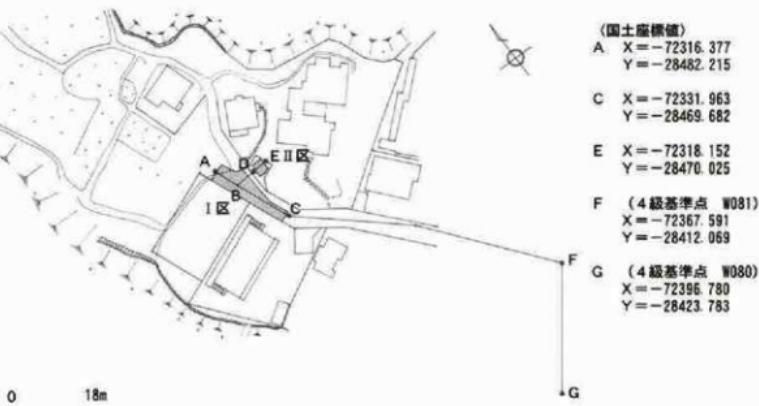


図2 グリッド設定・國土地標上の位置

第3章 発見した遺構と遺物

I区は、湧水に悩ませながらも、上層の客土を取り除いた後、比較的良好に5面の遺構面を発見した。II区では調査深度の限界近くまで、現代の客土によって搅乱されていた上に湧水量が多く遺構面の検出は1面のみであった。

第1節 基本土層層序（図3）

第1面上層は約80~90cmの厚さで、現代の客土が堆積していた。客土と第1面の間層には、宝永2年（1707年）の富士山の噴火による火山灰の堆積が1~3cmの厚さで認められた。I区の北側では平面的な堆積を確認する事は出来なかったが、調査区壁面で数ヶ所確認した。南側では平面的な火山灰の堆積が認められ、遺構含土内にも含まれる。第1面は約10~20cmの厚さの細かい土丹による地業である。第2面は第2a面～第2b面に分けて提示している。第2a面は約10~20cmの厚さで細かい土丹による地業が成される。第2b面の構成土は小土丹、炭化物、砂質土を含む暗茶褐色粘質土が約20cmの厚さで堆積していた。第2b面の上層は細かい土丹によって地業がなされる。第3面の構成土は炭化物、土丹を多く含む暗茶褐色粘質土が約20~40cmの厚さで堆積していた。縮まりのある土ではあったが、地業としては希薄である。第4面より下層は掘削深度の限界までの確認であるが、約40cmの厚さで暗茶褐色粘質土が堆積し、細かい土丹と粘土で構成された層と有機質を多く含む粘質土との互層になっていた。

第2節 I区の遺構と遺物

I区は5面にわたる遺構面を検出した。I区のはば中央に東西に走る土管が調査区を二分していたため、土管を界に北側・南側と文章中で示している。検出遺構面は下層から順に報告し、遺構面ごとの個別遺構は遺物が出土した遺構を優先に個別に提示している。遺構番号は、調査時に付した番号であり、遺構の新旧・形状等を表すものではない。漆製品の実測図で、スクリーントーンで示した部分は赤色漆が塗してある部分である。

1 第4面（図4）

海拔約7.7m~7.9mで確認した。北側では、硬く締まった地業ではないが土丹を含んだ暗茶褐色粘質土と有機質土を多く含む暗茶褐色粘質土の互層による地業が成され、部分的に細かい土丹による地業が見られた。南側では湧水の影響を受け地盤が弛んでいたためか、界の土管下付近には地業層が部分的に確認されたが、以南は有機質土を多く含んだ暗茶褐色土の堆積が広がり遺構の密度も低い。掘削深度の限界である海拔7.5mの深さまで、この堆積状況は続いた。調査範囲が上層に比して若干狭くなっているが、それは後述する溝（遺構6）によって削平を受けていたためである。

発見した遺構は、土壤4基、柱穴12穴、ピット32穴である。発見した遺構は北側に集中し、南側は遺構の密度がかなり低くなっている。これは、場の使い方の違いとともに、湧水により歩くことさえ困難なほど地盤が弛んでいたために、遺構の発見を見逃してしまった可能性も否めない。

柱の遺存する、あるいは柱底の残る柱穴を検出しているが、それぞれの関係については不明である。柱穴の特徴として、遺存していた柱は全て丸柱であった事・柱穴内で土丹による根固めをして柱を固定していた事を確認した。

遺構71 (図5)

南側で検出した土壌である。調査区外に遺構が延びてしまっているため、正確な形状は不明。最大長で138cm、深さ9cmを測る。含土に木片、有機質土を多く含む。

出土遺物 (図5)

1はロクロ成形かわらけ。口縁部に1ヵ所、焼成後に刃物状工具で切り込みを入れている。灯明皿として使用か。

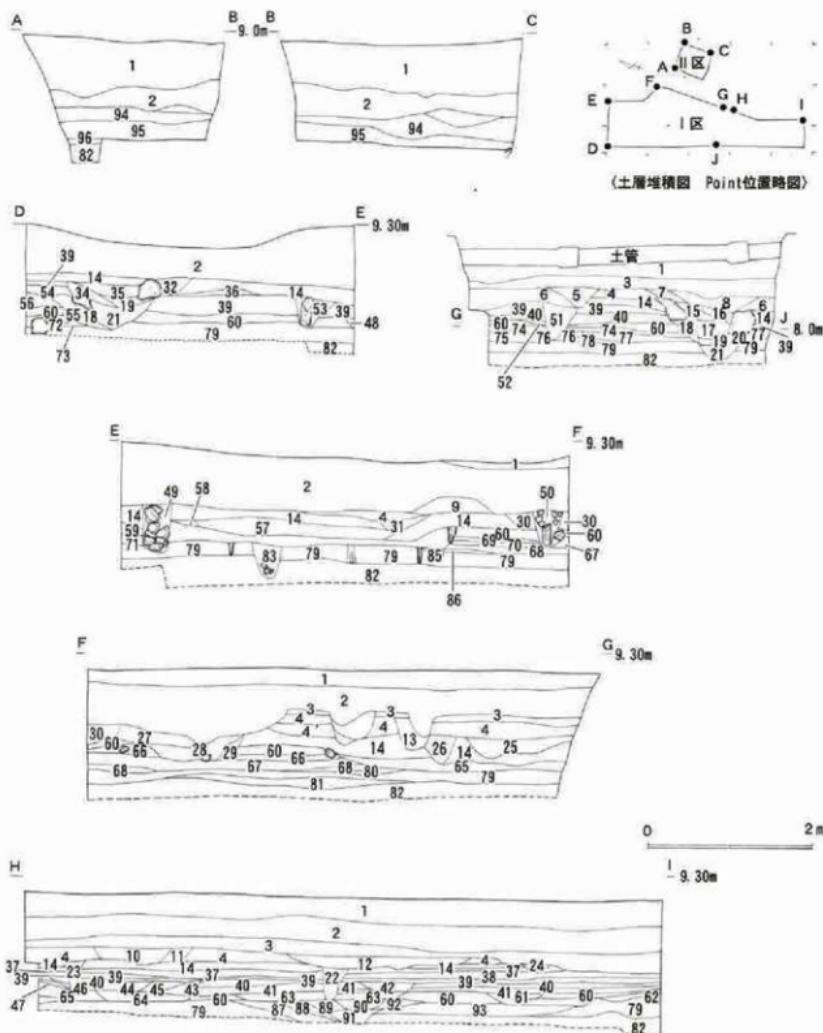


図3 調査区壁堆積土層図

表1 調査区盤堆積土層註記

1 現代・客土	
2 黄色土	土丹・土丹粒を多く含む
3 蒸褐色弱粘質土	宝水火山灰・土丹粒・砂質土含む
4 喜馬色粘質土	土丹・土丹粒を含む。堅く締まる(第1面構成土)
5 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒を含む
6 黑褐色粘質土	炭化物・土丹粒・玉石を含む
7 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒
8 喜馬褐色粘質土	宝水火山灰・炭化物・土丹粒・土丹を含む
9 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒・砂質土を多く含む
10 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒・砂質土を多く含む
11 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒を含む
12 喜馬褐色粘質土	炭化物・土丹粒を含む
13 喜馬褐色弱粘質土	土丹粒を含む
14 喜馬色粘質土	土丹・土丹粒を含む。堅く締まる(第2a面構成土)
15 喜馬色粘質土	土丹粒・砂質土を多く含む。(道構6合土)
16 喜馬色粘質土	土丹粒・砂質土多く含む。締まりが弱い(道構6合土)
17 喜馬色粘質土	土丹粒多く含む・砂質土含む。粘性あり(道構6合土)
18 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒含む(道構6割り方合土)
19 喜馬色弱粘質土	19層底面は、土丹粒で丁寧に突き固められる。(道構6合土)
20 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒を含む(道構6割り方合土)
21 喜馬色弱粘質土	土丹粒・砂質土を多く含む(道構6割り方合土)
22 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒・炭化物を含む
23 喜馬色弱粘質土	粘質土・土丹粒・有機質土を含む
24 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒・炭化物を含む
25 喜馬色弱粘質土	土丹粒を含む。堅く締まる
26 喜馬色弱粘質土	土丹粒を含む。堅く締まる
27 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒を含む(第2a面構成土の崩れかず)。
28 喜馬色粘質土	土丹粒・炭化物・炭を含む。締まりが弱い(道構6合土)
29 喜馬色粘質土	土丹・土丹粒を含む
30 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒・炭化物を多く含む。堅く締まる
31 喜馬色粘質土	土丹粒・炭化物少量(2面a構成土)
32 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒・締まり弱い(崩れ)
33 喜馬色弱粘質土	成化物・土丹粒(道構6合土)
34 喜馬色土	土丹・道構6の隙間に使用した土丹の崩れかもしれない。(道構6合土)
35 喜馬色土	土丹・土丹粒・砂質土を含む
36 喜馬色弱粘質土	砂質土を含む
37 喜馬色弱粘質土	土丹粒・堅く締まる(第2a面構成土)
38 喜馬色粘質土	土丹粒・炭化物少額・堅く締まる(第2a面構成土)
39 喜馬色粘質土	土丹粒・炭化物少量・堅く締まる(第2b面構成土)
40 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒を含む。堅く締まる(第2b面構成土)
41 喜馬色弱粘質土	砂質土を含む(第2b面構成土)
42 喜馬色粘質土	土丹粒・炭化物を含む
43 喜馬色弱粘質土	土丹粒・有機質土を含む
44 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒多く含む(道構24合土)
45 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒・有機質土を含む(道構24合土)
46 喜馬色粘質土	炭化物・土丹粒を含む。堅く締まる
47 喜馬色土	土丹・土丹粒を含む。堅く締まる。
48 喜馬色粘質土	土丹・土丹粒を含む。
49 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒・有機質土を含む(柱穴)
50 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒・有機質土を含む(柱穴・丸柱が遺存する)
51 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒を含む(柱穴)
52 喜馬色土	炭化物の堆積層
53 喜馬色粘質土	土丹粒を含む(柱穴・丸柱が遺存する)
54 喜馬色粘質土	土丹・土丹粒を含む。堅く締まる
55 喜馬色粘質土	土丹粒を含む。粘性強い(道構6割り方合土)
56 喜馬色弱粘質土	砂質土を含む
57 喜馬色弱粘質土	有機質土の堆積層・土丹・土丹粒・少量の炭化物を含む
58 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒を含む
59 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒を含む
60 喜馬色土	土丹層(第3面構成土)
61 喜馬色粘質土	砂質土を含む
62 喜馬色粘質土	土丹粒・砂質土・有機質土を含む
63 喜馬色粘質土	土丹粒・砂質土・有機質土を含む
64 喜馬色弱粘質土	土丹粒・砂質土を多く含む(道構24合土)
65 喜馬色弱粘質土	土丹粒・土丹・砂質土を多く含む(道構24合土)
66 喜馬色粘質土	土丹粒を含む。粘性強い
67 喜馬色弱粘質土	土丹粒・土丹を含む。堅く締まる
68 喜馬色弱粘質土	土丹粒を含む。粘性強い
69 喜馬色弱粘質土	粘性強い
70 喜馬色粘質土	土丹粒・土丹を含む。粘性強い
71 喜馬色弱粘質土	土丹粒・砂質土を多く含む(道構23合土)
72 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒・砂質土を含む
73 喜馬色土	土丹・土丹粒を多く含む。堅く締まる(第4面構成土)
74 喜馬色粘質土	粘性強い(第3面構成土)
75 喜馬色粘質土	土丹粒を含む。粘性強い
76 黑褐色粘質土	土丹粒・有機質土を多く含む
77 喜馬色弱粘質土	土丹粒・粘質土を含む。粘性が強い
78 喜馬色弱粘質土	土丹粒・砂質土を含む
79 喜馬色粘質土	土丹粒・砂質土を含む(第4面構成土)
80 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒・有機質土を含む。堅く締まる(第4面構成土)
81 喜馬色粘質土	土丹粒・土丹・有機質土の互層になっている(第4面構成土)
82 喜馬色弱粘質土	土丹粒・有機質土・砂質土の互層になる(第4面構成土)
83 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒を含む(土丹による細かい根根有。往々遺存していない)
84 喜馬色弱粘質土	有機質土を含む。杭が遺存する
85 喜馬色弱粘質土	土丹粒を含む。粘性強い
86 喜馬色土	土丹粒を含む。堅く締まる(第4面構成土)
87 喜馬色粘質土	土丹粒・土丹を含む(道構71合土)
88 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹粒・砂質土を含む(道構71合土)
89 喜馬色粘質土	粘性強く、堅く締まる(道構71合土)
90 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒を多く含む(道構71合土)
91 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒を多く含む(道構71合土)
92 喜馬色弱粘質土	粘性強く、堅く締まる(道構71合土)
93 喜馬色弱粘質土	砂質土・土丹粒・有機質土を含む(道構71合土)
94 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹・土丹粒を含む
95 喜馬色弱粘質土	炭化物・土丹・土丹粒を含む。
96 喜馬色弱粘質土	土丹・土丹粒を含む。堅く締まる。

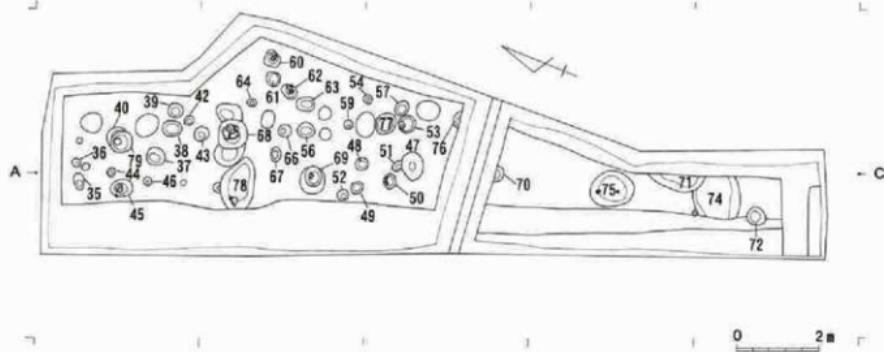


図4 第4面全側図

遺構75（図5）

南側で検出した土壙である。長軸で104cm、短軸で86cm、深さ16cmを測る土壙内で杭を確認したが、土壙との関係は不明である。地盤がゆるく、土壙の西方は崩れてしまい、平面形は推定である。

出土遺物（図5）

2は瀬戸捕鉢II類。口縁部、片口の整形痕が一部残る。

遺構35（図5）

北側で検出したピットである。長軸で38cm、短軸で26cm、深さ33cmを測る。含土は土丹粒・砂質土を含む暗褐色粘質土。

出土遺物（図5）

3はロクロ成形かわらけ。胎土、褐色を呈する。

遺構44（図5）

北側で検出した柱穴である。円形を呈し、直径20cm、深さ20cmを測る。検出することは出来なかつたが、柱穴中央に杭、あるいは柱材と思われる木痕を確認している。含土は砂質土、土丹粒を含む暗褐色粘質土。

出土遺物（図5）

4はロクロ成形かわらけ。胎土、褐色を呈する。二次焼成のためか内外面器壁に剥離痕あり。口唇部油煤痕残る。この他に、かわらけの口唇部に鉄滓状の物質が付着している破片が1点出土している。とりべとして使用したかと思われるが、高温でかわらけを熱した場合にかわらけ胎土内の含有物が溶けだして、鉄滓状に固まった可能性もある。図示出来なかった遺物は瓦器質火鉢1点。

遺構48（図5）

北側で検出したピットである。ほぼ円形を呈し、径は32cm×30cm、深さ30cmを測る。

出土遺物（図5）

5はロクロ成形かわらけ。胎土、赤褐色を呈する。

遺構55（図5）

北側で検出したピットである。円形を呈し、長軸で34cm、短軸で30cm、深さ29cmを測る。含土は有機質土、土丹の混入する暗褐色弱粘質土。

出土遺物（図5）

6・7はロクロ成形かわらけ。6は内底、口唇部に油煤痕残る。胎土赤褐色を呈する。7は口唇部を一部打ち欠いている。器形の歪みが大きい。胎土、灰褐色を呈する。

遺構56（図5）

北側で検出した柱穴である。やや梢円を呈し、長軸で42cm、短軸で38cm、深さ57cmを測る。含土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土。柱穴下層および側面は土丹で固められていた。木痕は残っていなかつたが、柱穴と思われる。

出土遺物（図5）

8はロクロ成形かわらけ。胎土、赤褐色を呈する。

遺構60（図5）

北側で検出した柱穴である。柱穴内には柱が遺存しており、土丹を柱材周囲に詰めて柱材を柱穴内に固定していた。柱材は難に面取りして整形している。また、材全体は炭化していた。平面形は円形を呈し、径40cm、深さ47cmを測る。含土は砂質土の多く混じる暗褐色弱粘質土。

出土遺物（図5）

9はロクロ成形かわらけ。口唇部対面上で2ヵ所、打ち欠いている。器壁や外反して立ち上がる。胎土、赤褐色を呈する。図示出来なかった遺物は、ロクロ成形かわらけ（大）2点・（小）6点。

遺構61（図5）

北側で検出したピットである。円形を呈し、長軸で36cm、短軸で33cm、深さ22cmを測る。含土は砂質土の多く混じる暗褐色弱粘質土。

出土遺物（図5）

10は錢。図示出来なかった遺物は常滑片口鉢II類1点。ロクロ成形かわらけ（小）4点。

遺構70（図5）

南側で検出したピットである。調査区外に遺構が延びてしまっているため、正確な形状は不明。深さ30cmを測る。含土は有機質土を多く含む暗茶褐色粘質土。

出土遺物（図5）

11は常滑片口鉢II類、口縁部片。内壁は口唇部近くまで磨耗している。12は鉄軸小皿。13～18はロクロ成形かわらけ。14は器壁は外反して立ち上がる。褐色を呈し、小石粒の混じる粗い胎土。13は内底、内側面に油煤痕残る。器壁は直立して立ち上がる。口唇部、残存部分のみでの確認であるが、1ヵ所打ち欠いている。砂質土の混入する硬質な胎土で、灰褐色を呈する。15は胎土、赤褐色を呈する。16は胎土、赤褐色を呈する。17は胎土、赤褐色を呈する。内底のナデ跡く残る。18は胎土、赤褐色を呈する。側壁外反して立ち上がる。

図示出来なかった遺物は、ロクロ成形かわらけ（大）1点・（小）5点。

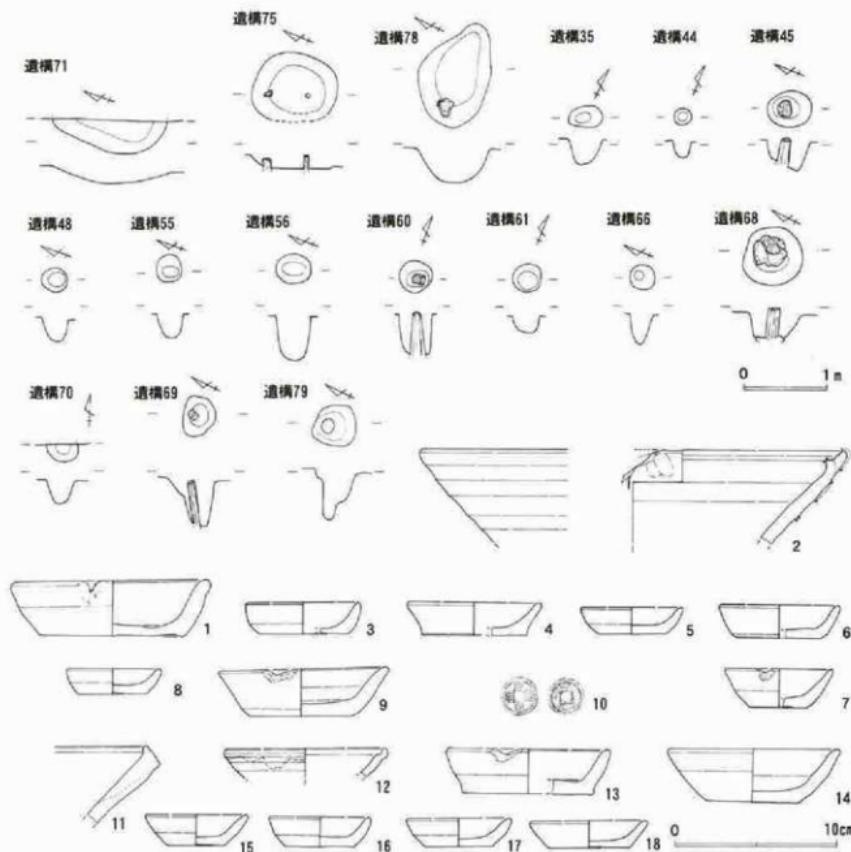


図5 第4面個別造構図・遺物実測図

2 第3面(図6)

第3面は地業としては若干希薄であったが、比較的良好に造構を検出した。第4面から20cm～30cmの厚さで土丹を含む粘性の強い暗褐色粘質土で地業土は構成される。検出した造構は溝2条・土壙2基・柱穴5穴・ピット11穴である。検出した2条の溝は並行して調査区内を南北に走り南端は調査区外に延びてしまうが、北端は図6で示した破線で示した箇所で消えている。この破線で示した箇所は、重機による表土掘削の時点で地盤が弛くなっていたために掘りすぎてしまった部分であるが、調査当初から造構ではないかと指摘を受けていた部分であった。土層堆積図(図3)を観察すると落ち込みを観察することができる。平面的な確認が出来なかったために、造構の形状などは不明であるが、2条の溝はこの地点より東に延びていたか、この地点が水溜めのような土壙であった可能性もある。検出した柱穴は、図面上で一見すると溝に添って構築されているようにも思えるのだが、調査中の観察ではそれぞれの間

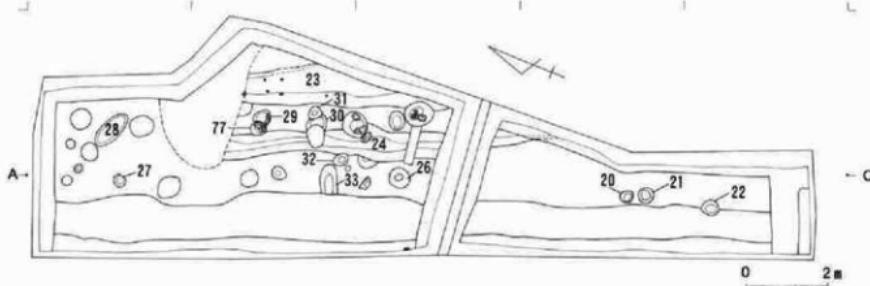


図6 第3面全側図

係を明確にする事は出来なかった。

第3面検出レベルは海拔7.9m～8.1mである。

遺構23（図7）

北側で検出した溝である。北端は図6で示した破線箇所で切れるが、南端は調査区外に延びる。幅約82cm、確認した範囲で長さ490cm、深さ34cm測る。溝下端には杭が遺存していた。下端の東側と西側の杭は対面しており、遺存している杭の間隔は34cmと42cmを測る。西側の杭は南に109cm行ったところで杭痕が確認されている。この溝は、溝下端に杭を打ち、側板をあて護岸の木組みが組まれていたのかかもしれない。溝底面のレベルはほぼ平坦であり流路方向は不明である。含土は暗褐色弱粘質土を呈し、砂質土、炭化物を含む。

出土遺物（図7）

1はロクロ成形かわらけ。胎土、灰褐色を呈する。器壁外反して立ち上がる。図示出来なかった遺物はロクロ成形かわらけ（小）1点。

遺構24（図7）

北側で検出した溝である。北端は、上層の遺構および、掘削時の掘りすぎによって確認できなかったが、土層堆積図（図3）の観察から、北に向かって調査区外に延びていたと考えられる。幅86cm～49cm、深さ14cm～21cmを測る。流路方向は北から南に向かっている。含土は暗茶褐色弱粘質土。土丹粒、炭化物、砂質土混入。含土中間層に約0.5cm～1cmの厚みで炭化物が堆積する。遺構23との新旧関係は不明であるが、柱穴に切られているところから、遺構24が溝としての機能を失うか、改修にともなって別の溝を構築した後に柱を伴う構造物が作られたのであろう。

出土遺物（図7）

2はロクロ成形かわらけ。胎土、赤褐色を呈する。外側面下部をナデによって整形し、高台状に作っている。

遺構29（図7）

北側で検出した柱穴である。遺構77に切られる。含土は小土丹を多く含む。柱穴内、ほぼ中心に木

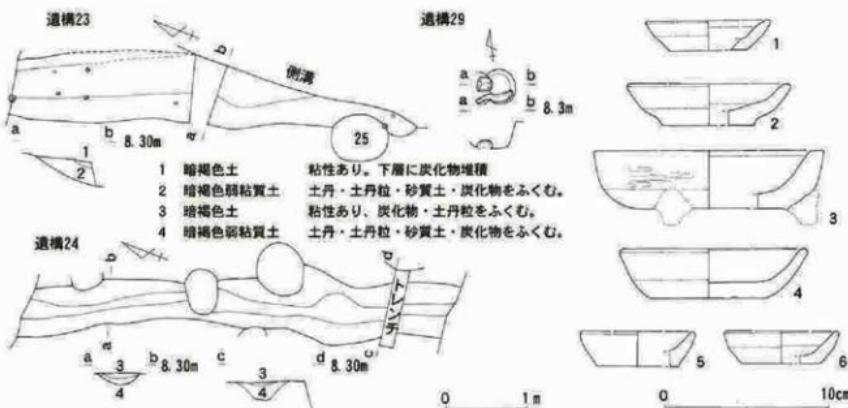


図7 第3面個別構造図・遺物実測図

痕確認しており、周囲を大型の土丹を用いて根固めをしていることを確認した。ロクロ成形かわらけが破片で1点出土している。

遺構外出土遺物（図7）

3・5・6は第3面上面上出土遺物。3は瓦器質香炉。脚部分は欠損していた。内外面ともに横方向の磨きが施される。5・6はロクロ成形かわらけ。5は胎土、灰褐色を呈する。器壁や直立して立ち上がる。6は胎土、灰褐色を呈する。側壁やや外反して立ち上がる。図示出来なかった遺物は常滑甕2点。瓦器質火鉢1点。

4は第3面構成土からの出土遺物である。ロクロ成形かわらけ。灰褐色を呈し、小石粒の混じる粗い胎土。側壁はやや外反して立ち上がる。

第2面（図8）

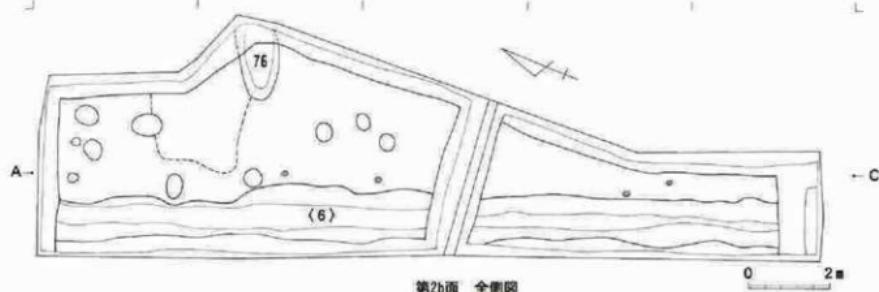
第2面は第2a面～第2b面の2面に構造面を分けて示している。

・第2b面（図10）

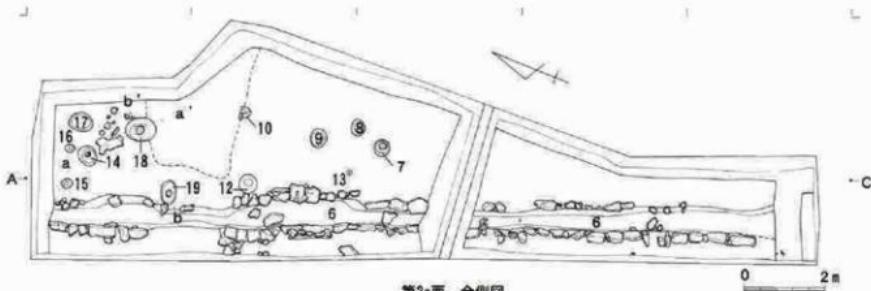
第2b面では、溝（掘り方）1条、土壙1基、ピット5穴が検出された。第2b面は2面の基盤層である。第3面上層に約20cmの厚さで砂質土、炭化物を多く含む暗褐色粘質土が堆積し、その上層に細かい土丹を使った地業が成されている。検出レベルは海拔8.0m～8.2mである。検出したピットは個別には図示していないが、小型の円形を呈し、径14cm～22cm、深さ12cm～17cmを測る。含土はいずれのピットも共通し、暗褐色弱粘質土。砂質土、炭化物を含む。溝に添って検出されているところから、柵のような構造物も考えられるが、関係は不明である。

遺構6（図9-2）

後述する第2a面で検出した遺構6（溝）の掘り方である。幅43～67cm、深さ15～24cmを測る。



第2b面 全側図



第2a面 全側図

図8 第2a面・第2b面全側図

出土遺物

後述する遺構6（溝）掘り方検出時に出土した遺物である。図示出来る遺物は出土していないが、破片で、常滑片口鉢II類1点。常滑甕3点。瓦器質火鉢1点。獸骨1点。貝1点。ロクロ成形かわらけ（大）2点・（小）10点・小片5点。

・第2a面（図8）

第2a面で発見した遺構は溝1条、柱穴11穴、ピット1穴である。柱穴には角柱が遺存していた柱穴が5穴、丸柱が遺存していた柱穴を2穴確認した。第2a面は、第2b面上に約10cmの厚さで小土丹による地業を行なっている。検出した柱穴の関係は不明であるが、遺構14・15・16・17・19は角柱の痕跡、および角柱が遺存していた。遺構7・8には丸柱が遺存していた。柱は、上から打ち込んでいるか、柱の寸法とさして違わない穴を掘り埋め込んだようであり、柱穴底面よりもさらに地中に入り込む。第2a面の検出レベルは海拔8.2m～8.3mである。

遺構6（図9-1）

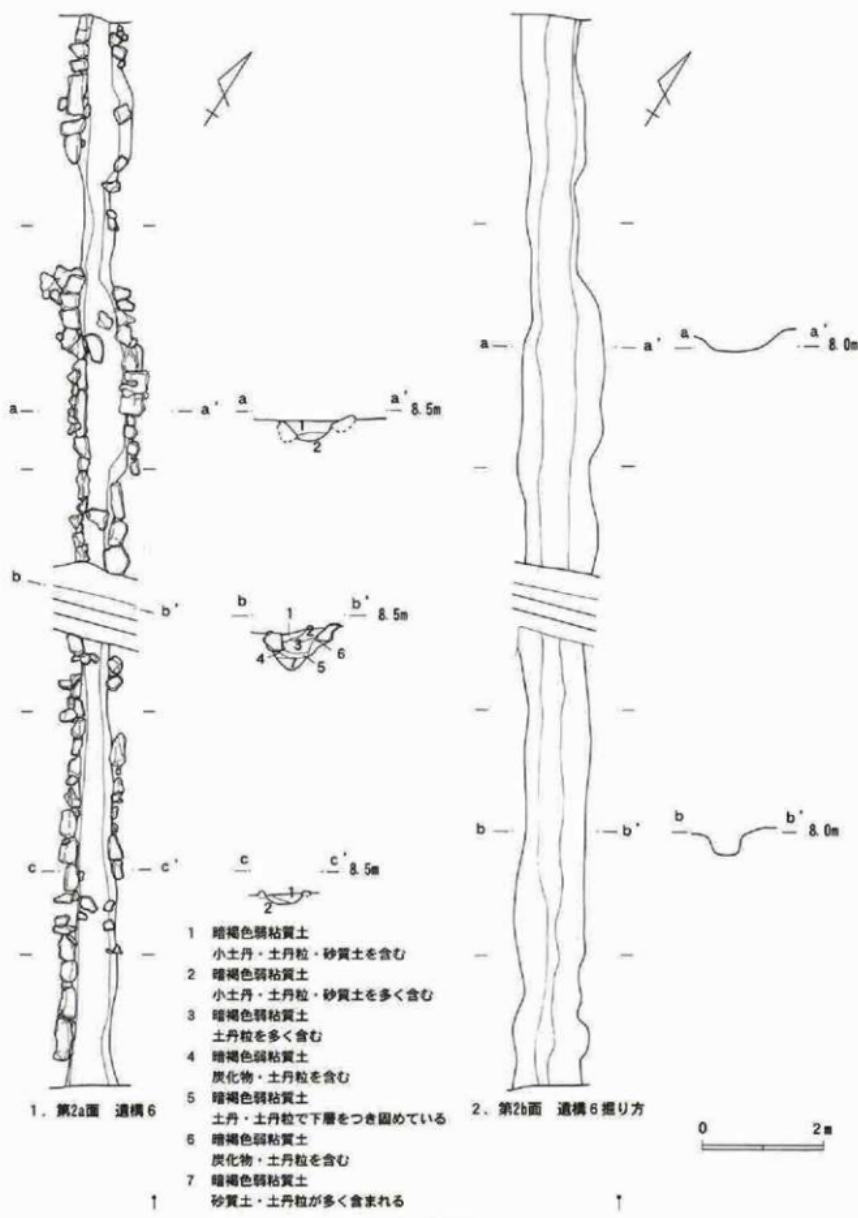


図9 道構 6

調査区内を南北に走る溝である。南端北端ともに調査区外に延びてしまっているため正確な規模は不明。溝は第2b面の地業上で、溝側壁に不整形ではあるが面を合わせた土丹の切り石を並べ、地業を積み増しして溝を構築している。幅は、側壁に並べられた土丹の内、内で測って、約30cm~50cmを測り、深さ約26cm~45cmを測る。流路方向は、北から南に向かっている。土丹による護岸が成されてはいるが、調査区内で観察した範囲で、幅などにしっかりと企画性が感じられないのは、上層の造構および擾乱によって削平を受けた影響もあると考えられる。含土は、暗褐色弱粘質土。砂質土、土丹粒、小土丹を含み、川砂の様な細かい石粒も多く混入していた。

出土遺物（図10）

1は瀬戸灰釉華瓶、胴部片。2は瀬戸灰釉、蓋。蓋内面は摩滅している。3・4は瀬戸播鉢II類、口縁部片。5は美濃・鉄絵長石釉皿、底部片。6~11はロクロ成形かわらけ。6は口径16cm・底径13cm・器高5cmを測る、大型のかわらけ。胎土は灰褐色を呈し、小石粒を含む粗い土である。器壁は、ほぼ直立して立ち上がり、器肉は厚い。法量の大きさから、通常「かわらけ」と呼んでいる土器とは用途が違うものかもしれない。7は胎土、褐色を呈する。側壁、やや外反して立ち上がる。8は胎土、灰褐色を呈する。内底見込みにナデが強く残り、器壁は直立して立ち上がる。9は胎土、灰褐色を呈する。器壁は直立して立ち上がり、内底のナデ強く残る。10は胎土、灰褐色を呈する。器壁は、ほぼ直立して立ち上がり、口唇部を外方に引いて整形している。11は胎土、灰褐色を呈する。12は鹿角。切断痕が残る。

図示出来なかった遺物は、常滑II類鉢1点。常滑甕1点。鉄製品1点。ロクロ成形かわらけ（大）3点・（小）5点。かわらけ小片10点。

造構7（図10）

北側で検出した柱穴である。円形を呈し、径37cm~40cm、深さ57cmを測る。径約18cmの丸柱が遺存していた。含土は暗褐色粘質土。小土丹、土丹粒混入。丸柱周囲を土丹によって、根固めしている。

出土遺物（図10）

13は瀬戸製品、底部片。器種は不明である。内外面ともに施釉の痕跡は無い。底部には高台が付かない。図示出来なかった遺物は常滑甕、胴部1点。

造構8（図10）

北側で検出した柱穴である。楕円形を呈し、長軸で39cm、短軸で34cm、深さ38cmを測る。直径約18cmの丸柱が遺存していたが、腐食しており検出することは出来なかった。含土は、暗褐色粘質土。小土丹を含む。出土遺物はなかった。

造構9（図10）

北側で検出したピットである。楕円形を呈し、長軸で45cm、短軸で40cm、深さ30cmを測る。含土は、暗褐色粘質土。砂質土、土丹粒を含む。柱痕は検出していない。出土遺物はなかった。

造構10（図10）

北側で検出した柱穴である。上層からの削平を受けており、柱穴の形状、大きさを確認することが出来ず、柱穴底面近くに残った、根固めの大・小土丹のみを検出した。個別の造構図は提示していない。

遺構14 (図10)

北側で検出した柱穴である。円形を呈し、直径約43cm、深さ32cmを測る。角柱が遺存するが、柱は土丹を柱周囲に埋め込み、根固めがしてあった。含土は暗茶褐色粘質土。出土遺物はなかった。

遺構18 (図10)

北側で検出した柱穴である。楕円形を呈し、長軸70cm、短軸55cm、深さ58cmを測る。一辺約18cm～20cmの角柱が遺存していた。含土は、暗褐色粘質土。柱の周囲に小土丹、土丹粒で根固めをしている
出土遺物 (図10)

14はロクロ成形かわらけ。胎土、赤褐色を呈し小石粒を含む。

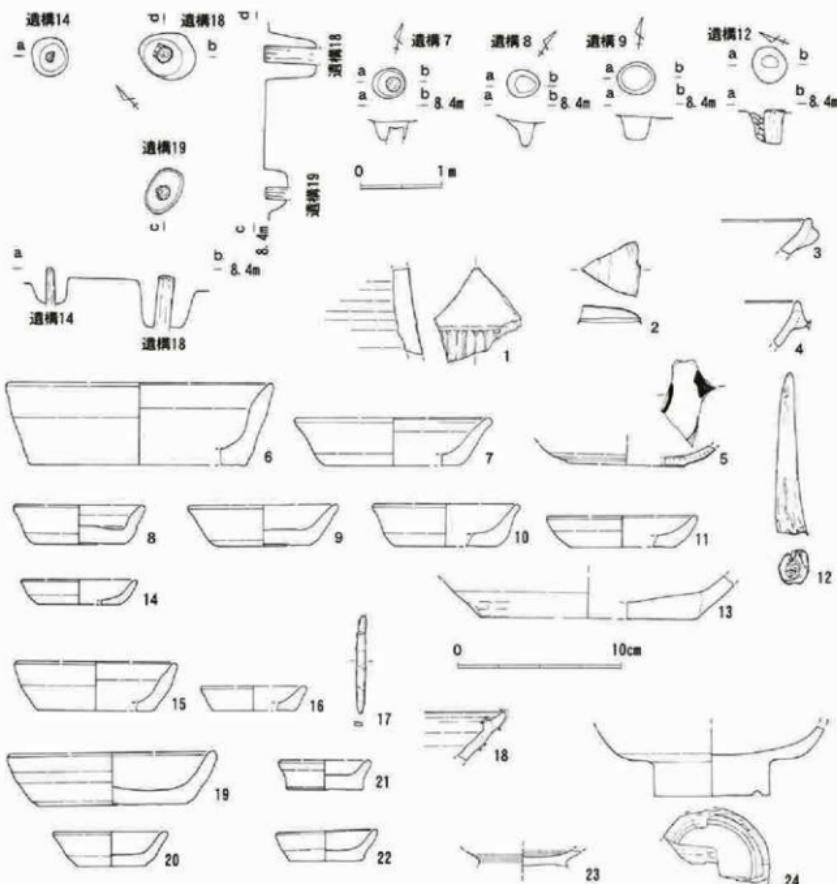


図10 第2面個別遺構・遺物実測図

遺構19(図10)

北側で検出した柱穴である。楕円形を呈し、長軸で59cm、短軸で39cm、深さ57cmを測る。角柱が遺存していた。含土は暗褐色粘土質。遺構18と同様に柱周囲に土丹による根固めを確認した。

個別遺構図には角柱の遺存する柱穴として、遺構14・遺構18・遺構19を関連のある柱穴として、提示したが、遺存している柱の規格や、遺構6(溝)との軸方向のずれから考えると、疑問が残る。それぞれの芯距離は、遺構14と遺構18の間が、140cm。遺構18と遺構19の間が170cmを測った。

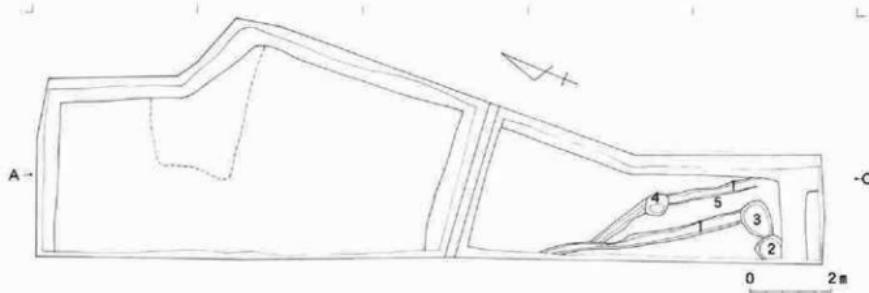
遺構外出土遺物(図10)

15~17は第2a面面上出土遺物である。15・16はロクロ成形かわらけ。15は胎土、灰褐色を呈する。器壁は、ほぼ直立して立ち上がる。16は胎土、灰褐色を呈する。器壁は外反して立ち上がる。17は鉄製品、釘。図示出来なかった遺物はロクロ成形かわらけ(大)3点・(小)1点。

第2b面面上では図示出来る遺物は出土しなかったが、破片では瀬戸捕鉢II類1点。ロクロ成形かわらけ(大)1点・(小)1点が出土した。

18~24は第2面構成土出土遺物である。

18は瀬戸捕鉢の口縁部片。19~22はロクロ成形かわらけ。19は灰褐色を呈し、小石粒の混じる粗い胎土。器壁はやや直立して立ち上がる。20は胎土、赤褐色を呈する。器壁や外反して立ち上がる。21



(第1面 全側図)

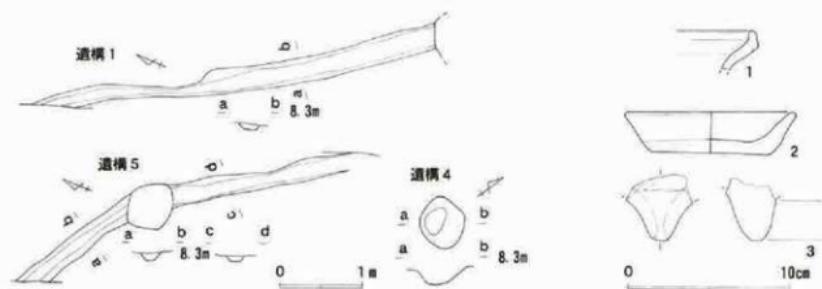


図11 第1面全側図・個別遺構図・遺物実測図

は胎土、褐色を呈し、器壁やや直立して立ち上がる。22は胎土、やや粉質で赤褐色を呈する。20と22は器形の歪みが大きい。23は漆器・椀、底部片。高台部のみ黒色漆を髹漆し、内外側面は赤色漆を・漆している。24は内外面共に黒色漆を・漆。粗い木取りのため内底に成形痕が残る。高台は肥厚で、二重高台であった。

第1面（図11）

第1面は、表土から約60cm下で検出した。北側が上層の客土によって削平を受けていたため、遺構を検出出来たのは南側のみであった。検出レベルは海抜約8.5mである。検出した遺構は溝2条、土壙3基である。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

遺構1（図11）

溝である。調査区内を南北に走り南端、北端ともに調査区外に延びている。幅15cm～20cm、深さ約6cmを測る。流路方向は北から南に向かう。溝の軸線は、下層の遺構6よりも西に振れている。含土には褐色砂質土。粗い砂粒とともに、宝永2年（1705年）の富士山の噴火による火山灰が含まれる。

遺構5（図11）

溝である。調査区内を東西に走り南端は調査区外に延び、北端は遺構1に切られている。幅17cm～27cm、深さ5cm～9cmを測る。流路方向は南から北に向かっている。含土は暗褐色弱粘質土、炭化物を含む。遺構1との軸線のずれは僅かであるが、流路方向が異なっているところから、場の使い方に短期間に変化があったのであろう。

遺構4（図11）

土壙である。不正円形を呈し、径約56cm、深さ17cmを測る。含土は暗褐色粘質土。炭化物を含む。遺構5を切っている。

遺構外出土遺物（図11）

第1面構成土出土遺物である。1は瀬戸撲鉢II類、口縁部片。2はロクロ成形かわらけ。胎土灰褐色を呈する。器壁やや外反して立ち上がる。3はかわらけ質手焙り、脚部片。胎土、灰褐色を呈する。

図示出来なかった遺物はロクロ成形かわらけ（小）4点。

第3節 II区の遺構と遺物（図12）

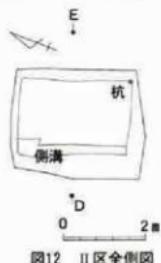


図12 II区全側図

II区は、重機による表土掘削を行なったのだが、湧水が激しく面の検出、確認が困難であった。表土から約100cm下までは近、現代の客土が堆積しており土層堆積図で示した第94層上層からは、人力による精査を行なったのだが、前述したように湧水のため、調査区内は泥濘の状態であり面として遺構を確認するは出来なかった。検出遺構は杭を調査区南東隅で発見している。杭は、整形した痕跡が無く、径約5cmであった。調査区北西隅と、周囲に側溝を掘つて検出面下層の土層を観察したが、下層では土丹による地業面が構築されていたと考えられる。

表2<遺物法量表>

開拓No.	No.	遺構名・層位	種別	口径	底径	器高	箇所No.	No.	遺構名・層位	種別	口径	底径	器高
5	1	遺構71	かわらけ	11.5	8.8	3.4	10	3	遺構6	瀬戸 楠鉢			
5	2	遺構75	瀬戸 楠鉢	(25.5)			10	4	遺構6	瀬戸 楠鉢			
5	3	遺構35	かわらけ	(6.8)	(5.4)	(1.9)	10	5	遺構6	美濃 長石釉皿		(7.0)	
5	4	遺構44	かわらけ	(8.0)	(6.4)	(2.0)	10	6	遺構6	土器	(16.0)	(13.0)	(5.0)
5	5	遺構48	かわらけ	(6.0)	(4.0)	(1.6)	10	7	遺構6	かわらけ	(11.8)	(8.4)	(2.9)
5	6	遺構55	かわらけ	(7.2)	(5.0)	(2.0)	10	8	遺構6	かわらけ	(7.8)	5.6	2.4
5	7	遺構55	かわらけ	(6.4)	(3.4)	(2.4)	10	9	遺構6	かわらけ	(9.0)	5.6	2.5
5	8	遺構56	かわらけ	5.9	4.2	1.6	10	10	遺構6	かわらけ	(8.9)	(6.2)	(2.6)
5	9	遺構60	かわらけ	4.1	3.2	2.9	10	11	遺構6	かわらけ	(9.0)	(6.4)	(1.9)
5	10	遺構61	銭	元豊通寶 北宋 刻款1078年 茶青	10	12	遺構6	鹿角(加工品)	長さ10.0 最大径2.0				
5	11	遺構70	常滑II類鉢				10	13	遺構7	瀬戸 器種不明		(13.0)	
5	12	遺構70	瀬戸鉄輪小皿	(9.4)			10	14	遺構18	かわらけ	(6.8)	(5.0)	(1.5)
5	13	遺構70	かわらけ	(9.8)	(8.0)	(2.7)	10	15	第2面直上	かわらけ	(9.6)	(7.0)	(3.0)
5	14	遺構70	かわらけ	10.3	5.6	3.2	10	16	第2面直上	かわらけ	(6.2)	(5.0)	(1.5)
5	15	遺構70	かわらけ	(6.2)	3.4	1.9	10	17	第2面直上	鉄製品 釘	長さ(6.1) 幅0.4 厚さ0.2		
5	16	遺構70	かわらけ	(6.1)	(4.2)	(1.8)	10	18	第2面構成土	瀬戸 楠鉢			
5	17	遺構70	かわらけ	6.2	4.2	1.7	10	19	第2面構成土	かわらけ	(12.4)	(9.0)	(3.2)
5	18	遺構70	かわらけ	(7.0)	(5.0)	(1.6)	10	20	第2面構成土	かわらけ	6.7	4.0	2.1
7	1	遺構23	かわらけ	(7.4)	(4.6)	(1.8)	10	21	第2面構成土	かわらけ	(5.4)	4.6	1.8
7	2	遺構34	かわらけ	(9.8)	(5.6)	(2.5)	10	22	第2面構成土	かわらけ	5.9	4.4	1.8
7	3	第3面直上	瓦器質香炉	(12.2)	(9.0)	(3.5)	10	23	第2面構成土	漆製品 瓶			
7	4	第3面構成土	かわらけ	11.1	7.2	3.0	10	24	第2面構成土	漆製品 瓶		(7.0)	
7	5	第3面直上	かわらけ	(6.8)	(5.0)	(2.15)	11	1	第1面構成土	瀬戸 楠鉢			
7	6	第3面直上	かわらけ	(6.6)	(4.8)	(7.0)	11	2	第1面構成土	かわらけ	10.1	7.2	2.5
10	1	遺構6	瀬戸 草瓶				11	3	第1面構成土	手焼り 腿部			
10	2	遺構6	瀬戸 盖										

遺物は客土掘削時に、常滑窯の胴部片2点。現代磁器・陶器7点が出土しているが、個別に提示できるものではなく、全て破片であった。また、検出面からの遺物出土が無い事や、I区が客土を取りのぞいた後、地業面が良好に水平堆積していた状況と異なり狭小な調査面積のなかで、上層の客土が調査区中央では確認面まで落ち込み、調査地が大きく攪乱されていたためI区の遺構確認面に相対させることは難しいが、検出レベルは海拔約7.7mを測り、I区・第4面の検出レベルが約7.8mであったため、第4面の層位に対するのではないかと考えている。
(伊丹まどか)

第4章 調査所見

今回の調査では、4期合計5面の地業面とそれに伴う造構群を発見した。調査は開発に伴う破壊が確実な深度の埋蔵文化財を対象とするため、調査地における遺跡の初源を把握することはできなかった。中世期に限っても、調査し得たものより古い段階の地業ないし造構が存在する可能性が高いことが出土遺物や4面下の遺物包含層の存在から窺えるが、それらの実体については、今後、当該地における調査の機会が再度訪れる事を期待したい。

確認し得た最も新しい地業面である第1面より上層に堆積する土層中に宝永4年(1707)の富士宝永山の噴火による火山灰が含まれていることから、検出された地業面の年代は遅くとも江戸時代前期ということになる。出土した遺物の大半を占めるかわらけの年代観に準拠した各地業面の年代としては、おおよそ戦国期ということになろうか。4面で検出された造構はピットと土壙のみであるのに対し、それ以降の1~3面では東西、つまり谷戸奥行き方向に平行する溝が設けられ、3面段階では多数のピットと併存するものの、2面以降はピットの数は減少し、その結果、非常に整理された空間のあり方が看取される。調査地の現況は谷奥から入口に向かう道路であるが、この道路と検出された溝の軸方位はほぼ同一といつてよく、上述の検出造構の状況を考え合わせると溝が排水機能のほかに敷地の区画、あるいは道路側溝といった性格をも具備しているのかも知れない。断定し得なかったため、本文中ではあえてグルーピングをしていないが、溝が検出されなかつた4面などでも係る軸方位上にピットの偏在傾向が窺え、各期を通じて同一の指向性の元に建造物が構築されている可能性が考えられよう。いずれにせよ、これらは狭小な調査区内での所見であり、玉縄城域における調査地一帯の性格や機能については、未だ不詳であると言わざるを得ない。この点については、本調査地点の束縛で平成12年と13年にあい



第13図 調査地点及び周辺の造構検出状況 (S=1/750)

ついで発掘調査が実施されている¹⁾ので、その成果について概略を述べると、第13図①の地点では、16世紀末葉頃と推定される土塙墓や掘立柱建物址などが堀を埋めた後に設けられている状況が確認された。また、②の地点では15世紀後半～16世紀代と考えられる溝状造構3条が検出されている。このうち、中央のものについては堀あるいは河道と考えられる規模と断面形を持っている。調査区相互の位置的関連や検出された造構の平面分布については第13図を参照されたいが、上記2地点で検出された堀（一方は堀あるいは河道）の位置的関連を見ると、今回の調査地がある谷を囲むように形成されていることがわかり、注目される。かつて、玉繩城跡についてその報告の中で総括した大河内氏は、玉繩城に関する研究をふまえ、「…玉繩城下については推測の域を出ないが、少なくとも近世の城下町のような整備されたものではなく、城の周辺には農地が存在し、それとともに家臣の居宅や寺院が存在し、職人・商人が集住して常設ないし定期的な市が設けられ、ある程度の町が形成されていたと考えられる。」と論じている（大河内・菊川1994）。当該地周辺では居宅や寺院といったものの存在を窺わせるような遺構は今のところ未確認であるが、本丸直下に位置するこの谷奥に係る造構が検出される可能性は高いと言えよう。

この説をふまえ本調査地及びその周辺の状況を推察するとすれば、前面部を堀によって防御した家臣の居宅や寺院といったものの存在が窺われよう。

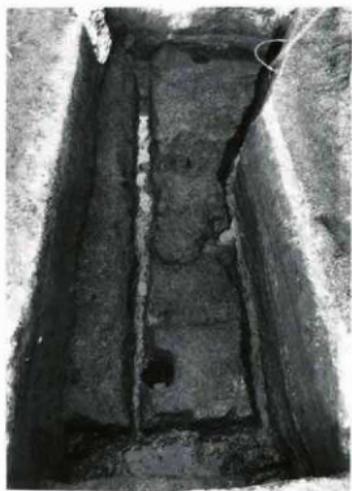
（継 実）

引用・参考文献

大河内勉・菊川英政 1994『玉繩城跡発掘調査報告書』玉繩城跡発掘調査団 p.17。

註

1) いずれも未報告。



第4面全景（南側）南から



第4面全景（北側）北から



降雨後の調査区冠水状況

図版2



第2面全景（南側）南から



第2面全景（北側）北から



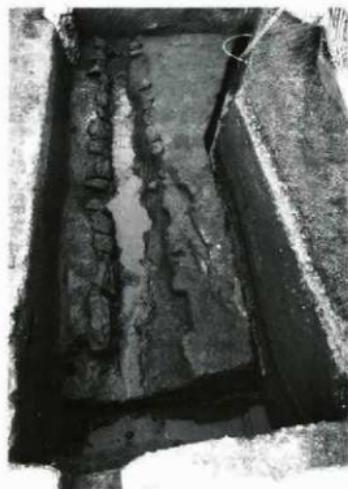
第3面全景（南側）南から



第3面全景（北側）北から



第1面全景（南から）



遺構 6（南側）南から（第2 a面）



遺構 6（北側）北から（第2 a面）

図版 4



II区 西壁土層堆積



II区 全景 (東から)



II区 南東隅 抗出土状況



II区 北壁土層堆積



図10-6

図10-9

図10-10



図10-8



図10-7



図10-2



図10-11



図10-3



図10-4



図10-1



図10-13



図7-1



図7-2



図5-3



図5-4



図5-5



図5-6



図5-8



図5-9



図5-10



図5-14



図5-17



図5-15



図5-13



図5-18



図5-16



図5-12

図版5 出土遺物

图版 6



图5-2



图5-1



图5-13



图11-1



图11-2



图10-15



图10-16



图10-19



图10-21



图10-18



图10-20



图10-22



图10-23



图10-24



图7-6



图7-3



图7-4



侧满出土遗物(未揭戴)

图版 6 出土遗物

さすけがやついせき
佐助ヶ谷遺跡 (No.203)

佐助一丁目476番1地点

例　　言

1. 本報は、佐助ヶ谷遺跡（No.203）内の鎌倉市佐助一丁目476番1地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成13年9月6日～同年12月15日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原　廣志

調査員：須佐直子、太田美智子、須佐仁和、早坂伸市、本城　裕、中川建二

調査補助員：梅岡渕音、久保田裕美（明治大学生）、猿田功一・阿倍　潤・佐藤文子・鈴木絵美・宇都洋平・高橋拓也・長山元彦（以上鶴見大学生）、橋本和之・原考史（以上国士館大学生）

協力機関名：鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

調査協力者：小川洋輔・北島清一・藤曲歓庸・山崎一男・渡辺輝彦（鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報の執筆は、第1章・第3章を原、第2章を須佐直子、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図作成には太田、早坂、中川・梅岡・久保田・原（考）・橋本が行なった。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原・須佐（直）・須佐（仁）があたり、出土遺物を須佐（仁）・早坂が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - ・図版縮尺　全測図：1/80
 - 遺構図：1/20、1/40
 - 遺物図：1/3、1/6（常滑窯）
 - ・遺構図版　遺構のレベルは海拔標高の数値を示している。
 - ・遺物図版　……は軸葉の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤と、漆器の黒漆地に朱漆文様を表現している。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。
大三輪龍彦、岡陽一郎、小野正敏、河野真知郎、神山晶子、菊川泉、小林康幸、斎木秀雄、斎藤慎一、佐藤仁彦、汐見一夫、宗碩秀明、田代郁夫、玉林美男、塙本和弘、繼実、手塚直樹、福田誠、松尾宣方、馬淵和雄

目 次

例 言	230
目 次	231

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	233
1. 遺跡の位置	233
2. 歴史的環境	233
第2章 調査の概要	236
1. 調査の経過	238
2. 測量軸の設定	238
3. 層序と生活面	238
第3章 検出遺構と出土遺物	240
1. 第1面の遺構・遺物	240
2. 第2面の遺構・遺物	249
3. 第3面の遺構・遺物	258
4. 第4面の遺構・遺物	264
第4章 佐助ヶ谷遺跡の花粉分析	299
第5章 調査のまとめ	304

挿 図 目 次

図1. 調査地点周辺図	234	図17. かわらけ溜り2出土遺物	254
図2. 測量軸設定図	237	図18. かわらけ溜り3出土遺物 (1)	255
図3. 堆積土層図	239	図19. かわらけ溜り3出土遺物 (2)	256
図4. 第1面全測図	241	図20. 第1面下～2面出土遺物	257
図5. 方形竪穴建物・土壤	242	図21. 第3面全測図	259
図6. 方形竪穴建物・土壤出土遺物	243	図22. 建物1	260
図7. 土壤8出土遺物 (1)	244	図23. 建物1柱穴出土遺物	260
図8. 土壤8出土遺物 (2)	245	図24. 土壤出土遺物 (1)	262
図9. 土壤9出土遺物	245	図25. 土壤出土遺物 (2)	263
図10. 第1面包含層出土遺物	246	図26. 溝・柱穴出土遺物	263
図11. 第2面全測図	247	図27. 第2面下～3面出土遺物	265
図12. かわらけ溜り1	248	図28. 第2面下～3面出土遺物	266
図13. かわらけ溜り2	250	図29. 第4面全測図	267
図14. かわらけ溜り3	251	図30. 建物1	268
図15. 第2面遺構出土遺物	252	図31. 建物2・3・4	269
図16. かわらけ溜り1出土遺物	253	図32. 碓石列	270

図33. 土壌	271	図38. 土壌10出土遺物	276
図34. 建物2出土遺物	272	図39. 溝・ピット出土遺物	276
図35. 土壌1~3・6出土遺物	272	図40. 第3面下~4面出土遺物	278
図36. 土壌8出土遺物	274	図41. 佐助ヶ谷遺跡の主要花粉化石分布図	
図37. 土壌9出土遺物	275		301

遺 物 観 察 表

表1. 遺物観察表(1)	279	表12. 遺物観察表(12)	290
表2. 遺物観察表(2)	280	表13. 遺物観察表(13)	291
表3. 遺物観察表(3)	281	表14. 遺物観察表(14)	292
表4. 遺物観察表(4)	282	表15. 遺物観察表(15)	293
表5. 遺物観察表(5)	283	表16. 遺物観察表(16)	294
表6. 遺物観察表(6)	284	表17. 遺物観察表(17)	295
表7. 遺物観察表(7)	285	表18. 遺物観察表(18)	296
表8. 遺物観察表(8)	286	表19. 遺物観察表(19)	297
表9. 遺物観察表(9)	287	表20. 遺物観察表(20)	298
表10. 遺物観察表(10)	288	表21. 産出花粉化石一覧表	300
表11. 遺物観察表(11)	289		

図 版 目 次

図版1. 1・2. 第1面I・II区全景		図版6. 1. 第4面I区全景(南から)	
3・4. 第1面II区全景(北・東側)	303	2. 第4面I区全景(西から)	
図版2. 1. 方形堅穴建物 2. 碓石列		3・4. 第4面II区全景(東・北から)	309
3. 土壌1 4. 土壌6 5. 土壌8上層		図版7. 1. 建物3・4北西壁 2. 建物4柱穴A-3	
6. 土壌8中層 7. 土壌8完掘状況		3. 建物4柱穴A-1・土壌8	
.....	305	4. 建物1柱穴A-1 5. 土壌6・7	
図版3. 1・2. 第2面II区全景(東・西から)		7. 板碑伝出土状況	
3. 第2面I区東南域		8. 漆器皿出土状況 9. 遺物出土状況	
4. かわらけ溜り1 5. かわらけ溜り2		310
6. かわらけ溜り3 7. 土壌5)	306	図版8. 1. 調査区北壁土層堆積	
図版4. 1・2. 第3面II区全景(東・北側)		2. 第4面II区北側の調査区東壁際	
3~5. 建物1(東・北・西から)	307	3. II区調査時の作業風景	311
図版5. 1. 建物1柱穴イ-1 2. 建物1柱穴イ-2		図版9. 第1面出土遺物	312
3. 建物1柱穴ロ-1 4. 建物1柱穴ロ-2		図版10. 第2面出土遺物	313
5. 建物1柱穴ハ-1新		図版11. 第3面出土遺物	314
6. 建物1柱穴ニ-1新		図版12. 第4面出土遺物	315
7. 建物1柱穴イ-1新		図版13. 産出花粉化石	316
8. 火鉢出土状況	308		

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本調査地点は、JR鎌倉駅から西方約600mにあたり、由比ヶ浜大通りから市立御成中学校前をぬけて鎌倉税務署に向う道筋が通っている。南北に細長い「佐助ヶ谷」の谷戸内に位置しており、開口部付近あたる鎌倉市佐助一丁目476番1の一部に所在する(図1)。調査地点の東側を現在は暗渠になった佐助川が流れている。

佐助ヶ谷は、標高40~90mほどの丘陵群に取り囲まれており、北方に入り組んだ谷内には小支谷が多く形成されている。谷奥の中腹には、翁の姿に変えた神靈が出現し、佐殿源頼朝に平氏追討の旗挙げを勧めて助けたので佐助という地名の由来ともなった社伝を残す佐助稻荷神社が位置しており、さらに源氏山への登り口付近には銭洗弁天として多くの人々に信仰されている宇賀福神社が鎮座している。なお地名の由来に関しては、いくつか伝わっており上総・千葉・常陸の三介の屋敷地がこの谷内にあって、三介ヶ谷と呼ばれていたのが転訛して佐助ヶ谷になったという説もその一つである。また谷内には国清寺や蓮華寺・松谷文庫なども所在していたらしい。

2. 歴史的環境

佐助ヶ谷に関しての初見は、『吾妻鏡』の北条時房の記事に認められる。時房は安元元年(1175)から仁治元年(1240)時政の子で、六波羅探題・連署・相模守に任じ、佐介氏と名乗り、大仏殿と号した。奥州合戦(1189年)や畠山重忠追討(1205年)・和田の乱(1213年)に従軍している。承久の変(1221年)には、北条泰時と共に上洛している。のちに初代の六波羅南方探題となり、連署は執権北条泰時のもので元仁元年(1224)から死没するまで任じた。時房の子のうち、時盛(1197~1277年)は佐介に屋敷を構えており、朝直(1216~1264年)は大仏氏の祖にあたり、光明寺開山の然阿良忠に帰依したのち、佐助ヶ谷に悟真寺を創建して開基となり住持していた。この他に谷内には、薬師堂・法蓮寺・七觀音・北斗堂・法性寺などの諸寺院・堂が存在していたようである(貫・川副 1980)。しかし現在では廃寺となっており、わずかに字名にその名を残し旧跡を辿るだけである。次に調査地点周辺における調査事例について少し触ることにする。

佐助ヶ谷遺跡内の地点2(佐助1-566番1外:齋木他#1993)にあたる鎌倉税務署用地の調査では、13世紀後半~14世紀にかけて粗末な構造で部屋が細かく間仕切られた大型の板壁掘立柱建物が多数検出され、その近くからはさまざまな職人の道具や加工品が出土している。この空間は、寺院郭内の一画に職人たちを集めて、工芸品の生産に当たらせていたのではないかと想像される。

地点4(田代・原 1991)は急傾斜崩落対策工事に伴う調査においてやぐら3基が検出された。特に注目されるのは、2号窟の羨道中央に岩盤を掘り込んだ升状の施設が発見され、中からは白磁水注・瀬戸四耳壺・常滑壺や甕など蔵骨器7点が出土した。地点5は13世紀後葉~14世紀中頃の時期にあたり、小支谷特有の造成地で比高差をもつ雑壇状の平坦面からは、溝・建物・柱穴とともに粘土採掘場と考えられる土壠群が検出されている。

地点6・7(高野 1998・滝澤 1998)は近接した位置の調査であり、検出された遺構から同一敷地内で共通した空間の遺跡として捉えられている。遺跡の年代観は、後者が鎌倉時代中~末期にあたる遺構・遺物、前者が14世紀中頃~15世紀前半に亘る5時期の生活面とそれに伴う建物群などの遺構が検出されている。

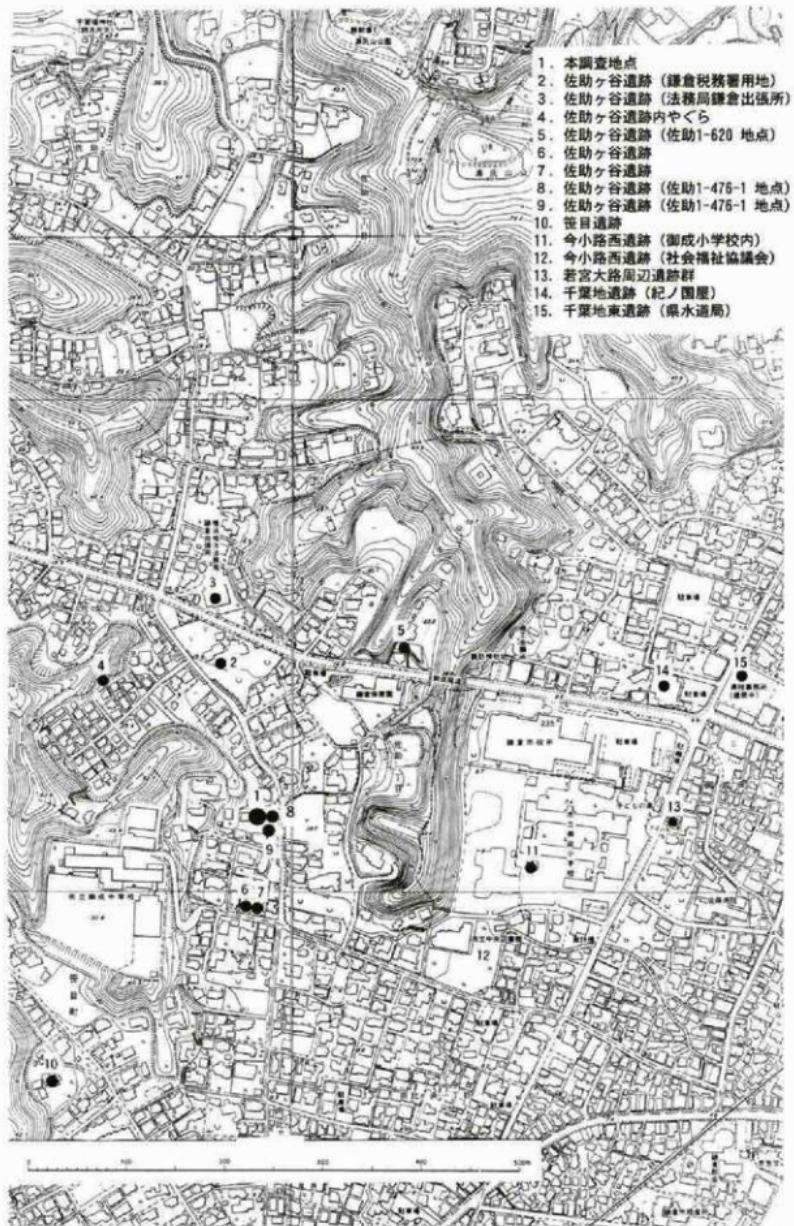


図1 調査地点と周辺遺跡

地点8・9は本調査地点と同一敷地内にある。東側に位置した地点8(齋木・降矢 2002)では、建築工事の掘削深度の関係で地表下1.0m前後までの調査であったが、土丹版築による2時期の生活面とそれに伴う据置土壙・石積造構、礎石建物を予想させる伊豆石(河原石)・鎌倉石切石などの礎石と佐助川の旧河川と推定されるものが検出されている。遺跡の年代観は、14世紀前半～15世紀前半頃に位置づけられている。また今回の調査に先立ち実施されたのが南側にあたる地点9(田代・若松 2002)である。この発掘調査は、市道から敷地内へ進入する通路地下の部分に上下水道を埋設する工事に伴うもので、本調査地点と関連した4時期の生活面とともに掘立柱建物・井戸・溝・土壙などの遺構が検出され、かわらけ・舶載陶磁器・国産陶器・漆製品などの遺物が発見されている。遺構の年代観は概ね13世紀中頃から14世紀中頃の時期と考えられている。

【引用・参考文献】

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
石井 進 1999『[もののふの都] 鎌倉と北条氏』石井 進編 新人物往来社
大三輪龍彦 1976『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版
河野眞知郎 1995『中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都—』講談社選書メチエ49
齋木秀雄他 1993『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
齋木秀雄・ 2002「佐助ヶ谷遺跡(No.203) 佐助一丁目476番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会告
降矢順子 1998「佐助ヶ谷遺跡(No.203) 佐助一丁目450番24地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
滝澤晶子 1998「佐助ヶ谷遺跡(No.203) 佐助一丁目450番25・27地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
田代郁夫・ 1991『佐助ヶ谷遺跡内やぐら』「平成元年鎌倉市内急傾斜地崩落対策事業に伴う発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団
原 廣志 2002『鎌倉市佐助ヶ谷遺跡発掘調査概要報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
若松美智子
貫 達人 1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号
貫 達人・ 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
川副武胤
貫 達人・ 1980『鎌倉廃寺辞典』有斐堂
川副武胤
山田邦明 1992「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』吉川公文館

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は市内中心部西寄りにあたり、佐助ヶ谷遺跡（県遺跡台帳 No.203）の一角に位置する鎌倉市佐助一丁目476番1地点において実施した。当該地は今回の現地調査に先立ち実施された宅地造成工事によって区画された宅地の一つである。平成13年7月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建物基礎の構造が現地表下2mまで及ぶこと、埋蔵文化財に対する影響が予想された。前述の宅地造成に伴う発掘調査の成果から土木工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について事業主との数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続きと現地調査の実施方法などの協議を経て、平成13年9月から調査面積120m²を対象として発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、調査で発生する廃土置場の問題から調査区を東西に2分割し、東側をI区、西側をII区として、それぞれ調査範囲を設定した。平成13年9月6日よりI区の表土を重機によって掘削することから始められた。その結果、I・II区は共に鎌倉時代中期～南北朝時代にかけて4時期の中世生活面とそれに伴う遺構・遺物が発見された。同年12月15日までの間に必要な記録作業を行ない、無事に現地調査を終了することができた。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

日誌抄

- 9月6日 I区調査開始。機材搬入。調査区を設定し、重機による表土掘削。
- 13日 第1・2面の遺構検出へ向けての調査開始。市4級基準点を基に測量用方眼杭を設定、原点レベル移動。
- 21日 第2面の調査終了。全景・かわらけ溜り・土壤などの写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
- 10月5日 第3面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
- 19日 第4面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
- 25日 調査区中央の地山トレーン調査終了。排土移動により調査を一時中断。
- 11月1日 II区調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。
- 2日 ベルコン設定。テント設営。第1面の遺構検出へ向けての作業開始。
- 13日 第1面の調査終了。全景写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
- 20日 第2面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
- 12月1日 第3面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
- 11日 第4面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
- 14日 II区東側域の地山トレーン調査終了。調査区壁土壤の花粉分析サンプル採取。
- 15日 現地調査終了。関係各方面に発掘調査が終了した旨を連絡し、機材撤収。

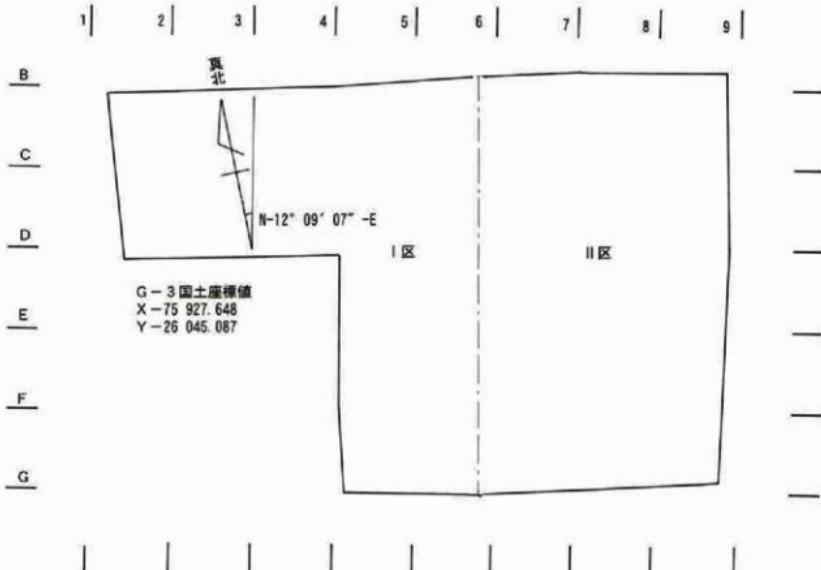


図2 グリッド設定・配置図

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定は、図2上段に図示したように国土座標を用いて実施した。調査地東側の佐助川沿いに走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点二ヶ所のD246及びD247が確認されたので、D246から西方へ任意のA点を設定した。A点から北へ10mの位置に調査基準点にあたるG-3杭を設置した。その後、図2下段のように東西軸にアルファベットを北からA～G、南北軸に算用数字を西から1～9を附し、それぞれ2m方眼によりグリッド設定を行なった。市4級基準点(D246・D247)及びA点・G-3杭の国土座標の数値は、以下の通りである。

D246 : [X = -75934.769 : Y = -26009.750] D247 : [X = -75961.839 : Y = -26009.257]

A点 : [X = -75937.470 : Y = -26042.972] G-3杭 : [X = -75927.648 : Y = -26045.087]

図中の方位はすべて真北を採用し、グリッド方眼の南北軸線は真北よりやや東に振れている。さらに調査地点の経緯は以下のようになる。

南北軸線 : [N 12° 09' 07" - E]

調査地点 : 東經 [139° 34' 10"] 北緯 [35° 19' 00"]

海拔標高の原点移動については、調査地東側道路を鎌倉税務署方面に至り、市役所通りとの交差点付近に設けられた鎌倉市3級水準点(BM.327 : L=15.589m)から調査地のG-3杭上(L=12.032m)に仮水準点を移動した。文章中及び挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

3. 層序と生活面

調査地点の堆積土層は概ね11層に区分されたが、その中で少なくとも5時期の生活面が確認されており、調査区壁土層の堆積状態は、図3に示したとおりである。まず厚さ20～35cmの表土層と1層とした大型土丹塊を多量に混入した近代整地層の厚い堆積土が見られる。この整地層の客土によって埋め立てられた大きな攪乱がI区とII区北側域を中心に展開しており、第1面及び第2面上の遺物包含層まで削平が及んでいた。なお、I区の造構密度が低いのは削平を受けた事によるものであり、深い掘り方をもつ造構だけが残存した結果による。2・3層の暗褐色弱粘質土は小片遺物を含んだ耕作土と第1面上の包含層と思われるものである。

これを除去すると、小土丹塊を多めに混入して版築した暗茶褐色弱粘質土の4層(地業層)が表出したのが第1面にあたる。調査区北壁でみると東西方向は海拔標高11.00m前後の平坦な地業を施しているが、調査区北際から南壁へ向かってやや低くなるよう整地されていた。5層は暗褐色粘質土で土丹角・砂・かわらけ片を多く含んだもので第2面上の薄い包含層である。この包含層を除去すると、海拔標高10.60m前後で黄灰褐色砂質土(6層)の中小土丹塊を突き固めて地業した第2面の生活面が構築されており、I区南東域からは硬化した焼土面の拡がりが確認されている。

8層は厚さ10～20cm程の山砂のような明茶灰色砂層からなり調査区のほぼ全域に認められた。この層を除去して表出したのが小土丹塊を多く含んだ第3面にあたる地業層であった。この生活面は、海拔標高10.35m前後で比較的平坦な面を構築している。さらに薄い炭化物層を挟んで、その下から検出されるのが第4面である。この面は中世地山の上面に小土丹塊を突き固めた地業層(10層)により構築されており、海拔標高10.15m前後である。なお、第4面で検出した造構には、地業面上と地業面を除去した中世地山上の両面に伴う造構を図示している。

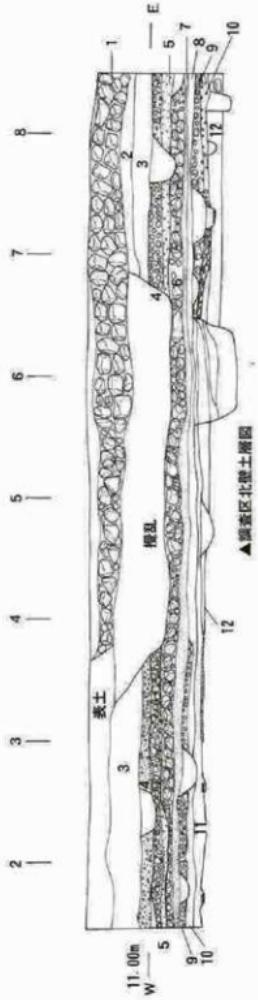


図3 調査区堆積土層

— 239 —

《土壤注記》

表土
1. 淡茶灰色砂質土：大型土丹塊を多量に混入した土質と、近代風の埋立て整地層

2. 暗褐色砂質土：土丹塊を含んだ鈍まりのよいもので、耕性が好

3. 暗褐色粘土質土：土丹塊・かづらかけ・粗水物をやや多く含んだ包含層

4. 黄灰褐色粘土質土：土丹塊を埋めた鈍まりのある土丹層底層（第2面積層底）

5. 暗褐色砂質土：土丹塊・かづらかけ小片・粗水物をやや多く含んだ包含層

6. 明茶褐色粘土質土：土丹塊と茶褐色粘土を交互にした鈍まり薄い土层

7. 黄灰褐色粘土：10~20cm程度の土丹塊を多く含んだ地質物（第2面積層中の低い基礎）

8. 明茶灰色砂質土：ほとんど砂礫物を含まない土

9. 明茶褐色砂質土：大小土丹塊を多量に入れて充てられた鈍まりの強い地質層（第3面積層±）

10. 暗褐色粘土質土：土丹塊をばらし、粗水物をからげ小片を多く含む地質層

11. 明茶褐色粘土：土丹塊を多量に入れて充てられた鈍まりの強い地質層（第4面積層±）

12. 黑褐色粘土土：中世地山



▲ I 区東壁土層図

▲ II 区西壁土層図

0 4m

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

現地表下70cm前後の表土・近代客土・擾乱を重機掘削すると、II区を中心に小土丹塊を突き固めた地盤面が遺物包含層を挟んで確認することができた。この生活面を第1面とした。第1面のI区東側半分に遺構が確認できなかったは、この地域が特に深くまで擾乱が及んで削平されたことによる結果である。検出した遺構は、方形竪穴建物、礎石列、土壙10基、柱穴約30口などが確認された。出土遺物にはかわらけをはじめ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、銅錢、石製品などがみられた。

a. 方形竪穴建物（図4～6、図版1・2）

調査区中央南端、G-4・5グリットで検出され、主体部は南側調査区外に拡がっているので全体規模の確認は不可能であった。確認できた掘り方の規模は、東西2.85m、南北1m以上、確認面からの深さ70cmを測る。礎石の配置から掘り方は東西位の長方形の平面形と推定される。底面はほぼ平坦になるように整形されており、海拔標高10.25m前後である。底面の北西隅と中央には、土台材を受けるための礎石に使用された鎌倉石切石と、偏平に加工された土丹塊が認められた。鎌倉石は長さ30cm、幅25cm、厚さ10cmの長方形を呈し、長軸が南北方向に据えられている。土丹塊は長さ25cm、幅20cmで長軸が東西方向を示しており、礎石間の芯々距離は105cm程である。北東隅の礎石は抜き取られて遺存していないが、掘り方を思わず浅い落ち込みが確認されている。

出土遺物は（図6-1～8、図版9）、1～3が小皿・4が大皿のロクロ成形のかわらけである。3は口縁部の二ヶ所に焼成後に打ち欠いた痕跡がある。5・6は常滑窯製品で甕の口縁部片と体部小片を転用したもので、破口断面と外面一部に磨った痕跡が認められる。7は断面方形の鉄釘で腐蝕が進み、下半を欠失している。8は骨を加工したもので製作途中の原材料と思われる。

b. 級石列（図4、図版1）

II区西側の南壁際において東西方向で検出された礎石列であり、礎石3個からなる2間分が確認された。礎石に使用された石材は川原石（伊豆石）で、径30cm前後の不正円形で偏平なものを用いている。柱間寸法の芯々距離は、西から210cm（約7尺）と120cm（約4尺）を測り、主軸方位はN-89°20' - Eとなり、ほぼ東西位を示している。

c. 土壙（図4～6、図版1・2・10）

土壙1：調査区のII区南東寄り、F-4グリットの位置で検出された。形状はほぼ円形を呈し、規模は南北軸・東西軸ともに約80cm、深さは確認面から約30cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。上層からは獸骨（牛・馬）1点が出土した（図版2-3）。獸骨以外に図示可能な遺物は出土していない。

土壙2：II区西側の南壁際で検出された遺構である。南側は僅かに調査区外に拡がっており、確認できた規模は、東西軸86cm、南北軸72cm以上、深さは確認面から35cm、断面がやや浅い磨鉢状を有した掘り方をもち、形状は楕円形に近いものと思われる。

出土遺物（図6）のうち図示できたのは13のロクロ成形かわらけの大皿だけである。

土壙3：II区西側の北西隅で検出された。規模は、南北軸62cm、東西軸50cm、深さは確認面から30

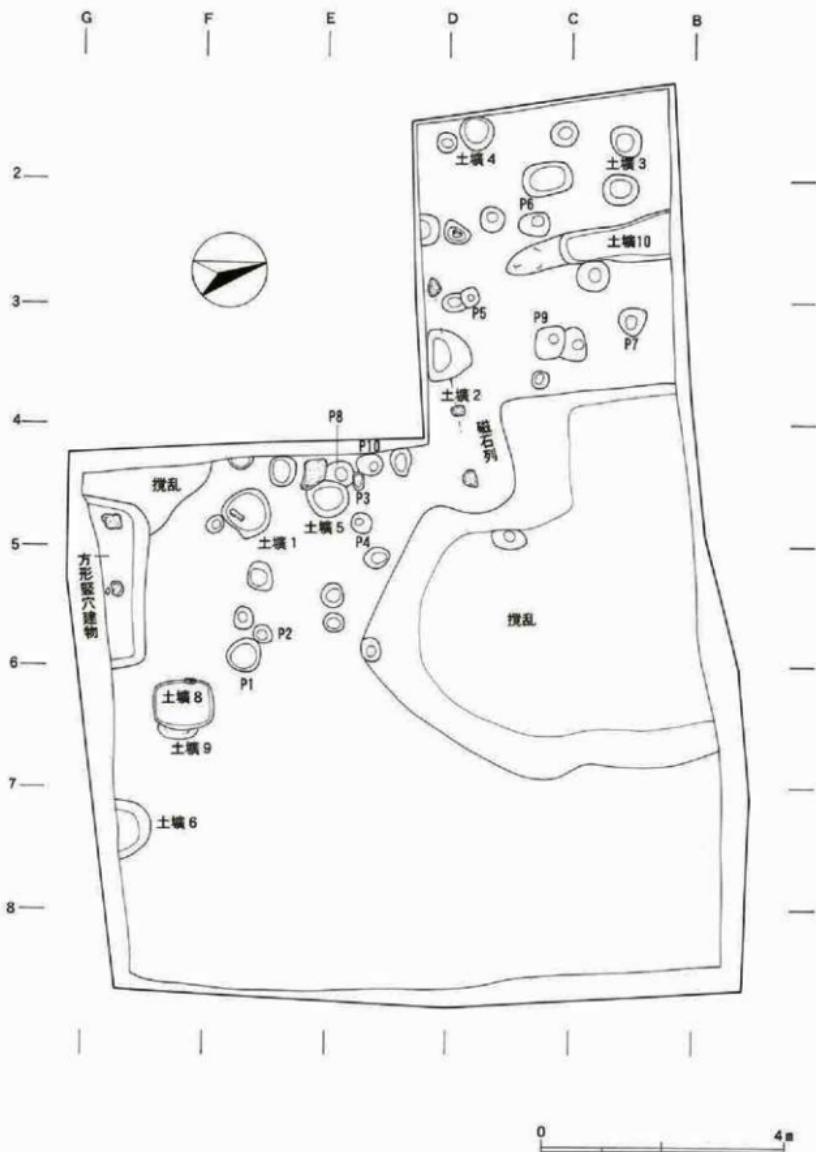


图4 第1面全测图

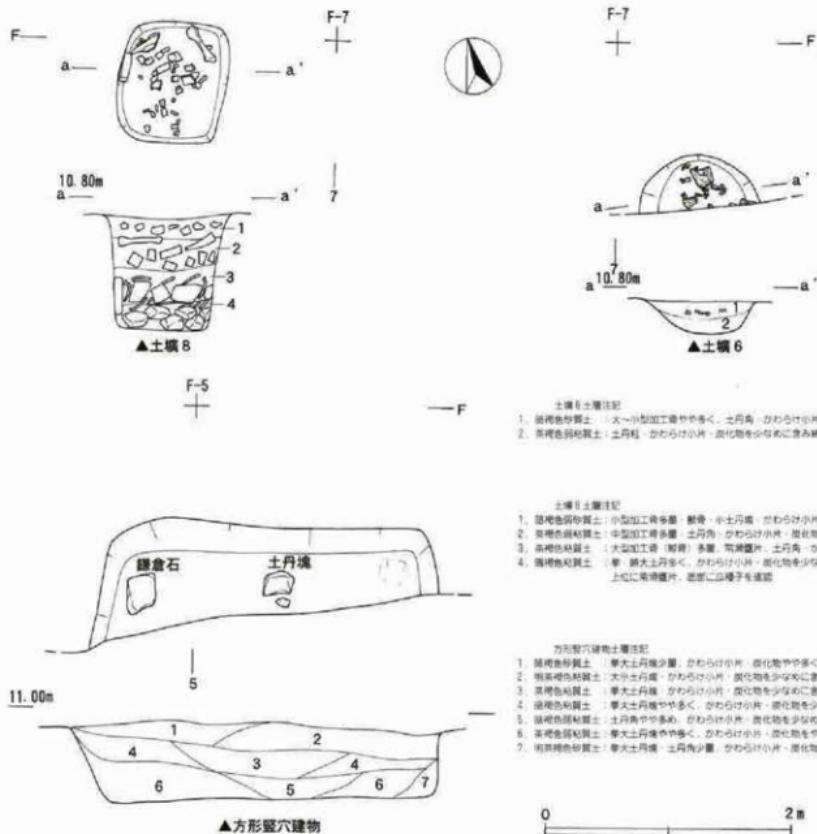


図5 方形竪穴建物・土壤

cm程で、形状は橢円形を呈する。断面は逆台形状を有した掘り方である。

出土遺物(図6)は14のロクロ成形かわらけ小皿だけが図示できた。

土壤4: II区西側のD-1グリットで検出された。規模は、径60cm、深さは確認面から35cm、形状はほぼ円形を呈し、断面は逆台形状を有した掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ小片の多い暗褐色砂質土である。

出土遺物(図6)のうち図示可能なものは15のロクロ成形かわらけ大皿だけである。

土壤6: I区南東側のG-7グリットで検出されたが、南側半部は調査区外に拡がっているため、全体規模は不明である。確認できた規模は、東西軸98cm、南北軸45cm以上、深さ28cmである。形状はほぼ円形を呈するものと思われる。覆土は上下2層からなり、下層は粘性や綿まりの弱い茶褐色土、上層は暗褐色砂質土で土丹小塊・炭化物を多めに含んでおり、大・小形加工骨の原材料や加工途中のものが多く出土している。

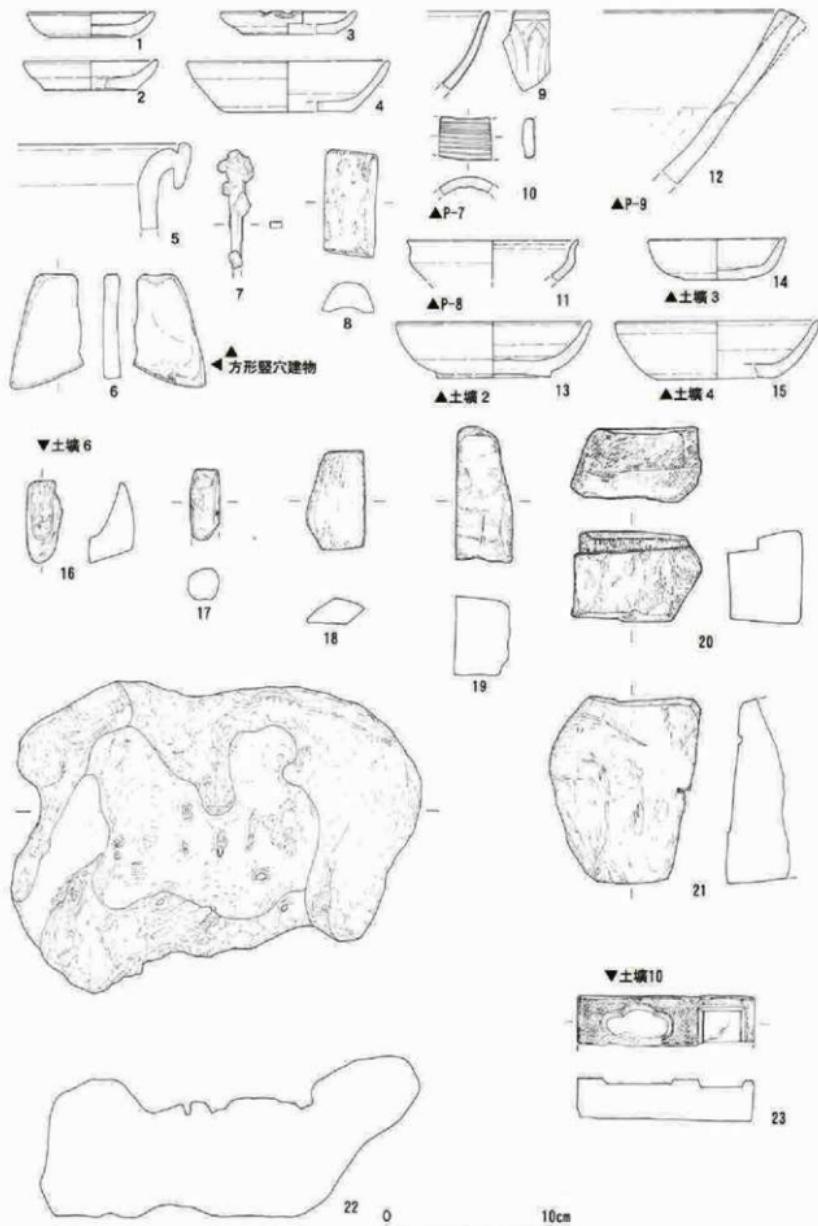


图 6 方形竖穴建物・土壤出土遗物

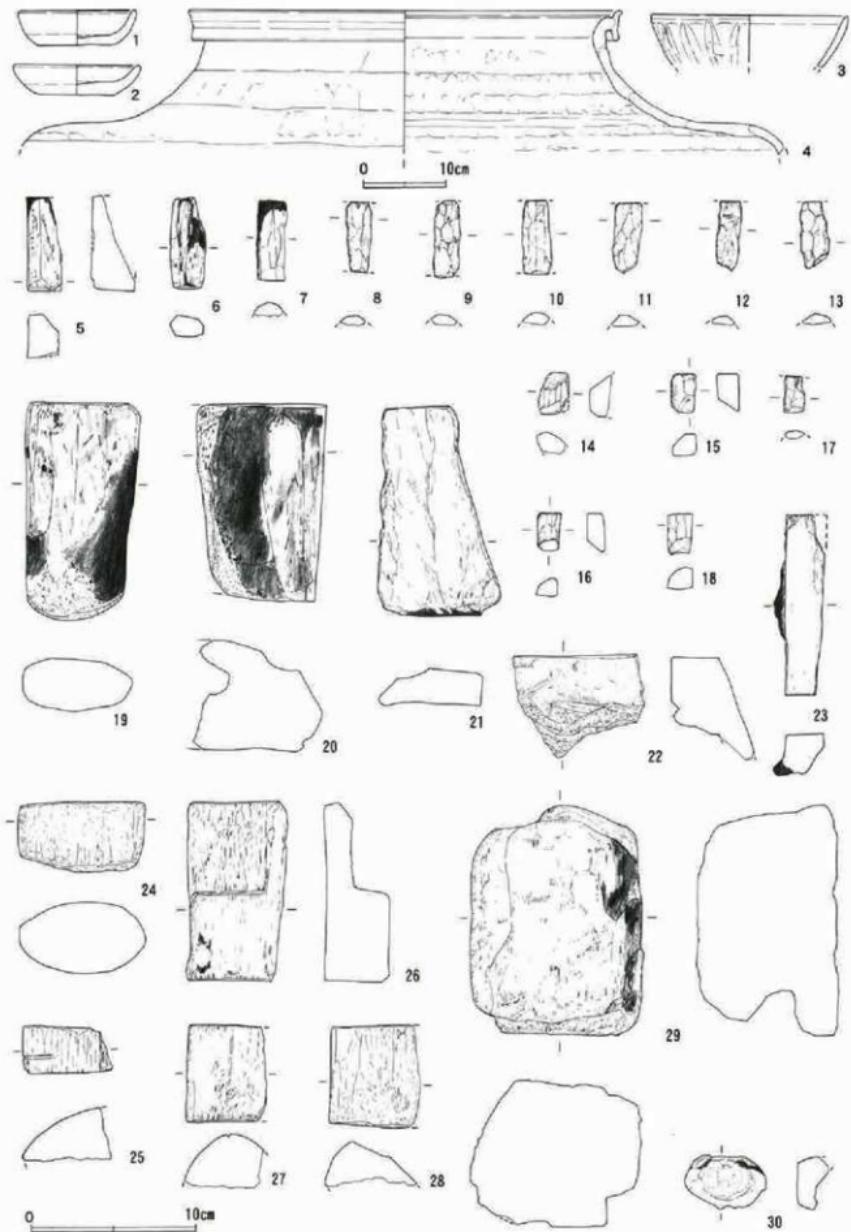


图7 土壤8出土遗物(1)

出土遺物（図6-16~22）は、すべて加工痕を残した骨である。16~21は端部や周囲に鋸の切断痕や刃物による削り加工を施したものであるが、製品にはなっておらず加工途中や余材にあたる資料と思われ、さらに22は加工した痕跡がほとんどないので、その原材料の可能性があろう。

土壤8：調査区中央南端寄りのF-6杭に東隣して検出された。規模は南北軸100cm、東西軸90cm、確認面からの深さ95cmである。形状は隅丸方形を呈し、垂直に近い壁面をもつ掘り方である。西壁中央の底面近くには鎌倉石切石が立った状態で認められた。切石は長さ25cm、高さ30cm、厚さ7cmと薄い板状のものである。覆土は四層に大別され、最下層は大小土丹塊を多く含み上位に常滑甕片が、3層からは多量の大型加工骨（鰯骨か）とそれに伴ない常滑甕片が確認された。また2層からは中型加工骨が、最上層の1層からは小型の加工骨がそれぞれ多量に出土している。

出土遺物（図7・8-1~32）は、1・2がロクロ成形のかわらけ小皿である。3は龍泉窯系の青磁錦運弁文碗、4が覆土中の3・4層から出土した常滑甕である。5~32はすべて加工痕をもつ骨片である。5~18は、形状から栗形製作における原材料や加工途中のもの、さらに製作途中に出た余材（削りカス）など製造工程を示したものと考えられる。栗形は刀装具の一部で、成年男子が必ず腰に帯びる腰刀の鞘に装着した下緒を結ぶための部品である。5は長方形に切断され、粗い削りを施す栗形に加工する前段階のもの。6は蒲鉾型に粗い削り加工し、突起部や返角部を鋸引きする以前のもの。7~13は蒲鉾型に成形する際の切断したカスと思われるもので、14~18は片側に鋸による斜位の切断痕が認められることから返角部製作時のカスであろう。5~7は部分的に焼け焦げた痕跡が認められた。また19~32は

土壤9：土壤8により西側大部分を壊されて検出された。確認規模は、南北軸66cm、東西軸25cm以上、深さ20cm程と浅く、覆土中からは切断した獸骨の未製品4点が出土している（図9-1~4）。これらの未製品は両端を切断して輪切りした後、表面を鋸引きで切り込みを入れて溼ったものや、また表面が部分的に黒ずんで焼け焦げた痕跡を残すものなども認められた。

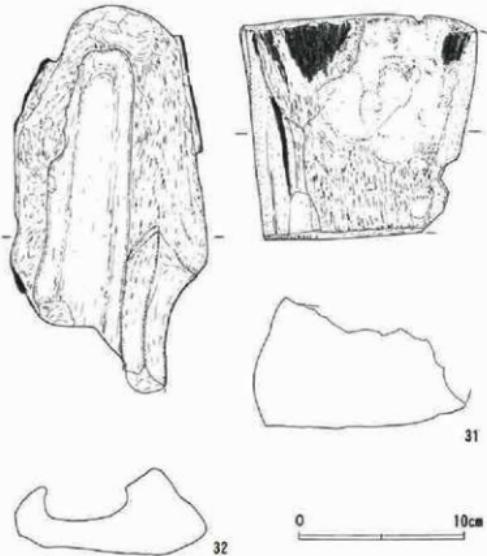


図8 土壤8出土遺物(2)

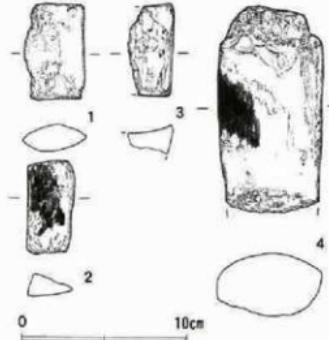


図9 土壤9出土遺物

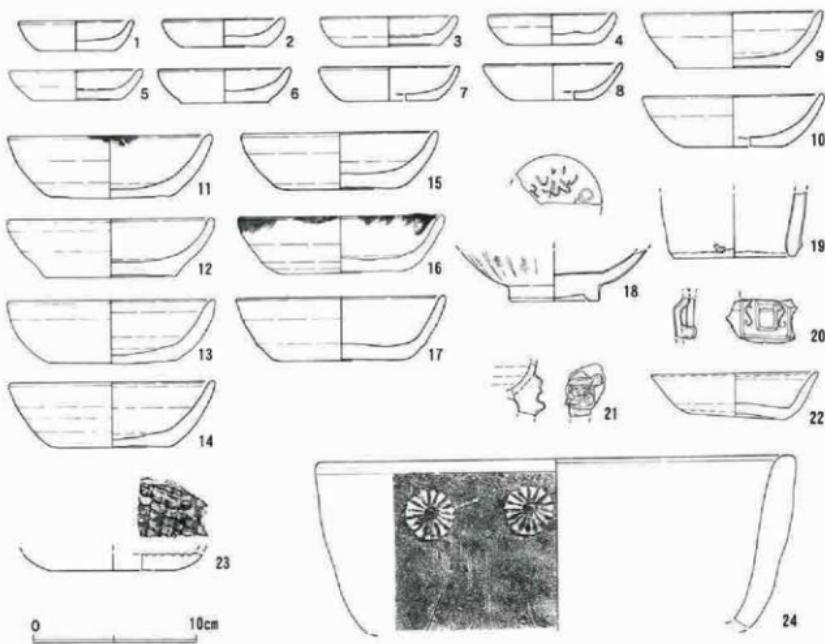


図10 第1面上包含層出土遺物

土壌10：II区北西域で検出された溝状の遺構で北側は調査区外に拡がっている。確認できた規模は、南北軸270cm以上、東西軸80cm、深さ20cm程と浅く細長い溝状を呈した土壌、ほぼ南北位の軸方位を示している。出土遺物は石製硯1点（図6-23）のみである。

d. 第1面及び包含層出土遺物（図10-1～24、図版9）

1～17はロクロ成形かわらけの小・中・大皿である。18～20は龍泉窯系青磁で18が鑄蓮弁文碗、19が器種不明、20が双耳香炉の耳部小片である。21は青白磁三足香炉の脚部小片、22が白磁口兀皿である。23は瀬戸印皿、24は菊花文スタンプした瓦質火鉢である。

ところで由比ヶ浜一帯、特に和田塚に隣接した江ノ電沿線あたりでは、獸骨や鹿角を切断したものがおびただしく出土おり、これらを加工してさまざまな製品を製作する職人がかなりいたと想像される。砂丘上に立地した長谷小路南遺跡（齋木他 1992）では、本遺跡同様に骨製栗形の製品にいたる各段階の未製品が多量に出土しており、製造工程が観察できるほどであった。

従って、上記したように第1面の遺構や生活面に伴って出土した大小さまざまな未製品が多く出土したこと、この地でも骨を加工して製品を作る職人の存在が想起されるところである。

【引用文献】

齋木秀雄他 1992『長谷小路南遺跡』長谷小路南遺跡発掘調査団

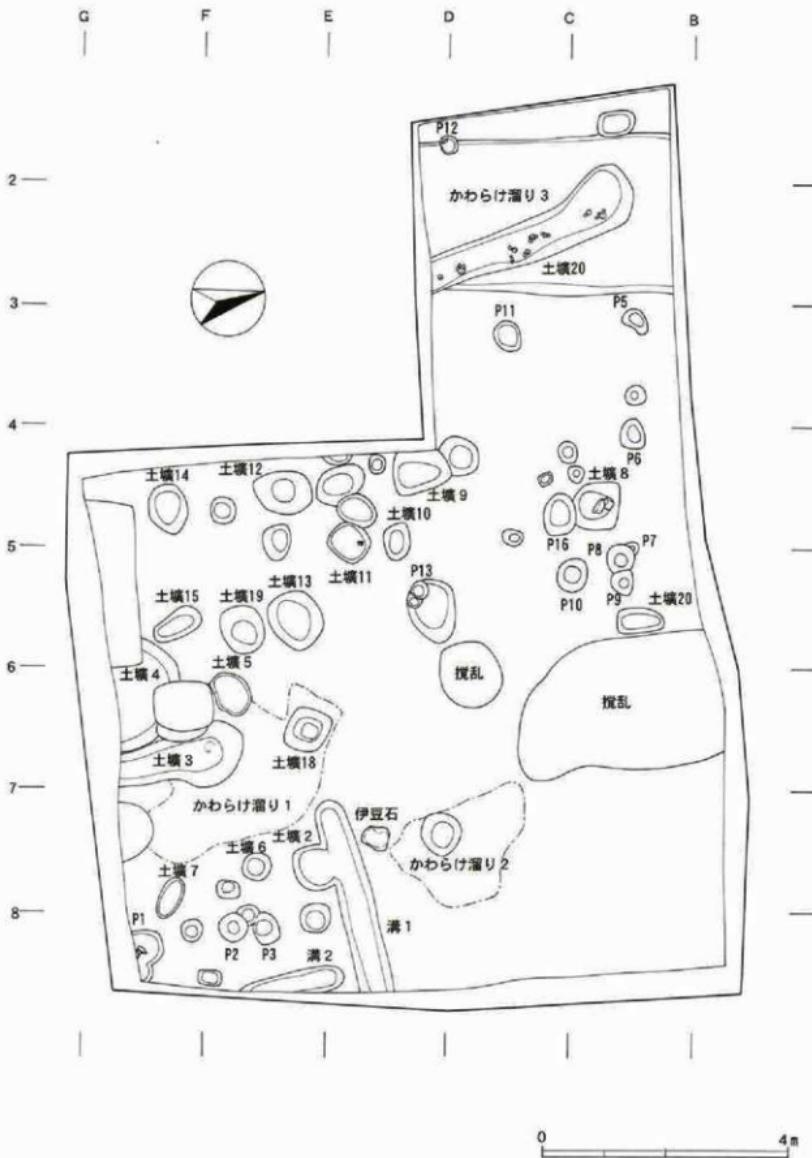


図11 第2面全測図

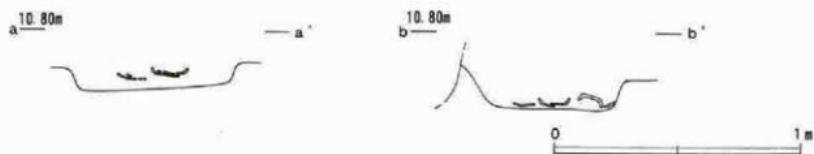
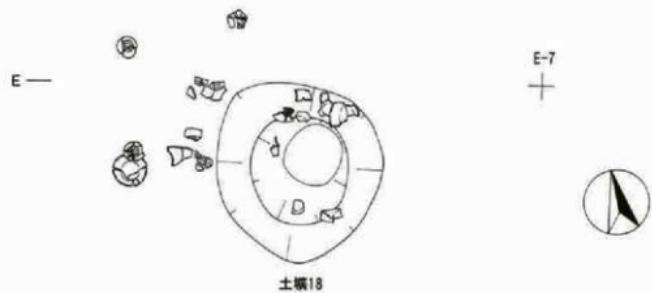


図12 かわらけ層1

2. 第2面の遺構・遺物

第1面を構成する厚さ約25cmの整地層と遺物包含層を除去すると、厚さ20cm程で上部に土丹版築を施した地業の上面が第2面であったり、I区南東域では硬化した焦土面の拡がりが確認された。この生活面は海拔標高10.60m前後である。第2面で検出した遺構には、土壙20基、溝2条、かわらけ溜3ヶ所、柱穴35口などである。柱穴は重複しながら調査区全体で確認されたが、建物を構成するような配置を示すものは認められなかった。遺物はかわらけ溜などの遺構を中心にかわらけ、船載陶磁器、瀬戸入子、常滑窯・捏鉢、火鉢、土製品、石、金属製品などが出土している。

a. 土壙 (図11・12・15、図版3・10)

土壙2：調査区南東寄りに位置し、溝1に北側を壊される形で検出された。確認された規模は東西軸80cm、南北軸60cm以上、確認面からの深さ約40cmの断面台形状を呈し、楕円形の掘り方である。

出土遺物 (図15-9) …ロクロ成形のかわらけ小皿である。

土壙3：調査区東寄りの南壁際、かわらけ溜1南西側に位置して検出された。かわらけ溜1に取り込まれた様相で連続した遺物の出土状況を示しており、土壙底面近くで出土した一部の遺物を除き、かわらけ溜1として扱った。南側は調査区外に拡がっており、全体規模は不明である。平面形状は南北位に長い溝状を呈した土壙で規模は、東西軸50~95cm、南北軸200cm以上、確認面からの深さ約20cmで断面逆台形状を呈する。土壙底面の北端で検出された小ピット中からは、かわらけ大皿を上向きに3枚重ねた状態で発見された (図16-60~62)。中段のかわらけは、口縁部の三ヶ所を打ち欠いて輪花状 (同図-61) にしたもので、その中には瀬戸入子の完形品 (同図-63) が納入されていた。

土壙4：調査区中央南壁際に位置し、第1面遺構の方形竪穴建物と土壙8・9に壊された大型土壙である。南側は調査区外に拡がっており、全体規模は不明である。確認できた規模は東西軸195cm、南北軸110cm、確認面からの深さ約20cmを割り、浅い皿状を呈した掘り方を有する。

出土遺物 (図15-10) …ロクロ成形のかわらけ小皿である。

土壙5：調査区中央南端寄り、かわらけ溜1西端に位置して検出された。平面形状は円形を呈し、規模は東西軸75cm、南北軸73cm、確認面からの深さ約10cmで浅い皿状を呈する。覆土中からはかわらけが細片になって程度まとめて出土したが復元できたのは3個体分だけである。

出土遺物 (図15-11~13) …ロクロ成形かわらけの中・大皿である。

土壙9：調査区中央の西壁際に位置して検出された。西端は調査区外に僅かに拡がっている。平面形状は隅丸長方形を呈し、確認された規模は東西軸75cm以上、南北軸95cm、確認面からの深さ約20cmで浅い摺鉢状を呈する。

出土遺物 (図15-14) …ロクロ成形かわらけの小皿である。

土壙13：調査区北西寄り、F-5グリットに位置して検出された。平面形状は長円形を呈し、規模は東西軸100cm、南北軸85cm、確認面からの深さ約20cmで浅い摺鉢状を呈する。

出土遺物 (図15-15~20) …ロクロ成形かわらけの小皿だけである。

土壙20：II区北西域において南北位に長い溝状を呈した土壙が検出された。本遺構はかわらけ溜3の上面を削平している。南端は調査区外に拡がっており、全体規模は不明である。確認された規模は、東西軸60~85cm、南北軸370cm以上、確認面からの深さ約15cmで浅い皿状を呈する。覆土中や底面からは、かわらけ・船載陶磁器などがまとめて出土している。

出土遺物 (図15-22~41) …22~33はロクロ成形かわらけの小・大皿である。34~37は龍泉窯系の鍋蓮弁文碗、38は龍泉窯系青磁の折縁皿、39・40は白磁口元皿、41は青白磁梅瓶の胴部小片である。

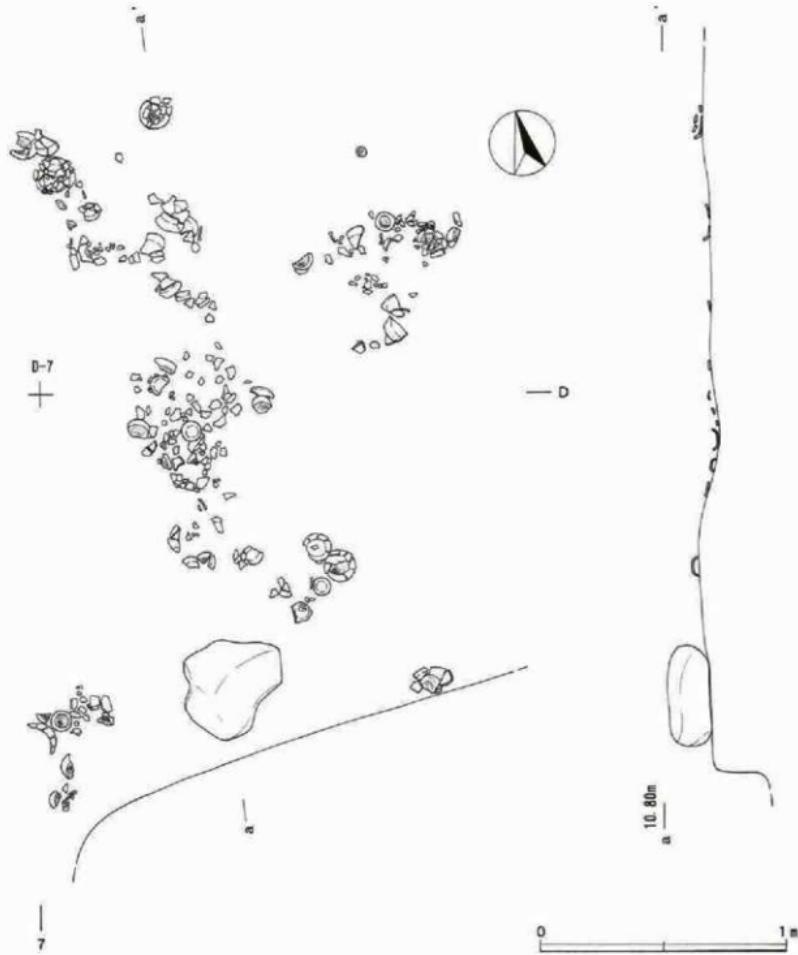


図13 かわらけ溜2

b. かわらけ溜り (図11~14・16~19、図版3・10)

かわらけ溜1：調査区南東側、G・F-6・7グリットにわたる範囲の位置で検出された。確認された規模は、南北3.6m、東西2.6mの範囲で東側で検出された焦土面と連続した状況で確認された。上層は破碎されたかわらけ小破片が敷きつめられたような状況で広範囲にわたって確認できた。これを丁寧に除去すると、図12のように土壤3・5・18にあたる部分を中心に細片だが接合可能なかわらけがある程度まとまった状態で出土した。

出土遺物 (図16-1~59・64~67) …口クロ成形のかわらけが1~20は小皿、21~29・31・32は



図14 かわらけ溜3

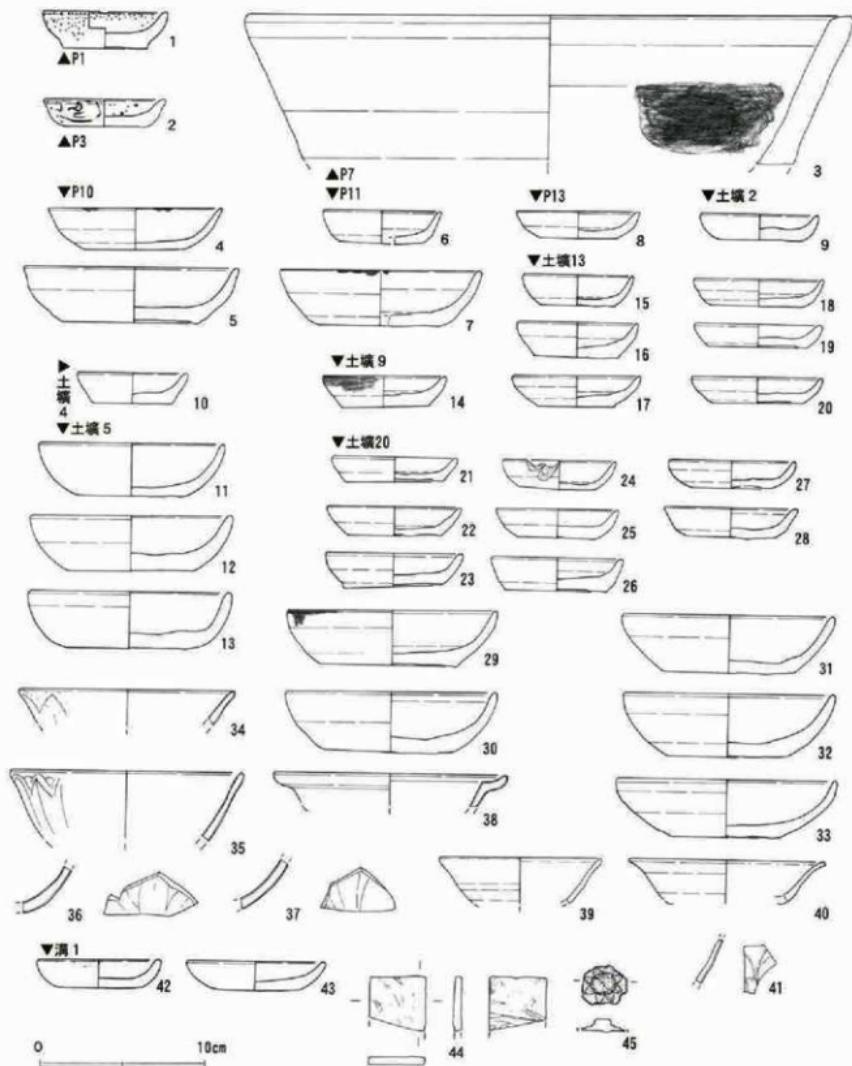


図15 第2面遺構出土遺物

中皿、30・34~59は大皿の三種に大別された。63は瀬戸入子で口縁八弁輪花である。64は手捏ね成形の白かわらけ大皿である。65は銅製品で破損するが元々は管状のものか。内側に木質と朱漆が僅かに

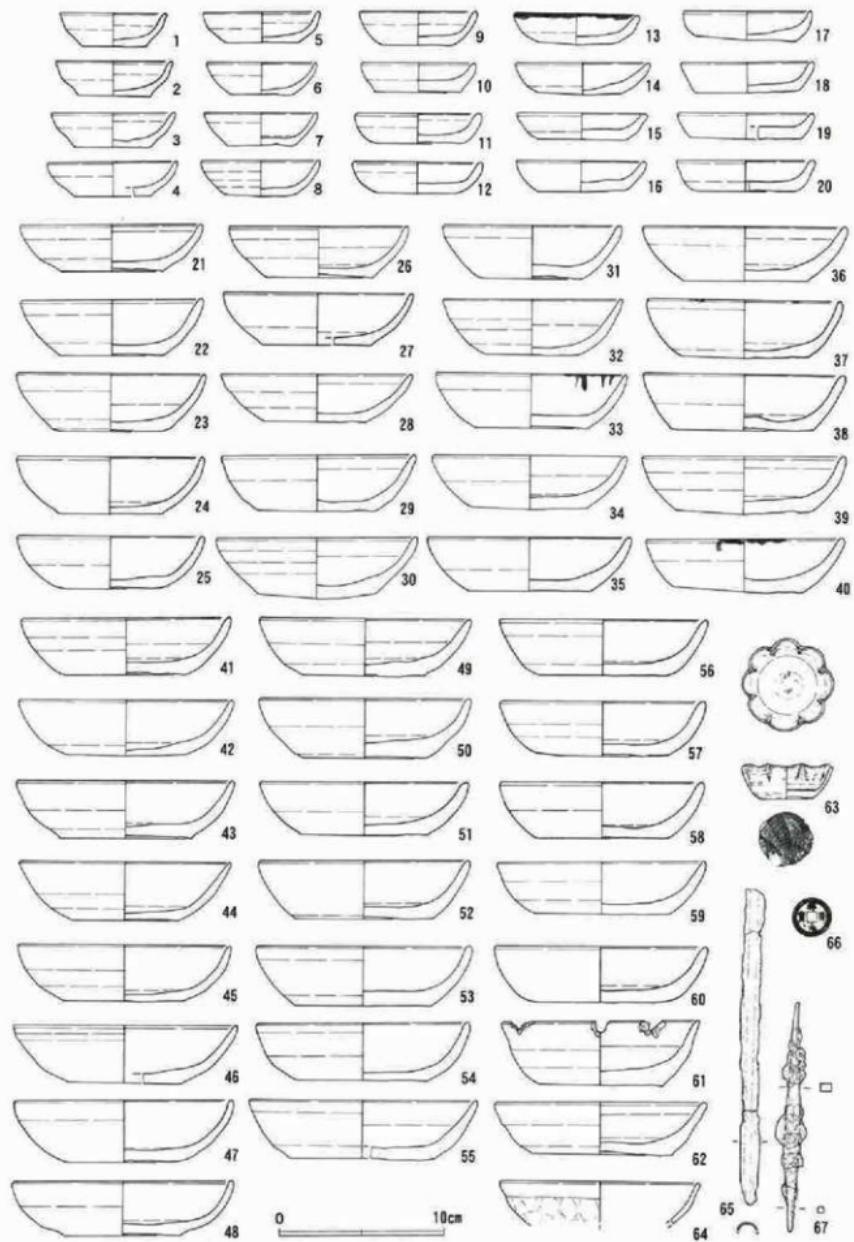


図16 かわらけ溜1出土遺物

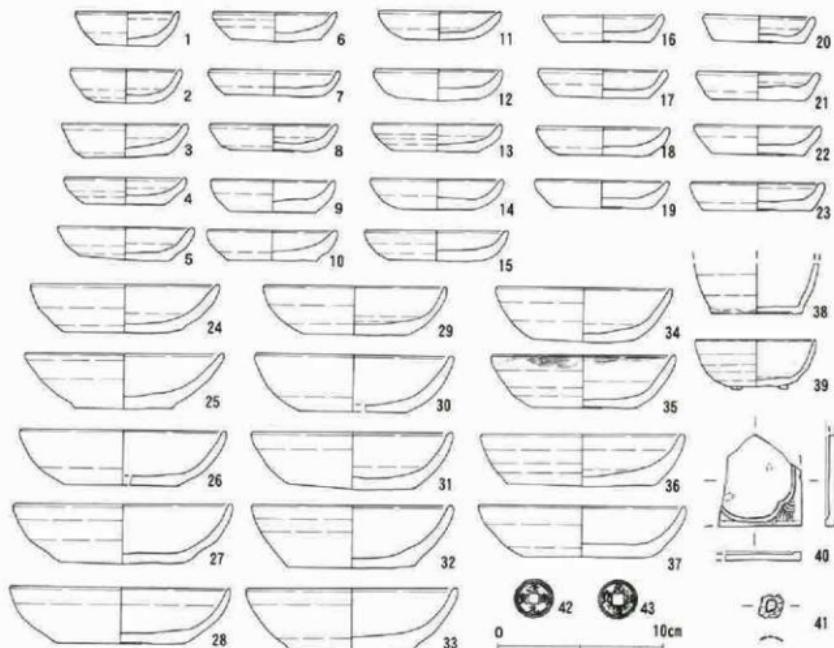


図17 かわらけ溜2出土遺物

残る。66は北宋銭で「祥符元宝」である。67は両端が尖った鉄製品である。

かわらけ溜2：調査区東側中央、E・D-7グリットにわたる位置で検出された。規模は南北2.4m、東西1.6mの範囲で面上の抜がった状態で確認できた。かわらけ溜1と同様に上層は破碎されたかわらけ小片が散きつめられていた。図13はそれを取り除いた状況の図面であり、かわらけは潰されて細かく割れたものになっている。

出土遺物（図17-1～43）…1～23が小皿、24・25・29・30・34・35が中皿、26～28・31～33・36・37は大皿の三種に大別されたロクロ成形のかわらけである。38は青白磁の型作り小壺、39は瀬戸入子で内壁に紅付着が紅皿である。40は石製硯で底面を四葉状に形成する。41～43は銅製品である。41が飾金具の釘頭か、42・43は北宋銭の「景德元宝」・「元祐元宝」である。

かわらけ溜3：調査区北西端の位置で検出された。土壙状の掘り方の様子から北・南側は調査区外に抜がっている可能性が高い。確認できた規模は、南北417cm以上、東西264cm、深さ30cm程の浅く掘り込んだ掘り方をもち、北側を中心に高い密度で廃棄された状況が確認された。かわらけ溜は土層観察から上層に弱い土丹地業が覆っており、遺物廃棄後に埋め立てられたらしく大半のかわらけが土圧で潰されて細かく割れていた。

出土遺物（図18～19-1～150）…1～4が極小皿、5～91が小皿、92～97・99～101が中皿、102～119が大皿の四種に大別されたロクロ成形のかわらけである。120～128は龍泉窯系の青磁であり、120～124が鎧蓮弁文碗、125が折腰皿、126～128が折縁盤である。129～135は白磁であり、129が

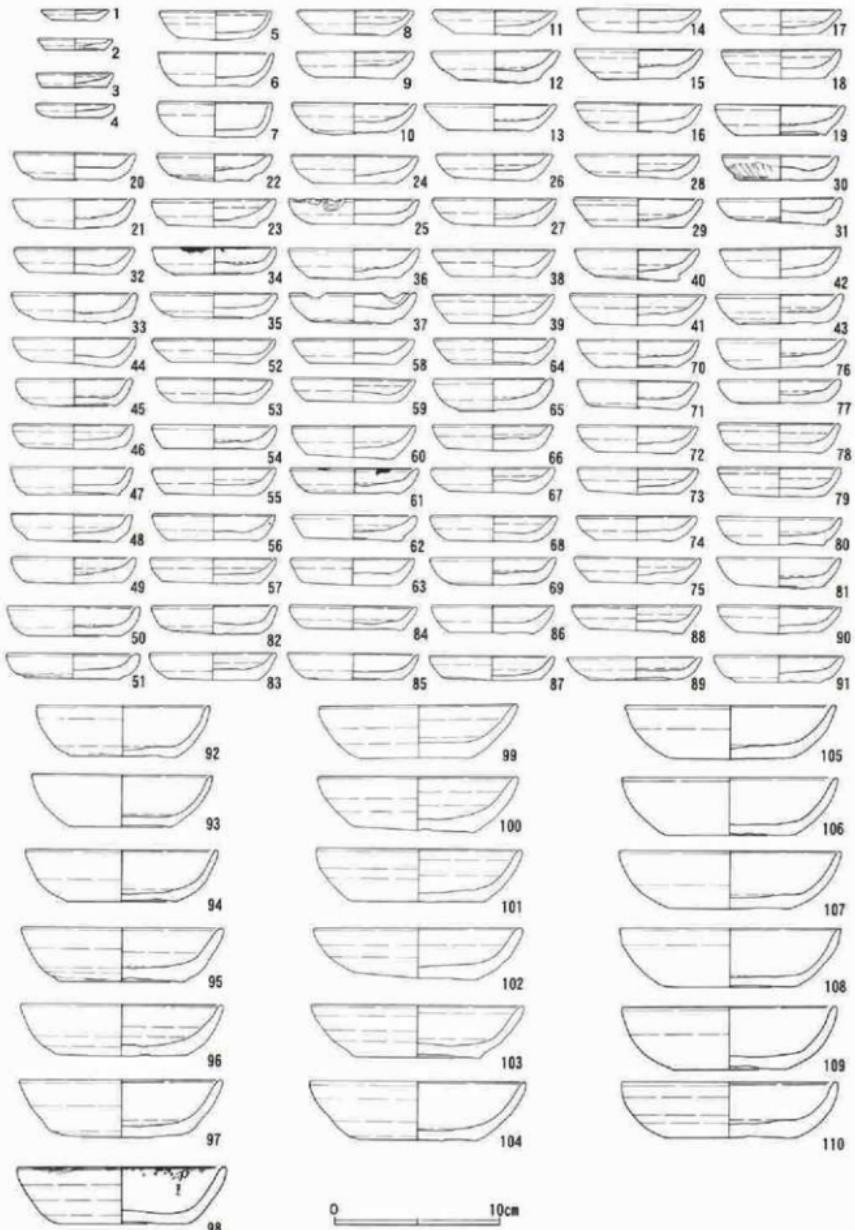


図18 かわらけ窓3(1)出土遺物

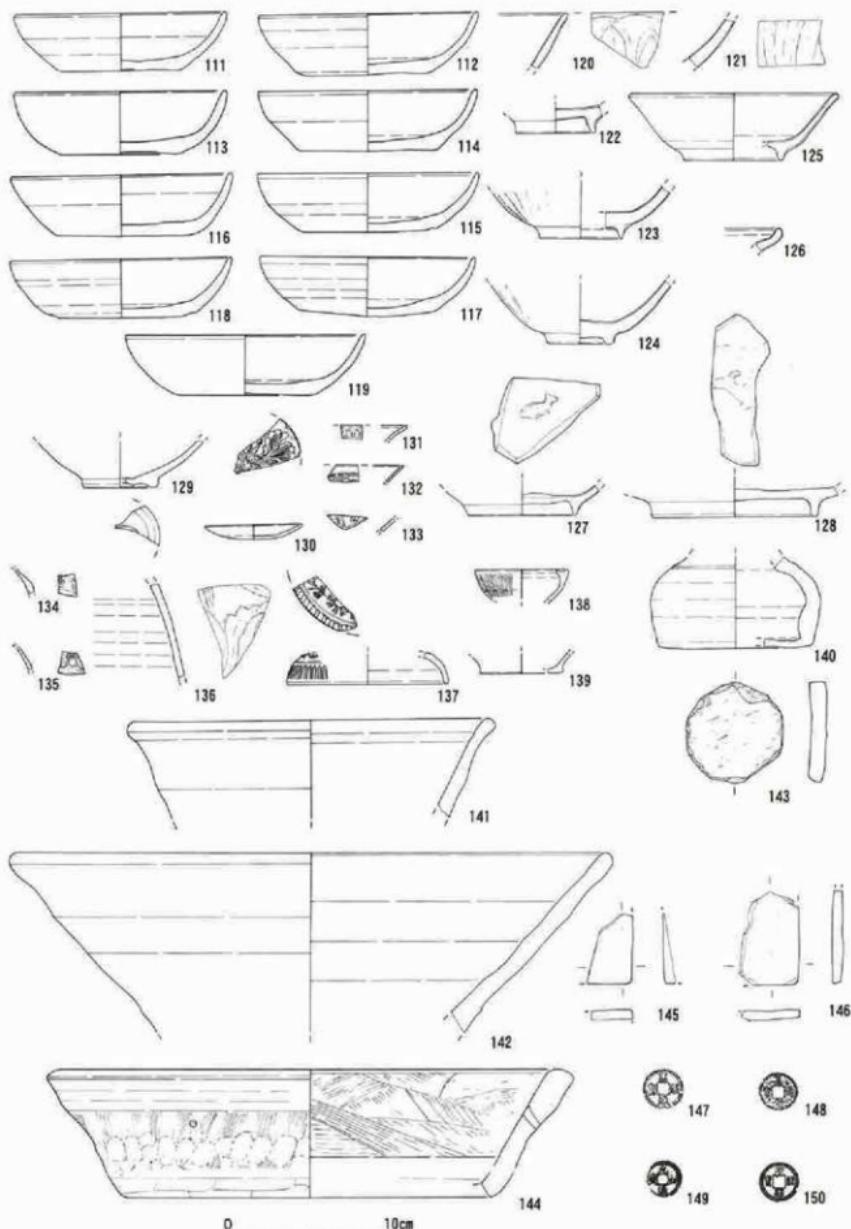


図19 かわらけ窪3(2)出土遺物

口兀碗の下半部、130～133が印花文小皿、134・135が小壺である。136～139は青白磁、136が梅瓶、137・138が合子蓋・身、139が小壺の底部片である。140～142は常滑の虜口壺と捏鉢（片口鉢I類）である。143はかわらけ底部を転用加工した円盤、144は土器質火鉢である。145・146は京都鳴滝産の砥石である。147～150は北宋銭の「皇宋通宝」・「嘉泰通宝」・「元祐元宝」であった。

c. 溝 (図11・15)

溝1：I区南東端の位置で検出された東西位の溝であり、西端は7ライン付近で終わっているが東端は調査区外に伸びている。確認された規模は、長さ335cm以上、幅55cm程、深さ30cm前後である。覆土は茶褐色弱粘質土で底面付近に粗い砂と土丹粒が堆積していた。

出土遺物 (図15-42～45) …42・43はロクロ成形のかわらけ小皿、46は京都鳴滝産の砥石、47は銅製品である。上面は中央に摘状の円形突起と周りに八葉蓮華文を施しており、容器の蓋物か、釘隠などの飾金具の可能性がある。

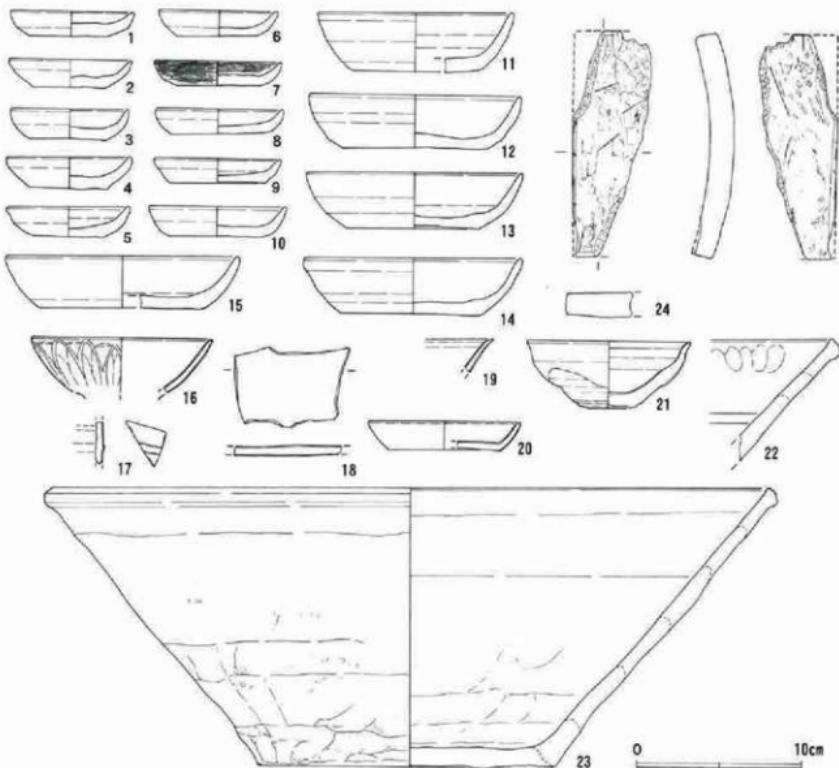


図20 第1面下～第2面出土遺物

溝2：溝1南側に隣接した位置で、溝1の主軸方位に直交した南北位の溝を検出した。南側は調査区外に延びている。確認された規模は、長さ125cm以上、幅約35cm、深さ30cm程である。遺物はかわらけ小片だけで図示し得るものは無かった。

d. 第1面下～第2面出土遺物（図20）

図20-1～23：かわらけはすべてロクロ成形であり、1～10が小皿、11が中皿、12～15が大皿である。16・18は青磁の碗と盤底部と思われるもの。17は青白磁の梅瓶小片、19・20は白磁の口元皿、21は船載の天目茶碗である。22・23は常滑捏鉢、24は滑石製鍋胴部を転用加工した温石である。

3. 第3面の遺構と遺物

第2面を構成していた大小の土丹塊を含んだ地業層を除去すると、明茶灰色の山砂が表出した。この山砂は厚さ5～10cmで調査区のほぼ全域で第3面上に敷きつめられた状況で確認されている。さらに第3面は大小土丹塊を突き固めて版築した堅牢な地業層であり、海拔標高10.40m前後で比較的に平坦な生活面を構築している。この生活面で検出した遺構は、掘立柱建物1軒、土壙12基、溝2条、柱穴約50口である。出土遺物は、かわらけ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、土製品、石製品、金属製品、木製品などがみられた。

a. 掘立柱建物（図21～23、図版4・5・11）

建物1：調査区西側に位置し、主体は調査区外に拡がっている。建物は、C～F-1～5グリットの範囲で東西3間、南北3間が検出されたが、建物周囲に施されている土丹版築の様子から南側は調査区外に延びてもう少し大きなものになる可能性がある。

調査区内での規模は、東西3間=5.94m、南北3間=5.95mが確認された。柱間寸法は東西・南北位ともに各間の芯々距離が198cm(約6.5尺)を測り、主軸方位はN-5°30' -Eである。各柱穴の掘り方は、平面形状が円形または梢円形を呈し、規模は径40～60cm程、確認面からの深さ約40～50cmである。柱穴の底面には、角柱を縦割りにして再利用した1～3枚の礎板がそれぞれ据えられていた。また柱穴口1には厚手の礎板上に幅12×9cmの角柱が遺存していた。建物の側柱外は通路と考えられる強い土丹版築の地業が施されているのに対し、建物内にあたる床下部分は貧弱な地業が拡がっていたに過ぎない。この地業の境は西・東・北辺で検出されたが南辺は確認されていないので、建物の南北位は現況よりも南側に延びて3間以上になる可能性が考えられる。

出土遺物は図23-1～21である。1(柱穴イー-1)は常滑窯の口縁部片であり、2～6(柱穴イー-3)がロクロ成形かわらけの小皿・青磁蓮弁文碗・北宋銭の「元祐元宝」(1086年)である。8～10(柱穴ロー-1)はロクロ成形のかわらけ小皿と大皿・滑石製加工品(スタンプの加工途中か)である。11～16(柱穴ハ-1)はロクロ成形かわらけの小皿と大皿である。17～21(柱穴ニ-1)はロクロ成形のかわらけ小皿と大皿・青磁蓮弁文碗であり、22～25(柱穴ニ-2)がロクロ成形のかわらけ小皿・ガラス製小壺の胴部片と思われるものである。

b. 土壙（図21・24・25、図版4・11）

土壙1：調査区中央北端、B-C-5・6グリット間で検出され、北半部は調査区外に拡がっているので全体規模は不明である。確認できた規模は、東西軸約205cm、南北軸120cm以上、深さ70cmであり、梢円形を呈するものと推定される大型の土壙である。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆

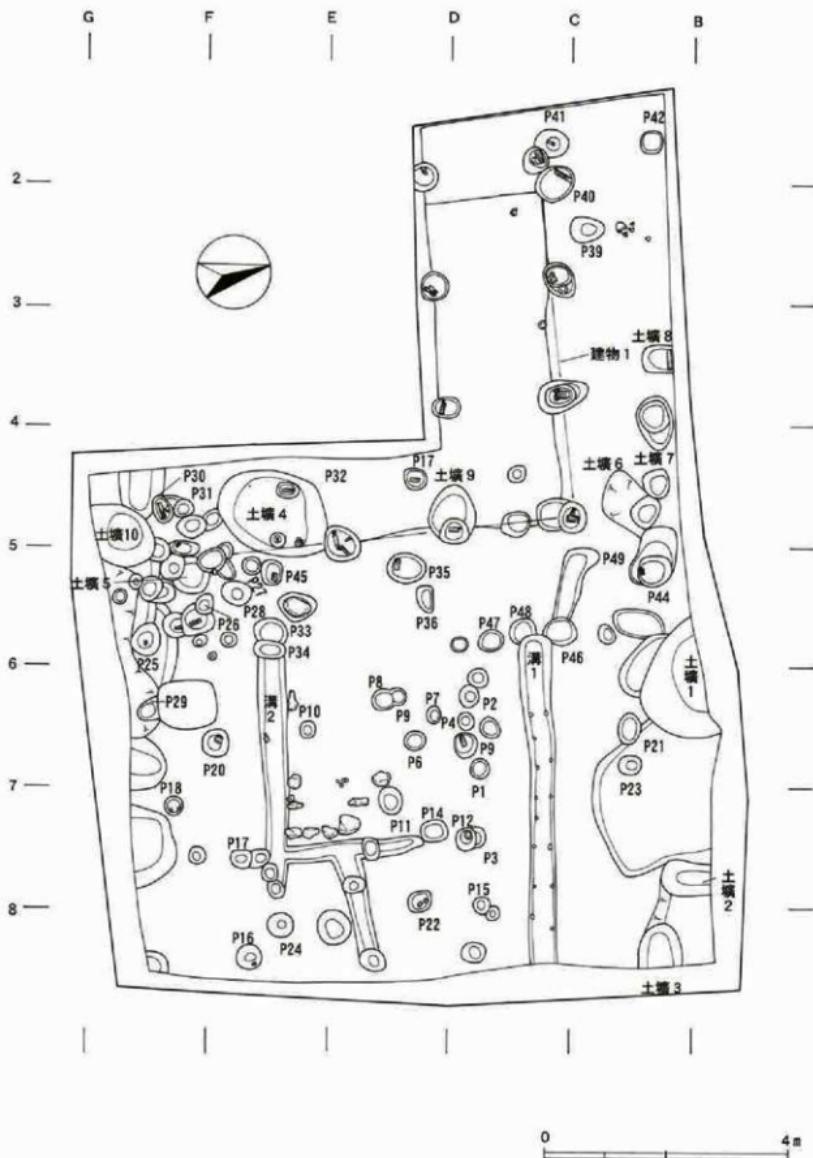


図21 第3面全測図

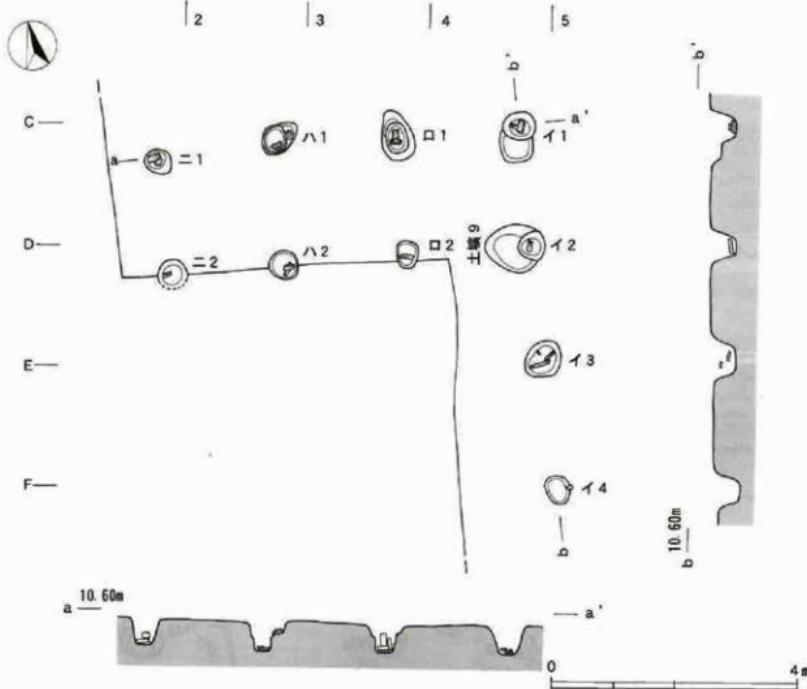


図22 建物1

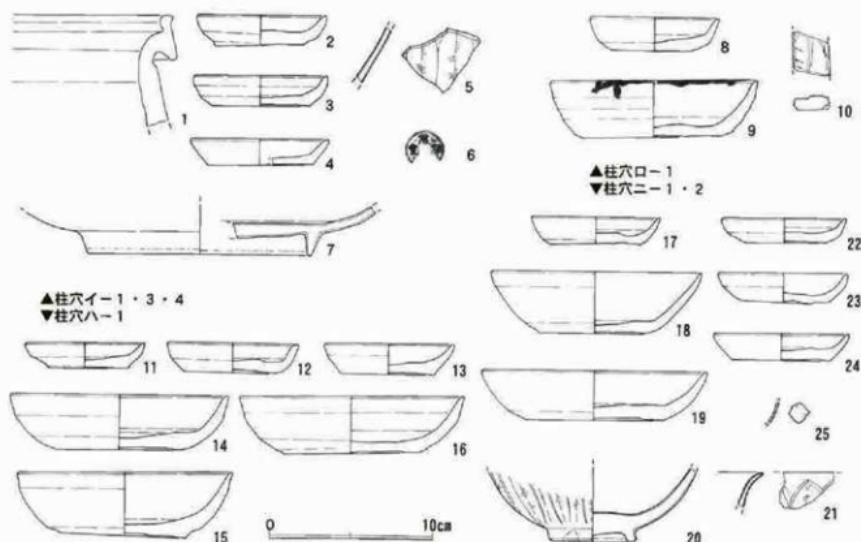


図23 建物1出土遺物

土は上層が山砂を多く含んだ茶灰色砂質土、中層が厚さ10cm前後の炭化物層になり、下層には木製品を多く混入した締まりのない有機物腐蝕土が厚く堆積していた。なお、最上部は土丹版築によって埋め戻された痕跡を窺うことができた。

出土遺物は（図24-1～25）、1～4が小皿と大皿のロクロ成形のかわらけ、2は口縁～内壁に煤の付着があり燈明皿であろう。5は青磁折縁盤である。6～25は木製品である。6・7が鍋などの蓋と曲物の底板、8が所謂金剛草履の芯、9が箱物になる組物部材の側板、10・11が形代の劍形と刀形と思われるものである。12・13～22は箸であるが、12はやや太く片側だけを加工した菜箸、その他は両端が細くなるように加工されたものである。23は角棒の片端が尖る杭状の製品である。

土壙2：調査区北東隅付近に位置し、北側調査区外に拡がるものである。確認された規模は、南北軸85cm以上、東西軸60cm、深さ22cmである。覆土は炭化物・山砂を多く含んだ茶灰色砂質土である。

出土遺物は（図24-26～36）、26～28が小皿と大皿のロクロ成形かわらけ、29～32が白磁口兀皿・皿、33が青白磁の印花文小皿、34が高台付の土器碗、35・36が北宋銭の「治平元宝」、「至和元宝」である。

土壙4：調査区南西域の西壁際に位置で検出された。建物1の柱穴イー3に一部を壊されている。規模は、南北軸190cm、東西軸138cm、深さ20cm程であり、梢円形を呈した浅い掘り方の大型土壙である。掘り方底面の北寄り両端には、礎板をもつビット2口が検出されている。

出土遺物は（図25-37～40）、37が白磁口兀皿、38が青白磁の菊花文小皿、39が瀬戸入子、40が常滑窯の口縁片である。

土壙5：土壙4の南側に位置し、建物1の柱穴イー4に一部を壊されている。規模は径65cmの円形を呈し、深さ30cm程で掘り方断面が摺鉢状である。覆土は炭化物とかわらけ小片を多く含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。

出土遺物は（図25-41・42）、41がロクロ成形のかわらけ小皿、42が青磁鑄蓮弁文碗である。

土壙7：調査区中央北端に位置し、柱穴に上半部を壊された状況で検出された。規模は東西軸98cm、南北軸60cm、深さ45cmで梢円形の掘り方を有する。

出土遺物は（図25-43・44）、43が青磁折縁皿、44が常滑捏鉢である。

土壙9：調査区西側中央よりに位置し、建物1の柱穴イー2に東端が壊されて検出された。規模は、東西軸98cm、南北軸80cm、深さ42cmで梢円形を呈した掘り方をもつ。

出土遺物は（図25-45・46）、図示できたのが45・46のロクロ成形のかわらけ小皿だけである。

c. 溝（図21・26、図版11）

溝1：調査区北東域に位置し、Cラインの北側に沿った東西方向の溝である。西端はD-5グリットの北東域から始まり、東端は調査区外に延びている。確認された規模は、長さ545cm、幅45cm前後、深さ30cm程であり、溝底の両基底部には30～60cm程の間隔で小ビットが確認されていしる。このビットは、木組構に用いられたもので、土止め板（横板）を受ける為に打ち込まれた杭の痕跡と考えられる。

出土遺物は（図26-1～3）、1がロクロ成形のかわらけ小皿、2が青白磁合子蓋、3が砾石で長崎県天草産と推定されるものである。

溝2：調査区南側に位置し、E・F-5～7グリット間に東西方向に検出され、溝1と同一の軸方位を示している。規模は長さ422cm、幅45cm前後、深さ30cm程、掘り方は断面逆台形をていしている。底面に杭のような痕跡は認められなかった。東端近くで本溝と接続して北側に延びながらT字形になつ

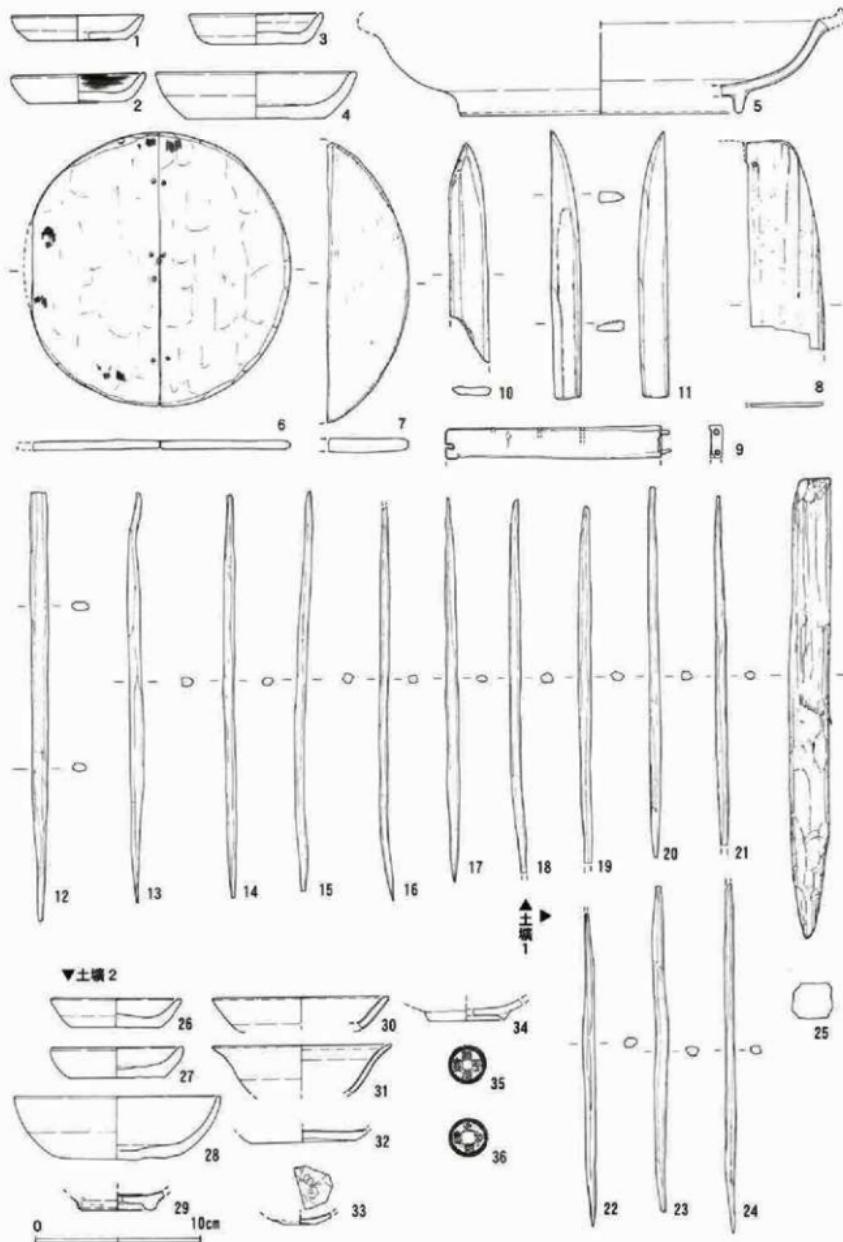


図24 土壤出土遺物（1）

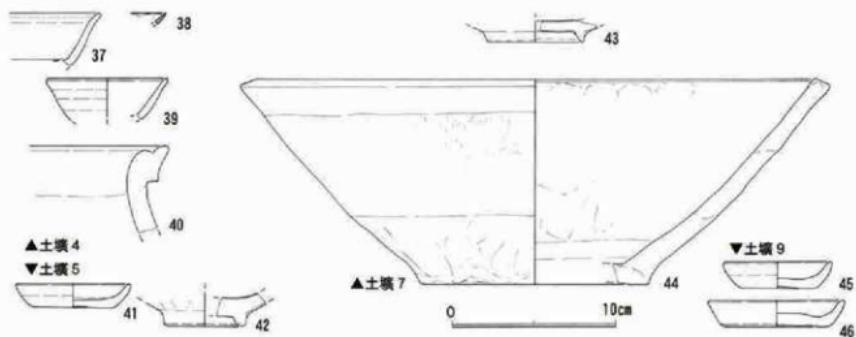


図25 土壤出土遺物(2)

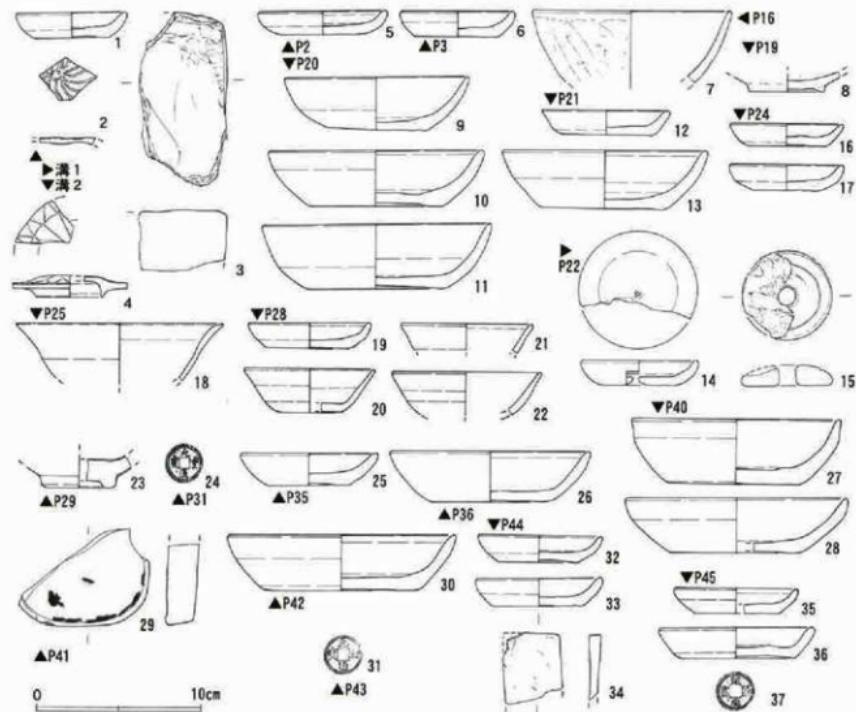


図26 溝・柱穴出土遺物

た浅い溝状の遺構を検出した。

また南北方向の溝状遺構の西肩に沿って4個の不整形な鎌倉石が確認された。さらにその西側には、偏平な川原石（伊豆石）がL字形の配置（各芯々距離が約145cm）で確認されたので、礎石建物を想定して周囲を精査したが、その他には礎石や掘り方等の痕跡を検出することはできなかった。図示可能な出土遺物は（図26-4）白磁壺蓋だけである。

d. 柱穴（図21・26、図版11）

この面で検出した柱穴は約70口である。建物1東辺の柱穴列西側には、同じ軸方位を示して柱穴底面に礎板をもつP17→P32→P30の南北方向に二間分の柱穴（各柱間約210cm）が見られた。東西方向は西側が調査区外になるため確認できなが、P17・P30の東側約200cmの位置で柱穴、またP32では同一位置にやや大型の礎石（川原石=伊豆石）が確認されている。従って、建物を構成する柱間の配置を示しており、確証を得ていないが建物の可能性を考えられる。

その他の柱穴は楕円形・隅丸方形で断面逆台形を呈し、径約30~60cm、深さ20~40cm程である。底面に礎板や土丹塊を残したもののが若干認められた。

各柱穴から出土した実測可能な遺物は（図26-5~37）、P2・3-5・6がロクロ成形のかわらけ小皿、P16-7が青磁鏡蓮弁文碗、P19-8が瓦質土器碗、P20-9~11がかわらけ中・大皿、P21-12・13がかわらけ小・大皿P22-14・15がかわらけ小皿と滑石製錘車、P24-16・17がかわらけ小皿、P25-25が白磁口兀碗、P28-19~22がかわらけ小皿と瀬戸入子、P29-23が青磁碗、P31-24が北宋銭「元豊通宝」、P35・36-25・26がかわらけ小・大皿、P40-27・28がかわらけ大皿、P41-29が石硯、P42-30がかわらけ大皿、P43-31が北宋銭「元祐通宝」、P44-32~34がかわらけ小皿と砥石、P45-35~37がかわらけ小皿と北宋銭「皇宋通宝」などが認められた。

e. 第2面下～第3面上出土遺物（図27・28-1~64）

1~25はすべてロクロ成形かわらけである。1~15の小皿は口径7.2~8.3cm（平均7.7cm）、低径4.4~6.0cm（平均5.4cm）の法量を示し、口径8cm以下と小型資料が主体を占めている。16は中皿である。17~25は大皿で口径12.2~12.9cm（平均12.6cm）、低径6.2~8.9cm（平均7.3cm）、器高2.7~3.9cm（平均3.3cm）の法量を示しており、口径13cm以下の小型で器高3cmを超えるやや高い資料が主体を占めている。26はロクロ成形の白かわらけである。

舶載陶磁器は、27~32が龍泉窯系青磁である。27・28が蓮弁文・無文碗、29・31が無文の折縁盤、31が蓮弁文皿である。32~34は白磁口兀皿、35が青白磁合子の蓋である。36は泉州窯系の綠釉盤と考えられるものである。

国産陶器は、37~39が瀬戸の洗・入子、40~42が常滑の甕・壺・捏鉢がみられた。43・44は土器質火鉢にあたり、46が女瓦片の砥石転用品である。46~50は石製品であり、46が砥石、47が滑石製温石、48が硯、49火打石、50が水晶製數珠玉と考えられるものである。51・52は白色物質塊で漆喰の可能性があるもの。54~63は金属製品であり、54・55が鉄製品の刀子・錐、56が銅製の用途不明品である。56~63は北宋銭であり、「口祐元宝」（景祐元宝か）・「元豊通宝」・「元祐通宝」2点・「紹聖元宝」3点・「聖宗元宝」である。64は竹加工品で片端を尖らせて杭状にしており、尖った先端部を地中に刺して立った状態で出土したものである。

4. 第4面の遺構と遺物

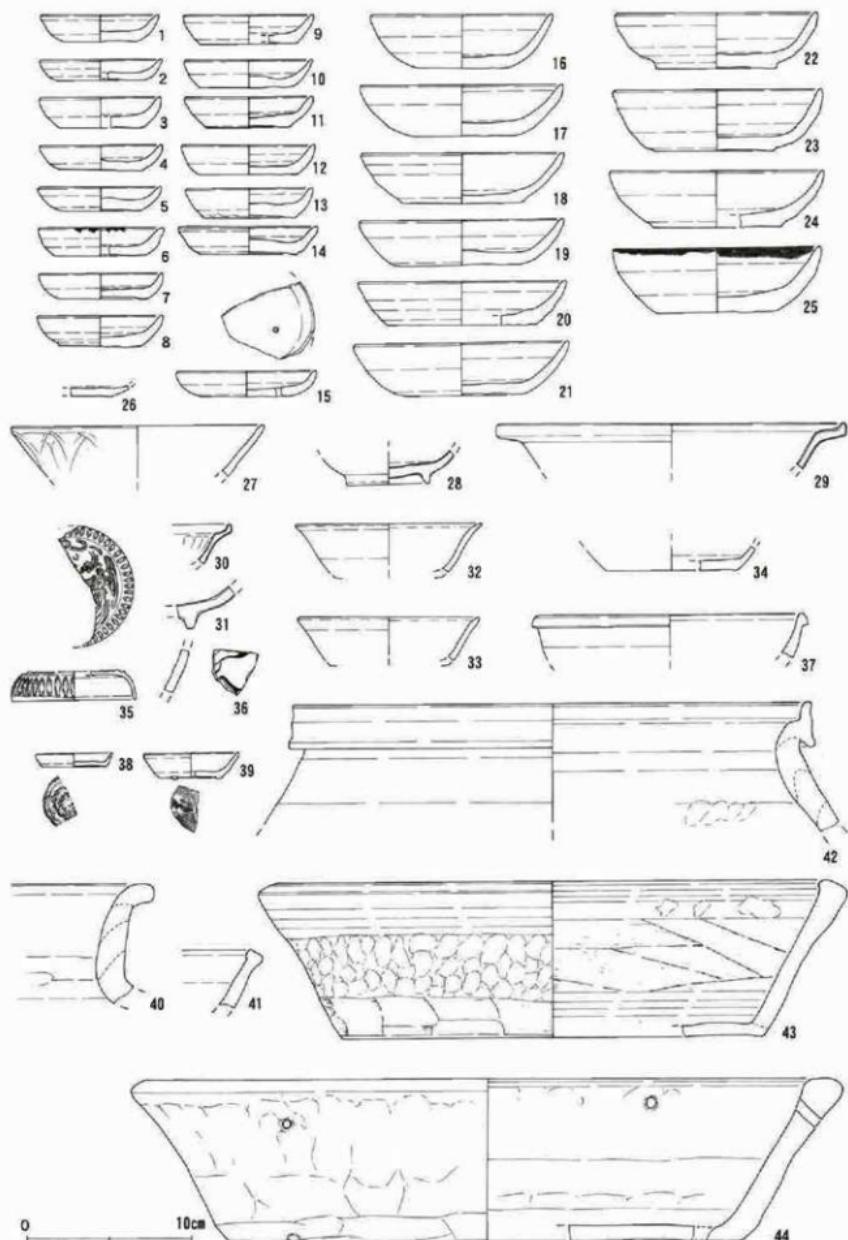


図27 第2面下～第3面出土遺物（1）

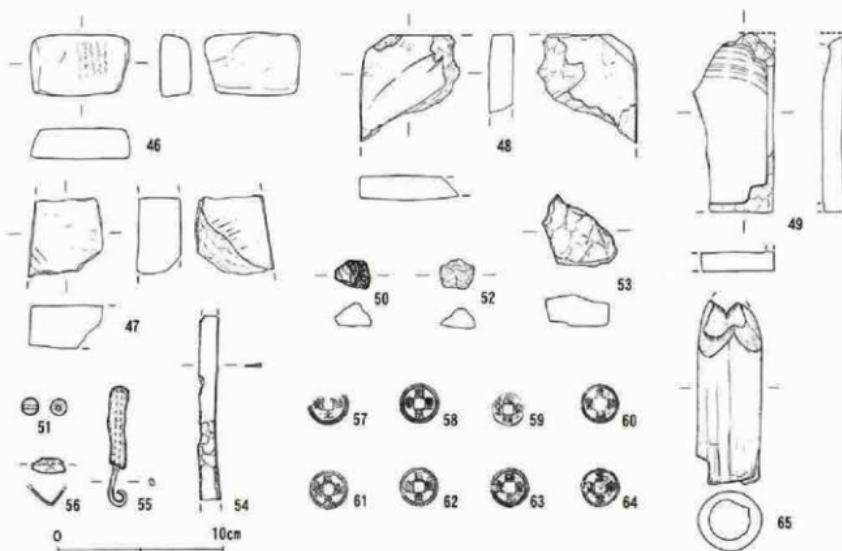


図28 第2面下～第3面出土遺物（2）

第4面は、黒褐色粘質土の中世地山面と、その上面に厚さ5～10cmの小土丹塊を突き固めて版築された地業層により構築された生活面である。この生活面で検出された遺構は、地業面上と中世地山面との両面に伴うものである。検出遺構は、掘立柱建物5軒、礎石列1列、土壙11基、溝2条、柱穴約80口である。出土遺物は、多量のかわらけをはじめ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、土製品、石製品、金属製品、漆・木製品などがみられた。

a. 掘立柱建物（図29～32・34、図版6・7・12）

建物1（図30）：調査区東側（I区）に位置した南北位の掘立柱建物である。建物は、東西2間、南北4間が検出されたが、建物周囲に施されている土丹版築の様子から東・南側は調査区外に延びてもう少し大きなものになる可能性がある。

調査区内での規模は、東西2間=405cm、南北4間=812cmが確認された。柱間寸法は東西・南北位ともに各間の芯々距離が約203cm（約6.7尺）を測り、南北主軸方位はN-10°30' - Eである。中央柱穴列南北軸の東側には、重複する形で礎板を伴った浅い掘り方の柱穴が認められた。また梁行の北から3～5間に位置した柱穴列P 8～13・P 9～14・P 10～15の中間には、それぞれ柱穴が確認され掘り方の底面に礎板や角柱痕が遺存していた。これは床下構造に係わる補強の為の束柱と推測され、この範囲が寝屋的な空間の可能性が考えられる。各柱穴の掘り方は、平面形状が円形または梢円形を呈し、規模は径40～60cm程、確認面からの深さ約65～85cmである。各柱穴の底面には、角柱を15～27cm程の長さに切断した後、縦割りにして再利用した1枚または2枚の礎板が底面に据えられていた。また柱穴のP 2・13からは、厚手の礎板上に幅15cm程の四隅を面取りした角柱痕が遺存していた（図版7-4）。柱穴内からの出土遺物は、かわらけ小片だけで図示可能なものは認められなかった。

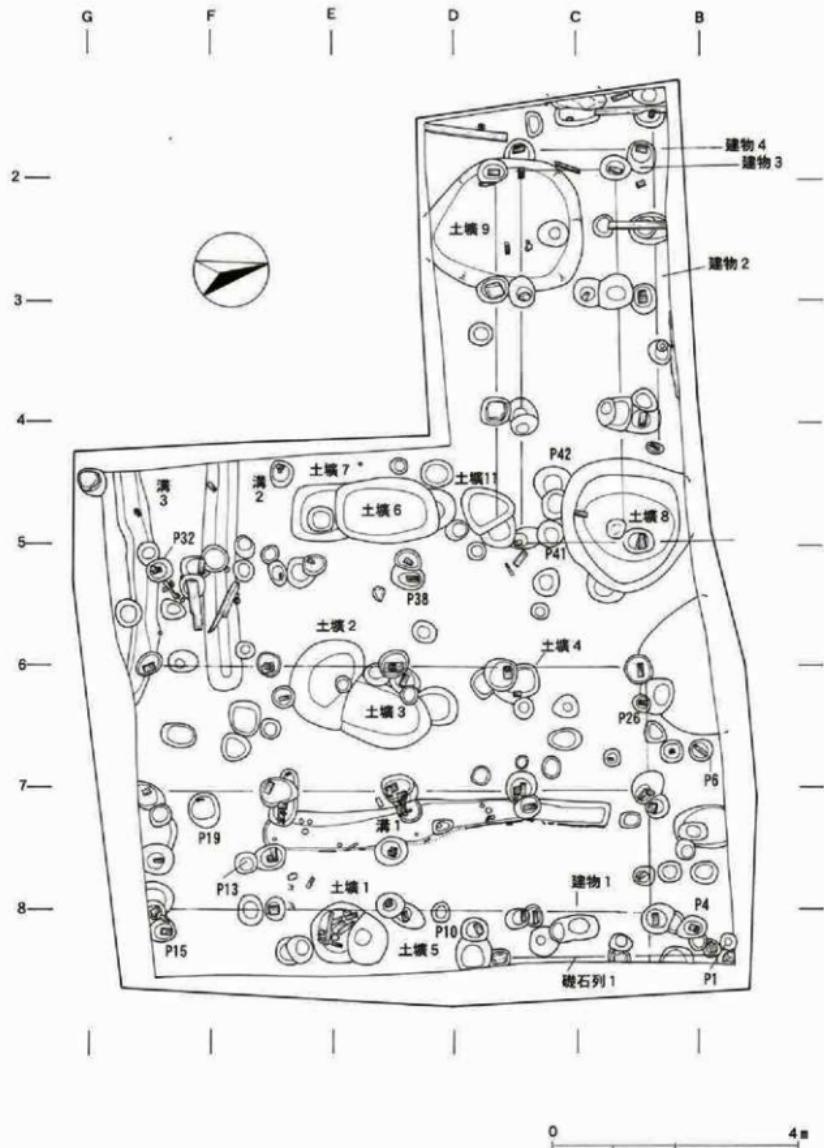


図29 第4面全測図

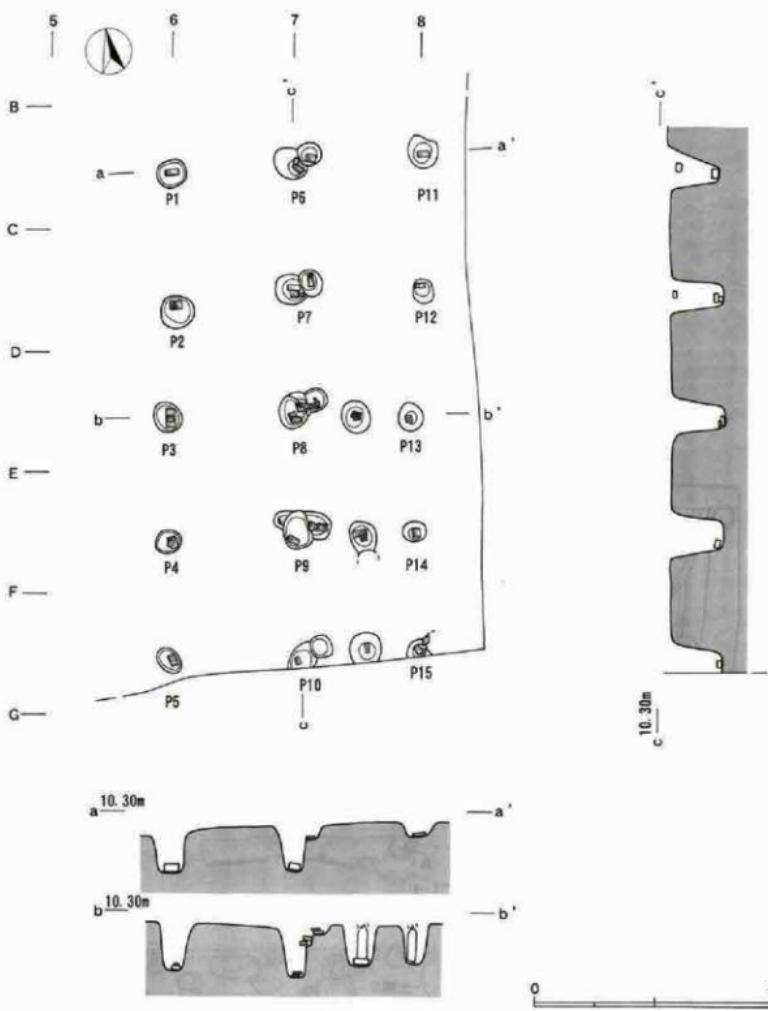


図30 建物1

建物2(図31・34) :

北西域(C-2~5グリット)に位置しており、調査区北壁にほぼ沿って柱穴4口からなる柱穴列が検出された。これは柱間の距離からみて掘立柱建物の一部を構成した柱穴列と推定され、中心は北側の調査区外に抜がっている可能性がある。柱間寸法は、芯々距離で西端にあたる柱穴から東端の柱穴までが195cm・195cm・160cmを測る。各柱穴の掘り方は、平面形が橢円形を呈し、大きさは径30~50cm

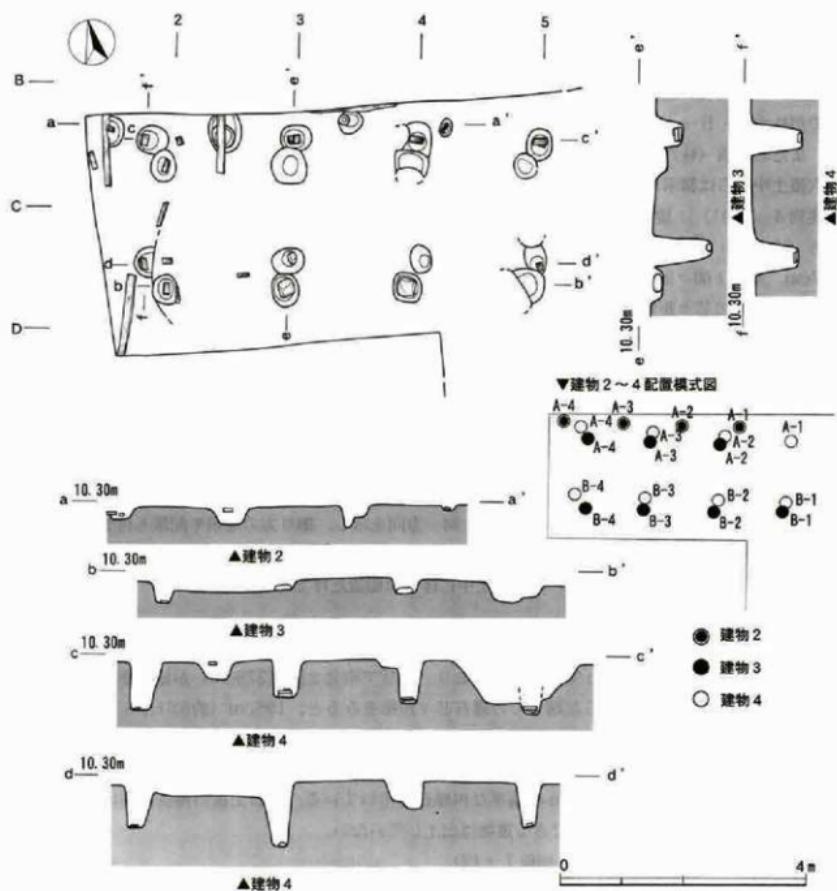


図31 建物2～4

程で確認面からの深さ20cm前後と浅いものであり、両端の柱穴底面に小型の礎板が確認された。また同一面上で柱穴A-3・4上に南北位、柱穴A-2に接して東西位の板材（幅12cm、厚さ1cm）がそれぞれ検出されたが北側の調査区外に延びており全体規模は確認できていないが本建物に伴う可能性も考えられる。さらに調査区南西隅にも南北位の板材を確認しているが関係は不明である。

出土遺物は（図34-1～6）、柱穴A-3に伴うものすべてロクロ成形のかわらけである。1が小皿・2～6が大皿、5・6は口縁内外に煤が付着した證明皿である。

建物3（図31）：調査区北西域（B～D-2～5グリット）に位置した掘立柱建物であり、建物4と重複した形で検出されたが本建物の方が新しい。調査区内で確認できた建物規模は、東西3間=590cm、南北1間=198cmであり、西・北側は調査区外に拡がっている可能性が考えられる。

柱間寸法は東西・南北位ともに各間の芯々距離が約198cm(6.6尺)を測り、南北軸方位は建物1と同一のN-10°30' - Eである。各柱穴の掘り方は、平面形が隅丸方形または梢円形を呈し、大きさは径40~60cm程、確認面からの深さ約20~30cmと浅いものである。柱穴の底面には、礎板を伴うものが柱穴A・B-4の2口、伊豆石の偏平な川原石を据えたものが柱穴B-2・3の2口が認められた。また北東隅(柱穴A-1位置)の柱穴は検出されておらず、土壌8に壊されたものと理解される。柱穴覆土中からは図示可能な遺物は出土していない。

建物4(図31)：建物3と重複する形で検出された掘立柱建物である。土壌8・9により柱穴の掘り方(A-1・B-3・4)の一部が壊されていた。調査区内で確認された建物規模は、東西3間=647cm、南北1間=201cmであり、西・北側は調査区外に拡がっている可能性が高い。柱間寸法は、東西位が各間の芯々距離で柱穴1~4が201cm・201cm(約6.6尺)・245cm(約8尺)をそれぞれ測り、柱穴3~4間だけが他の柱間に比べて1尺半程伸びている。建物の主軸方位は建物1・3と同一のN-10°30' - Eである。各柱穴の掘り方は平面形が梢円形を呈し、大きさは径45~60cm程、確認面からの深さは約65~90cmと深く掘り込んでいる。柱穴の底面には、A列とB-1・4の柱穴6口で1~3枚の礎板が据えられており、また偏平な小土丹塊を置いたものがB-3の柱穴1口から検出された。

本建物を構成する各柱穴は、比較的大形で深い掘り方を有しており、底面に礎板を据えたものが主体を占めていた。また軸方位は建物1の東西列と同一方向を示し、掘り方の規模や配置も併せてみると、両建物は同時期に存在した可能性が考えられよう。

出土遺物は(図34-7)柱穴B-4の覆土中に伴う白磁皿だけである。

b. 磚石列(図29・32、図版6)

調査区北東隅から北壁に沿って検出されており、現状で南北2間(378cm)が確認された。柱間寸法は、南端に位置する磚石から北端までの磚石芯々距離をみると、196cm(約6.5尺)・182cm(約6尺)とそれぞれの柱間距離を測ることができる。主軸方位はN-10°30' - Eであり、建物1~4と同じ軸方向を示している。各磚石は浅い掘り方を有し、使用された石材は全て伊豆石、径25~35cm程の梢円形を呈し、厚さ10~15cmの偏平な川原石を用いている。磚石上面の海拔標高は、9.90m前後とほぼ水平に据えている。図示できる遺物は出土していない。

c. 土壌(図29・33・35~38、図版7・12)

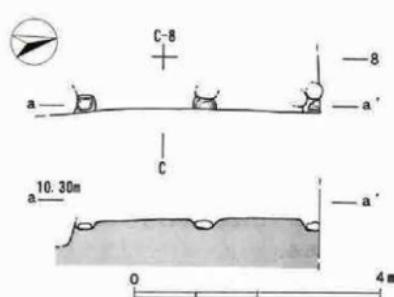


図32 磚石列

土壤1：調査区東壁際、E-8杭に接した位置で検出された。土壤5により掘り方の北側一部が壊されているが形状はほぼ円形を呈するものと思われる。規模は径98cm、深さ50cmである。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は上層が土丹粒・炭化物を多めに含んだ茶褐色粘質土、中層に厚さ2cm前後の炭化物層を挟んで、下層には短く切断された板材やかわらけが多く混入した締まりのない有機物腐蝕土が厚く堆積していた。なお、最上部は土丹版築によって埋め戻された痕跡を窺うことができた。

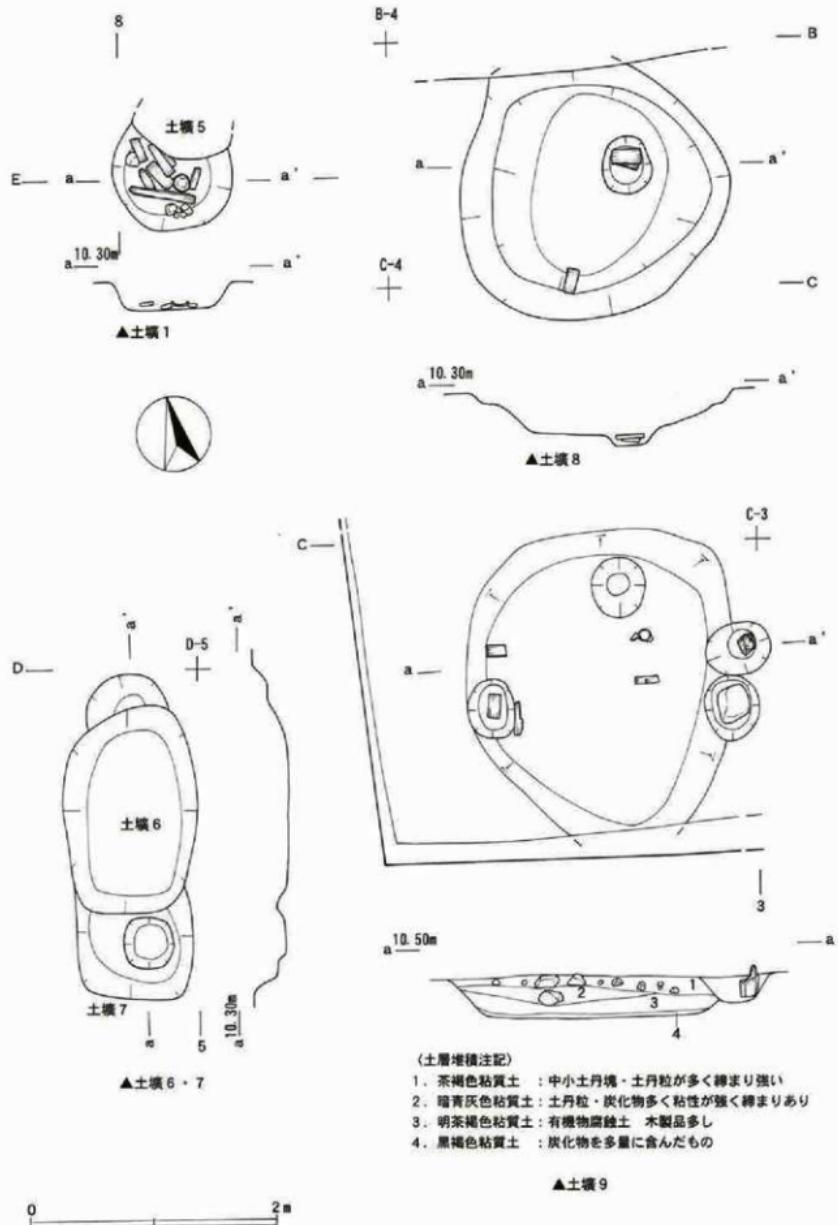


図33 土壤

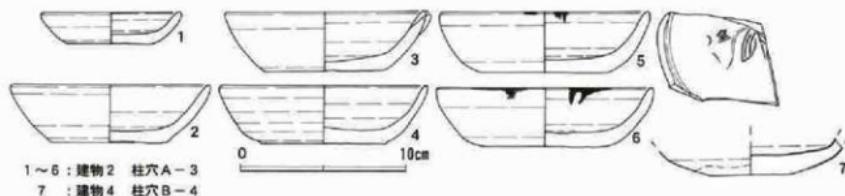


図34 建物2・4出土遺物

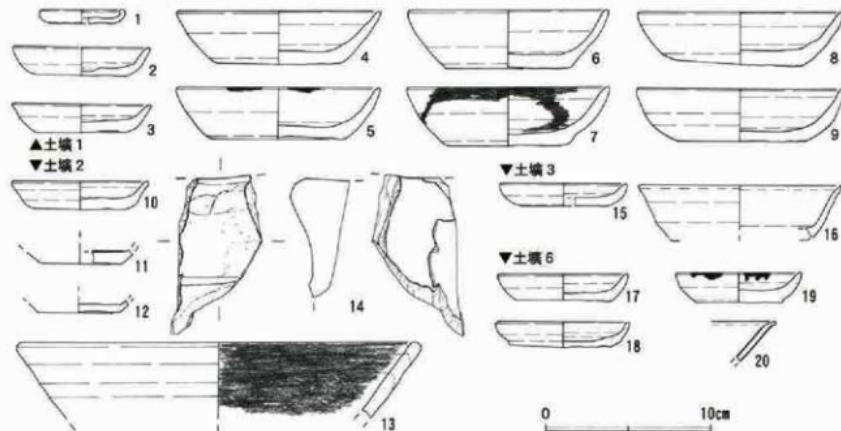


図35 土壌1～3・6出土遺物

出土遺物は(図35-1～9),すべてロクロ成形のかわらけである。1が極小の内折タイプ、2・3が小皿、4～9が大皿である。また5の口縁、7の口縁～内外壁にそれぞれ煤の付着があり燈明皿であろう。

土壤2：調査区中央東寄り、E-6杭の位置で検出された。土壤3により掘り方北側の一部が壊されている。確認された規模は、南北軸110cm以上、東西軸150cm、深さ45cmである。掘り方の形状は、梢円形を呈しており、断面が摺鉢状である。覆土は土丹粒・炭化物を多く含んだ茶褐色粘質土である。

出土遺物は(図35-10～14)、10が小皿のロクロ成形かわらけ、11・12が白磁口兀皿の底部片、13が常滑の捏鉢で内面に煤のような黒色物質が付着している。14は砥石である。

土壤3：調査区中央東寄りの位置で検出され、土壤2と重複関係にある。規模は、南北軸175cm、東西軸115cm、深さ30cm程度であり、梢円形を呈した浅い掘り方の土壤である。覆土は茶褐色弱粘質土で炭化物とかわらけ粒を多めに含んだものである。

出土遺物は(図35-15・16)、15が小皿のロクロ成形かわらけ、16が白磁口兀皿である。

土壤6：調査区中央西寄り、D・E-5杭の西隣接した位置で検出された。土壤7とは重複関係にあるが土壤7の一部を壊して掘られており、本土壤が方が新しい。規模は南北軸172cm、東西軸112cm、

平面形状は隅丸長方形を呈し、深さ30cm程で掘り方は断面が浅い皿状である。覆土は炭化物とかわらけ小片が多く含んだ締まりのない茶褐色粘質土である。

出土遺物は(図35-17~20)、17~19がロクロ成形のかわらけ小皿、20が白磁口皿である。

土壤7: 土壌6に北端部を壊された状況で検出された。確認された規模は、南北軸96cm以上、東西軸97cm、深さ25cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。断面逆台形の掘り方を有し、底面の南東寄りに径40cm程の円形の浅い掘り込みが認められた。覆土は明茶褐色の有機物腐蝕土(藻状の纖維質が強いもの)が堆積している。図示可能な遺物は出土していない。

土壤8: 調査区の北端中央寄り位置した大型の土壌である。北端は調査区外に拡がっており、建物3・4の柱穴掘り方を壊して掘られたものである。規模は、東西軸215cm、南北軸210cm以上、深さ50cm前後である。平面形は梢円形を呈し、壁面上位に屈曲した稜を有し、底面にかけて緩やかな落ち込みを呈した断面皿状の掘り方である。覆土は上位が厚さ5cm程の土丹粒を多く含んだ締まりの強い茶褐色粘質土、下位は明茶褐色の有機物腐蝕土で木器類を多量に含んでいた。

出土遺物は(図36-1~26)、1~5がロクロ成形のかわらけ小皿と大皿、6が常滑盤、7が土器質鉢形火鉢である。8~26は漆・木製品であり、8が漆器碗、9・10が折敷、11・12が曲物の底板と側板、13が菜箸、14・15が籠、16~22が箸、23・24が金剛草履の芯、25・26が片端が焼け焦げたものである。

土壤9: 調査区の西端中央寄り位置した大型の土壌である。南端は調査区外に拡がっており、建物3・4の柱穴掘り方に壊されたものである。規模は、東西軸227cm、南北軸252cm以上、深さ38cmと深いものである。平面形は梢円形を呈し、掘り方は広い底面から急な壁面の立ち上がりをもち、断面が浅い皿状の土壌である。覆土は上位が厚さ10~18cm程の小土丹塊・土丹粒を多く含んだ締まりの強い茶褐色粘質土と暗青灰色粘質土、下位は明茶褐色有機物腐蝕土で木器類を多量に含んだものと、掘り方直上に炭化物を多量に含んだものの薄く堆積していた。

出土遺物は(図37-1~26)、1~8が外底に糸切痕を残すロクロ成形のかわらけ小皿と大皿である。9~26は漆・木製品である。漆製品は黒漆地に朱漆文様をもつもので9~14が漆器皿、15が漆塗盆である。16は黒漆塗りで蓋物の把手か盆の脚部のようなものか? 17は画面に墨書痕を残す折敷であるが内容は不明である。18が板杓子、19~23が箸、24が籠、25が先端が焼け焦げているが菜箸と考えられるもの、26は用途不明である。

土壤10: 調査区の西端中央寄り位置した大型の土壌である。南端は調査区外に拡がっており、建物3・4の柱穴掘り方に壊されたものである。規模は、東西軸227cm、南北軸252cm以上、深さ38cmと深いものである。平面形は梢円形を呈し、掘り方は広い底面から急な壁面の立ち上がりをもち、断面が浅い皿状の土壌である。覆土は上位が厚さ10~18cm程の小土丹塊・土丹粒を多く含んだ締まりの強い茶褐色粘質土と暗青灰色粘質土、下位は明茶褐色有機物腐蝕土で木器類を多量に含んだものと、掘り方直上に炭化物を多量に含んだものの薄く堆積していた。

出土遺物は(図38-1~4)、1~3がロクロ成形のかわらけ、4が常滑捏鉢である。

c. 溝(図29・39、図版6・12)

溝1: 調査区東側でC~F-7グリット間に位置し、建物1中央柱穴列の東側に沿って南北方向で検出されたが、建物1の柱穴一部を壊すように掘り込まれていた。規模は長さ572cm、幅35~65cm、深さ20cm程である。溝掘り方の東壁沿いには、腐蝕の進んだ縦位の薄い板材(幅9cm、厚さ5mm)が貼り付く形で確認された。板材は柱穴列沿いに建物1と近い軸方位を示しており、当初は建物の間仕切りなどを構成する板壁が想定された。北端から南に向かって確認作業を行なうと南に230cm程で板

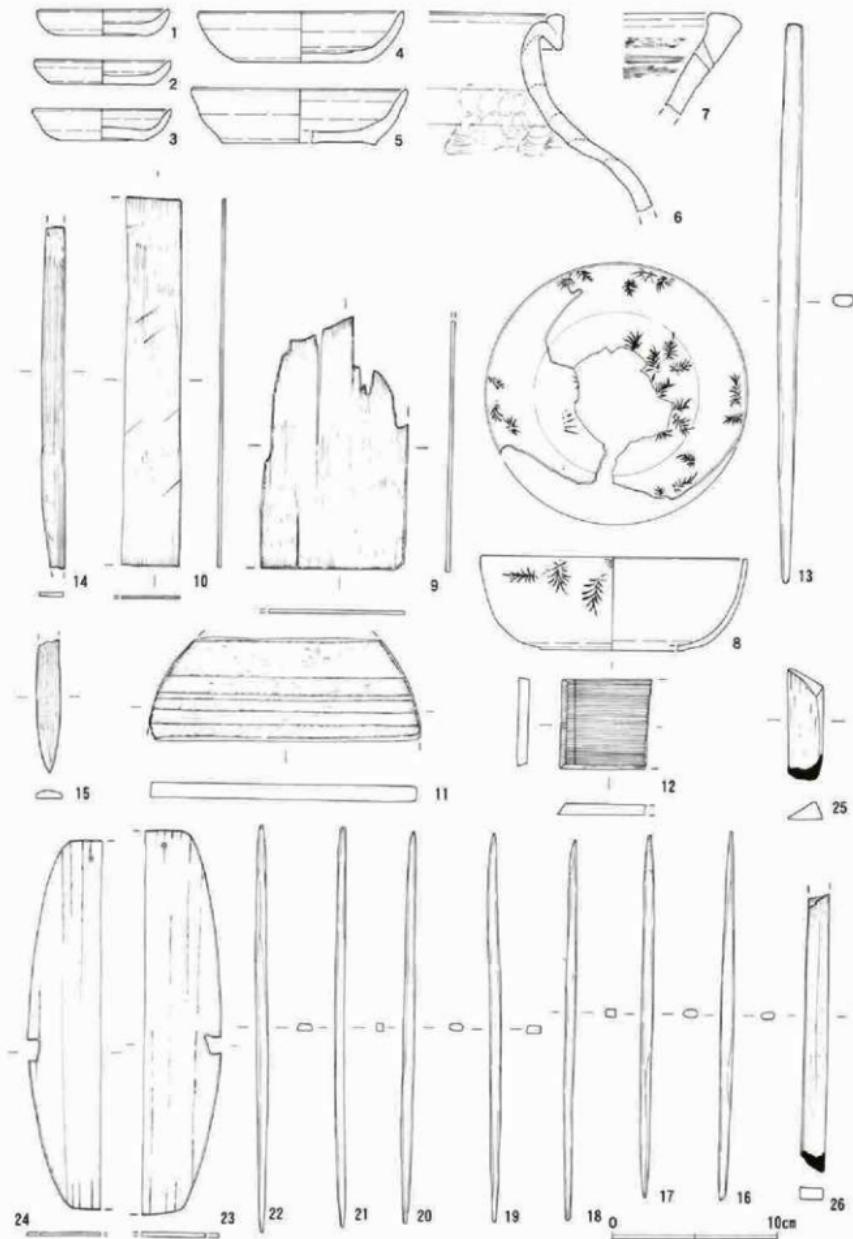


图36 土壤8出土遗物

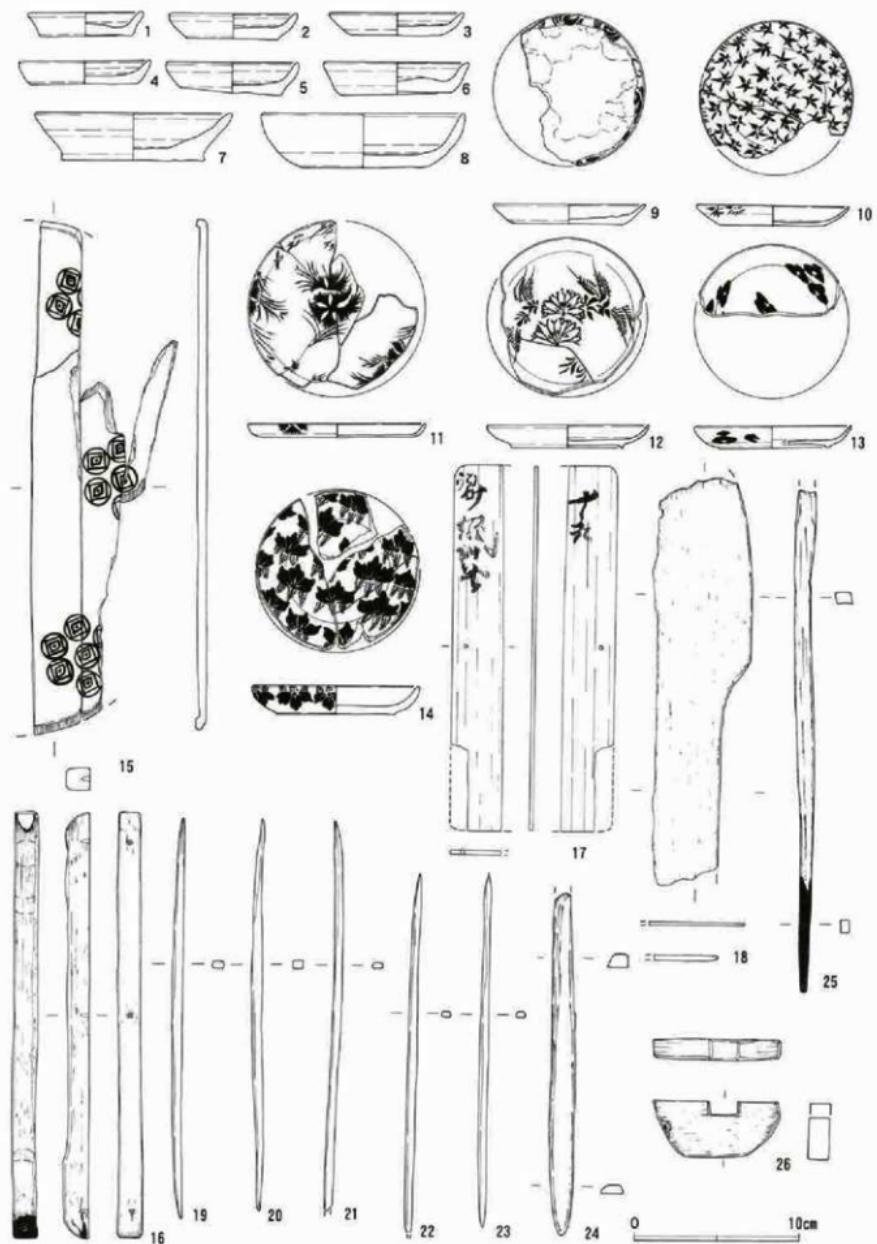


图37 土壤9出土遗物

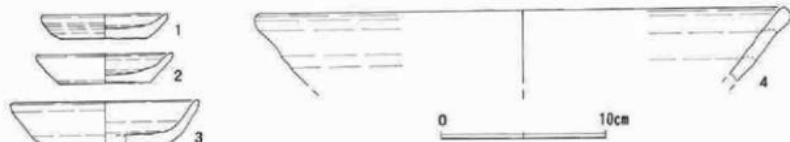


図38 土壌10出土遺物

材が不明瞭になり、その先は東側にやや膨らみ木杭と不規則な横板が検出されたに過ぎないので、ここでは溝状のものとして捉えることにした。

出土遺物は(図39-1・2) 1がロクロ成形のかわらけ大皿、2が常滑捏鉢の口縁小片である。

溝2・3: 調査区中央南側でグリットのF軸沿いに溝2が、G軸北側沿いに溝3がそれぞれ東西方向で平行した位置に検出された。溝3東端付近は建物1柱穴に一部が壊れていた。両溝ともにグリット6軸の東側から掘り方が始まり、西端は調査区外に伸びている。規模は溝3が長さ378cm以上、幅55cm前後、深さ20cm程、溝3が長さ390cm以上、幅50cm前後、深さ15cm程である。両溝ともに掘り方は断面逆台形を呈し、覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含んだ締まりのない茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

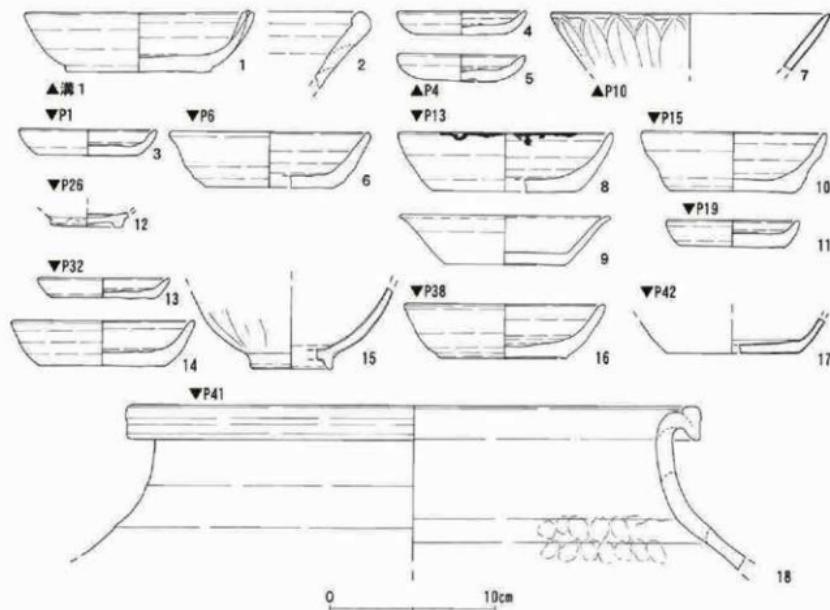


図39 溝・柱穴出土遺物

d. 柱穴 (図29・39、図版6・12)

この面からは建物に伴うもの以外に約80口の柱穴が検出されている。ここでは遺物が出土した柱穴を中心に簡単に触ることにする。

P 1 : 調査区南東隅に位置し、礎石列1北端の掘り方一部を壊している。掘り方は径30cmの円形を呈し、深さ35cmで底面に礎板を据えている。出土遺物は3のロクロ成形かわらけである。P 4 : P 1 の北隣に位置し、掘り方は径40~50cmの楕円形を呈し、深さ40cmで底面に礎板を据えている。出土遺物は4・5のロクロ成形のかわらけ小皿2点である。P 6 : B-7杭の北側に位置し、掘り方は径40cmの円形を呈し、深さ27cmで底面に縦長の礎板を据えている。出土遺物は6のロクロ成形のかわらけである。P 10 : D-8杭の北東隣に位置し、掘り方は径45cmの隅丸方形を呈し、深さ35cmで底面に礎板を据えている。出土遺物は7の青磁錦蓮弁文碗である。P 13 : F-8杭の北西側に位置し、掘り方は径38cmの円形を呈し、深さ30cmである。建物1に伴う柱穴を壊す形で掘られている。出土遺物は8のロクロ成形かわらけの燈明皿、9の白磁口兀皿である。P 15 : G-8グリットに位置し、建物1柱穴を壊す形で掘り込まれたものである。掘り方は径40~50cmの楕円形を呈し、深さ36cmで底面に礎板を据えている。出土遺物は10のロクロ成形かわらけである。P 19 : F-7杭の東隣に位置し、掘り方は径50~60cmの楕円形を呈し、深さ30cmである。出土遺物は11のロクロ成形かわらけである。P 26 : C-6グリットに位置し、掘り方は径30cmの円形を呈し、深さ38cmで底面に礎板が据えられている。出土遺物は12の白磁口兀碗の底部である。P 32 : G-5グリットに位置し、溝3を壊して掘られたものである。掘り方は径48cmの円形を呈し、深さ45cmで底面に礎板2枚が据えられている。出土遺物は13・14のロクロ成形かわらけ、15が青磁錦蓮弁文碗である。P 38 : E-5グリットに位置し、掘り方は径40~60cmの楕円形を呈し、深さ38cmで底面に礎板が据えられている。出土遺物は16のロクロ成形かわらけである。P 41 : C-5杭の南隣に位置し、本例は建物4柱穴B-1より新しく、土壌8より古い。掘り方は径45cmの円形を呈し、深さ35cmである。出土遺物は18の常滑窯の口縁~頸部片である。P 42 : P 41の西側に位置し、土壌8に一部を壊されている。掘り方は径65cm程で円形を呈し、深さ40cmである。出土遺物は17の白磁口兀皿だけである。

e. 第3面下~第4面上出土遺物 (図40)

1~27はロクロ成形かわらけの小・大皿、28が唯一の手捏ね成形かわらけである。17・26は墨書資料で前者は内面、後者が内外面に花押様のものが書かれている。

船載陶磁器は、29~32が青磁錦蓮弁文碗、33・42~48が青白磁で33が香炉・42が皿・43が水注把手?・44~47が合子の蓋と身・48が小壺底部片である。34~40は白磁で34・35が折腰皿、36~41が口兀皿・碗である。

国産陶器は、49が瀬戸系山茶碗、50~52が常滑の壺・捏鉢である。53は瓦器質壺類の袋ものか。54はかわらけ質小壺、55が須恵器壺の胴部小片である。56・57は滑石製硯と用途不明の加工品、58が基石である。59は北宋銭の「至道元宝」である。60は板碑伝で下端は欠失するが、細長い板状の頂部を主頭状にし、その下は両脇二ヶ所に切り込みを入れており、表面に「南無阿」の墨書が判読できる。

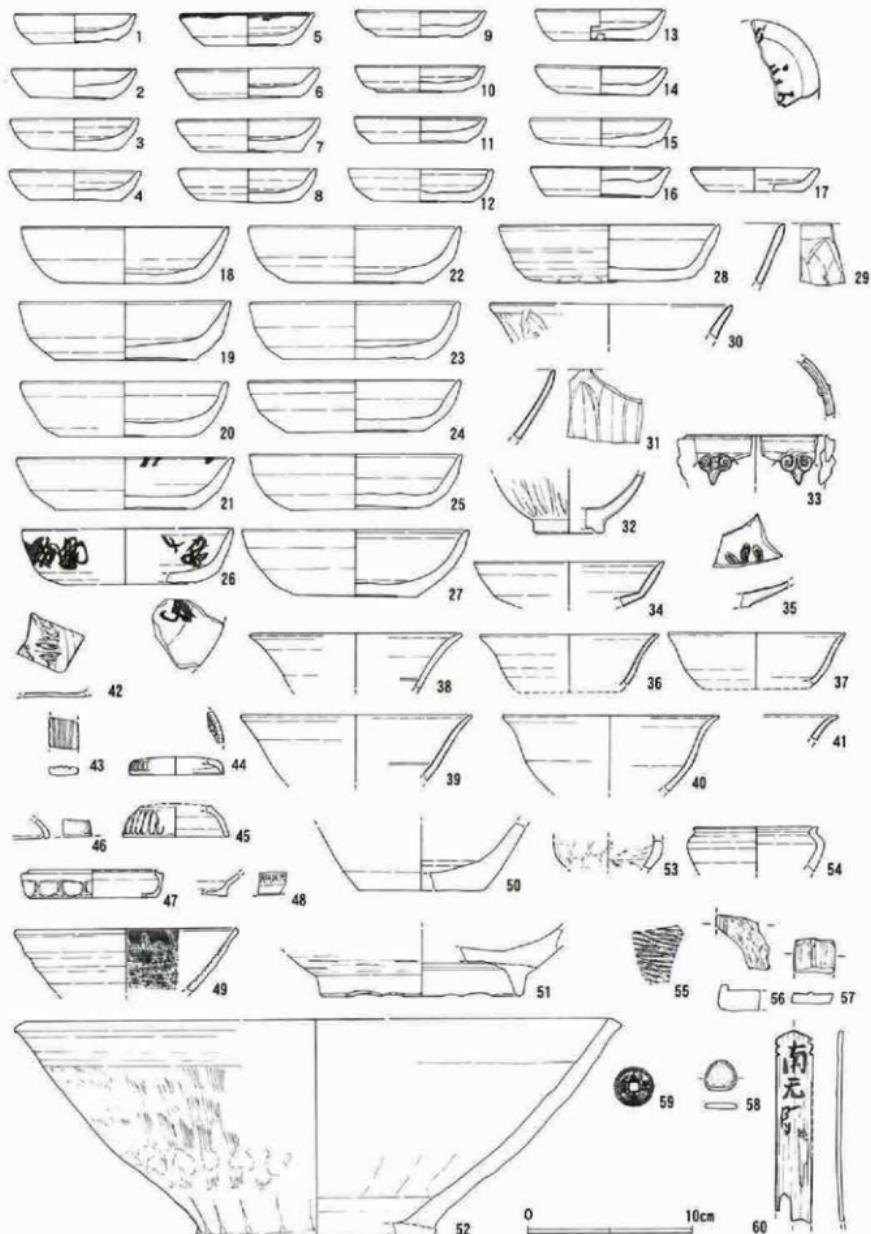


図40 3面下～4面出土遺物

表1 遺物観察表(1)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・地模・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
5-1	かわらけ	a:7.8cm b:4.8cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・赤色鉄・白色鉄・白針	方形壺穴建物
2	かわらけ	a:8.3cm b:5.6cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・赤色鉄・白針	#
3	かわらけ	a:8.3cm b:5.7cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色鐵砂・赤色鉄・白針	#
4	かわらけ	a:12.4cm b:7.6cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	#
5	常滑 瓢	口縁部片	輪郭み技術 口縁N字状 赤褐色 砂粒・長石粒多し	#
6	常滑片加工品	長さ7.2cm 幅4.4cm 厚さ8mm	更削片の周縁を彫り加工して軸用 来模色 砂粒・長石粒	#
7	鉄釘	長さ(7.2cm) 厚さ5mm	角釘 下端欠失 かなり彫り	#
8	骨加工品	長さ5.6cm 幅3.6cm 厚さ1.8mm	断面縦溝型 上下端は縦状の切断痕、両面は縦状の刃物削り痕	# 土塹8多数出土
9	青磁 瓢	口縁部片	外曲縦溝弁文 滅褐色半透明の薄手黒胎 灰白色 黑色鐵砂含むが緻密	P7 龍泉窯系
10	瀬戸 甌	長さ(3.3cm) 幅2.5cm 厚さ8mm	耳環片 上面に条縞を型引き 薄反唇の灰胎 灰白色 粗面	#
11	瀬戸 天目碗	a:10.6cm	口縁下くびれから外反した天目型 黒褐色鐵砂や今厚手 灰白色 粗面	P8
12	常滑 程体	口縁~全体片	片口 口縁端部平ら外面彫め横枚ナデ 灰褐色 砂粒・長石粒多し	P9 常滑片口鉢II期
13	かわらけ	a:12.5cm b:7.6cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	土塹2
14	かわらけ	a:8.2cm b:4.6cm c:2.4cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	土塹3
15	かわらけ	a:12.7cm b:7.3cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	土塹4
16	加工骨	長さ5.0cm 幅2.2cm 厚さ2.7cm	断面L字形 周囲研磨、表面滑らか	土塹6
17	加工骨	長さ(4.4cm) 幅1.8cm 厚さ2.0cm	断面丸錐状 上端は縦状の切断痕、周囲は刃物の削り痕	#
18	加工骨	長さ5.0cm 幅3.6cm 厚さ1.6cm	断面菱形 上下端・下面是縦状の切断痕、上面は刃物の削り痕	#
19	加工骨	長さ8.2cm 幅3.6cm 厚さ4.8cm	断面長方形 上下端・両側面は縦状の切断痕、右端は刃物の削り痕	#
20	加工骨	長さ5.6cm 幅7.6cm 厚さ5.7cm	断面L字形 各面は縦状の切断後、上面は縦状斜み入れ続いた成形	#
21	加工骨	長さ11.4cm 幅8.0cm 厚さ(3.8cm)	断面長方形か 上下端は縦状の切断痕、一部錐状の切断途中の刻み痕	#
22	加工骨	長さ25.2cm 幅19.0cm 厚さ8.5cm	加工骨の原材料か、縦状切削痕や刃物削り痕は認められない	#
23	石鏡	長さ(3.0cm) 幅10.8cm 厚さ2.5cm	長方鏡 鏡面と筆跡墨がセット 周縁毛刷文鏡 きめ細かな墨褐色粘合質	土塹10
7-1	かわらけ	a:7.1cm b:4.6cm c:2.0cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	土塹8
2	かわらけ	a:17.8cm b:4.6cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・藍母・赤色鉄・白針	#
3	青磁 瓢	a:12.1cm	外曲縦溝弁文 滅褐色透明、薄手の黒胎 灰白色 黑色鐵砂含むが緻密	龍泉窯系
4	常滑 瓢	a:12.7cm, 底部径22.4cm(最大径)	口縁部N字状 輪郭成形 滅褐色 砂粒・長石粒多く岩石質	常滑器7型式
5	加工骨	長さ5.6cm 幅2.1cm 厚さ2.6cm	周縁は縦状切削後、右上端を刃物で斜めに面取り削り	楔形断材か
6	加工骨	長さ5.5cm 幅2.2cm 厚さ1.3cm	断面始形 上下端は縦状の切断痕、周縁は刃物の削り痕	楔形断材か
7	加工骨	長さ4.6cm 幅1.8cm 厚さ2.8cm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
8	加工骨	長さ4.3cm 幅1.8cm 厚さ6mm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
9	加工骨	長さ4.6cm 幅1.7cm 厚さ2.6cm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
10	加工骨	長さ4.5cm 幅1.8cm 厚さ7mm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
11	加工骨	長さ4.3cm 幅1.7cm 厚さ7mm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
12	加工骨	長さ4.3cm 幅1.4cm 厚さ6mm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
13	加工骨	長さ4.1cm 幅1.6cm 厚さ7mm	断面縦溝形 上下端は縦状切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
14	加工骨	長さ2.7cm 幅1.8cm 厚さ1.3cm	片端は縦状斜め切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
15	加工骨	長さ2.4cm 幅1.6cm 厚さ1.3cm	片端は縦状斜め切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材
16	加工骨	長さ2.4cm 幅1.5cm 厚さ1.1cm	片端は縦状斜め切削痕、上面は刃物の削り痕	楔形余材

表2 遺物観察表(2)

図-番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・釉薬・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他の)
7-17	加工骨	長さ2.3cm 幅1.3cm 厚さ5mm	片端は鋸状斜め切断痕、上面は刃物の削り痕、角部製作時の余材	土塹8 楠形余材
18	加工骨	長さ2.5cm 幅1.9cm 厚さ1.3cm	片端は鋸状斜め切断痕、上面は刃物の削り痕、角部製作時の余材	# 楠形余材
19	加工骨	長さ13.2cm 幅7.1cm 厚さ3.2cm	断面椭円形 上端は鋸状切断痕、周囲は刃物の削り痕、擦り成形	# 原材料か
20	加工骨	長さ12.2cm 幅7.8cm 厚さ3.8cm	上下端は鋸状切断痕、右面は刃物の削り成形 加工骨の原材料か	#
21	加工骨	長さ12.8cm 幅7.5cm 厚さ3.2cm	左右端は鋸状切断痕、周囲・上面は刃物の削り成形 加工骨の原材料か	#
22	加工骨	長さ6.2cm 幅7.6cm 厚さ4.2cm	上端は鋸状切断痕、下面は刃物の削り成形 加工骨の原材料か	#
23	加工骨	長さ11.0cm 幅2.9cm 厚さ2.9cm	上下・左端は鋸状切断痕、一部に刃物の削り成形 加工骨の原材料か	#
24	加工骨	長さ4.2cm 幅7.7cm 厚さ4.3cm	上端は鋸状切断痕、下面は刃物削り痕 加工骨の原材料か	#
25	加工骨	長さ2.9cm 幅5.4cm 厚さ3.2cm	上下端は鋸状切断痕、一部に鋸状の切込み 加工途中又は原材料か	#
26	加工骨	長さ10.8cm 幅6.0cm 厚さ4.0cm	上下端・左端は鋸状切断痕、上部に鋸状凹込みを入れ、字形に切断	# 原材料か
27	加工骨	長さ6.0cm 幅4.8cm 厚さ3.2cm	上下端は鋸状切断痕、下面は刃物の削り成形 加工途中又は原材料か	#
28	加工骨	長さ6.4cm 幅5.5cm 厚さ2.5cm	上下端は鋸状切断痕、右上面は刃物の削り成形 加工途中又は原材料か	#
29	加工骨	長さ14.0cm 幅10.6cm 厚さ8.8cm	上下端は鋸状切断痕、上面は刃物の削り成形 下面に刃物で穿った孔	# 原材料か
30	加工骨	長さ3.2cm 幅5.0cm 厚さ1.9cm	上下端は鋸状切断痕、一部に鋸状の切込み 加工途中又は原材料か	#
8-31	加工骨	長さ13.7cm 幅14.4cm 厚さ7.8cm	上下端は鋸状切断痕、下面は刃物の削り成形 加工途中又は原材料か	#
32	加工骨	長さ23.4cm 幅12.2cm 厚さ5.3cm	上下端は擦り成形、右上面は刃物の削り成形 加工途中又は原材料か	#
9-1	加工骨	長さ5.8cm 幅3.9cm 厚さ1.7cm	断面楕円形 上下端は鋸状切断痕、下面は刃物の削り痕・削り成形	土塹9 原材料・余材?
2	加工骨	長さ5.5cm 幅2.7cm 厚さ1.3cm	上下端は鋸状切断痕、上面は刃物の削り成形 楠形製作時の余材か?	#
3	加工骨	長さ5.5cm 幅12.7cm 厚さ1.7cm	上下端は鋸状切断痕、右端は刃物削りで面取り 楠形製作時の余材か?	#
4	加工骨	長さ12.5cm 幅8.5cm 厚さ3.7cm	上端は切断後、凸面に刃物の粗い削り成形 下端は折れ欠失	# 加工途中?
10-1	かわらけ	a:7.0cm b:4.7cm c:1.8cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色繊維・黒母・白針	1面包含層
2	かわらけ	a:7.4cm b:5.3cm c:1.7cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 黑色繊維・黒母・白針	#
3	かわらけ	a:8.2cm b:4.9cm c:1.8cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・黒母・白針	#
4	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.9cm	外底系切痕 ロクロ 錆黃褐色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
5	かわらけ	a:8.0cm b:5.2cm c:1.7cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・黒母・白針	#
6	かわらけ	a:8.0cm b:5.3cm c:2.0cm	外底系切痕 ロクロ 錆黃褐色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
7	かわらけ	a:8.4cm b:5.8cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色繊維・黒母・白針	#
8	かわらけ	a:8.4cm b:4.6cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・黒母・白針	#
9	かわらけ	a:11.0cm b:7.0cm c:3.3cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
10	かわらけ	a:10.9cm b:6.2cm c:3.1cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
11	かわらけ	a:12.2cm b:7.5cm c:3.7cm	外底系切痕 ロクロ 錆褐色 黑色繊維・黒母・白針 磁明斑	#
12	かわらけ	a:12.4cm b:8.0cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 錆褐色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
13	かわらけ	a:12.4cm b:7.7cm c:3.7cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
14	かわらけ	a:12.3cm b:7.8cm c:2.9cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針	#
15	かわらけ	a:12.0cm b:7.3cm c:3.4cm	外底系切痕 ロクロ 錆色 黑色繊維・黒母・白針	#
16	かわらけ	a:12.4cm b:7.6cm c:3.4cm	外底系切痕 ロクロ 錆黃褐色 黑色繊維・赤色粒・黒母・白針 磁明斑	#
17	かわらけ	a:12.6cm b:8.2cm c:3.8cm	外底系切痕 ロクロ 錆黃褐色 黑色繊維・黒母・白針	#
18	青磁 瓶	b:5.4cm	外面織籠文・内腹印文 緑灰色半透明 高台内盤付輪筋 灰白色堅緻	# 龍泉窯系
19	青磁 不明	b:7.4cm	墨合・花瓶か 下端内ヘラ削り 緑灰色不透明 厚手に施釉 下面輪筋 白色堅緻	# 龍泉窯系

表3 造物観察表(3)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:器高)	成形・特徴(文様・點墨・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
10-20	青磁 香炉	双耳香炉の耳部小片	貼付耳部に唐草文 緑色不透明 手厚施釉 灰白色型體 建長寺伝世品	1面包含層 龍泉窯系
21	青白磁香炉	三足香炉の脚部小片	貼付脚部 明緑皮色透明光沢あり 文様貼付部は施釉厚い 白色織密	# 今小路西遺跡群
22	白磁 口瓦瓶	a:10.1cm b:5.6cm c:2.6cm	白色不透明 気泡・気孔多く、口唇部薙付 灰白色 黒色織紋含むが難定	#
23	瀬戸 卸皿	b:(7.6cm)	周辺はヘラで折目を施す 外底系切腹 灰綠色輪 灰白色 織密	#
24	瓦質 火鉢	a:(23.2cm)	口継下に菊花文スタンプ 輪縁み技抜 表面灰黑色 灰色 粉粒・小石	#
15-1	かわらけ	a:7.5cm b:5.3cm c:2.2cm	外底系切腹 ロクロ 暗黃褐色 黒色織紋・墨母・白叶 るつばに使用	P 1
2	かわらけ	a:7.4cm b:5.0cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶 るつばに使用	P 3
3	土器質 火鉢	a:36.8cm	輪縁み技抜 暗黃褐色 粉粒・赤色粒・白叶 内面に再火の痕跡	P 7
4	かわらけ	a:10.5cm b:6.0cm c:2.6cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶 煙明鏡	P 10
5	かわらけ	a:12.9cm b:8.2cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
6	かわらけ	a:7.3cm b:5.2cm c:2.0cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	P 11
7	かわらけ	a:12.4cm b:7.3cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶 煙明鏡	#
8	かわらけ	a:7.8cm b:4.8cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	P 13
9	かわらけ	a:7.1cm b:5.2cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤2
10	かわらけ	a:6.9cm b:5.0cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤4
11	かわらけ	a:11.2cm b:6.9cm c:3.3cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤5
12	かわらけ	a:12.3cm b:7.8cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
13	かわらけ	a:12.3cm b:8.8cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
14	かわらけ	a:7.7cm b:5.4cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤9
15	かわらけ	a:5.9cm b:4.6cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤13
16	かわらけ	a:7.6cm b:5.3cm c:2.1cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
17	かわらけ	a:7.9cm b:4.8cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
18	かわらけ	a:8.0cm b:5.8cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
19	かわらけ	a:7.9cm b:6.0cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 淡黄色 黒色織紋・墨母・白叶	#
20	かわらけ	a:8.0cm b:5.6cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
21	かわらけ	a:7.7cm b:5.9cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	土壤20
22	かわらけ	a:8.2cm b:5.6cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 淡黄色 黒色織紋・墨母・白叶	#
23	かわらけ	a:8.2cm b:6.0cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
24	かわらけ	a:7.0cm b:4.8cm c:2.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶 口縁一部打欠き	#
25	かわらけ	a:7.6cm b:4.7cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
26	かわらけ	a:8.0cm b:5.2cm c:2.0cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
27	かわらけ	a:7.9cm b:4.9cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
28	かわらけ	a:8.0cm b:5.4cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
29	かわらけ	a:12.8cm b:8.4cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶 煙明鏡	#
30	かわらけ	a:12.7cm b:8.1cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織紋・墨母・白叶	#
31	かわらけ	a:12.8cm b:8.0cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
32	かわらけ	a:12.7cm b:7.4cm c:3.7cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
33	かわらけ	a:13.4cm b:7.4cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 暗色 黒色織紋・墨母・白叶	#
34	青磁 瓶	a:(13.2cm)	外底織紋文 明オリーブ灰色不透明 手手の蟲歟 灰白色型體	# 龍泉窯系

表4 遺物観察表(4)

団・番号	種類	法數(a:口径 b:底径 c:器高)	成形・特徴(文様・胎葉・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
15-35	青磁 碗	a:(14.2cm)	外圓輪邊文 オリーブ灰褐色透明 貫入あり 潤手の胎葉 灰白色堅緻	土壤20 鹿児窯系
36	青磁 碗	杯部下鉢片	外圓輪邊文 明オリーブ灰褐色不透明 やや厚手の胎葉 灰白色堅緻	# 鹿児窯系
37	青磁 碗	杯部下鉢片	外圓輪邊文 明オリーブ灰褐色不透明 潤手の胎葉 灰白色堅緻	# 鹿児窯系
38	青磁 斜線皿	a:(14.3cm)	外圓輪邊文 明緑灰褐色不透明 貫入あり やや厚手の胎葉 反白色堅緻	# 鹿児窯系
39	白磁 口元皿	a:10.0cm	オリーブ白色不透明 口唇部薦出 灰白色 黒色鐵砂含むが緻密	#
40	白磁 口元皿	a:11.8cm	オリーブ白色不透明 口唇部薦出 灰白色緻密	#
41	青白磁 梅瓶	胸部小片	外圓牡丹文か 明緑灰褐色不透明 細緻多し 灰白色緻密	#
42	かわらけ	a:7.5cm b:5.7cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	調1
43	かわらけ	a:8.3cm b:5.6cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
44	瓦石	長3(3.4cm) 幅3.4cm 厚さ5mm	上・左右端切削部 上下面 貝殻(執板岩) 淡黄色 鳴海中山産系	#
45	削製品飾金具	長3(2.2cm) 幅(2.7cm) 厚さ8mm	凸状中房の周囲に八葉葵花藤蔓文を配す 並に屋根の毛彫り 刺繡小	#
16-1	かわらけ	a:6.5cm b:4.0cm c:2.0cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針・小石粒	かわらけ壺1
2	かわらけ	a:7.0cm b:4.4cm c:2.1cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
3	かわらけ	a:7.4cm b:4.5cm c:2.1cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:8.0cm b:4.6cm c:2.1cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
5	かわらけ	a:7.1cm b:4.2cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
6	かわらけ	a:6.8cm b:3.9cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
7	かわらけ	a:7.1cm b:4.0cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
8	かわらけ	a:7.2cm b:4.2cm c:2.2cm	外底系切腹 ロクロ 淡黄色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
9	かわらけ	a:7.2cm b:4.3cm c:2.0cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
10	かわらけ	a:7.1cm b:5.1cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
11	かわらけ	a:7.6cm b:6.0cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
12	かわらけ	a:7.9cm b:5.1cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 淡褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
13	かわらけ	a:7.8cm b:4.7cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針・煙明頭	#
14	かわらけ	a:8.3cm b:5.2cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
15	かわらけ	a:8.0cm b:5.4cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
16	かわらけ	a:8.1cm b:5.4cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
17	かわらけ	a:7.9cm b:6.0cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
18	かわらけ	a:8.2cm b:6.2cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 淡黃褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
19	かわらけ	a:8.3cm b:6.8cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
20	かわらけ	a:8.2cm b:6.4cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
21	かわらけ	a:11.2cm b:6.3cm c:2.8cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黒色鐵砂・雲母・白針	#
22	かわらけ	a:11.2cm b:6.3cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黑色鐵砂・雲母・白針	#
23	かわらけ	a:11.6cm b:7.2cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 黃褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
24	かわらけ	a:11.5cm b:6.4cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黑色鐵砂・雲母・白針	#
25	かわらけ	a:11.4cm b:6.7cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
26	かわらけ	a:11.1cm b:6.5cm c:3.2cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
27	かわらけ	a:11.4cm b:6.5cm c:3.2cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
28	かわらけ	a:11.7cm b:6.3cm c:3.0cm	外底系切腹 ロクロ 極細 黑色鐵砂・雲母・白針	#

表5 遺物觀察表(5)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・輪溝・胎土・素地・焼成など)	備考(選択・その他)
16-29	かわらけ	a:11.8cm b:7.5cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 棒色 黒色鐵砂・雲母・白針	かわらけ縫り1
30	かわらけ	a:12.8cm b:7.9cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 棒色 黒色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
31	かわらけ	a:10.9cm b:6.4cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 棒色 黒色鐵砂・雲母・白針	#
32	かわらけ	a:10.9cm b:5.6cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
33	かわらけ	a:11.8cm b:6.8cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針 燐明皿	#
34	かわらけ	a:12.0cm b:7.0cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・白針・土丹粒	#
35	かわらけ	a:12.3cm b:7.3cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
36	かわらけ	a:12.3cm b:7.6cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
37	かわらけ	a:11.9cm b:7.9cm c:3.7cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒 燐明皿	#
38	かわらけ	a:12.1cm b:8.8cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
39	かわらけ	a:12.5cm b:8.2cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
40	かわらけ	a:12.0cm b:8.1cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針 燐明皿	#
41	かわらけ	a:12.6cm b:7.6cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
42	かわらけ	a:13.2cm b:7.2cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
43	かわらけ	a:13.4cm b:8.0cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
44	かわらけ	a:13.0cm b:6.4cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
45	かわらけ	a:12.1cm b:7.2cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
46	かわらけ	a:13.4cm b:7.0cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 暗褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
47	かわらけ	a:12.3cm b:7.0cm c:3.7cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
48	かわらけ	a:13.9cm b:8.0cm c:2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
49	かわらけ	a:13.1cm b:7.6cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
50	かわらけ	a:13.1cm b:7.7cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 淡黄色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
51	かわらけ	a:12.7cm b:7.8cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・赤色粒・白針	#
52	かわらけ	a:13.0cm b:8.6cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
53	かわらけ	a:13.1cm b:8.2cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
54	かわらけ	a:12.9cm b:7.8cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
55	かわらけ	a:13.8cm b:8.8cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 淡褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
56	かわらけ	a:12.7cm b:7.7cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
57	かわらけ	a:12.4cm b:8.2cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
58	かわらけ	a:12.4cm b:8.2cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒	#
59	かわらけ	a:12.6cm b:8.2cm c:3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 暗褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
60	かわらけ	a:12.8cm b:8.0cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針	土輪3
61	かわらけ	a:12.3cm b:7.5cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針 口縁部を三ヶ所打穴	#
62	器# 入子	a:5.6cm b:3.2cm c:2.1cm	外底ヘラ削り 口縁八弁輪花 口縁内壁に陶灰斑 黄褐色 鐵砂質體良	#
63	白かわらけ	a:12.0cm	手捏ね 口縁下縁～底部かけて指頭圧痕 黃白色 鐵砂・白色粒	かわらけ縫り1
64	削鉢品	長さ(9.5cm) 幅(1.2cm) 厚さ1mm	破損するが状態か 内側に腐蝕した木質と朱漆と思しきものが付着	#
65	削鉢	井持元宝	北宋 刻年 1008年	#
66	鉢品			

表6 遺物観察表(6)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・輪裏・胎土・素地・焼成など)	備考(選択・その他の記述)
17-1	かわらけ	a:6.4cm b:3.6cm c:2.1cm	外底系切削 ロクロ 染色 黒色微砂・赤色粒・黒母	かわらけ窯り2
2	かわらけ	a:6.8cm b:3.6cm c:2.1cm	外底系切削 ロクロ 染色 黒色微砂・赤色粒・黒母	#
3	かわらけ	a:7.6cm b:5.1cm c:2.1cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母	#
4	かわらけ	a:7.3cm b:4.9cm c:1.8cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白針・小石粒	#
5	かわらけ	a:8.1cm b:5.4cm c:2.0cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白針・小石粒	#
6	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
7	かわらけ	a:7.8cm b:6.0cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・黒母・白针・小石粒	#
8	かわらけ	a:7.7cm b:5.4cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
9	かわらけ	a:7.4cm b:5.3cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 明灰褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
10	かわらけ	a:7.7cm b:5.4cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
11	かわらけ	a:7.4cm b:4.1cm c:1.8cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母	#
12	かわらけ	a:7.6cm b:5.1cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
13	かわらけ	a:7.8cm b:5.0cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
14	かわらけ	a:8.0cm b:4.5cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
15	かわらけ	a:8.5cm b:5.7cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
16	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・黒母・白针	#
17	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
18	かわらけ	a:7.9cm b:5.2cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
19	かわらけ	a:8.0cm b:5.7cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗黄色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
20	かわらけ	a:8.7cm b:5.4cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
21	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
22	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
23	かわらけ	a:7.9cm b:5.6cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
24	かわらけ	a:11.4cm b:7.2cm c:2.9cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
25	かわらけ	a:12.0cm b:6.0cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
26	かわらけ	a:12.4cm b:7.0cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・小石粒	#
27	かわらけ	a:13.2cm b:7.5cm c:3.6cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
28	かわらけ	a:13.4cm b:7.8cm c:3.5cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・小石粒	#
29	かわらけ	a:11.2cm b:6.2cm c:3.0cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针	#
30	かわらけ	a:12.0cm b:6.5cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
31	かわらけ	a:12.2cm b:7.5cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
32	かわらけ	a:12.2cm b:7.7cm c:3.7cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
33	かわらけ	a:12.7cm b:7.4cm c:3.9cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
34	かわらけ	a:10.9cm b:6.0cm c:3.3cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
35	かわらけ	a:11.1cm b:6.3cm c:3.2cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・小石粒 烧明显	#
36	かわらけ	a:12.3cm b:8.0cm c:3.2cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
37	かわらけ	a:12.6cm b:7.4cm c:3.1cm	外底系切削 ロクロ 染色 黑色微砂・赤色粒・黒母・白针・小石粒	#
38	青白釉 盆	b:5.8cm	製作り 低い高台 明緑灰色半透明 外面下端～高台内縁部 茶白色堅密	#
39	網戸 入子	b:7.5cm b:3.0cm c:2.8cm	外底系切削後に粘土小接點付 灰色堅密 微細堅密 褐色に紅村着	#

表7 遺物観察表(7)

団・番号	種類	法量(a:口径・b:底径・c:器高)	成形・特徴(文様・胎葉・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他の)
17-40	石瓶	長さ:5.6cm 幅(4.6cm) 厚さ:4mm	断面は四葉型 瓶に波瀬文が毛刷記 粘土褐色粘板岩質	かわらけ層り2
41	副葬品	長さ:1.5cm 幅(1.5cm) 厚さ:1mm	断面に僅かな曲率 中央に方形小孔 内面に銅金具で釘留か	×
42	副葬	景祐元宝	北宋魏 初鎌年 1004年	×
43	副葬	元祐元宝	北宋魏 初鎌年 1086年	×
18-1	かわらけ	a:4.0cm b:2.9cm c:0.9cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黒色織紗・雲母・白針	かわらけ層り3
2	かわらけ	a:4.5cm b:3.6cm c:0.9cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄色 黑色織紗・雲母・白針	×
3	かわらけ	a:4.6cm b:4.0cm c:0.9cm	外底糸切痕 ロクロ 淡青色 黑色織紗・雲母・白針	×
4	かわらけ	a:4.6cm b:3.2cm c:0.9cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黒色織紗・雲母・白針	×
5	かわらけ	a:4.8cm b:4.3cm c:2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 淡青色 黑色織紗・雲母・白針	×
6	かわらけ	a:5.0cm b:4.5cm c:2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黒色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
7	かわらけ	a:5.0cm b:4.8cm c:2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
8	かわらけ	a:7.0cm b:4.3cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黒色織紗・雲母・白針	×
9	かわらけ	a:7.0cm b:4.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
10	かわらけ	a:7.4cm b:4.6cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
11	かわらけ	a:7.4cm b:4.7cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
12	かわらけ	a:7.7cm b:4.9cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針・小石粒	×
13	かわらけ	a:7.9cm b:5.1cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
14	かわらけ	a:7.5cm b:5.2cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 淡黄色 黑色織紗・雲母・白針	×
15	かわらけ	a:7.7cm b:4.7cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
16	かわらけ	a:7.7cm b:4.7cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
17	かわらけ	a:7.3cm b:4.6cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
18	かわらけ	a:7.5cm b:5.7cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
19	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針・小石粒	×
20	かわらけ	a:7.6cm b:4.8cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
21	かわらけ	a:7.3cm b:4.9cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
22	かわらけ	a:7.0cm b:4.3cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
23	かわらけ	a:7.5cm b:5.5cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 淡黄色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
24	かわらけ	a:7.5cm b:5.0cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
25	かわらけ	a:7.8cm b:5.8cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針 口縁一部打欠き	×
26	かわらけ	a:7.1cm b:4.7cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
27	かわらけ	a:7.5cm b:4.8cm c:1.4cm	外底糸切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
28	かわらけ	a:7.5cm b:4.8cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×
29	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
30	かわらけ	a:7.1cm b:5.2cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針 外面下半に焼成後削り	×
31	かわらけ	a:7.4cm b:5.5cm c:1.4cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針・小石粒	×
32	かわらけ	a:7.3cm b:5.4cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・雲母・白針	×
33	かわらけ	a:7.5cm b:5.9cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色織紗・赤色粒・雲母・白針	×
34	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・雲母・白針 線明瞭	×
35	かわらけ	a:7.6cm b:4.8cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色織紗・雲母・白針	×

表8 遺物観察表(8)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(陶土・素地・胎膜・焼成など)	備考(遺構・その他)
18-36	かわらけ	a:7.9cm b:5.7cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	かわらけ盛り3
37	かわらけ	a:7.8cm b:5.8cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針	#
38	かわらけ	a:7.5cm b:5.2cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黒色微砂・雲母・白針	#
39	かわらけ	a:7.5cm b:5.2cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
40	かわらけ	a:7.6cm b:5.2cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
41	かわらけ	a:8.2cm b:5.2cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
42	かわらけ	a:7.3cm b:4.6cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
43	かわらけ	a:7.6cm b:5.6cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
44	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
45	かわらけ	a:7.0cm b:5.1cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・雲母・白針・小石粒	#
46	かわらけ	a:7.3cm b:5.4cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
47	かわらけ	a:7.3cm b:5.8cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・白針	#
48	かわらけ	a:7.3cm b:5.4cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
49	かわらけ	a:7.4cm b:5.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
50	かわらけ	a:8.0cm b:5.7cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
51	かわらけ	a:8.0cm b:5.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
52	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黒色微砂・雲母・白針	#
53	かわらけ	a:7.1cm b:5.0cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黒色微砂・雲母・白針	#
54	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.4cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黑色微砂・赤色粒・雲母・白針	#
55	かわらけ	a:7.5cm b:5.5cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
56	かわらけ	a:7.5cm b:5.4cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 淡黄色 黑色微砂・雲母・白針	#
57	かわらけ	a:7.7cm b:6.0cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
58	かわらけ	a:7.3cm b:5.2cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黑色微砂・雲母・白針	#
59	かわらけ	a:7.5cm b:5.5cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 緑色 黑色微砂・赤色粒・雲母・白針	#
60	かわらけ	a:7.5cm b:5.4cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
61	かわらけ	a:7.8cm b:5.4cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・雲母・白針・透明膜	#
62	かわらけ	a:7.4cm b:6.0cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・雲母・白針・小石粒	#
63	かわらけ	a:7.5cm b:5.6cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・赤色粒・雲母・白針	#
64	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
65	かわらけ	a:7.2cm b:4.6cm c:2.0cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・雲母・白針・小石粒	#
66	かわらけ	a:7.3cm b:5.4cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
67	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・雲母・白針	#
68	かわらけ	a:7.6cm b:5.7cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
69	かわらけ	a:7.6cm b:5.5cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
70	かわらけ	a:7.4cm b:4.7cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・雲母・白針	#
71	かわらけ	a:7.4cm b:5.4cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・雲母・白針・小石粒	#
72	かわらけ	a:7.3cm b:5.0cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 紫色 黑色微砂・雲母・白針	#
73	かわらけ	a:7.3cm b:5.7cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#
74	かわらけ	a:7.3cm b:4.7cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・雲母・白針	#

表9 遺物観察表(9)

図・番号	種類	法量(a:口徑 b:底径 c:高さ)	形状・特徴(文様・貼差・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他の記述)
18-75	かわらけ	a:7.7cm b:5.9cm c:1.5cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黒色織砂・黒母・白針	かわらけ壺り3
76	かわらけ	a:7.8cm b:5.2cm c:2.0cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黒色織砂・赤色粒・黒母・白針	#
77	かわらけ	a:7.4cm b:5.7cm c:1.6cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黒色織砂・赤色粒・黒母・白針	#
78	かわらけ	a:7.3cm b:5.3cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
79	かわらけ	a:7.5cm b:5.7cm c:1.8cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黒色織砂・黒母・白針	#
80	かわらけ	a:7.6cm b:5.4cm c:1.8cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黒色織砂・赤色粒・黒母・白針・小石粒	#
81	かわらけ	a:7.5cm b:5.4cm c:1.8cm	外底糸切底 ロクロ 明黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
82	かわらけ	a:7.6cm b:5.3cm c:1.8cm	外底糸切底 ロクロ 明黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
83	かわらけ	a:7.6cm b:5.5cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
84	かわらけ	a:7.7cm b:5.9cm c:1.5cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
85	かわらけ	a:7.9cm b:5.9cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・赤色粒・黒母・白針	#
86	かわらけ	a:7.5cm b:5.2cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 暗黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
87	かわらけ	a:7.6cm b:5.9cm c:1.6cm	外底糸切底 ロクロ 明黄褐色 黑色織砂・赤色粒・黒母・白針・小石粒	#
88	かわらけ	a:7.7cm b:5.8cm c:1.6cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
89	かわらけ	a:8.1cm b:5.9cm c:1.5cm	外底糸切底 ロクロ 暗黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
90	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
91	かわらけ	a:7.8cm b:5.2cm c:1.7cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
92	かわらけ	a:10.5cm b:5.5cm c:3.1cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
93	かわらけ	a:11.0cm b:5.1cm c:3.2cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
94	かわらけ	a:11.6cm b:5.9cm c:3.1cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
95	かわらけ	a:12.2cm b:7.8cm c:3.3cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
96	かわらけ	a:12.3cm b:7.9cm c:3.1cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
97	かわらけ	a:12.3cm b:8.0cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
98	かわらけ	a:12.7cm b:8.1cm c:3.4cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針 横明眞	#
99	かわらけ	a:12.1cm b:6.8cm c:3.2cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
100	かわらけ	a:12.2cm b:7.2cm c:3.3cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
101	かわらけ	a:12.4cm b:8.1cm c:3.2cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
102	かわらけ	a:12.7cm b:7.5cm c:3.1cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
103	かわらけ	a:12.8cm b:7.8cm c:3.2cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
104	かわらけ	a:13.0cm b:7.4cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
105	かわらけ	a:12.9cm b:8.0cm c:3.3cm	外底糸切底 ロクロ 暗黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
106	かわらけ	a:13.0cm b:8.1cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
107	かわらけ	a:13.4cm b:7.6cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 暗黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
108	かわらけ	a:13.4cm b:8.5cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
109	かわらけ	a:13.1cm b:6.9cm c:3.7cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針	#
110	かわらけ	a:13.1cm b:8.1cm c:3.4cm	外底糸切底 ロクロ 橙色 黑色織砂・黒母・白針・小石粒	#
111	かわらけ	a:12.9cm b:7.2cm c:3.5cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#
112	かわらけ	a:13.3cm b:7.7cm c:3.7cm	外底糸切底 ロクロ 黄褐色 黑色織砂・赤色粒・黒母・白針	#
113	かわらけ	a:13.0cm b:7.5cm c:3.7cm	外底糸切底 ロクロ 暗黄褐色 黑色織砂・黒母・白針	#

表10 遺物觀察表(10)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・釉薬・胎土・素地・接続など)	備考(遺構・その他)
19-114	かわらけ	a:13.3cm b:8.4cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 線色 黒色微砂・墨母・白針	かわらけ型り3
115	かわらけ	a:13.5cm b:8.4cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 線色 黒色微砂・墨母・白針	#
116	かわらけ	a:13.5cm b:8.1cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 線色 黒色微砂・赤色粒・墨母・白針	#
117	かわらけ	a:13.1cm b:8.6cm c:3.7cm	外底糸切痕 ロクロ 線色 黒色微砂・墨母・白針	#
118	かわらけ	a:13.5cm b:8.5cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色微砂・赤色粒・墨母・白針・小石粒	#
119	かわらけ	a:14.4cm b:8.2cm c:3.7cm	外底糸切痕 ロクロ 線色 黑色微砂・赤色粒・墨母・白針	#
120	青磁 瓢	口縁部	外面鐵繪文 斧オリーブ色半透明 灰白色堅韌	龍泉窯系
121	青磁 瓢	体部下半	外面鐵繪文 斧オリーブ色不透明 灰白色堅韌	龍泉窯系
122	青磁 瓢	b:(4.8cm)	斧オリーブ色不透明 高台内輪鉢 置付窓附 灰白色堅韌	龍泉窯系
123	青磁 瓢	b:(5.0cm)	外面鐵繪文 明瞭灰色不透明 高台内輪鉢 置付窓附 灰白色堅韌	龍泉窯系
124	青磁 瓢	b:(3.9cm)	外面鐵繪文 明瞭灰色不透明 高台輪～高台内輪鉢 灰白色堅韌	龍泉窯系
125	青磁 瓢	a:12.4cm b:6.0cm c:4.2cm	折唇 内外面無文 斧オリーブ色不透明 灰白色堅韌	龍泉窯系
126	青磁 瓢	口縁部片	折唇 内外面無文 斧オリーブ色不透明 貫入多し 灰白色堅韌	龍泉窯系
127	青磁 盆	b:6.4cm	折唇 内底面双魚文貼付け オリーブ黄色不透明 貫入多し 灰白色堅韌	龍泉窯系
128	青磁 盆	b:10.1cm	折唇 内底面双魚文貼付け 明オリーブ色不透明 貫付窓附 灰白色堅韌	龍泉窯系
129	白磁 瓢	b:4.5cm	削出し高台 灰白色不透明 高台輪～高台内輪鉢 灰白色堅韌	#
130	白磁 瓢	a:5.8cm b:1.8cm c:0.8cm	内型作り 内面牡丹唐草文 成白色半透明 下半～外底窓附 灰白色堅韌	#
131	白磁 瓢	口縁部小片	内型作り 内面墨文の菊花文風 白色透明 灰白色堅韌	#
132	白磁 瓢	口縁部小片	内型作り 内面墨文・草花文風 灰白色不透明 白色堅韌	#
133	白磁 瓢	体部小片	内型作り 内面草花文墨 灰白色不透明 灰白色堅韌 I32と同一個体か	#
134	白磁 壶	体部小片	上下半部別々の外型作り 外面草花文墨 灰白色不透明 灰白色堅韌	#
135	白磁 壶	口縁部小片	上下半部別々の外型作り 外面墨文 成白色半透明 灰白色堅韌	#
136	青白磁梅瓶	肩部片	外面牡丹唐草文 明暦灰色半透明 滑い施釉 灰白色堅韌	#
137	青白磁合子壺	a:9.7cm c:(2.1cm)	型作り 天井部草花文 鐵繪墨文 明暦灰色半透明 灰白色堅韌	#
138	青白磁合子舟	a:5.6cm	型作り 鐵繪墨文の舟文 青白色透明 口縁部と下半窓附 灰白色堅韌	#
139	青白磁合子舟	b:5.0cm 小型底部片	上下半部別々の外型作り 明暦灰色半透明 灰白色堅韌	#
140	常滑 瓶	b:9.3cm	窓口窓 肩部に一毫枝紋 肩部黒灰色の陽灰釉 灰褐色 粗砂粒・石英粒	#
141	常滑 瓶	a:22.6cm	内面口縁部・体部に陶灰の自然釉 灰色 粗砂粒・石英粒多し	常滑片口跡I類
142	常滑 瓶	a:36.1cm	内面口縁部・体部に陶灰の自然釉 灰褐色 粗砂粒・石英粒多し	常滑片口跡I類
143	円盤状土器製品	径6.1cm 厚さ1.0cm	かわらけ底部片の周縁を打抜いて円形に加工 線色 黒色微砂・墨母・白針	#
144	土器質火鉢	a:30.2cm b:22.2cm c:7.9cm	口縁部肥厚した鉢形 内外面ヘラナデ・縁縛き 黄～灰褐色 黑色微砂	#
145	瓦石	長さ(4.2cm) 幅2.7cm 厚さ3mm	仕上紙 鳥海産の粘板岩質 瓦面に細かな刀物痕跡有り 浅黄色	#
146	瓦石	長さ(5.6cm) 幅(3.6cm) 厚さ3mm	仕上紙 鳥海産の粘板岩質 瓦面に細かな刀物痕跡有り 浅黄色	#
147	耐熱	宝宗御宝	北宋銘 初鑄年 1020年	#
148	耐熱	嘉泰御宝	北宋銘 初鑄年 1201年	#
149	耐熱	元祐元宝	北宋銘 初鑄年 1085年	#
150	耐熱	元祐元宝	北宋銘 初鑄年 1085年	#
20-1	かわらけ	a:7.6cm b:5.0cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色微砂・墨母・白針	1面下～2面
2	かわらけ	a:7.6cm b:4.5cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 淡色 黑色微砂・墨母・白針	#

表11 造物観察表 (11)

団・番号	解 説	法點 (a・口径・b・底径・c・高さ)	成形・特徴 (文様・釉薬・胎土・素地・構成など)	備 考 (選択・その他)
20-3	かわらけ	a:7.4cm b:4.9cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黒色鐵砂・雲母・白針	1面下~2面
4	かわらけ	a:7.6cm b:4.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 極色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
5	かわらけ	a:7.3cm b:4.3cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
6	かわらけ	a:7.3cm b:4.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 明黃褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
7	かわらけ	a:7.8cm b:5.2cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針 異明暗	#
8	かわらけ	a:7.8cm b:5.1cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
9	かわらけ	a:7.8cm b:6.0cm c:1.5cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
10	かわらけ	a:8.1cm b:4.2cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
11	かわらけ	a:11.8cm b:8.1cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
12	かわらけ	a:12.6cm b:8.5cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
13	かわらけ	a:12.3cm b:8.0cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黃褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
14	かわらけ	a:12.4cm b:7.9cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
15	かわらけ	a:13.7cm b:9.8cm c:3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
16	青磁 鏡	a:(11.1cm)	外面銀漬文 オリーブ灰色半透明 薄手の施釉 灰白色堅緻	# 龍泉窯系
17	青白磁海螺	腹部小片	外面文様 明青灰色半透明 薄い施釉 灰白色堅緻	#
18	青磁 鏡か	底部片	無文 灰綠色半透明 厚手の施釉 灰色 二次焼成で一部暗灰色に変色	# 龍泉窯系
19	白磁 鏡	口縁部片	口元部 灰白色不透明 薄い施釉 口唇部黒駆 灰白色堅緻	#
20	白磁 鏡	a:9.2cm b:5.6cm c:1.7cm	口元部 灰白色不透明 薄い施釉 外底網毛巻り 口唇部黒駆 灰白色堅緻	#
21	白磁天目茶碗	a:10.0cm b:3.5cm c:4.2cm	低い削出し高台 口縁へ底部黒駆へ墨褐色 上半部灰色 下半部植灰色	# 中国産
22	常滑 磁炉	a:27.7cm b:17.8cm c:17.1cm	外底砂目 緩読み成形 表面暗赤褐色 反褐色 砂粒・石英粒・長石粒	# 常滑窯口跡
23	滑石製磁石	長さ13.3cm 幅(3.8cm) 厚さ1.5cm	出来があり滑石質の割離片を転用加工 両面に削り・振りの加工痕	#
23-1	常滑 磁	口縁部片	経帯部や中広口 外面自然釉 表面暗赤褐色 砂粒・石英粒・長石粒	建物1 常滑6b型式#
2	かわらけ	a:7.9cm b:5.5cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
3	かわらけ	a:8.0cm b:5.8cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:8.3cm b:6.4cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 灰黄色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
5	青磁 鏡	体部片	外面銀漬文 オリーブ灰色半透明 厚手の施釉 灰色堅緻	# 龍泉窯系
6	雨鏡	元祐元年	北宋鏡 初鋤年 1086年	#
7	青磁 鏡	b:13.8cm 体部~底部片	無文 明緑灰色半透明 厚手の施釉 高台輪・蟹付輪駆 灰色堅緻	# 龍泉窯系
8	かわらけ	a:17.8cm b:5.0cm c:1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 底桔色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・土月粒	#
9	かわらけ	a:12.7cm b:8.7cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針 異明暗	#
10	磨石製加工品	長さ(2.5cm) 幅2.3cm 厚さ8mm	上下端の割離以外は刃物削り加工 スタンプ未製品か	#
11	かわらけ	a:17.2cm b:4.9cm c:1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
12	かわらけ	a:7.9cm b:6.0cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
13	かわらけ	a:7.9cm b:5.8cm c:1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
14	かわらけ	a:13.2cm b:7.8cm c:3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
15	かわらけ	a:13.2cm b:7.8cm c:3.7cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
16	かわらけ	a:13.6cm b:8.3cm c:3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
17	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
18	かわらけ	a:12.8cm b:6.9cm c:3.6cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 黑色鐵砂・雲母・白針	#

表12 遺物觀察表 (12)

図-番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(胎土・素地・釉薬・焼成など)	備考(遺構・その他)
23-19	かわらけ	a:13.4cm b:8.3cm c:3.1cm	外底系切腹 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	理物1
20	青磁 瓢	b:4.9cm	外底系鉢文 緑灰色半透明 薄手の施釉 罩付～高台内窯附 灰色型體	# 青灰窯系
21	青磁 瓢	口縁部小片	端反口縁 球磨手作り 外面鉢文 緑灰色半透明 灰色型體	# 青灰窯系
22	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 棕色 黒色鐵砂・赤色粒・雲母・白針 燐明皿	#
23	かわらけ	a:7.9cm b:5.2cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
24	かわらけ	a:5.1cm b:5.6cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
25	ガラス製品	高さ(1.4cm)幅(1.3cm)厚さ1.5mm	小壺の側面部が二次焼成を受けたものか白濁。一部に青緑色が残存	#
24-1	かわらけ	a:7.8cm b:5.8cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 棕色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	土崎1
2	かわらけ	a:7.0cm b:5.8cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 棕色 黑色鐵砂・雲母・白針・小石粒 燐明皿	#
3	かわらけ	a:8.0cm b:5.7cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:12.1cm b:8.2cm c:2.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	#
5	青磁 盆	b:(17.2cm)	折縁 無文 明緑色不透明 厚手施釉 高台盤・蓋付開口 灰白色型體	# 青灰窯系
6	木製品蓋	径16.6cm 厚さ5mm	外周・上面は刃物の削り成形 中央部に取手を止めた丸孔3ヶ所有	#
7	木製品底板	径21.2cm 厚さ3mm	曲物底板 外周・縁は刃物の削り成形 徒目材	#
8	木製品板草履	長さ(12.8cm)幅(4.3cm)厚さ3mm	金襴草履の芯 表面に斜付けた圓目麻有り 鼻緒部に小孔 板目材	#
9	木製品箱物	長さ(13.2cm)幅(2.3cm)厚さ7mm	箱物の蓋木 口上面に木釘で木釘受け小孔のぼぞ穴が複数 備目材	#
10	木製品形代	長さ(13.5cm)幅(2.3cm)厚さ6mm	形代削成形 上端斜面直 両面中央が踏み両端は刃端に削り加工	#
11	木製品形代	長さ16.3cm 幅1.8cm 厚さ6mm	形代円形子 上端は鋸い方先状、下側は柄状に削り加工	#
12	木製品蓋	長さ26.5cm 幅1.1cm 厚さ5mm	断面扁平な多角形 刃物で片端だけを磨く削り加工 采箸	#
13	木製品蓋	長さ25.2cm 幅2mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るよう削り加工	#
14	木製品蓋	長さ24.7cm 幅7mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
15	木製品蓋	長さ24.5cm 幅5mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
16	木製品蓋	長さ(24.3cm)幅5mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
17	木製品蓋	長さ23.5cm 幅7mm 厚さ4mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
18	木製品蓋	長さ(22cm)幅7mm 厚さ6mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
19	木製品蓋	長さ(22cm)幅7mm 厚さ6mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
20	木製品蓋	長さ(22.5cm)幅7mm 厚さ6mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
21	木製品蓋	長さ(21.3cm)幅6mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
22	木製品蓋	長さ(19.2cm)幅7mm 厚さ6mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
23	木製品蓋	長さ(20cm)幅7mm 厚さ6mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
24	木製品蓋	長さ(21.5cm)幅6mm 厚さ5mm	断面多角形 刃物で両端が細く成るように削り加工	#
25	木製品枕	長さ28.5cm 幅2.5cm 厚さ2.2cm	断面角棒状 刃物で片端だけを尖らるよう削り加工 木枕	#
26	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	土崎2
27	かわらけ	a:7.9cm b:5.7cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・雲母・白針	#
28	かわらけ	a:12.5cm b:6.2cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 棕色 黑色鐵砂・雲母・白針	#
29	白磁 瓢	b:4.2cm	口瓦継 窓付一系沈款 灰白色半透明 高台盤～高台内窯附 白色型體	#
30	白磁 瓢	a:10.7cm	口瓦継 反白色不透明 薄い施釉 口唇部施釉 灰白色型體	#
31	白磁 瓢	a:10.9cm	口瓦継 端反口縁 反白色不透明 薄い施釉 口唇部施釉 灰白色型體	#
32	白磁 瓢	b:8.4cm	口瓦継 明オリーブ灰色不透明 薄い施釉 外底削出し巻り 白色型體	#

表13 遺物観察表 (13)

図・番号	種類	法量(a:口徑 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・釉薬・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他の)
24-33	青白磁 盆	b:2.0cm	内面に型押印花文 明暦灰釉 体部下端~外底面輪 白色堅致	土塗2
34	土師質土器碗	b:4.1cm	断面三角形の粘付台面 浅黄褐色 砂粒・小石粒 濡戸内系か	フ
35	副残	治平元年	北宋 初鉢年 1064年	フ
36	副残	正和元年	北宋 初鉢年 1064年	フ
25-37	白磁 盆	口縁~体部片	口瓦面 明暦灰色不透明 厚手施釉 口唇部輪肋 灰白色堅致	土塗4
38	青白磁 盆	口縁標片	口小皿 内面に型押印花文 明暦白色半透明 口唇部輪肋 白色堅致	フ
39	瀬戸 入子	a:7.3cm	ロクロ 口唇部に自然輪 灰色 磁砂含むが粗良・堅致	フ
40	窓滑 豪	口縁部片	輪抹めの縁部 表面暗褐色 反側面 砂粒・石粒・黒色粒	フ
41	かわらけ	a:6.9cm b:4.9cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・藍母・白針・小石粒	土塗5
42	青磁 豪	b:4.6cm	外面輪廊舟文 緑灰色不透明 厚手施釉 置付~高台内面輪肋 灰色堅致	フ 龍泉窯系
43	青磁 盆	a:12.5cm b:8.3cm c:3.5cm	折腰盤 緑灰色半透明 高台内まで厚手の施釉 置付輪肋 灰白色堅致	土塗7 龍泉窯系
44	常滑 程跡	a:34.0cm b:13.6cm c:12.4cm	口唇部平らで口脇強めの横擦ナデ 内面自然輪 灰色 砂粒・石粒	フ 常滑口跡Ⅲ期
45	かわらけ	a:8.5cm b:4.6cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	土塗9
46	かわらけ	a:8.2cm b:5.0cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	フ
26-1	かわらけ	a:6.7cm b:4.5cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	溝1
2	青白磁合子蓋	蓋頂部片	小さな中房を留く蓮花文 明青反色不透明 内面輪肋 灰白色堅致	フ
3	磁石	長さ(10.3cm)幅(5.4cm)厚さ3.7cm	中磁 浅黄褐色 彩色の波文状 蓼葉岩質 天草産か	フ
4	白磁 盆蓋	a:7.0cm c:1.3cm	周縁八角型か 小型短頸盤 頭部面に花弁文 灰白色透明 灰白色堅致	廣2
5	かわらけ	a:7.8cm b:5.0cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 茶黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	P2
6	かわらけ	a:6.8cm b:5.0cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 明暦褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母	P3
7	青磁 豪	a:11.9cm	外面輪廊舟文 緑灰色不透明 厚手施釉 灰白色堅致	P16
8	瓦質土器碗	b:4.6cm	手捏ね成形 断面三角形の粘付台面 灰~灰黑色 砂粒・小石粒	P19
9	かわらけ	a:11.2cm b:6.0cm c:3.2cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母	P20
10	かわらけ	a:13.0cm b:8.0cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	フ
11	かわらけ	a:13.7cm b:8.2cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	フ
12	かわらけ	a:7.7cm b:5.4cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	P21
13	かわらけ	a:12.5cm b:7.7cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 浅黄色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	フ
14	かわらけ	a:7.1cm b:4.6cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・藍母・白針・小石粒・底部小穿孔	P22
15	滑石製防護車	径5.5cm 厚さ1.2cm 孔径1.1cm	断面や中通孔壁 中央円孔 上面に一筋沈線 表面は丁寧な研磨	フ
16	かわらけ	a:6.8cm b:4.8cm c:1.4cm	外底系切腹 ロクロ 緑色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	P23
17	かわらけ	a:6.9cm b:6.0cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 紫褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針・土丹粒	フ
18	白磁 豪	a:12.6cm	口瓦面 口縁外平 底色不透明 口唇部輪肋 灰白色堅致	P25
19	かわらけ	a:7.5cm b:5.0cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	P26
20	瀬戸 入子	a:7.8cm b:3.7cm c:2.6cm	外底系切腹 口唇部に少量自然輪 抗食 灰色 磁砂質精良	フ
21	瀬戸 入子	a:7.8cm	口縁に抗食 灰色 磁砂質精良 内壁に赤色物村層 紅か	フ
22	瀬戸 入子	a:8.9cm	口唇部に少量抗食 抗食 磁砂質精良 内壁に赤色物村層 紅か	フ
23	青磁 豪	b:4.1cm	内底面印刷文 外面文様不明 緑灰色半透明 厚手施釉 灰色堅致	P29 龍泉窯系
24	副残	元豐通宝	北宋 初鉢年 1078年	P31
25	かわらけ	a:8.0cm b:5.0cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黑色鐵砂・赤色粒・藍母・白針	P35

表14 遺物觀察表 (14)

図・番号	種類	法縫(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・釉薬・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他の)
25-26	かわらけ	a:12.1cm b:7.0cm c:3.1cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・土丹粒	P36
27	かわらけ	a:12.6cm b:7.6cm c:3.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	P40
28	かわらけ	a:13.2cm b:7.6cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
29	石瓶	腹部片 厚さ1.8cm	腹部両側開口 断面逆台形 上面以外は黒漆塗り 灰色 薄かな砂岩質	P41
30	かわらけ	a:13.8cm b:9.1cm c:3.4cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	P42
31	銅鏡	元祐通宝	北宋 初緒年 1086年	P43
32	かわらけ	a:7.3cm b:4.8cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	P44
33	かわらけ	a:7.6cm b:5.4cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 赤褐色 黒色織糸・雲母・白叶・小石粒	#
34	範石	長さ4.4cm 幅3.6cm 厚さ7mm	仕上端 南面使用 上端切断痕 淡黄色 真岩質 鳥嘴式	#
35	かわらけ	a:7.5cm b:5.0cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	P45
36	かわらけ	a:9.1cm b:6.8cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
37	銅鏡	皇宋通宝	北宋 初緒年 1089年	#
27-1	かわらけ	a:7.2cm b:4.4cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶	2面下~3面
2	かわらけ	a:7.4cm b:5.5cm c:1.4cm	外底系切腹 ロクロ 菊繪色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
3	かわらけ	a:7.3cm b:5.1cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶・小石粒	#
4	かわらけ	a:7.4cm b:5.0cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶	#
5	かわらけ	a:7.5cm b:4.9cm c:1.5cm	外底系切腹 ロクロ 淡黄色 黑色織糸・雲母・白叶	#
6	かわらけ	a:7.6cm b:5.4cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明淡色 黑色織糸・雲母・白叶・透明感	#
7	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
8	かわらけ	a:7.5cm b:5.2cm c:1.9cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
9	かわらけ	a:7.8cm b:5.8cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
10	かわらけ	a:7.7cm b:5.7cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	#
11	かわらけ	a:7.5cm b:5.0cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶	#
12	かわらけ	a:8.0cm b:5.9cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	#
13	かわらけ	a:7.7cm b:5.5cm c:1.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	#
14	かわらけ	a:8.3cm b:6.0cm c:1.7cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
15	かわらけ	a:8.3cm b:5.7cm c:1.6cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶・底部に一ヶ所穿孔	#
16	かわらけ	a:11.0cm b:5.4cm c:3.2cm	外底系切腹 ロクロ 暗褐色 黑色織糸・雲母・白叶	#
17	かわらけ	a:12.2cm b:6.2cm c:3.0cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
18	かわらけ	a:12.3cm b:7.4cm c:3.1cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶	#
19	かわらけ	a:12.3cm b:7.0cm c:2.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
20	かわらけ	a:12.6cm b:8.9cm c:2.7cm	外底系切腹 ロクロ 明黄褐色 黒色織糸・雲母・白叶・小石粒	#
21	かわらけ	a:12.8cm b:6.9cm c:3.3cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
22	かわらけ	a:12.2cm b:7.3cm c:2.8cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	#
23	かわらけ	a:12.6cm b:7.3cm c:2.5cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶・小石粒	#
24	かわらけ	a:12.9cm b:7.8cm c:3.5cm	外底系切腹 ロクロ 緩色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白叶	#
25	かわらけ	a:12.6cm b:7.0cm c:3.9cm	外底系切腹 ロクロ 暗黄褐色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白叶・透明感	#
26	白かわらけ	底部小片	外底系切腹 ロクロ 淡黄色 白色粒 織糸質良好	#
27	青磁 瓢	a:15.4cm	外底織糸文 弓オリーブ灰 二次焼成のため失透 灰白色堅致	# 龍泉窯系

表15 遺物観察表(15)

団・番号	種類	法量(a:口徑・b:底径・c:高さ)	成形・特徴(文様・地巻・加工・素地・焼成など)	備考(遺物・その他の関連)
27-28	青磁 瓢	b:5.0cm	無文 塗装灰褐色不透明 高台内施釉 高台縮~茎付瓢胎 灰白色堅緻	# 龍泉窯系
29	青磁 盆	a:21.0cm	折縁盤 内外面無文 灰褐色不透明 扇手脚胎 灰色堅緻	# 龍泉窯系
30	青磁 盆	口盤部小片	内面墨文 明オリーブ灰褐色 やや厚手脚胎 花入多し 灰白色堅緻	# 龍泉窯系
31	青磁 盆	底部小片	内外面無文 灰褐色不透明 厚手脚胎 高台内施釉 高台縮~茎付瓢胎	# 龍泉窯系
32	白磁 盆	a:11.2cm	口元直 口縁外平 明オリーブ灰褐色不透明 口唇部墨胎 灰白色堅緻	#
33	白磁 盆	a:10.9cm	口元直 口縁外平気味 明オリーブ灰褐色不透明 口唇部墨胎 灰白色堅緻	#
34	白磁 盆	b:(8.0cm)	口元直 明オリーブ灰褐色不透明 气泡有り 口唇部墨胎 灰白色堅緻	#
35	青白磁合子蓋	a:7.5cm c:1.8cm	頂部墨文・飛葉文 側面墨文 側面墨文 明麗灰褐色透明 白色堅緻	#
36	經輪 蓋か	体部小片	三彩蓋又は藍墨か 緑色不透明に黄褐色・綠色系施 噴黃褐色 小石粒	# 龍泉窯系
37	廻戸 洗	a:(16.0cm)	口縁部玉縁状に肥厚 灰褐色 内外面灰褐色墨毛坐り 灰色 磨砂 精良	#
38	廻戸 入子	a:4.6cm b:4.0cm c:0.8cm	外底ヘラ削り 灰褐色 磨砂 精良 一部二次焼成でやや軟化	#
39	廻戸 入子	a:5.7cm b:3.8cm c:1.5cm	外底ヘラ削り 茎部小腹點付け 口唇~内壁に明麗灰褐色灰脚胎 灰色墨痕	#
40	常滑 瓢	a:31.4cm	輪轉技法 線部斜付け 内面指淵痕・横位ナデ 外面灰褐色輪轉胎 灰色	#
41	常滑 瓢	口盤部小片	口唇端部を研削するが西耳巻か 内面指淵痕・横位ナデ 灰褐色良好	#
42	常滑 瓢	口盤部小片	口唇端部が平ら 外面強い横位ナデ 内面灰褐色輪轉胎 灰褐色粗胎	#
43	土器發火鉢	a:33.8cm b:25.8cm c:9.5cm	丸浅鉢形 口唇部厚内面墨凸部状 内面横~斜位ナデ 外面指淵痕 灰褐色	#
44	土器發火鉢	a:45.0cm b:31.2cm c:10.0cm	丸浅鉢形 口唇外平気味 肥厚 内面横位ナデ 口縁下継ぎ前の穿孔 灰褐色	#
45	瓦軒用品	長さ3.8cm 幅5.9cm 厚さ1.8cm	瓦片片寄り加工 凸面側から鏡面叩打痕 表裏面刃物側痕 磁石転用か	#
28-46	砾石	長さ(4.5cm)幅(4.3cm)厚さ2.6cm	両面に刃物研ぎ痕直 微黃褐色 剥離や粗い砂岩質 中空又は空洞か	#
47	素面圓錐石	長さ(6.5cm)幅(6.0cm)厚さ3.1cm	端面部片を扁平して両面 周囲を研ぎ加工 角を取り風に刃物で削る	#
48	石硯	長さ11.0cm 幅5.0cm 厚さ2.6cm	長方板型・海部削り四型臺状に加工 黑褐色 粘板岩質	#
49	火打石	長さ13cm 幅2.2cm 厚さ1.4cm	顶部に打撃痕を残す 白色系チャート質	#
50	數珠玉	径1.0cm	円形 中央に径1.8mmの小孔を穿つ 表面無数の傷で失透 水晶製か	#
51	漆喰状	長さ1.8cm 幅2.0cm 厚さ1.3cm	軟質で肌感の繊かな白色物質の塊 漆喰の可能性有り	#
52	漆喰状	長さ4.3cm 幅4.0cm 厚さ1.9cm	S2と同様に軟質で肌感の繊かな白色物質の塊	#
53	漆喰品刀子	長さ(11.2cm)幅1.2cm 厚さ2mm	刀身から鋸部分にかけての欠損品	#
54	漆喰品刷	長さ(7.4cm)幅3mm 厚さ4mm	断面方形 先端は曲がるが鋸歯部分に別の木質部を埋めこみ残す	#
55	漆喰品不明品	長さ(2.8cm)幅(2cm)厚さ3mm	円管状の製品が溶れて曲がったもの 用途等不明製品	#
56	刷毛	口刷元宝	書体から『景祐元宝』の可能性あり(北宋 初鋤年 1034年)	#
57	刷毛	元豐通宝	北宋 初鋤年 1078年	#
58	刷毛	元祐通宝	北宋 初鋤年 1086年	#
59	刷毛	元祐通宝	北宋 初鋤年 1086年	#
60	刷毛	紹聖元寶	北宋 初鋤年 1094年	#
61	刷毛	紹聖元寶	北宋 初鋤年 1094年	#
62	刷毛	紹聖元寶	北宋 初鋤年 1094年	#
63	刷毛	聖宋通宝	北宋 初鋤年 1101年	#
64	竹加工品	長さ(11.2cm)径3.7cm	先端は杭状に三方から削る 片端は節部分で切断、片側に切り込み痕	#
34-1	かわらけ	a:8.5cm b:5.2cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 噴黃褐色 黒色墨痕・墨痕・白針	建物2
2	かわらけ	a:12.1cm b:7.0cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 緑色 噴黃褐色・赤色墨・墨痕・白針	建物2

表16 遺物観察表 (16)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(胎土・素地・輪郭・接合など)	備考(遺構・その他)
34-3	かわらけ	a:12.2cm b:7.3cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黒色繊砂・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
4	かわらけ	a:12.5cm b:7.5cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黒色繊砂・雲母・白針・小石粒	#
5	かわらけ	a:12.6cm b:7.6cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黒色繊砂・赤色粒・雲母・白針 燐明皿	#
6	かわらけ	a:12.9cm b:7.4cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針・小石粒 燐明皿	#
7	白磁 盆	b:5.0cm	体部が屈曲 尖込に『宝』文字と劃文文 明黄色白色不透明 灰白色堅緻	建物4
35-1	かわらけ	a:5.0cm b:3.8cm c:1.0cm	小型の内折 外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色繊砂・赤色粒・雲母・白針 土器1	
2	かわらけ	a:8.2cm b:5.4cm c:1.8cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・赤色粒・雲母・白針	#
3	かわらけ	a:8.4cm b:5.4cm c:1.8cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:12.5cm b:7.5cm c:3.2cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針	#
5	かわらけ	a:12.5cm b:7.8cm c:3.2cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針・小石粒 燐明皿	#
6	かわらけ	a:12.3cm b:7.7cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針	#
7	かわらけ	a:12.4cm b:7.3cm c:3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黑色繊砂・雲母・白針 燐明皿	#
8	かわらけ	a:12.5cm b:7.5cm c:3.2cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黑色繊砂・雲母・白針・小石粒	#
9	かわらけ	a:12.6cm b:7.7cm c:3.2cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針・小石粒	#
10	かわらけ	a:8.3cm b:5.7cm c:1.7cm	外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色繊砂・雲母・白針	土器2
11	白磁 盆	b:5.0cm	口丸皿 オリーブ灰白色不透明 若干気泡有り 灰白色堅緻	#
12	白磁 盆	b:5.0cm	口丸皿 明オリーブ灰白色不透明 気泡・貫入有り 灰白色堅緻	#
13	常滑 製鉢	a:24.0cm	輪轉技法 暗灰色 砂粒・長石粉多し 内面全体に輝が付着	常滑片口鉢1面
14	範石	長さ9.5cm 幅5.0cm 厚さ3.5cm	上面一部に刃物研ぎ痕 淡黄色 肌理のやや粗い砂呑質 中底又は茎部又は葉裏	#
15	かわらけ	a:7.8cm b:5.5cm c:1.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黑色繊砂・雲母・白針	土器3
16	白磁盤	a:12.3cm	口丸皿 羽オリーブ灰白色不透明 気泡・貫入有り 灰白色堅緻	#
17	かわらけ	a:8.0cm b:5.8cm c:1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黑色繊砂・雲母・白針	土器6
18	かわらけ	a:8.2cm b:6.3cm c:1.6cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針	#
19	かわらけ	a:7.7cm b:5.4cm c:1.7cm	外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色繊砂・雲母・白針 燐明皿	#
20	白磁盤	口盤部片	口丸皿 明オリーブ灰白色不透明 気泡有り 灰白色堅緻	#
36-1	かわらけ	a:8.0cm b:5.9cm c:1.5cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・雲母・白針・小石粒	土器8
2	かわらけ	a:8.2cm b:6.2cm c:1.5cm	外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色繊砂・雲母・白針	#
3	かわらけ	a:8.4cm b:5.3cm c:1.9cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 黑色繊砂・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:12.8cm b:8.0cm c:3.0cm	外底系切痕 ロクロ 淡黄色 黑色繊砂・赤色粒・雲母・白針	#
5	かわらけ	a:13.0cm b:9.2cm c:3.3cm	外底系切痕 ロクロ 暗黄褐色 黑色繊砂・雲母・白針	#
6	常滑 製鉢	口盤～脚部片	輪轉技法 畫帶貼付け 内面周縁部・脚部ナデ 外面灰綠色脚灰斑 暗灰色	#
7	土器質火鉢	口盤～体部片	丸焼鉢形 口銀肥厚火鉢 内面横脚部ナデ 口縁下焼成病の穿孔 灰褐色	#
8	唐器 袋	a:18.0cm b:8.7cm c:5.8cm	外底部低い平台面 薄い生地 黒褐色に朱漆で内外面に筆の揮毫を手書き	#
9	木製品折敷	長さ(15.5cm)幅(8.7cm)厚さ2mm	角は狭い幅で斜めに切り面取り	#
10	木製品折敷	長さ22.5cm 幅(3.6cm)厚さ1.5mm	角は面取り加工を施さない	#
11	木製品骨壺	長さ(16.5cm)幅(6.3cm)厚さ10mm	曲物底版か壺と思われる円盤状の製品	#
12	木製品骨壺	長さ(5.5cm)幅(5.3cm)厚さ8mm	端部木口を斜めに切断、内側に一条の刻みを入れる 骨壺の断面	#
13	木製品箇箇	長さ34.0cm 幅1.2cm 厚さ5mm	上側は断面椭円形 下側は先端が尖るように丁寧な削り成形	#
14	木製品箇箇	長さ26.8cm 幅1.9cm 厚さ3mm	幅の狭い薄板状 先端の片面を斜めに切断加工	#

表17 通物観察表(17)

団・番号	種類	法量(a:口徑 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・施墨・鉛土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
36-15	木製品置	長さ8.2cm 幅1.5cm 厚さ6mm	幅の狭い薄板状 先端は両端から斜めに削り尖らせた加工	土塗8
16	木製品置	長さ22.5cm 幅8mm 厚さ4mm	断面多角形の棒状で両端を尖らせた削り加工	#
17	木製品置	長さ22.2cm 幅8mm 厚さ5mm	断面多角形の棒状で両端を尖らせた削り加工	#
18	木製品置	長さ25.0cm 幅8mm 厚さ5mm	断面多角形の棒状で両端を尖らせた削り加工	#
19	木製品置	長さ25.0cm 幅8mm 厚さ5mm	断面多角形の棒状で両端を尖らせた削り加工	#
20	木製品置	長さ24.0cm 幅8mm 厚さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
21	木製品置	長さ24.5cm 幅8mm 厚さ5mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
22	木製品置	長さ25.0cm 幅8mm 厚さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
23	木製品草履	長さ23.5cm 幅16.7cm 厚さ3mm	金属草履型 先端部内側りの小孔と側縫部や後方の切込みは鼻緒すび部	#
24	木製品草履	長さ22.5cm 幅14.5cm 厚さ2mm	金属草履型 先端部内側りの小孔と側縫部や後方の切込みは鼻緒すび部	#
25	木製品	長さ6.5cm 幅2.1cm 厚さ1.0cm	加工の際の余材 片端が焼け焦げる 火の移し木の様なものか	#
26	木製品	長さ16.7cm 幅1.4cm 厚さ7mm	加工の際の余材 片端が焼け焦げる 火の移し木の様なものか	#
1	かわらけ	a:7.0cm b:5.4cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 深黄色 黒色織糸・赤色粒・雲母・白針・小石粒	土塗9
37-2	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・雲母・白針	#
3	かわらけ	a:8.1cm b:5.4cm c:1.4cm	外底系切削 ロクロ 暗灰褐色 黑色織糸・雲母・白針	#
4	かわらけ	a:8.0cm b:6.6cm c:1.4cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白針・小石粒	#
5	かわらけ	a:8.0cm b:6.2cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色織糸・赤色粒・雲母・白針	#
6	かわらけ	a:8.7cm b:6.8cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 暗灰褐色 黑色織糸・雲母・白針	#
7	かわらけ	a:12.0cm b:8.8cm c:3.0cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・雲母・白針・外底焼け焦げ	#
8	かわらけ	a:12.4cm b:7.8cm c:3.2cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・雲母・白針・小石粒	#
9	漆製品置	a:9.2cm b:6.3cm c:1.2cm	輪高台 薄い生地 内面焼け焦げるが黒漆地に朱漆で三巴文を型押施文	#
10	漆製品置	a:9.2cm b:6.3cm c:1.2cm	輪高台 薄い生地 黒漆地に朱漆で内面と体部外側に楕円文様を型押施文	#
11	漆製品置	a:10.8cm b:8.1cm c:9cm	輪高台 薄い生地 黒漆地に朱漆で内面と体部外側に楕円文様を手描き施文	#
12	漆製品置	a:9.8cm b:6.7cm c:1.4cm	輪高台 薄い生地 黒漆地に朱漆で内面に草花文を手描き施文	#
13	漆製品置	a:9.5cm b:6.7cm c:1.3cm	輪高台 薄い生地 黒漆地に朱漆で内面と体部外側に楕円文を手描き施文	#
14	漆製品置	a:10.0cm b:7.2cm c:1.8cm	平高台 やや厚手生地 黒漆地に朱漆で内面と体部外側に楕円文を型押施文	#
15	漆製品盆	長さ(31.2cm) 幅(8.8cm) 厚さ5mm	外周低い縁 黑漆地に朱漆で内面と体部外側に楕円文を手描き施文	#
16	漆製品不明	長さ26.0cm 幅1.4cm 高さ1.5cm	接合部以外は黒漆仕上げ 中央と両端間に接合の木釘孔痕 腹・蓋把手か	#
17	木製品折敷	長さ22.4cm 幅(3.1cm) 厚さ2mm	杉木折敷 両丸仕上げ 中央最近くに小孔 表裏面に墨書きあり解説不明	#
18	木製品板杓子	長さ(24.3cm) 幅(6.0cm) 厚さ4mm	身と柄が部分的に欠失 液から身の先端部分に向かって薄く仕上げる	#
19	木製品置	長さ24.6cm 幅5mm 高さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
20	木製品置	長さ24.0cm 幅6mm 高さ5mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
21	木製品置	長さ(23.7cm) 幅5mm 高さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
22	木製品置	長さ(22.0cm) 幅5mm 高さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
23	木製品置	長さ21.5cm 幅5mm 高さ4mm	断面多角形の棒状の両端を尖らせた削り加工	#
24	木製品置	長さ(21.0cm) 幅1.3cm 厚さ5mm	断面台形 上側に比べて先端側を薄く削り尖り気味に加工	#
25	木製品葉著か	長さ(30.5cm) 幅8mm 厚さ7mm	巻割り板を粗い削りで棒状に片側を粗く加工 先端付近が焼け焦げる	#
26	木製品不明	長さ7.8cm 幅3.6cm 厚さ1.3cm	上側は欠失 周縁は丸柱を付け加工 上側中央に方形の抜き用溝不明	#
38-1	かわらけ	a:7.6cm b:5.3cm c:1.4cm	外底系切削 ロクロ 浅黄色 黑色織糸・雲母・白針	土塗10

表18 遺物觀察表 (18)

図・番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・地模・胎土・素地・焼成など)	備考(調査・その他の)
38-2	かわらけ	a:8.2cm b:5.5cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 淡黄色 黒色織糸・赤色粒・墨母・土丹粒	土壤10
3	かわらけ	a:11.4cm b:7.1cm c:2.7cm	外底系切削 ロクロ 淡黒色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
4	常滑 球体	a:31.8cm	輪旋技法 口縁端部丸味をもつ 灰色 砂粒・長石多し	# 常滑片口球II型
29-1	かわらけ	a:13.7cm b:5.8cm c:3.6cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・土丹粒	構1
2	常滑 球体	口縁部小片	輪旋技法 口縁端部丸味をもつ 灰色 砂粒・長石多し	# 常滑片口球II型
30-3	かわらけ	a:8.3cm b:6.0cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄色 黑色織糸・墨母・白針	P1
4	かわらけ	a:7.7cm b:5.5cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 淡黄色 黑色織糸・墨母・白針・土丹粒	P4
5	かわらけ	a:7.7cm b:4.6cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
6	かわらけ	a:12.2cm b:7.7cm c:3.4cm	外底系切削 ロクロ 淡黄色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	P6
7	青磁 薄	a:16.8cm	外面織糸背文 オリーブ灰色不透明 深い輪肋 暗灰色堅壁	P10 錦友窯系
8	かわらけ	a:13.0cm b:8.8cm c:3.5cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	P13
9	白磁 薄	a:12.7cm b:7.2cm c:3.0cm	口口直 口縁外反 オリーブ灰色不透明 内外面口唇部重ね 灰色堅壁	#
10	かわらけ	a:11.4cm b:7.6cm c:2.5cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色織糸・墨母・白針・小石粒	P15
11	かわらけ	a:8.0cm b:5.4cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 灰青色 黑色織糸・墨母・白針・土丹粒	P19
12	白磁 薄	b:4.1cm	口元直 斜出し高台 突起外周沈線 明オリーブ灰色不透明 灰色堅壁	P26
13	かわらけ	a:8.0cm b:5.3cm c:1.2cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・墨母・白針	P32
14	かわらけ	a:11.2cm b:7.6cm c:2.8cm	外底系切削 ロクロ 淡黄色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・小石粒	#
15	青磁 薄	b:5.0cm	外面織糸背文 灰色不透明 高台内側斜 立付輪肋 灰色堅壁	# 錦友窯系
16	かわらけ	a:12.2cm b:7.5cm c:3.3cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・小石粒	P38
17	白磁 薄	b:8.0cm	口元直 体部下位に横 明オリーブ灰色不透明 灰白色堅壁 小気孔あり	P42
18	常滑 薄	a:34.0cm	輪旋技法 縫接貼付 口ノミ・肩部に明緑灰褐色灰輪 輪灰色 砂粒・小石粒	P41
40-1	かわらけ	a:7.5cm b:5.1cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・白針・土丹粒	3面下~4面
2	かわらけ	a:7.7cm b:5.1cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・土丹粒	#
3	かわらけ	a:7.8cm b:5.3cm c:1.8cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
4	かわらけ	a:7.9cm b:5.7cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
5	かわらけ	a:8.1cm b:5.5cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針 壓明脈	#
6	かわらけ	a:8.6cm b:6.2cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・小石粒・土丹粒	#
7	かわらけ	a:8.6cm b:5.4cm c:2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・小石粒	#
8	かわらけ	a:8.3cm b:6.0cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 淡黄色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・土丹粒	#
9	かわらけ	a:8.0cm b:5.5cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
10	かわらけ	a:8.0cm b:5.1cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 暗褐色 黑色織糸・墨母・白針	#
11	かわらけ	a:8.0cm b:5.8cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
12	かわらけ	a:8.6cm b:6.2cm c:1.9cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色織糸・墨母・白針・土丹粒	#
13	かわらけ	a:8.0cm b:5.8cm c:1.8cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・墨母・白針 外底に穿孔造中の小孔	#
14	かわらけ	a:8.0cm b:5.3cm c:1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色織糸・墨母・白針 壓明脈	#
15	かわらけ	a:8.4cm b:6.0cm c:1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#
16	かわらけ	a:8.4cm b:6.6cm c:1.8cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針・土丹粒	#
17	かわらけ	a:8.1cm b:6.0cm c:1.5cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 黑色織糸・墨母・白針 内面墨書文字不明	#
18	かわらけ	a:12.7cm b:7.9cm c:3.5cm	外底系切削 ロクロ 暗色 黑色織糸・赤色粒・墨母・白針	#

表19 遺物観察表 (19)

図・番号	種類	法量(a:口径・b:底径・c:深さ)	成形・特徴(文様・難度・胎土・調理・焼成など)	備考(遺物・その他)
10-19	かわらけ	a:12.8cm b:8.5cm c:3.5cm	外底余切痕 ロクロ 稲毛 黒色鐵砂・赤色鉄・墨母・白針	3面下~4面
20	かわらけ	a:12.7cm b:8.1cm c:3.3cm	外底余切痕 ロクロ 明黄褐色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白針	△
21	かわらけ	a:13.0cm b:8.5cm c:3.1cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白針	△
22	かわらけ	a:12.8cm b:8.2cm c:3.5cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白針	△
23	かわらけ	a:12.8cm b:8.8cm c:3.4cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・墨母・白针・土丹粒	△
24	かわらけ	a:13.0cm b:8.3cm c:3.1cm	外底余切痕 ロクロ 桂色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白针	△
25	かわらけ	a:12.9cm b:7.8cm c:2.3cm	外底余切痕 ロクロ 桂色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白针	△
26	かわらけ	a:12.8cm b:8.2cm c:3.4cm	外底余切痕 ロクロ 桂色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白针・外側温書	△
27	かわらけ	a:13.7cm b:7.6cm c:3.9cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 黑色鐵砂・赤色鉄・墨母・白针・土丹粒	△
28	かわらけ	a:13.3cm b:10.5cm c:3.5cm	手捏ね 体部上位強い模様ナデ 外底余切痕 桂色 黑色鐵砂・墨母・白针	△ 手捏ね本例だけ
29	青磁 碗	口縁部小片	外面施蓮瓣文 緑灰色不透明 手の施釉 灰白色堅緻	△ 龍泉窯系
30	青磁 碗	a:14.7cm	外面施蓮瓣文 明顯灰褐色半透明 手の施釉 灰白色堅緻	△ 龍泉窯系
31	青磁 碗	口縁部片	外面施蓮瓣文 緑灰色不透明 やや厚手の墨跡 強い質入 灰白色堅緻	△ 龍泉窯系
32	青磁 碗	b:4.2cm	外面施蓮瓣文 緑灰色透明 高台内~墨手跡付 灰白色 黑色鐵砂 堅緻	△ 龍泉窯系
33	青白磁香炉	a:(8.6cm)	体部に透かし文様 明青灰半透明 口唇部墨跡 小気泡多し 白色精良	△
34	白磁 盆	a:(11.6cm)	体部中位粗面 反オリーブ色透明 質入多し 灰白色 小孔多し	△
35	白磁 盆	底部~体部片	内底面に線刻文様 反オリーブ色透明 外底墨跡 灰白色 小孔多し	△
36	白磁 盆	a:11.0cm	口元黒 口縁外反 灰白色不透明 内外口唇部墨跡 反白色堅緻	△
37	白磁 盆	a:10.8cm b:16.3cm c:13.4cm	口元黒 口縁外反灰味付 灰白色透明 内外口唇部墨跡 灰色堅緻	△
38	白磁 碗	a:12.9cm	口元黒 口縁外反 一条波線 反オリーブ色不透明 内外口唇部墨跡 灰色堅緻	△
39	白磁 碗	a:14.2cm	口元黒 一条波線 灰白色不透明 内外口唇部墨跡 灰白色堅緻	△
40	白磁 碗	a:13.3cm	口元黒 口縁外反 オリーブ灰褐色半透明 内外口唇部墨跡 灰白色堅緻	△
41	白磁 盆・碗?	口縁部小片	口元黒 不透明 口縁外反 灰白色半透明 内外口唇部墨跡 灰白色堅緻	△
42	青白磁盤	底部片	内底にヘラ切り文様有り 明青灰透明 外底中央墨跡 灰白色堅緻	△
43	青白磁水差	把手手片 幅1.8cm	水差の把手手 四条紋縫を斜め 明青色透明 白色精良・堅緻	△
44	青白磁合子蓋	a:15.8cm	頂部草花文 斜縞織文 明青灰褐色半透明 内側~口唇部墨跡 白色堅緻	△
45	青白磁合子蓋	a:15.5cm	側面織文文 明青灰褐色半透明 内側~口唇部墨跡 白色堅緻	△
46	青白磁合子蓋	口縁部小片	側面織文文 明青灰褐色半透明 内側~口唇部墨跡 灰白色堅緻	△
47	青白磁合子舟	a:7.8cm b:7.7cm c:1.8cm	側面幅広の蓮瓣文 文青灰褐色半透明 口唇部~外底墨跡 白色堅緻	△
48	青白磁盤	底部小片	側面幅狭い蓮瓣文 文青灰褐色半透明 口唇部下位~外底墨跡 灰白色堅緻	△
49	瀬戸 山茶碗	a:11.2cm	ロクロ 内面へラ書き日付 灰色 精良堅緻 東美濃系山茶碗	△
50	常滑 萩口壺	b:8.8cm	外底余切痕 内面陶研跡 暗褐色 砂粒・長石粒多し	△
51	常滑 指輪	b:(12.1cm)	裏面三角形の貼付高台 灰色 砂粒・長石粒多し 高台一部焼成後の割り	△ 常滑片口壺I類
52	常滑 指輪	a:35.5cm b:14.2cm c:13.4cm	口唇部平ら 口縁外側強い横位ナデ 暗褐色 砂粒・長石粒やや多し	△ 常滑片口壺II類
53	瓦器質製品	頸部片	輪削技法 内外面弱い指頭痕を残す 暗灰黒灰色 志部灰白色精良	△
54	かわらけ直壺	a:7.7cm 鉢大径8.5cm	小型の短脚直壺 口縁くち字に外付 桂色 黑色鐵砂・墨母・白针・良好	△
55	須恵器 壺	頸部小片	外面に平行文様 灰色 砂粒・小石粒	△
56	青石瓶 壺	長さ(3.5cm)幅(3.2cm) 高さ1.3cm	漫石瓶の桟用 陸部に薄い墨痕あり	△
57	滑石製加工品	長さ(2.1cm)幅(2.5cm) 高さ7mm	漫石瓶加工品 滑板状で中央部を凸形に削りを施す 用途不明	△

表20 遺物観察表（20）

図・番号	種類	法數（a. 口径・b. 底径・c. 深さ）	成形・特徴（文様・馳走・船上・素地・焼成など）	備考（遺構・その他）
40-58	磬石	径1.3cm 厚さ3mm	やや梢円形の扁平な墨石	3面下～4面
59	副葬	至道元宝	北宋 初聖年 995年	#
60	安神伝	長さ11.8cm 幅2.2cm 高さ3mm	頭部半埋状 その下両脇に二ヶ所切込み 表面「南朝阿団」墨書	#

※〔 〕内の数値は推定値を示す

【参考文献】

- 河野真知郎ほか 1990 『今小路西遺跡（御成小学校地内）』鎌倉市教育委員会
青磁双耳香炉の伝世品（元代）として、鎌倉建長寺（青磁貼花龍牡丹文）や
横浜称名寺（青磁貼花雲龍文）の大香炉が有名である。
- 宗臺富貴子 1996 「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について—古瀬戸前期
から後期までの出土様相—」『研究紀要 第4輯』（財）瀬戸埋蔵文化財セン
ター
- 中野晴久 1995 「9. 中世陶器 〔2〕 常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器
研究会編 真陽社
- 藤澤良祐 1995 「9. 中世陶器 〔1〕 古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究
会編 真陽社
- 山本信夫 1995 「11. 貿易陶磁器 〔2〕 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶
磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 横田賢次郎・
森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館

第4章 佐助ヶ谷遺跡の花粉化石

1. 試料と分析方法

試料は調査区北壁Ⅱ区側より採取した8試料（試料N0.1～8）である。花粉分析はこれら8試料について以上のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約3～4g）を速沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行ない、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣よりプレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉47、草本花粉23、形態分類を含むシダ植物胞子3、寄生虫卵3の総計76である。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表21に、それらの分布を図41に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を基準に、草本花粉およびシダ植物胞子・寄生虫卵は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してある。また表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検鏡の結果、樹木花粉の産出傾向に違いが認められたため花粉化石群集帯（下位よりI～IV）を設定した。

花粉帯I（試料8）：トウヒ属やマツ属単維管束亜属（ハイマツ、コタゴヨウなどのいわゆるゴヨウマツ類）といった寒冷要素と考えられる分類群が低率ながら検出されていることで特徴づけられる。最も多く検出されているのはコナラ属コナラ亜属で、出現率は、30%を達している。次いでハンノキ属、クマシデ属アサダ属、スギが10%を超えて得られている。草本類ではイネ科が30%を超え最も多く、次いでカヤツリグサ科が、20%近い出現率を示している。また1点だけであるがミズバショウ属が検出されている。

花粉帯II（試料6・7）：クリ属の急増で特徴づけられ、試料6では出現率は80%を達している。試料7においてはハンノキ属が最も多く、次いでコナラ亜属で、I帯から引き続き減少傾向が認められる。草本類はヨモギ属が最も多く、次いでイネ科、カラマツソウ属となっており、試料6で出現率を下げる傾向が認められる。

花粉帯III（試料3～5）：ハンノキ属とコナラ属アカガシ亜属の優古で特徴づけられる。その他、二列属一ケヤキ属は約20%と高い出現率を示すもののその上部では急減しており、コナラ亜属、カエデ属にも同様の傾向がみられる。反対にトチノキ属は上部に向かい増加しており、エノキ属ムクノキ属も同様である。草本類は全体に少なく、イネ科、カラマツクサ科、ヨモギ属がやっと5%前後を示す程度である。

表21 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
裸木									
モク属	<i>Podocarpus</i>	1	1	+	1	+	+	+	-
モク属	<i>Abies</i>	1	1	1	1	1	1	1	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	3	1	1	1	1	1	5
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	1	1	1	1	1	1	6
マツ属单球管胞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyloso</i>	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属双球管胞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyloso</i>	7	1	1	2	2	-	-	2
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> [Unknown]	5	1	-	-	2	-	1	6
コクサキ属	<i>Sesidopitys</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i> japonica D. Don	23	60	14	20	16	2	1	35
イデノ科イタヤガ科ヒメノ科	<i>T. G.</i>	6	14	5	12	6	3	-	4
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	1	1	-	-	-
ヤマモチ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	1	-	-	-	-
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	-	3	1	-	5	3	1	-
クマノミデ属アヤガ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	3	6	15	10	9	1	4	26
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	1	-	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	1	-	-	-	1	6
ハリコブシ属	<i>Alnus</i>	1	6	37	72	10	8	50	26
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	2	2	-	1	-	-	-	4
イヌクチ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	1	-	-	-	-	2	2
コクサキ属コナラ属属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	22	41	13	14	26	10	25	54
コクサキ属カガシ属属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	16	35	58	39	38	5	1	-
クリ属	<i>Castanea</i>	1	6	-	2	4	1	1	1
シナノキ属マタバシイ属	<i>Castanopsis</i> - <i>Passiflora</i>	9	6	9	7	8	-	-	1
ニシキギ属	<i>Ulmus</i> - <i>Bellicosa</i>	4	2	13	12	42	1	2	12
エバネズム属マタキ属	<i>Cellis-Aphananthe</i>	-	2	34	11	10	3	2	-
カガシ属	<i>Ceratidiphyllum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	1	-	-	-
キハダ属	<i>Pholidodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	1	-	-	-	-
アカガシ属	<i>Miliotaxus</i>	-	3	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
ニシキギ科	<i>Celastraceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
タチバナ科	<i>Amer</i>	-	5	2	3	2	4	-	7
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	9	1	61	30	8	3	-	1
ムロノキ属	<i>Sapindus</i>	-	1	5	2	4	-	-	-
ブナ属	<i>Vitis</i>	-	1	-	1	1	-	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモビ属	<i>Acetosella</i>	-	-	1	1	-	-	-	-
グリーン	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
ウカツバ科	<i>Araliaceae</i>	-	-	4	-	-	2	2	-
シズオカ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
エノキ属	<i>Styrax</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
イガタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	2
トリリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	1	3	-	2	2	5
タケニカズラ属	<i>Trilepidodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
草本									
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
ヒメムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	2	-	-	-	-	-	-
モウセンゴケ属	<i>Equisetum</i>	4	-	-	-	-	-	-	-
イヌイチ	<i>Grimmia</i>	202	196	9	7	16	9	34	109
カラザリギサ属	<i>Cyperaceae</i>	92	118	6	21	7	2	1	114
ヒメハシヨウ属	<i>Lysichiton</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒメハシヨウ属	<i>ct. Lycoris</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
ヒメハシヨウ属	<i>Moraceae</i>	4	3	-	-	-	-	-	-
サヌエタゲ属一ウナギノカズミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	3	-	3	3	-	1	1	1
アカザゲ科ヒヌリ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	10	-	-	-	-	-	-	-
アカザゲ科	<i>Caricaceae</i>	11	-	-	-	-	-	-	-
カラマツク属	<i>Thelypteris</i>	-	-	-	-	-	4	10	2
色のキシボウゲ属	<i>other Rannunculaceae</i>	3	-	-	3	-	1	1	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	165	1	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	1	-	-	-	-	-	-
物のハラ科	<i>other Rosaceae</i>	-	-	-	1	-	-	1	4
ヤマト科	<i>Lagunculariae</i>	4	3	-	4	1	-	-	3
モクノイグサ科	<i>Euphorbiaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
ソリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	2	1	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	63	48	22	4	7	15	36	36
他のキク属科	<i>Other Tubuliflorae</i>	8	5	-	-	-	-	10	13
タンポポ属科	<i>Liguliflorae</i>	34	2	-	3	3	-	-	1
シダ類									
ヒメノカズラ属	<i>Lycopodiaceae</i>	8	4	-	2	-	19	-	-
单型孢子	<i>Moniliota</i> spore	31	54	9	17	22	31	33	35
三型孢子	<i>Trilete</i> spore	9	2	-	-	-	-	5	4
固生	<i>Ascaris</i>	8	-	-	-	-	-	-	-
壁生	<i>Trichosporium</i>	13	-	-	-	-	-	-	-
附着生	<i>Clemorchis</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	<i>Arborescent pollen</i>	107	216	261	255	212	210	169	220
草本花粉	<i>Succarbose pollen</i>	633	384	18	35	33	35	105	377
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	48	60	6	17	24	31	55	39
花粉・孢子類総数	Total Pollen & Spores	788	860	285	305	260	285	269	545
不明花粉	Unknown pollen	33	32	17	20	64	15	24	14

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

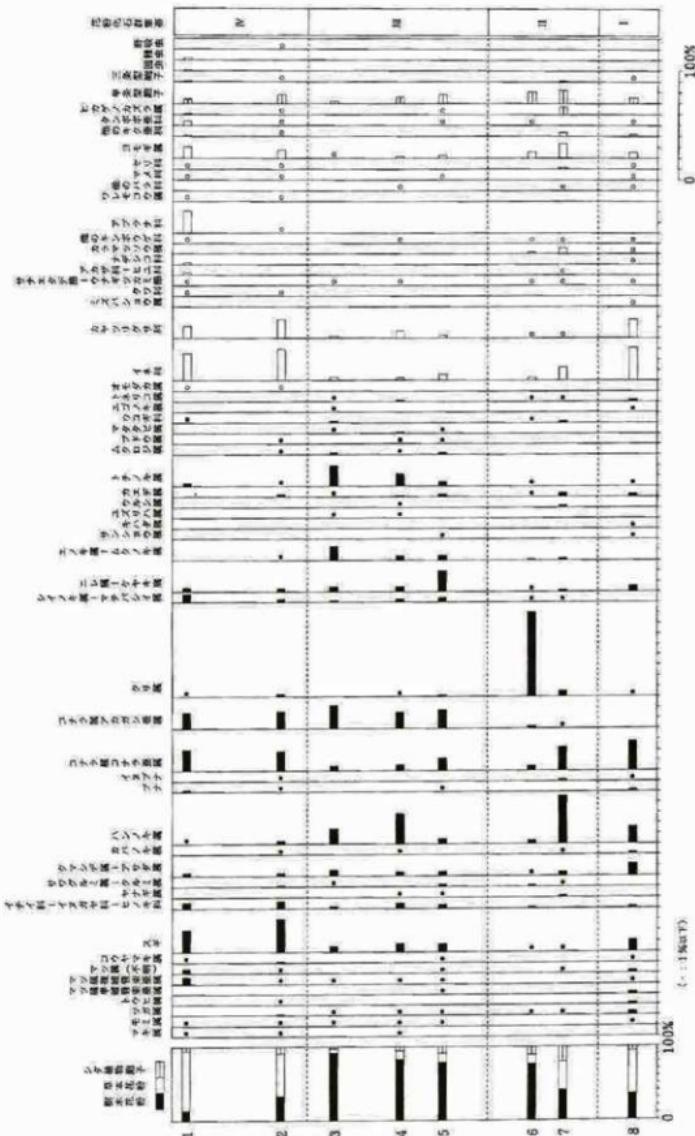


図41 佐助ヶ谷遺跡の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草木花粉、孢子は花粉・孢子総数を基数として百分率で算出した)

花粉帶IV（試料1・2）：スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属の優古で特徴づけられる。その他、試料1でマツ属複雜管束亞属（オカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）やシイノキ属一マテバシイ属（以後シイ類と略す）が10%弱の出現率を示している。またイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も他帶に比べてやや出現率を増している。草本類ではイネ科が25~30%と最も多く、次いで10~20%のカヤツリグサ科となっている。また、試料1ではアブラナ科が多産しており、水生植物（抽水植物）のオモダカ属が低率ながら本帶2試料より検出されている。

3. 遺跡周辺の古植生

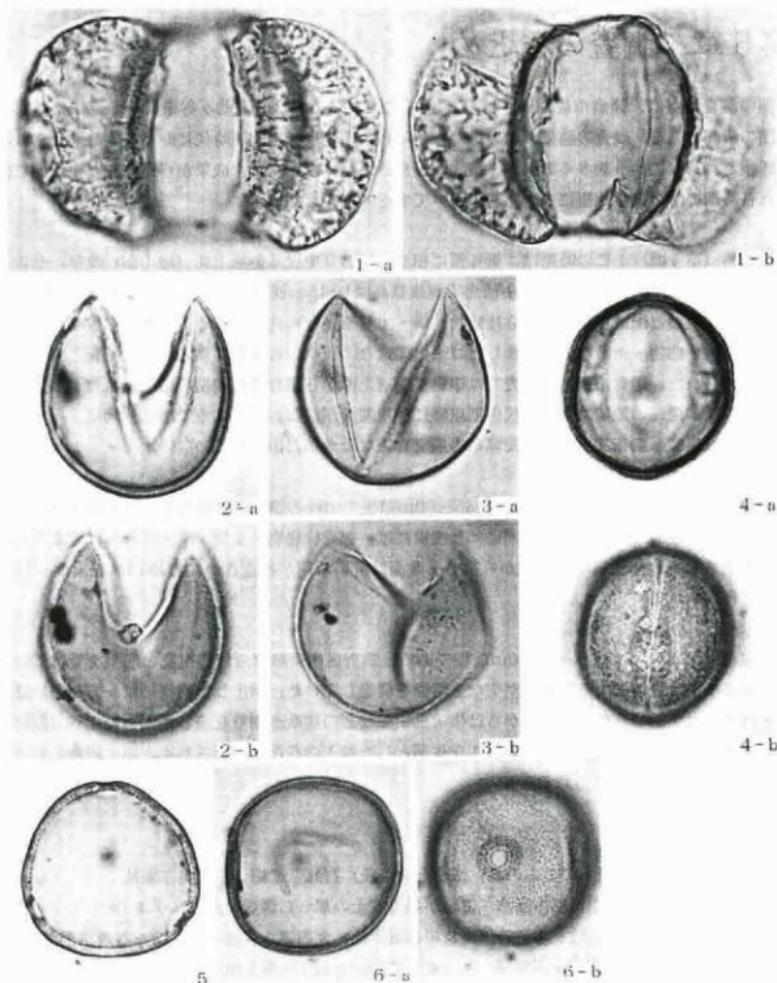
設定した花粉化石群集帯を基に遺跡周辺の植生変遷について述べる。

花粉帶I期：トウヒ属やゴヨウマツ類といった針葉樹類群を交えたコナラ亜属・クマシデ属-アサダ属を主体とした落葉広葉樹林が遺跡周辺丘陵部に成立していた。低地部においてはヨシ属などのイネ科やカヤツリグサ科などが生育する湿地環境が広がっていた。また、ハンノキ属やトネリコ属の湿地林も一部に成立していたとみられる。

花粉帶II期：この時期の遺跡周辺丘陵部では初めコナラ亜属を主体にクリ属やクマシデ属-アサダ属が生育する落葉広葉樹林が成立していたが、その後急激にクリ属が増加した。一方低地部ではI期に比べ乾いた環境が推測され、そのなかでジメジメした所にはトネリコ属を伴ってハンノキ属の林が成立していた。

花粉帶III期：この時期になると遺跡周辺丘陵部ではアカガシ亜属を主体にシイ類を交えた照葉樹林が林分を広げ、一部にコナラ亜属やニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹林も生育していたであろう。また、台地斜面を中心にトチノキ属が増加し、スギ、ヒノキ類、エノキ属-ムクノキ属なども生育していた。低地部においてはII期同様にジメジメしたところ中心にハンノキ属林が成立していた。

花粉帶IV期：遺跡周辺台地部には照葉樹林が成立しており、スギ林やコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が丘陵部頂部から斜面にかけて分布していた。また、最上部においてニヨウマツ類の増加傾向がみられ、IV期以降におけるコナラ亜属を含めた二次林のさらなる広がりが予測される。低地部においてはイネ科の増加、オモダカ属の産出からこの時期において水田稻作が営まれていたとみられる。また、アブラナ科も多産しており、アブラナなどの栽培も予想される。



▲. 産出花粉化石の顕微鏡写真

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1 : マキ属 | 4 : イヌブナ |
| 2 : スギ | 5 : エノキームクノキ |
| 3 : イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科 | 6 : イネ |

第5章 調査のまとめ

今回の調査地点は、鎌倉市佐助一丁目476番1に所在しており、佐助ヶ谷遺跡の一部に位置する中世前期の遺跡である。調査の結果、この地は鎌倉時代中期後半～南北朝時代にかけて少なくとも4時期の生活面と、それに伴う数多くの遺構・遺物が発見された。以下、調査成果から得られた生活面に認められた各時期の特徴と年代観について若干述べてまとめてみたい。

I期遺構（第4面）：この時期は、第4面に相当しており中世基盤層上面（地山面）及び、その上面に施された土丹版築地業層からなる生活面で海拔標高は10.15m前後である。検出した遺構には、礎石建物や一定の規模と配置を示した掘立柱建物、溝・土壙や多数の柱穴である。土壙には生活用品の箸・漆器類・下駄・曲物・折敷などを投機したゴミ捨て穴と、薬状の有機物が腐蝕土のトイレと考えられるものも認められた。鎌倉市街地の調査では中世基盤層上面から鎌倉時代前期の遺構・遺物が多数発見されているが、本遺跡の地域は鎌倉時代中期以降に谷戸開発が行なわれたよう出土遺物に手程ねかわらけや舶載品竜泉窯系割花文青磁・同安窯系櫛描文青磁などが殆ど出土していない。

II期遺構（第2・3面）：海拔標高10.35～60m前後で山砂の整地層を挟んで上下に検出された土丹版築を施した生活面である。両生活面に伴う遺構には、掘立柱建物・土壙・溝・かわらけ溜まり・柱穴などが検出された。出土遺物の組成から第2・3面は近い時期が推定され、概ね13世紀末葉～14世紀前葉頃と考えられる。

III期遺構（第1面）：抜標高11.00m前後である。調査区南東域は近代の擾乱と削平を受けていたがそれ以外は小型土丹塊による版築で堅牢な生活面を構築していた。検出した遺構には、方形堅穴建物・土壙・柱穴などが認められた。土壙からは牛・馬・鯨などの切断や削りを施した大小加工骨（原材料やカス）が確認されており、骨加工品の製作を生業とした職人の存在が想起される。出土遺物の組成から概ね14世紀中葉前後と考えられる。

【参考文献】

- | | | |
|----------------|------|--|
| 石井 進 | 1999 | 『[もののふの都] 鎌倉と北条氏』石井 進編 新人物往来社 |
| 河野真知郎 | 1995 | 『中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都—』講談社選書メチエ49 |
| 齊木秀雄 他 | 1993 | 『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡掘調査団編 |
| 齊木秀雄・
降矢順子 | 2002 | 『佐助ヶ谷遺跡（No.203）佐助一丁目476番1地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会 |
| 田代郁夫・
若松美智子 | 2002 | 『鎌倉市佐助ヶ谷遺跡発掘調査概要報告書』佐助ヶ谷遺跡掘調査団編 |
| 馬淵和雄 | 1992 | 『中世鎌倉における谷戸開発のある側面』『鎌倉』第69号 鎌倉文化研究会 |
| 馬淵和雄 | 1998 | 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社 |

図版 2

►1. 第1面Ⅰ区全景
I区は第2面の遺構も含む



◀2. 第1面Ⅱ区全景



▼3. 第1面Ⅱ区東側



▼4. 第1面Ⅱ区北側





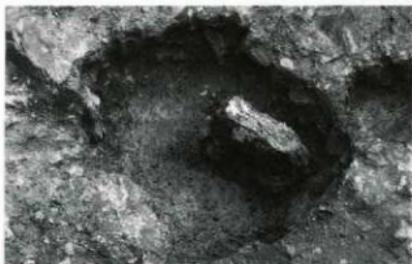
▲ 1. 方形竖穴建物



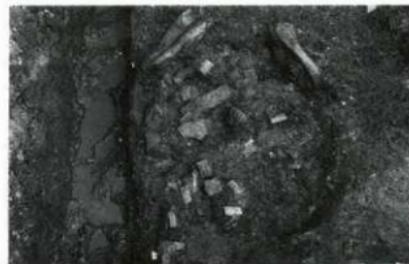
▲ 2. 磐石列



▲ 4. 土壙 6



▲ 3. 土壙 1



▲ 5. 土壙 8 上層



▲ 6. 土壙 8 中層

▼ 7. 土壙 8 完掘状況



上層では加工骨の
小形破片が多く認
められた。栗形の
原材料や余材が出
土した。

中層以下では加工骨
の大形破片が多く認
められた。鯨骨の輪
切になったものも出
土した。

図版 4



▲1. 第2面II区全景北側（東から）



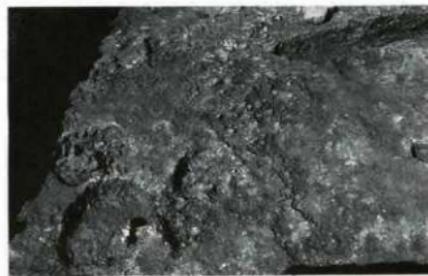
▲2. 第2面II区全景北側（西から）



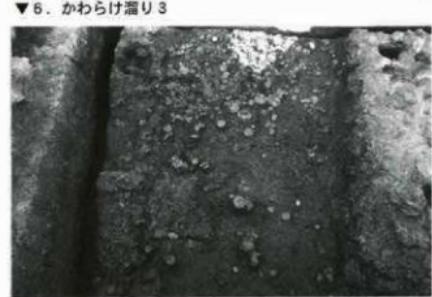
▼3. 第2面東南域



▼4. かわらけ渓り1

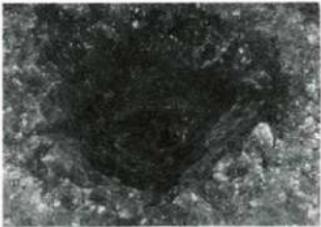


▼5. かわらけ渓り2



▼6. かわらけ渓り3

▼7. 土壌5



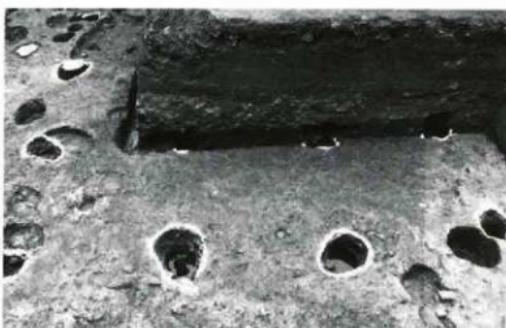


▲1. 第3面全景東側（南から）



▲2. 第3面全景北側（東から）

▼3. 建物1（東から）



▲4. 建物1（北から）



◀5. 建物1（西から）

図版 6



▲1. 建物1イー1柱穴



▲2. 建物1イー2柱穴



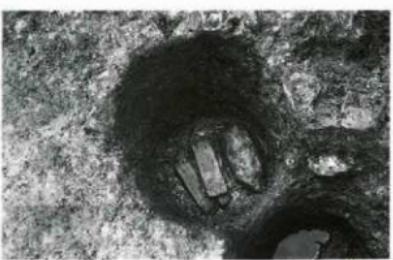
▲3. 建物1口ー1柱穴



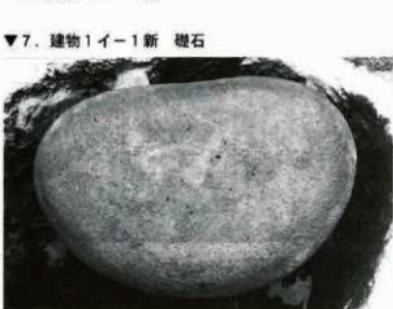
▲4. 建物1口ー2柱穴



▲5. 建物1ハー1新



▲6. 建物1ニー1新



▼7. 建物1イー1新 磁石



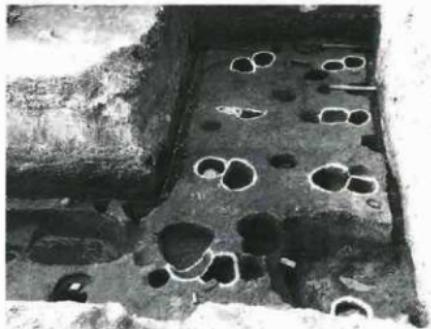
►8. 土器質火鉢出土状況



▲1. 第4面Ⅰ区全景（南から）



▶2. 第4面Ⅰ区全景（西から）



▲3. 第4面Ⅱ区（東から）

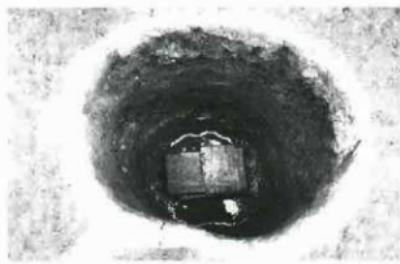


▲4. 第4面Ⅱ区（北から）

图版 8



▲1. 建物 3・4 北西域



▲2. 建物 4 A - 3 柱穴



▲5. 板磚 6・7
(南から)

▼6. 板磚出土狀況



▼7. 面上漆器皿出土狀況



▲3. 土壞 8
建物 4 A - 1



▲4. 建物 1 - P 2



▼8. 面上漆物出土狀況



調査区北壁
土層堆積

1. ▶



◀第4面Ⅱ区北側
調査区東壁



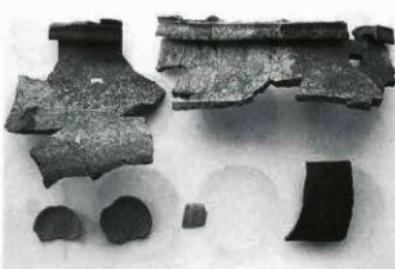
II区調査時 3. ▶
の作業風景



図版10



▲1面 方堅 土壙 柱穴



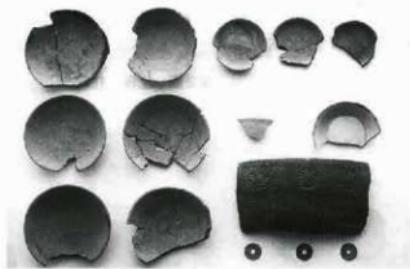
▲1面 土壙 8



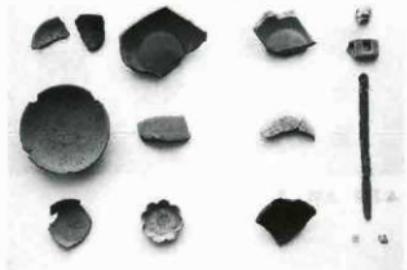
▲1面上



▲1面 土壙 6・8



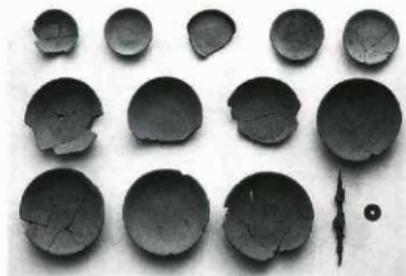
▲1面上



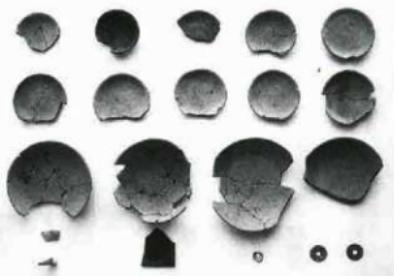
▲主要遺物 1~4面(表)



▲(裏)



▲2面 かわらけ溜り1



▲2面 かわらけ溜り2



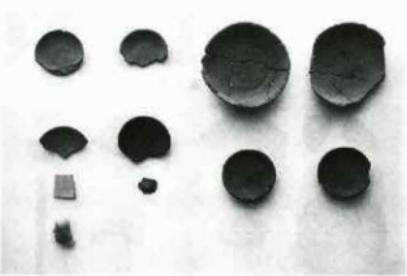
▲2面 かわらけ溜り3



▲2面 土壌 柱穴

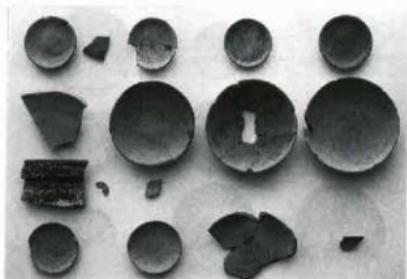


▲2面上

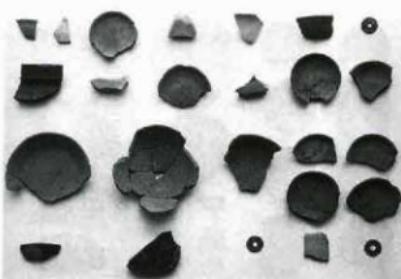


▲2面 土壌 溝

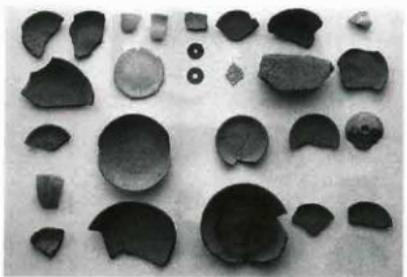
図版12



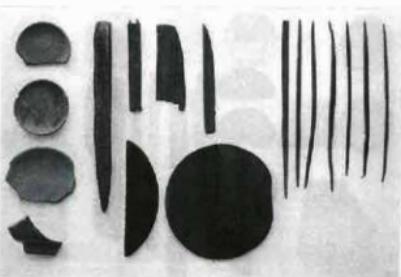
▲3面 建物 柱穴



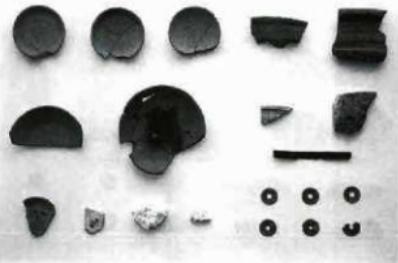
▲3面 土壤 柱穴



▲3面 土壤 溝 柱穴



▲3面 土壤1



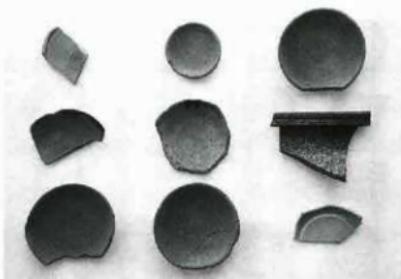
▲3面上



▲3面上



▲4面 建物内 面上



▲4面 建物2、4 柱穴



▲4面 土塙



▲4面 土塙1 柱穴



▲4面上



▲4面上

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名	平成15年度発掘調査報告						
巻次	20						
シリーズ名	第1分冊						
シリーズ番号							
編著者	伊丹まさか/原廣志/宮田真/滝沢晶子/馬淵和雄・鍛冶屋勝二/森孝子/継実・須佐直子						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2004年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒			
玉繩城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 70番1外	14204	35° 20' 57"	139° 31' 11"	20010525 ~ 20010614	30.00	個人専用 住宅 (防災工事)
今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 148番5	14204	35° 18' 48"	139° 32' 54"	20010605 ~ 20010803	115.02	個人専用 住宅
米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 2324番1外	14204	35° 18' 37"	139° 33' 26"	20010806 ~ 20010929	67.21	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町七丁目 1615番8	14204	35° 18' 33"	139° 34' 07"	20010918 ~ 20011013	20.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
玉繩城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 198番の一部	14204	35° 20' 51"	139° 33' 12"	20010925 ~ 20011031	73.13	個人専用 住宅 (位置指定道路)
佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 476番1の一部	14204	35° 18' 54"	139° 32' 49"	20010906 ~ 20011215	120.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)

取扱遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉繩城跡	城館	15世紀後半 / 16世紀	土壘、溝跡、 柱穴	かわらけ	
今小路西遺跡	都市	中世 / 近世	土壘、道路、 井戸跡、道路遺構、 方形堅穴建 築址	土器類、須恵器、 斬削印陶器、国產 陶器、かわらけ、 金属製品	
米町遺跡	都市	鎌倉時代 / 室町時代	獨立柱建物跡、 井戸、溝跡、 柱穴	かわらけ、陶器	
名越ヶ谷遺跡	都市	13世紀末 / 14世紀前半	かわらけ塗り 柱窓遺構、遺跡	かわらけ、鏡、 石製品、舶載海陸器 国産陶器	短期間ににおける 5回の土丹地形を確認
玉繩城跡	城館	鎌倉時代 / 室町時代	土壘、柱穴、 溝跡	かわらけ、陶器	
佐助ヶ谷遺跡	都市	鎌倉時代 / 南北朝時代	獨立柱建物、 礎石建物、溝跡、 土壤	かわらけ、陶器 木製品、金属製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20

平成15年度 発掘調査報告（第1分冊）

発行日 平成16年3月31日

編集発行 鎌倉市教育委員会

印刷 朝日オフセット印刷株式会社